

京都市内遺跡発掘調査報告

平成24年度

2013年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

京都市内遺跡発掘調査報告

平成24年度

2013年3月

京 都 市 文 化 市 民 局



風呂関連遺構群全景（北東から）



石風呂3130（北から）



1 井戸3020 (北から)



2 井戸3020出土遺物

ご あ い さ つ

京都市は、平安京建都以来、我が国の政治・経済・宗教の発展に中心的役割を果たした都市であり、またその永い時間の中で生み育てられてきた華麗かつ繊細な文化を今に伝える、世界でも有数の文化都市であります。

市内には数多くの文化財が存在し、埋蔵文化財包蔵地も市街化区域の4割を超える地域に広く分布しています。古代から近世にわたる永い歴史の中で幾層にも積み重なった遺跡は、我が国の歴史や文化を正しく理解するうえで欠かすことのできない国民共有の財産です。

本市では、先人が残した貴重な埋蔵文化財を適切に、後世に伝える責務を果たし、また、将来にわたって日本文化を国内外に発信していけるよう、その活用にも取り組んでおります。

この度、平成24年度に文化庁の国庫補助を得て実施しました埋蔵文化財調査成果をまとめた報告書を作成いたしました。この報告書が、京都の歴史と文化財への理解を深めるために、広く御活用いただければ幸いに存じます。

文末になりましたが、各調査の実施に当たり、御理解、御協力を賜りました市民の皆様と、御指導を賜りました関係機関の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成25年3月

京都市文化市民局文化芸術担当局長

平 竹 耕 三

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した平成24年度の京都市内発掘調査報告書である。発掘調査は、京都市が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した。なお、本書では平成24年1月から12月までに実施した発掘調査成果を報告する。
- 2 調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は、下記のとおりである。

- I 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡（文化財保護課番号 12 K 202）

京都市中京区聚楽廻東町21番20、21

2012年6月1日～6月6日 125㎡ 網 伸也

- II 平安京右京二条四坊一町跡（文化財保護課番号 11 H 223）

京都市右京区花園中御門町2、2-13、2-14

2012年4月10日～5月2日 243㎡ 伊藤 潔

- III 中臣遺跡86次調査（文化財保護課番号 11 N 498）

京都市山科区勸修寺西栗栖野町44-3、44-4（一部）、44-5、44-11

2012年5月7日～5月15日 153㎡ 柏田有香

- IV 植物園北遺跡（文化財保護課番号 11 S 326）

京都市左京区松ヶ崎芝本町13番、13番1

2011年11月14日～12月22日 116㎡ 吉崎 伸

- V 山科本願寺跡

京都市山科区西野山階町30-1他

2012年7月17日～10月5日 453㎡ 柏田有香

- VI 大藪遺跡（文化財保護課番号 11 S 197）

京都市南区久世殿城町544番地

2011年12月1日～12月28日 193㎡ 上村和直

- VII 寺戸大塚古墳

京都市西京区大枝南福西町2丁目

2012年7月30日～10月5日 240㎡ 南 孝雄・宇野隆志（京都市文化財保護課）

なお、文化財保護課番号とは、「文化財保護法」第93・94条および125条にかかる申請に対して文化財保護課が付す受理固有番号のことである。

- 3 本書の執筆分担は、下記のとおりである。

- I 網 伸也

- II 伊藤 潔

- III 柏田有香

- IV 吉崎 伸

V 柏田有香・馬瀬智光（京都市文化財保護課）

VI 上村和直

VII 南 孝雄・宇野隆志（京都市文化財保護課）

- 4 本書に使用した写真の撮影は、主に村井伸也が担当し、遺構の一部は調査担当者が行った。
- 5 本書で使用した土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
- 6 本書中で使用した方位および座標の数値は、世界測地系 平面直角座標系VIによる（ただし、単位（m）を省略した）。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。調査における測量基準点の設置は、宮原健吾が行った。
- 7 本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画基本図「聚楽廻」「花園」「勸修寺」「植物園」「山科」「久世」「石見」を調整したものである。
- 8 本書の編集は、児玉光世が行った。

本文目次

I 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

1. 調査経過	1
2. 遺構	3
3. 遺物	5
4. まとめ	7

II 平安京右京二条四坊一町跡

1. 調査経過	9
2. 位置と環境	9
3. 遺構	11
4. 遺物	17
(1) 遺物の概要	17
(2) 土器類	17
(3) 瓦類	20
(4) 石製品	21
5. まとめ	22

III 中臣遺跡86次調査

1. 調査経過	23
2. 遺構	24
(1) 基本層序	24
(2) 遺構	25
3. まとめ	26

IV 植物園北遺跡

1. 調査経過	27
2. 遺構	29
(1) 基本層序	29
(2) 遺構	29
3. 遺物	35
4. まとめ	37

V 山科本願寺跡

1. 調査経過	39
2. 遺跡	40
(1) 遺跡の位置と歴史	40
(2) 周辺の調査	41
3. 遺構	46
(1) 基本層序	46
(2) 室町時代の遺構	47
(3) 江戸時代から近代の遺構	62
4. 遺物	66
(1) 土器	66
(2) 瓦類	71
(3) 金属製品	75
(4) 石製品・石材	76
(5) その他の遺物	77
5. まとめ	81
(1) 遺構の変遷とその性格	81
(2) 風呂関連遺構群について	83
(3) 土塁の構築と規模	85
(4) 本願寺廃絶以後の様相	85
6. 竈3100、石風呂3130出土炭化材の樹種	87
7. 総括	92
(1) 調査に至る経過	92
(2) 調査成果	92
(3) 今後の課題	92

VI 大藪遺跡

1. 調査経過	94
(1) 調査に至る経緯	94
(2) 調査の経緯	94
2. 遺跡	95
(1) 位置と環境	95
(2) 周辺の調査	95
3. 遺構	99
(1) 基本層序	99

(2) 検出遺構の概要	99
(3) 中世以降の遺構	99
(4) 弥生時代の遺構	102
4. 遺物	108
(1) 遺物の概要	108
(2) 弥生時代の遺物	108
(3) 中世の遺物	111
5. まとめ	112
(1) 遺構の変遷	112
(2) 弥生時代掘立柱建物について	114
VII 寺戸大塚古墳	
1. 調査経過	117
2. 遺構	117
3. まとめ	117
報告書抄録	119

図 版 目 次

巻頭図版 1	山科本願寺跡 遺構	風呂関連遺構群全景 (北東から)
巻頭図版 2	山科本願寺跡 遺構	石風呂3130 (北から)
巻頭図版 3	山科本願寺跡 遺構・遺物	1 井戸3020 (北から) 2 井戸3020出土遺物
図版 1	平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡 遺構	1 調査区全景 (東から) 2 基壇南西隅 (南西から) 3 基壇延石抜き取り痕跡 (南から)
図版 2	平安京右京二条四坊一町跡 遺構	1 調査区全景 (北東から) 2 柵3 (北東から)
図版 3	平安京右京二条四坊一町跡 遺構	1 柱穴53 (北から) 2 掘立柱建物1 柱穴46 (南から) 3 掘立柱建物1 柱穴49 (南から)

			4 柵3 柱穴134 (南から)
			5 井戸25 (南から)
図版4	平安京右京二条四坊一町跡	遺物	出土遺物
図版5	植物園北遺跡	遺構	1 調査区全景 (北東から) 2 SH101 (南東から)
図版6	植物園北遺跡	遺構	1 SH104 (北から) 2 SH102 (北東から) 3 SH103 (北東から)
図版7	山科本願寺跡	遺構	1 1区全景 (北から) 2 溝3043炭化米出土状況 (西北西から) 3 土坑3091土器出土状況 (南から)
図版8	山科本願寺跡	遺構	1 1区南半全景 (北から) 2 溝3089 (北北西から) 3 溝3089南端石組 (北西から)
図版9	山科本願寺跡	遺構	1 竈3100 (北から) 2 竈3100燃焼室 (北東から) 3 竈3100断面 (北西から)
図版10	山科本願寺跡	遺構	1 石風呂3130断面 (北東から) 2 石風呂3130階段 (西北西から) 3 石風呂3130北壁石積み (南から)
図版11	山科本願寺跡	遺構	1 石風呂3130転用石材 (北北東から) 2 3区石風呂3130北西隅検出状況 (北北西から) 3 3区全景 (北から) 4 2区全景 (東から)
図版12	山科本願寺跡	遺物	出土土器
図版13	山科本願寺跡	遺物	出土焼締陶器大甕
図版14	大藪遺跡	遺構	1 調査区全景 中世 (西から) 2 調査区全景 弥生時代 (西から)
図版15	大藪遺跡	遺構	1 建物50 (北から) 2 溝40 (北東から)
図版16	大藪遺跡	遺構	1 溝40断面 (北東から) 2 建物50柱穴7断面 (北から) 3 建物50柱穴7・6断面 (北東から)
図版17	大藪遺跡	遺構	1 建物50柱穴36断面 (東から) 2 建物50柱穴27断面 (北東から)

		3 建物50柱穴13断面（北西から）
		4 建物50柱穴15断面（南東から）
図版18 大藪遺跡	遺物	出土土器
図版19 大藪遺跡	遺物	出土木製品

挿 図 目 次

平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

図1 調査位置図（1：2,500）	1
図2 調査区配置図（1：200）	2
図3 調査前全景（南東から）	2
図4 作業風景（南西から）	2
図5 北壁断面図（1：40）	4
図6 遺構平面図（1：40）	4
図7 軒瓦拓影・実測図（1：4）	6

平安京右京二条四坊一町跡

図8 調査位置図（1：2,500）	9
図9 四行八門および調査区配置図（1：1,500）	10
図10 調査前全景（南東から）	10
図11 作業風景（南東から）	10
図12 遺構平面図（1：150）	12
図13 北壁断面図（1：50）	13
図14 井戸25実測図（1：50）	13
図15 掘立柱建物1実測図（1：50）	14
図16 柵2・3実測図（1：50）	15
図17 柵4実測図（1：50）	16
図18 土器実測図1（1：4）	18
図19 土器実測図2（1：4）	19
図20 軒瓦拓影・実測図（1：4）	21
図21 石製品実測図（1：4）	21

中臣遺跡86次調査

図22 調査位置図（1：5,000）	23
図23 調査前全景（南東から）	24
図24 作業風景（北北東から）	24

図25	基本層序（1：20）	24
図26	調査区平面図（1：400）	25
図27	調査区全景（南西から）	26
植物園北遺跡		
図28	調査位置図（1：2,500）	27
図29	調査前全景（北から）	28
図30	作業風景（北から）	28
図31	調査区配置図（1：500）	28
図32	遺構平面図（1：100）	30
図33	西壁・南壁断面図（1：50）	31
図34	SH101実測図（1：80）	32
図35	SH102～104実測図（1：50）	33
図36	出土遺物実測図（1：4）	36
図37	古式土師器壺（1）	36
図38	石材（4）	36
図39	SH101貯蔵穴左右の小溝（東から）	37
図40	SH104貯蔵穴壺出土状況（北東から）	38
山科本願寺跡		
図41	調査前全景（北から）	39
図42	作業風景（北から）	39
図43	現地説明会（北から）	40
図44	埋め戻し状況（北から）	40
図45	井戸3020保護状況	40
図46	石風呂3130保護状況	40
図47	主要調査位置図（1：4,000）	42
図48	調査区配置図（1：800）	46
図49	調査区断面模式柱状図（1：50）	47
図50	基盤層堆積模式図（1：50）	47
図51	中世遺構平面図（1：300）	49
図52	井戸3020実測図（1：50）	50
図53	溝3043、土坑3230実測図（1：50）	51
図54	風呂関連遺構群平面図（1：60）	52
図55	竈3100実測図（1：50）	53
図56	石風呂3130実測図（1：50）	55
図57	石風呂3130断面図（1：50）	56

図58	1区南東部平面図（1：100）、溝3089断面図（1：50）	58
図59	溝3083、埋甕3083、土坑3244・3135・3144、塀状遺構断面図（1：50）	59
図60	2区実測図（1：50）	61
図61	近世遺構平面図（1：300）	63
図62	出土土器類実測図1（1：4）	67
図63	出土土器類実測図2（1：4、55・58のみ1：6）	69
図64	出土土器類実測図3（1：4）	70
図65	出土土器類実測図4（1：4、131のみ1：8）	71
図66	瓦類拓影・実測図1（瓦1～5は1：4、瓦6～11は1：6）	73
図67	瓦類拓影・実測図2（1：6）	74
図68	鉄釘実測図（1：2）	75
図69	石製品・石材実測図（石1～3は1：4、石4・5は1：6）	76
図70	炭化米	77
図71	周辺遺構分布図（1：800）	82
図72	炭化材1	90
図73	炭化材2	91
図74	御本寺中枢施設推定図（1：2,500）	93
大藪遺跡		
図75	調査前全景（西から）	94
図76	作業風景（北から）	94
図77	調査区配置図（1：400）	95
図78	調査区および周辺調査位置図（1：5,000）	96
図79	20次調査検出遺構実測図（1：150 弥生時代）	98
図80	調査区断面図（1：80）	100
図81	中世以降遺構平面図（1：100）	101
図82	弥生時代遺構平面図（1：100）	103
図83	建物50実測図（1：80）	104
図84	建物50柱穴実測図1（1：20）	105
図85	建物50柱穴実測図2（1：20）	106
図86	出土土器拓影・実測図（1：4）	109
図87	出土木製品実測図（1：8）	110
図88	調査地周辺遺構配置図（1：1,000）	113
図89	20・26次調査区配置図（1：250）	115
寺戸大塚古墳		
図90	調査区配置図（1：500）	118

表 目 次

平安宮朝堂院跡・聚樂遺跡

表1 遺構概要表	3
表2 遺物概要表	5

平安京右京二条四坊一町跡

表3 遺構概要表	11
表4 遺物概要表	17

植物園北遺跡

表5 遺構概要表	29
表6 遺物概要表	35

山科本願寺跡

表7 主要調査一覽表	43
表8 山科本願寺關係略年表	45
表9 遺構概要表	48
表10 遺物概要表	66
表11 鉄釘計測表	75
表12 遺物一覽表	78
表13 樹種同定結果	88

大藪遺跡

表14 周辺調査一覽表	97
表15 遺構概要表	99
表16 遺物概要表	108

I 平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡

1. 調査経過

本調査は、個人住宅の新築工事に伴う文化庁国庫補助事業による発掘調査である。調査地は、平安宮朝堂院修式堂の南西隅部に相当する。修式堂の調査は、1971年に平安博物館が行った下水道工事に伴う立会調査で、基壇北縁の凝灰岩延石列を約17mにわたって確認しており、その西延長部の凝灰岩延石を1979年に行ったガス管敷設工事に伴う立会調査でも発見している。

今回の調査では、修式堂基壇の南西隅部の検出が想定されたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という。）の指導のもと、敷地北半に東西5m、南北2.5mの調査区を設定し、重機掘削を行った。掘削にあたっては、新築建物の基礎の掘削深度を超えないように十分注意して調査を進めたところ、限界掘削深度とほぼ同じ標高で平安時代の遺構面を検出し、修式堂の南西隅部の延石抜き取り痕跡を確認することができた。

ただ、検出した遺構面の年代や、基壇の構築方法などの解明には、限界掘削深度を超えて断割調査を行う必要が生じたため、京都市文化財保護課と設計担当者を交えて調査方法の協議を行った。



図1 調査位置図 (1:2,500)

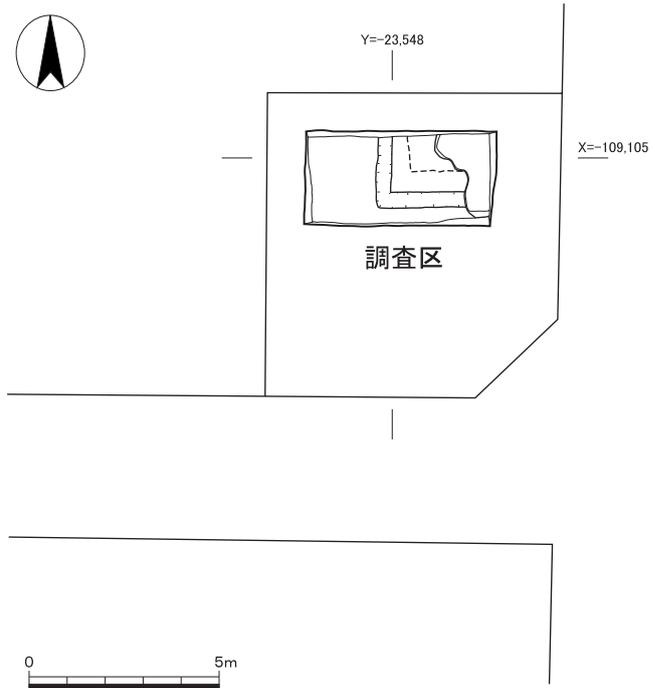


図2 調査区配置図 (1 : 200)

その結果、現況遺構面の平面記録作業後に、幅0.2mの東西試掘トレンチを北壁部に設定して断割調査を行うこととなった。

断割調査では、検出遺構面が平安時代後期に修築された基壇外装痕跡と整地層であることや、西へ下がる旧地形を修式堂創建段階で整地を行い基壇の一部に版築を行っていることを明らかにした。これらの断面記録を作成した後に、試掘トレンチを限界掘削深度まで復旧し、重機で埋め戻して調査を終了した。



図3 調査前全景 (南東から)



図4 作業風景 (南西から)

2. 遺 構 (図版 1)

調査区の基本層序は、地表下 - 0.5mまでが近現代の盛土で、その下層に江戸時代の整地層（第1・2層）が堆積する。これら江戸時代整地層を除去した段階で、平安時代の修式堂基壇土と整地層を検出した。基壇土の上面は標高約40.6m、基壇周辺の整地層上面は標高40.45～40.55mで、調査区南西が最も低くなっていた。

検出した遺構は、修式堂基壇南西隅の凝灰岩延石抜き取り痕跡で、幅約0.4m、深さ約0.2mの断面方形を呈する溝状遺構である。検出した長さは、南北約1.8m、東西約2.3mで、北側は調査区外に展開し、東側は攪乱によって壊されている。これらの遺構の構築状況について、断割を行った調査区北壁断面の層序に基づいて報告する。

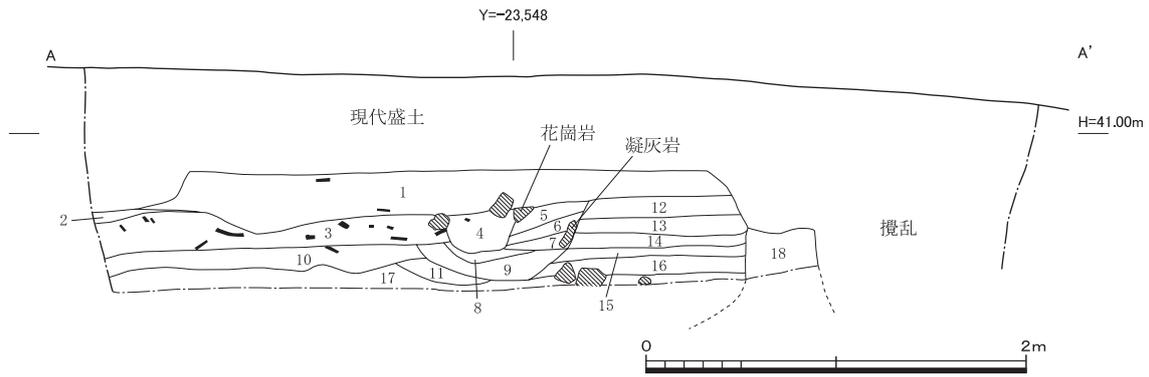
基壇外装の据え付けは、基壇据え付け位置に幅約0.9m、深さ約0.4mの溝状の余掘りを行った後、瓦を多く含む暗褐色砂泥（第9層）を底に敷いて延石の高さを揃えて裏込めで内側を固めている。裏込め土（第5～8層）には多量の凝灰岩片が含まれている。また、延石の外側は、瓦を多く含む暗褐色砂泥（第3層）で厚さ0.2mほど整地していた。これらの整地は、延石の深さや据え付け溝との関係から、基壇外装の構築と一体で行われたと考えられる。整地層内から播磨産軒瓦が出土しており、検出した基壇外装は少なくとも平安時代後期に修築されたものであることを示している。

さらに、溝状余掘りの内側は強固な版築（第12～16層）が厚さ約0.4m残存しているが、Y = -23,546.8ラインでは基盤層のにおい黄色褐色泥砂（第18層）となっており、西にむかって旧地形が急激に下がっていたことを示している。これらのことから、基壇の中央部は基盤層を残すが、西端部は旧地形の傾斜面を水平に削りこんで部分的に版築を行っていたと考えられる。また基壇版築に対応して外側にも、平安時代後期の整地層の下層に遺物をあまり包含しない褐色砂泥（第10層）が堆積しており、これらは修式堂創建期の基壇地業と整地と考えている。そして、この創建期整地層に覆われた凝灰岩片を含む暗褐色砂泥層（第11層）が、位置的にも創建期基壇の外装据え付け痕跡と推定することができる。

なお、基壇延石が抜き取られた時期については、抜取痕跡から瓦や凝灰岩・花崗岩・砂岩などが出土するだけで、年代を示す土器類は出土しておらず不明である。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	修式堂基壇版築	基壇版築は創建期まで遡る。
	基壇延石抜き取り痕跡	延石の設置は平安時代後期の修築。
	整地層	整地層は修築期と創建期の2層検出。



- 1 7.5YR3/3 暗褐色砂泥 (江戸時代整地層)
- 2 7.5YR3/2 黒褐色砂泥と瓦片の混層
- 3 10YR3/3 暗褐色砂泥 瓦・凝灰岩片を多く含む (修築期整地層)
- 4 10YR2/2 黒褐色砂泥 瓦・凝灰岩・花崗岩・砂岩など多く含む (凝灰岩延石抜き取り痕跡)
- 5 10YR2/3 黒褐色砂泥 凝灰岩片を多く含む 固く締まる
- 6 10YR2/2 黒褐色砂泥 礫を多く含む 固く締まる (基壇外装裏込め)
- 7 10YR3/3 暗褐色砂泥 固く締まる
- 8 10YR2/3 黒褐色砂泥 やや締まりなし (凝灰岩延石据え付け)
- 9 10YR3/4 暗褐色砂泥 凝灰岩片を多く含む 固く締まる
- 10 10YR4/4 褐色砂泥 瓦片を少量含む (創建期整地層)
- 11 10YR3/4 暗褐色砂泥 瓦・凝灰岩片を少量含む (創建期凝灰岩延石据え付け)
- 12 10YR3/2 黒褐色砂泥 固く締まる
- 13 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 黄褐色土塊を多く含む 固く締まる
- 14 10YR3/2 黒褐色砂泥 固く締まる (修式堂創建期の部分版築)
- 15 10YR2/2 黒褐色砂泥 にぶい黄色泥砂を多く含む 固く締まる
- 16 10YR3/3 暗褐色砂泥 固く締まる
- 17 10YR2/3 黒褐色砂泥 礫を多く含む (下層傾斜面の埋土)
- 18 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (基盤層)

図5 北壁断面図 (1:40)

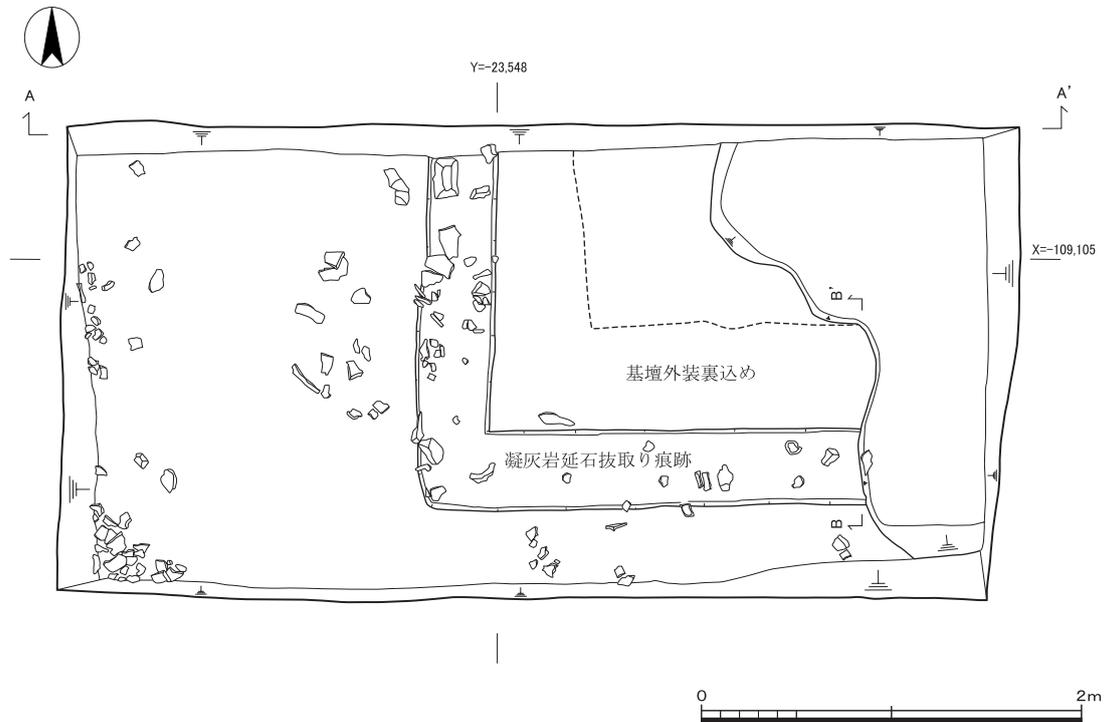


図6 遺構平面図 (1:40)

3. 遺 物

遺物は、遺物整理コンテナにして5箱出土した。出土遺物は、ほとんどが平安時代の瓦類である。中でも基壇外側の整地層から多量に出土しており、基壇修築の年代の上限を示す良好な資料となっている。また、延石抜き取り痕跡からは、瓦や凝灰岩片とともに円面硯の脚部破片が出土した。以下では、整地層と延石抜き取り痕跡から出土した軒瓦について報告する。

瓦1は、平城宮6229型式（長岡宮7228型式）の軒丸瓦である。瓦当の厚さが約4.5cmあり、瓦当裏面には横置き一本造りにともなう布目が観察できる。磨滅のため細かい調整は不明だが、側面はヨコナデと考えられる。胎土は砂粒・褐色粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈する。延石抜き取り痕跡から出土した。

瓦2は、複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当厚は約2cmで、瓦当裏面に一本造りに伴う布目が残り、下端部はケズリによって面取りする。側面はヨコナデ。胎土は砂粒をやや多く含み、灰～灰白色を呈する。栗栖野瓦窯産と考えられる。基壇西整地層から出土した。

瓦3は、一本造りの蓮華文軒丸瓦である。瓦当厚は最大3.5cmとやや厚く、瓦当裏面には粗い布目が残る。瓦当裏面下端部にはケズリを施し、側面もケズリ後にヨコナデ調整で仕上げる。胎土は砂粒をやや含み、灰色を呈する。基壇西整地層から出土した。

瓦4は、播磨産の蓮華文軒丸瓦である。文様面に自然釉がかかる。瓦当厚は約2cmで、丸瓦接合後に瓦当裏面から補足粘土をナデつける。丸瓦部凸面はタテケズリ後にナデ調整。凹面には粘土板糸切り痕跡が明瞭に残る。胎土は緻密で灰～灰白色を呈し、須恵質に焼きあがる。基壇西整地層から出土した。

瓦5と瓦6は、播磨産の蓮華文軒丸瓦である。瓦当厚は1cm前後と薄く、丸瓦部には布目が認められず、粘土紐巻き上げ成形と考えられる。瓦5では瓦当裏面に自然釉が付着する。瓦6は周縁の歪みが激しく、スサの圧痕が残っており、乾燥時に周縁上半を下にして置いたことがわかる。また、丸瓦部凸面はタテケズリ後にナデ調整で、自然釉が付着する。胎土は微砂粒をやや含み、にぶい橙～灰色を呈する。焼成は須恵質で、神出窯跡群産である。基壇西整地層から出土した。

瓦7は、西賀茂瓦窯のNS205A型式軒平瓦である。ヨコケズリによって幅約3cmの顎面を形成

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
平安時代	須恵器円面硯、丸瓦、平瓦、 緑釉丸瓦、軒瓦、凝灰岩片	4箱	軒丸瓦6点、軒平瓦1点	0箱	3箱
江戸時代 ～明治時代	磁器、陶器、瓦	2箱		0箱	2箱
合 計		6箱	7点（1箱）	0箱	5箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

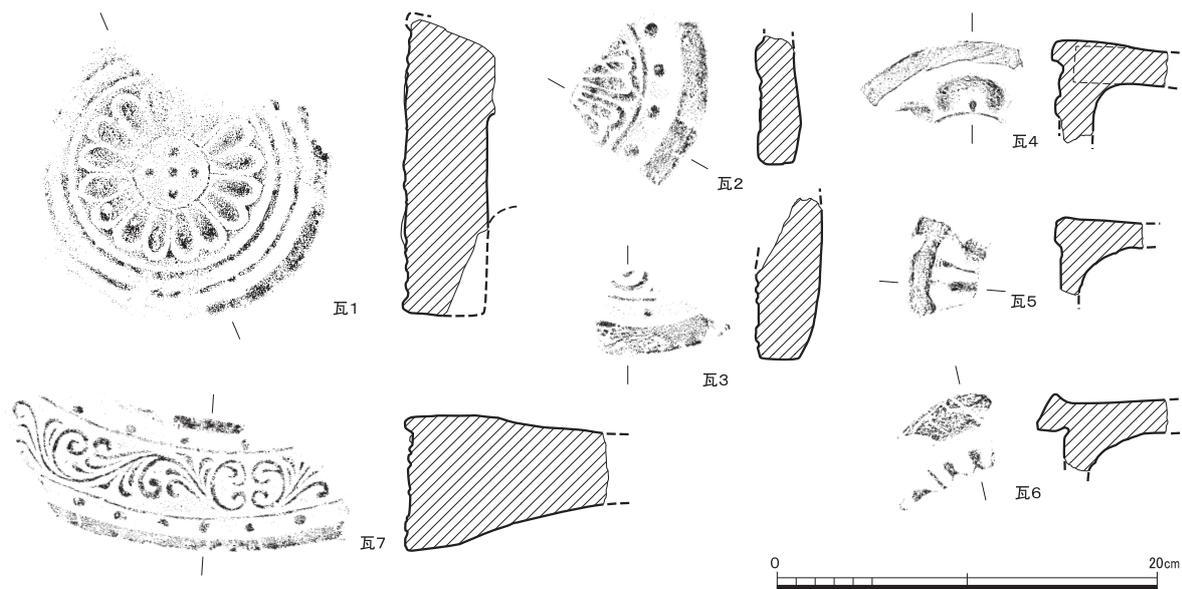


図7 軒瓦拓影・実測図（1：4）

し、曲線顎に仕上げる。顎部調整はヨコナデで、平瓦部凸面にヨコ縄タタキが残る。また、文様面から9～10cmの位置に朱線が認められる。凹面には布目が残るが、文様面端部を幅約5cmの範囲でヘラケズリ調整する。胎土は砂粒をやや多く含み、にぶい黄橙色を呈する。基壇西整地層から出土した。

4. まとめ

今回の調査成果として、平安宮朝堂院修式堂の基壇南西隅が確定したことが重要である。出土遺物の年代観から、検出した修式堂基壇は平安時代後期に修築されたものであるが、基壇版築は創建期と考えられることや、基壇外装は一般的に同じ位置で修築されることから、現状の基壇痕跡の位置は平安宮創建期からあまり動いていないと想定できる。以上の点を考慮したうえで、修式堂南西部の基壇座標値を延石外側で表示すると、基壇西辺で $Y = -23,548.4$ 、基壇南辺で $X = -109,106.3$ ということになる。

これらのデータと、これまでの調査で判明している修式堂および延祿堂の基壇縁のデータを比較して、基壇の大きさや基壇間の距離を求めると以下のようになる。²⁾

修式堂基壇の南北幅 … 19.23 m (6丈4尺4寸 \approx 6丈5尺)

修式堂基壇西縁と延祿堂基壇東縁の距離 … 10.44 m (3丈5尺)

平安宮想定中軸と修式堂基壇西縁の距離 … 48.625 m (16丈3尺)

なお、平安宮中軸を挟んで修式堂と対称の位置にある暉章堂の基壇東縁を、1979年の立会調査で確認しており、その時のデータと今回検出した修式堂基壇西縁の距離を計測すると、97.75 m (32丈7尺5寸 \approx 32丈8尺)という数値を得ることができ、実際には平安宮中軸から修式堂基壇西縁の距離は16丈4尺であった可能性が高いといえる。

次に基壇外装の修築時期であるが、整地層内から播磨産軒丸瓦が出土した事実は注目できる。とくに、瓦5・6は同範資料が民部省³⁾と左京一条三坊九町の調査でも出土しており、平安宮を中心に広い範囲に供給された軒瓦であることがわかる。これらの軒丸瓦は自然釉を多くかぶる点や、丸瓦部に布目がなく粘土紐巻き上げで成形されている点で共通しており、生産地として播磨の神出窯跡群から同資料が出土する。神出窯跡群では、瓦範に改刻を加えながら長期間にわたる生産が推定され、平安宮への供給は11世紀第3四半期の後三条天皇による大極殿再建以降、12世紀第1四半期にかけての年代が与えられるという⁵⁾。

この播磨産軒丸瓦が整地層に混入している事実から、修築時期の候補として嘉承2年(1107)の鳥羽天皇の踐祚に伴う八省院の修理を挙げることができる。しかし、この時の修理は実質的には大極殿や廊門などが主だったようで、朝堂院全域にわたる整地や朝堂基壇の修築が実施されたかどうか不明である。大規模な朝堂院の整備としては、保元3年(1158)の信西による八省院修造の可能性も残る。今回の調査成果からは、12世紀前半に大規模な朝堂の修造があったことを指摘するにとどめておきたい。

最後に朝堂院創建期における旧地形との関係であるが、今回の調査で旧地形は修式堂基壇の西縁付近から西へ大きく落ちていくことが明らかとなった。現状では朝堂院西回廊推定地付近の西側が低くなっており、南回廊推定地付近も東西道路である太子道に沿って低くなっているが、延祿

堂南端部付近で2 mほど高まって平坦地となっている。政所政次郎氏の収集記録にも、二条千本西の踏切（旧山陰線）東の宅地造成による削平工事で多くの瓦を収集したことが記されており、⁶⁾朝堂院南西部が盛り土によって一段高い平坦地を造成していた可能性が高い。平坦なイメージの強い平安宮であるが、朝堂院の南西からの景観は、微地形を利用して聳えるように高まっていたのである。今後の調査では、平安宮の旧地形の復元も考慮して行っていく必要がある。

註

- 1) 伊藤玄三「平安宮朝堂院の遺構－延祿堂・修式堂－」『古代文化』第24巻第8号 1972年
- 2) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年
なお、上記報告書では基壇位置のデータは旧測地系で表記されているため、今回これらのデータを世界測地系に換算して比較検討した。
- 3) 戸田秀典・松井忠春「平安宮推定民部省跡の発掘調査」『平安博物館研究紀要』第6輯 1976年
- 4) 財団法人古代学協会『平安京土御門烏丸内裏跡－左京一條三坊九町一』平安京跡研究調査報告第10輯 1983年
- 5) 兵庫県教育委員会『神出窯跡群Ⅲ』兵庫県文化財調査報告第407冊 2011年
- 6) 網 伸也・植山 茂「平安宮出土軒瓦の新資料－政所政治郎手拓資料の紹介（1）－」『帝塚山大学考古学研究所研究報告XⅠ』 2009年

Ⅱ 平安京右京二条四坊一町跡

1. 調査経過

京都市右京区花園中御門町地内でマンションの建設が計画され、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）が試掘調査を実施したところ、平安時代前期から中期の柱穴や土坑などが認められ、平安時代の遺構が良好に遺存していることが判明した。その結果、文化財保護課の指導により、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、国庫補助事業として2012年4月10日から5月2日の期間で発掘調査を実施した。

調査区は建物予定地に東西26.7m、南北7.4～11.3mの調査範囲を設定し、現代層は重機掘削し、その後人力による手作業で調査を進めた。調査面積は243㎡である。

調査の節目ごとに文化財保護課の視察を受け、その指導の下に調査を進めた。

2. 位置と環境

調査地は平安京の条坊では、北側を中御門大路、東側を木辻大路、南側を春日小路、西側を菖蒲小路に四方を画された右京二条四坊一町の南東部にあたる。また一町内を区分する「四行八門制」



図8 調査位置図（1：2,500）

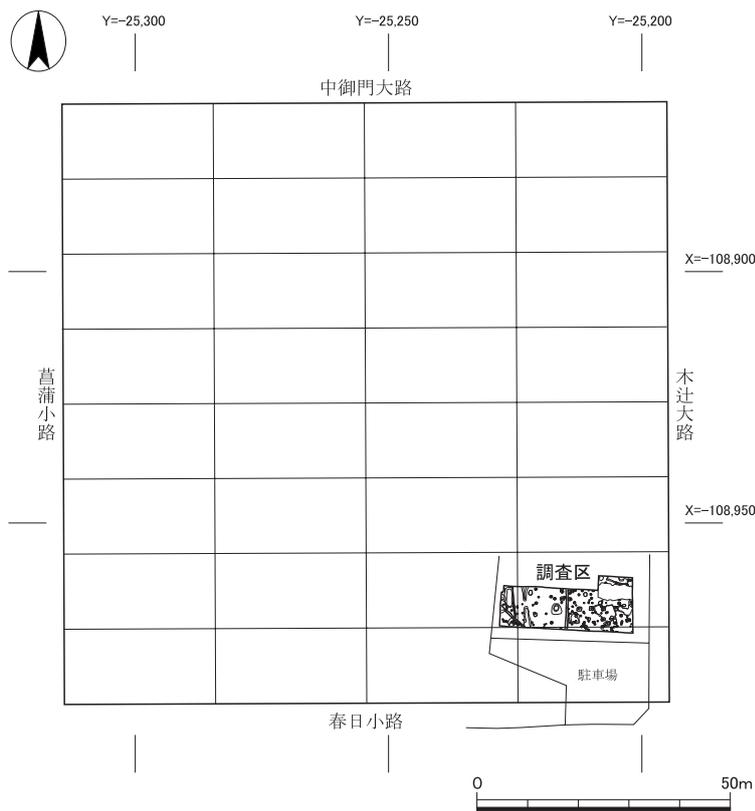


図9 四行八門および調査区配置図 (1 : 1,500)

によれば「東一・二行北七門」の二戸主分に該当する。同町に関連する居住者や諸施設については記録した文献史料は認められないが、「拾芥抄」西京図には四坊の地には二町「章博領」、三・四町藤原通俊所有地、七町右馬町、八町内匠町、十町藤原安頼領、十三・十四町右兵衛府領、十五町右近衛府領、十六町四天王寺領などが記されている。

四坊内における調査例は乏しい。八町内では1982年にマンション建設に伴う発掘調査で、平安時代中期から室町時代にかけての春日小路北側溝、掘立柱

建物群、柵、土坑などが検出されている。

十五町内では1977年の右京文化会館建設に伴う発掘調査で平安時代中期から室町時代の西京極大路の路面および平安時代後期の西側溝が検出されている。また、2005年に行われた太秦安井公園設備事業に伴う発掘調査でも、平安時代後期の西京極大路東西側溝、鎌倉時代から室町時代の春日小路路面および南側溝が検出されている。

立会調査では三町内で平安時代前期の井戸が検出されている。また、二町・六町・八町・十六町では平安時代から鎌倉時代の遺物包含層が確認されている。



図10 調査前全景 (南東から)



図11 作業風景 (南東から)

3. 遺 構 (図版 2・3)

遺構検出面に至る層序では、一部(西端)で旧耕作土層を認めたと、調査区の大部分では現代層直下に遺構面を検出した。遺構面は大半が地山層で現地表下0.2～0.5mと浅い。遺構はすべて同一面で検出しており、重複しているものも多くある。

検出した遺構には鎌倉時代の井戸・溝・土坑や平安時代の掘立柱建物・柵・土坑、柱穴などのほか、建物としてまとまりはつかめなかったが多数の遺構がある。

また、土器を埋納したと思われる柱穴を1基検出した。検出遺構総数は172基である。

以下主要な遺構についてのべる。

井戸25 (図14、図版3-5) 調査区中央で検出した平面形が2.1×1.9mの楕円形を呈する素掘りの井戸である。検出面からの深さは3.4mで、底面の標高は37.3mである。埋土は黒褐色砂泥・黒褐色泥土で、鎌倉時代前期の土師器・瓦器・須恵器・輸入陶磁器・軒瓦・石鍋などが出土した。

井戸137 調査区東端壁際で検出した。東半は調査区外に広がり、北側は攪乱により壊されている。壁際で検出したため安全上、検出面から0.8mまでの調査にとどめた。従って深さは不明である。埋土は黒褐色砂泥・暗褐色砂泥で鎌倉時代前期の遺物が出土した。

溝64 調査区西側で検出した幅0.5m、深さ0.4mを測る南北方向の溝である。埋土は灰黄褐色砂泥で、鎌倉時代前期の遺物が出土した。

柱穴53 (図版3-1) 調査区南東部で検出した径0.4m、深さ0.2mを測る柱穴である。掘形から鎌倉時代の土師器皿が完形で出土した。

土坑14 調査区西側で検出した径0.3m、深さ0.2mを測る土坑である。埋土は黒褐色砂泥で、滑石製石鍋を転用した温石が出土した。

掘立柱建物1 (図15) 調査区南東部で検出した。東西3間(7.2m)以上、南北1間(2.4m)以上の掘立柱建物で、調査区外へ広がる。柱間は2.4mである。柱掘形は0.5～0.6m前後の円形を呈し、検出面からの深さは0.2～0.5mを測る。柱穴46の柱当りには焼土・炭が多量に含まれている(図版3-2)。また柱穴49は検出面で0.2×0.3mの肩平な石が据えられており、その下柱当りには小石が詰められている(図版3-3)。柱穴46の掘形、柱穴59の柱当りから平安時代の遺物が出土した。

柵2 (図16) 調査区東半中央部で検出した東西方向を示す、柱間3間分の柵。柱間は2.2～2.3mで柱掘形は0.3～0.4mの円形を呈する。検出面からの深さは、0.2～0.4mを測る。

表3 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	掘立柱建物1、柵2～4、土坑139・161、溝20、柱穴など	
鎌倉時代	井戸25・137、溝64、土坑など	

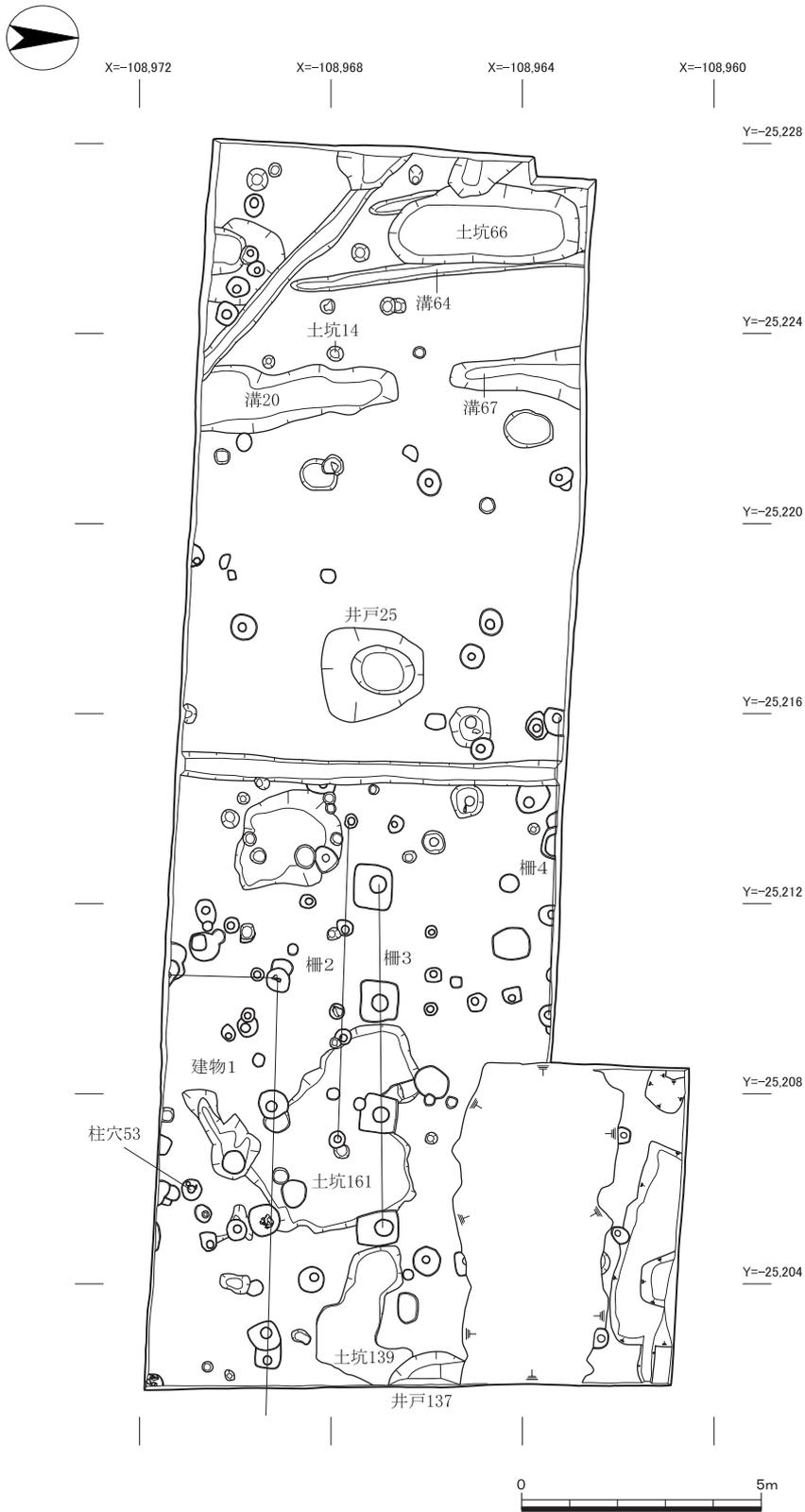


图12 遺構平面図 (1 : 150)

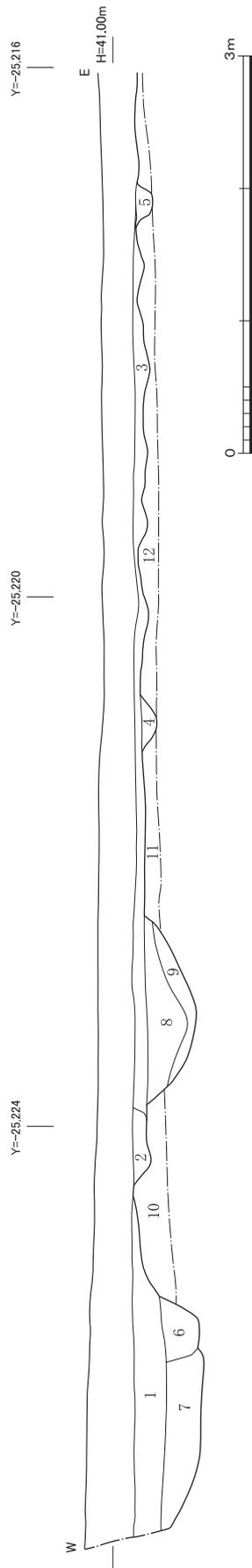


図13 北壁断面図 (1 : 50)

- 1 10YR2/3 黒褐色砂泥 土師片・炭混
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 3 10YR2/3 黒褐色砂泥
- 4 10YR3/2 黒褐色砂泥 土師片混
- 5 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 6 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (溝64)

- 7 10YR2/2 黒褐色砂泥 土師片混 (土坑66)
- 8 10YR3/2 黒褐色砂泥 土師片・炭混
- 9 10YR3/2 黒褐色砂泥 + 10YR5/6 黄褐色粘質土10% (溝67)
- 10 10YR5/4~5/6 黄褐色砂礫 + 10YR5/6 黄褐色粘質土
- 11 10YR5/6 黄褐色粘質土
- 12 10YR3/3 暗褐色砂泥 + 10YR5/3~5/4 にぶい黄褐色砂礫

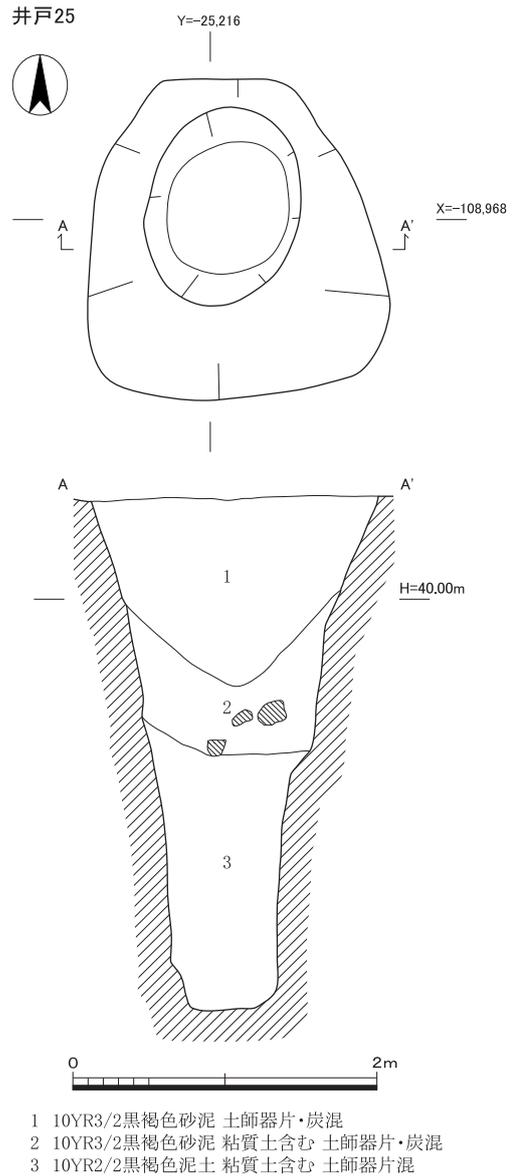


図14 井戸25実測図 (1 : 50)

- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 土師器片・炭混
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 粘質土含む 土師器片・炭混
- 3 10YR2/2 黒褐色泥土 粘質土含む 土師器片混

柵3 (図16、図版2-2・3-4) 調査区中央部で検出した東西方向を示す、柱間3間分の柵。柱間は2.4mで、柱掘形は0.15~0.25mを測る。各柱穴の柱当り、掘形から平安時代の遺物が出土した。

柵4 (図17) 調査区東半北壁際で検出した3間以上の東西方向を示す、柱間3間分の柵。柱間は2.0mで柱掘形は円形を呈するが規模は不明。

土坑139 東半で検出した不定形な大型遺構。埋土は、黒褐色砂泥に、にぶい黄褐色砂泥・炭が多く含まれている。検出面からの深さは0.05~0.1mで、平安時代前期から中期の遺物が出土した。

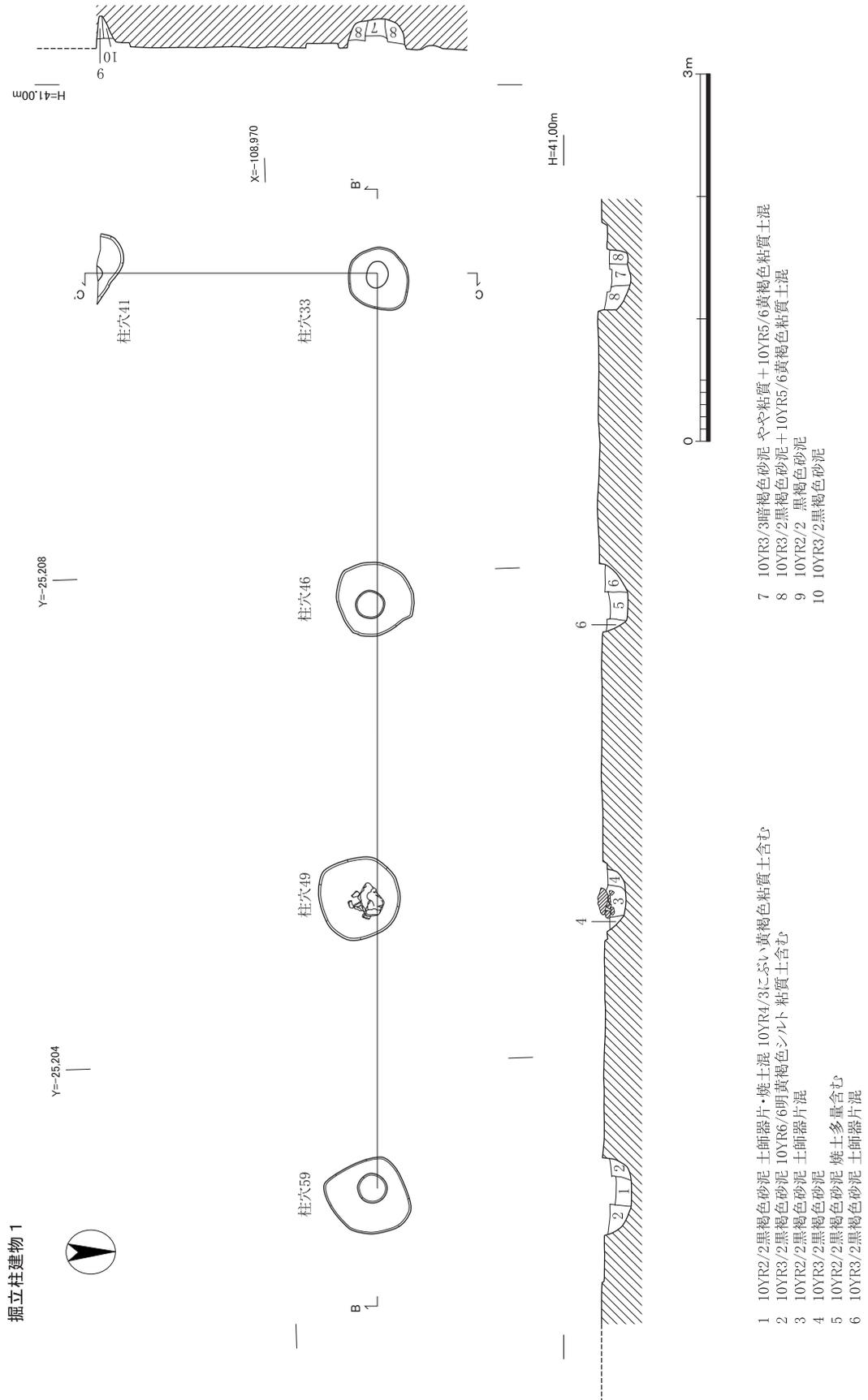


図15 掘立柱建物 1 実測図 (1 : 50)

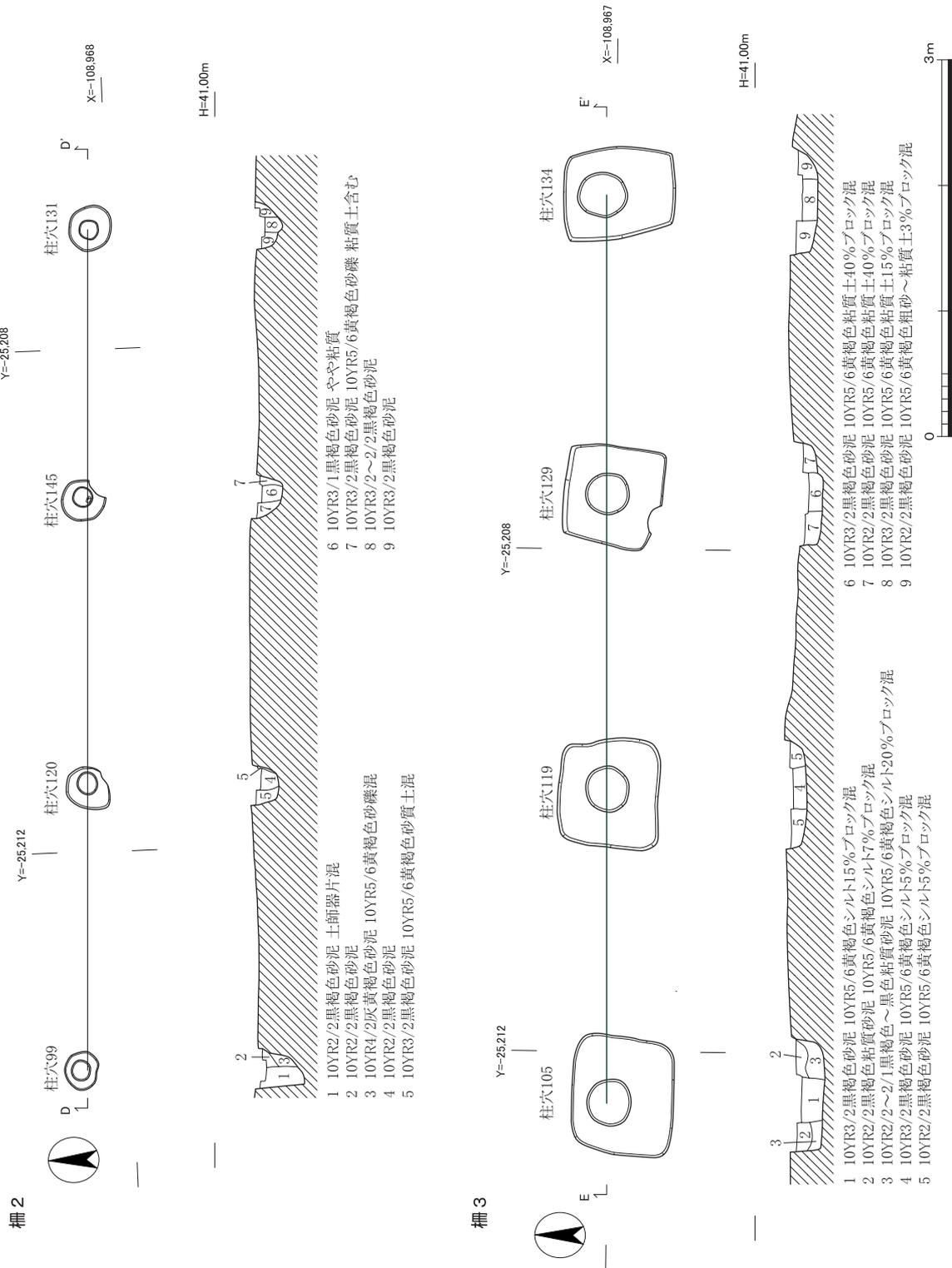


図16 柵 2・3実測図 (1:50)

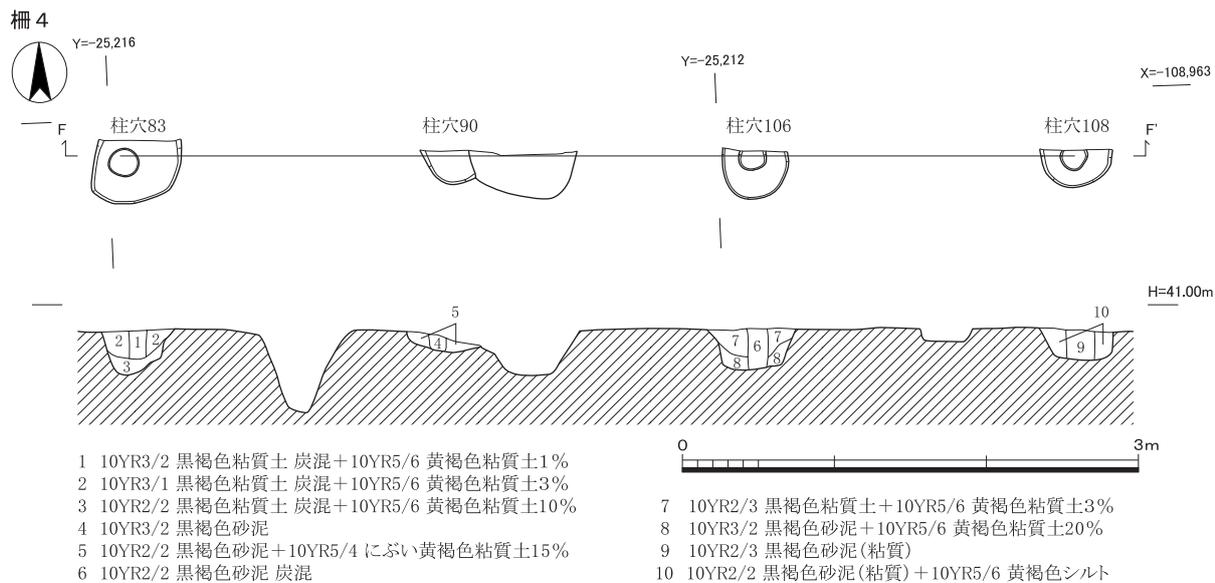


図17 柵4実測図(1:50)

土坑161 調査区東半で検出した土坑139と同様の不定形な大型遺構。埋土は、黒褐色砂泥に、黄褐色粘質土が混入している。検出面からの深さは0.05~0.12mで、平安時代前期から中期の遺物が出土した。

土坑66 調査区西端で検出した。南北4m以上東西1.7mの楕円形を呈した大型の土坑である。埋土は黒褐色砂泥(図13-7層)で、平安時代前期から中期の遺物が出土した。

溝20 調査区西半で検出した。幅1.2m、深さ0.15mを測る南北方向の溝状遺構である。埋土は黒褐色砂泥で灰釉陶器、黒色土器などが出土した。

溝67 調査区西半で検出した幅0.6~1.3m、深さ0.2~0.35mを測る南北方向の溝状遺構である。埋土は黒褐色砂泥(図13-8・9層)で、緑釉陶器が多く出土した。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、整理箱で14箱ある。遺物の主体は土器類であるが、ほかに瓦類・石製品・金属製品がある。遺物の時期は平安時代前期から鎌倉時代に属するものが多い。

鎌倉時代の遺物は土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器・焼締陶器・軒瓦・石製品などがある。井戸25・溝64などから出土した。

平安時代の遺物は土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・軒平瓦などがある。溝20、土坑139、土坑161などから出土した。鎌倉時代の遺構から出土しているものも多い。

(2) 土器類 (図18・19、図版4)

井戸25出土土器(1~23)(図18) 1~17は土師器皿である。体部外面上半から口縁部にかけてナデによる浅い一段の凹みをもつ。皿N小(1~13)は、口径8.4~10.0cm、器高1.5cm前後が中心で、体部は丸みをもって外上方へのび、端部は丸く収める。12・13は2段ナデの名残を残し、口縁端部も外反気味である。皿N大(14~17)は、口径12~13cm台で、器高は2.5cm前後である。体部は丸みをもって外上方へのび、端部はつまみ上げている。18は須恵器皿。口径7.6cm、器高2.2cmを測る。口縁部は外上方へ直線的にのび、端部は丸く収める。底部は糸切り痕を残す。19は瓦器皿。口径は8.4cmを測る。内面はヨコ方向の粗いヘラミガキ、外面はナデ調整。外面は口縁部のみ瓦質化している。20~22は白磁椀。20は体部が外上方へ直線的にのび、口縁部は外反し、端面をもつ。21は外へ折りたたむ内厚な玉縁口縁で、体部外面下半は露胎である。22は椀の底部。削り出しの蛇の目高台で、外面は露胎である。23は白磁壺。削り出しの底部で、高台部は露胎である。底部に「一□」2文字の墨書があるが、判読できない。ほかに瓦器椀・三足付羽釜、焼締陶器鉢・甕などがある。12世紀末から13世紀前半に位置付けられる。

柱穴53出土土器(24)(図18) 24は土師器皿N小である。口径1.5cm、器高2.0cmを測る。体部外面上半から口縁部にかけてナデによる浅い一段の凹みをもつ。底部外面に編物様の炭化物が付

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類		土師器9点、須恵器3点、黒色土器4点、緑釉陶器10点、灰釉陶器4点、軒瓦5点		
鎌倉時代	土師器、瓦器、輸入陶磁器、須恵器、焼締陶器、瓦類、石製品、金属製品		土師器23点、瓦器2点、輸入陶磁器4点、須恵器1点、石製品3点		
合計		16箱	68点(2箱)	1箱	13箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

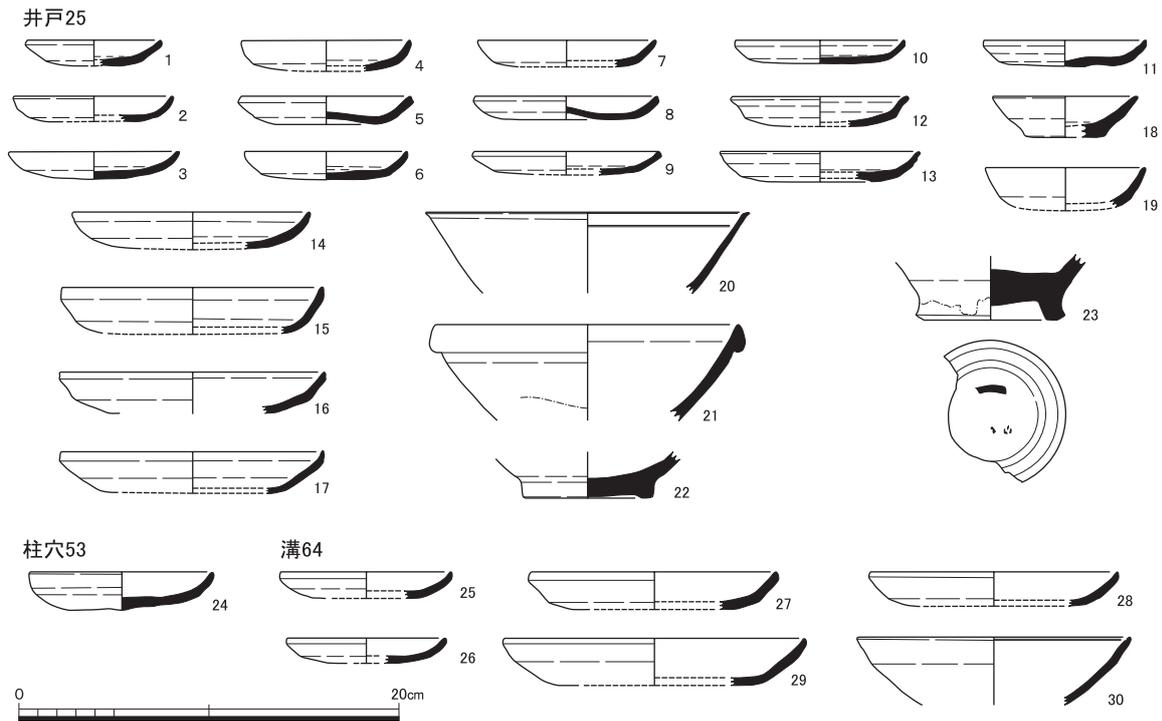


図18 土器実測図1 (1:4)

着している。

溝64出土土器 (25～30) (図18) 25・26は口径9cm前後の土師器皿N小、27・28は口径13cmの土師器皿N中、29は口径16cmの土師器皿N大である。体部上半から口縁部にかけてナデによる一段の凹みをもつ。30は瓦器椀。口縁部内面に浅い凹線が巡る。内外面磨滅しているが、外面は部分的に粗いミガキが認められる。

溝20出土土器 (31～33) (図19) 31は黒色土器A類椀。口径14.8cm、器高8.2cm。体部はやや内湾気味に外上方へ延びる。口縁部内面に一条の凹線を巡らす。体部内面はヨコ方向、底部は一定方向のヘラミガキを施す。外面の調整は磨滅しており不明であるが、底部に断面三角形の高台が付く。32・33は灰釉陶器椀。32は底部ヘラケズリで、短い断面三日月形高台が付く。体部上半内外面に刷毛塗りで施釉。底部外面に墨書があるが判読できない。33は体部から口縁部がやや丸みをもって外上方へのびる。外面体部下半から底部はヘラケズリで、高い三日月形高台が付く。口縁部内外面施釉。口縁部にヘラによる輪花を施す。9世紀中頃から後半。

柱穴49出土土器 (34・35) (図19) 34は黒色土器A類鉢。体部はほぼ直立し、口縁端部は面をもつ。外面は磨滅しているため調整不明。内面ヨコ方向のヘラミガキを施す。35は緑釉陶器皿。口縁部は内湾気味に開き、端部はやや屈曲して外反する。口縁部と体部の境界に稜が付く。底部外面以外施釉。二次焼成を受けている。京都産。9世紀後半。

柱穴46出土土器 (36) (図19) 36は須恵器壺M。口縁部は欠損。体部は卵型を呈する。体部下半ヘラケズリ。底部外面は糸切り痕を残す。

柱穴59出土土器 (37・38) (図19) 37は土師器皿。口縁部は外反し、端部が小さく上方へ立ち上がる。内面と口縁部はナデ、外面はオサエ調整。10世紀中頃から後半。38は須恵器杯Bの底

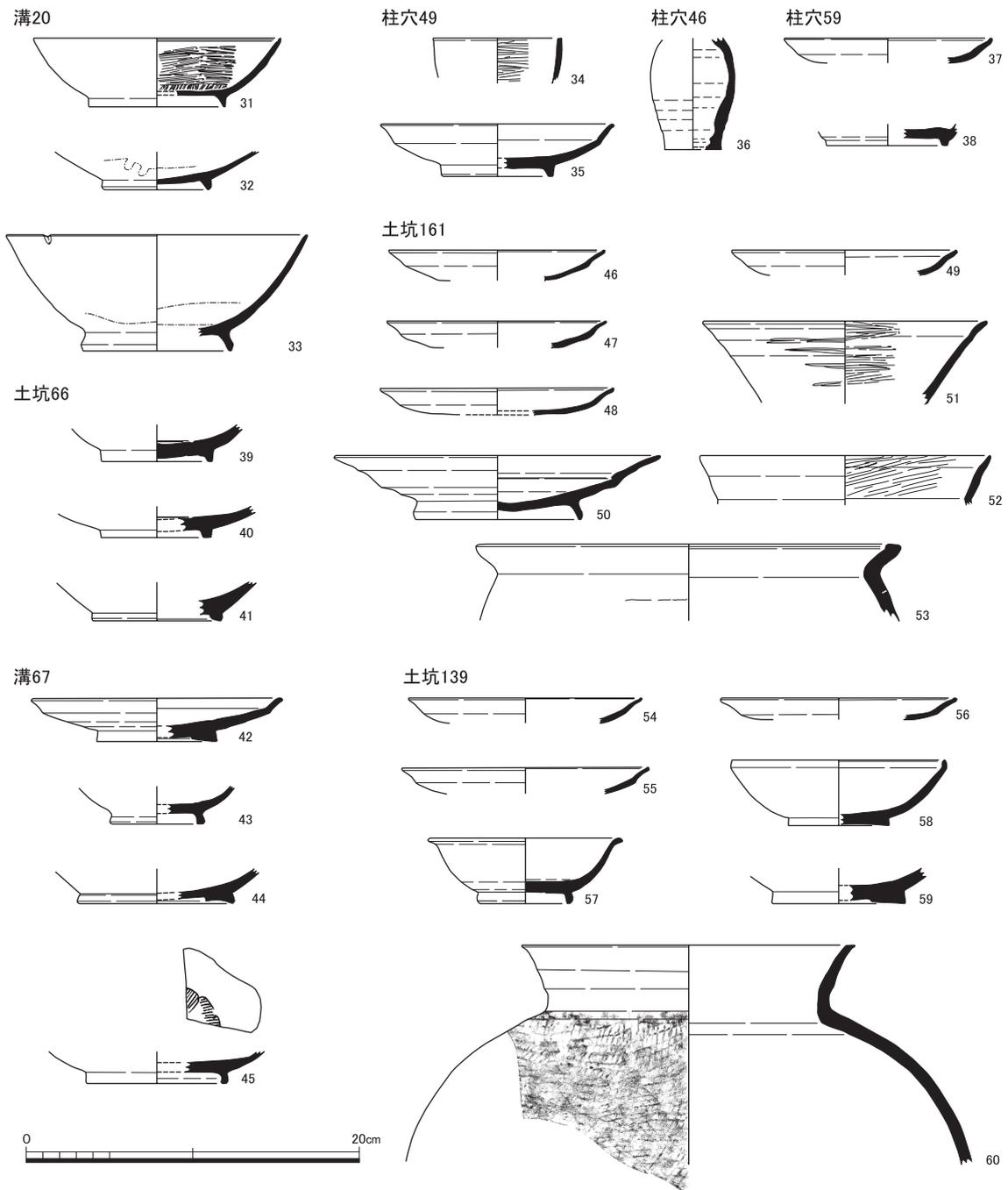


図19 土器実測図2 (1:4)

部。9世紀。

土坑66出土土器(39~41)(図19) 39・40は緑釉陶器碗。39は外面ヘラケズリで、削り出しの輪高台。内面ヘラミガキで、底部に凹線が巡る。にぶい黄橙色の素地に全面施釉。40は内外面ヘラミガキで、削り出しの輪高台。内面底部に凹線が巡る。にぶい黄橙色の素地に全面施釉。41は緑釉陶器碗の素地。内外面ヘラミガキで、削り出しの輪高台。いずれも京都産で、9世紀中頃から後半。

溝67出土土器(42~45)(図19) 42は緑釉陶器皿。口縁部は内湾気味に開き、端部はやや屈曲して外反する。内面ヘラミガキ、外面ヨコナデで、底部は削り出しの蛇の目高台。須恵質の素地

に全面施釉する。43～45は緑釉陶器碗。43は内外面ヘラミガキで、貼り付けの輪高台。須恵器の素地に全面施釉する。44は内外面ヘラミガキで、底部は貼り付けの蛇の目高台。灰白色の軟質の素地に全面施釉する。45は内外面ヘラミガキで、貼り付けの輪高台。底部内面に印刻花文を施す。灰白色の軟質の素地に淡緑黄色の釉を前面に施す。42は京都産。43～45は猿投産。9世紀後半。

土坑161出土土器(46～53)(図19) 46～49は土師器皿。口縁部は外反し、端部が小さく上方へつまみあげる。器壁は薄い。内面および口縁部外面はナデ、外面はオサエ調整。46～48は10世紀中頃。49は古相を呈しており、10世紀前半に位置づけられる。50は灰釉陶器段皿。内面に段があり、端部は外上方へ直線的にのびる。口縁部内外面ヨコナデ、底部内面ナデ調整で重ね焼き痕が残る。底部には断面隅丸方形を呈するやや高い輪高台が付く。口縁部内面施釉。51・52は黒色土器A類。51は口縁部が外上方へ直線的にのびる鉢。内面はヨコ方向の丁寧なヘラミガキ、外面はヨコ方向の粗いヘラミガキ調整。52は甕の口縁部。外面ナデ、内面ヘラミガキ調整。53は土師器甕。口縁部はわずかに肥厚する。外面に粘土紐痕が残る。

土坑139出土土器(54～60)(図19) 54～56は土師器皿。口縁部は外反し、端部が小さく上方へつまみあげる。器壁は薄い。内面および口縁部外面ナデ調整。10世紀中頃に位置づけられる。57は灰釉陶器碗。体部は内湾気味に外上方へのび、口縁部は外反し、端部は丸く収める。底部に断面三日月高台が付く。内外面ヨコナデ調整で、口縁部内面施釉。58・59は緑釉陶器碗。58は内湾気味に立ち上がり、口縁部は直立する。内面ヘラミガキ、外面ヨコナデ調整で、底部は平高台。須恵質の素地に緑灰色の釉薬を前面に施す。59は内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリで、削り出しの蛇の目高台。にぶい橙色の素地に淡緑黄色の釉薬を前面に施す。京都産。9世紀後半から10世紀前半。60は口径20.0cmの須恵器甕。口縁部は内外面ヨコナデ調整。体部は外面格子目タタキ、内面は同心円文をナデ消している。9世紀。

(3) 瓦類(図20、図版4)

掲載した瓦は軒丸瓦1点、軒平瓦4点である。61・62・65は鎌倉時代の井戸25から混入で、63・64は土坑139から出土した。

61は三巴文軒丸瓦である。左巻きで、巴の頭部は欠損する。尾は互いに接しない。瓦当部裏面上端に丸瓦をあて粘土を付加して接合。全体に磨滅し調整は不明。瓦当面に離れ砂が付着する。胎土は小礫含み、灰白色。軟質。平安時代後期。山城産。

62は緑釉均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向C字形で、大きな巻き込みの唐草を配する。外区に珠文が粗く巡る。曲線顎。瓦当部凹面ヨコケズリ。平瓦部凸面ナデ、凹面ヨコケズリで一部布目が残る。顎部凸面ヨコナデ。胎土は砂粒・小礫含み、淡黄色。やや軟質。瓦当部・顎部に施釉。釉色は浅黄色。平安時代前期。栗栖野瓦窯産。

63は均整唐草文軒平瓦である。主葉は大きく巻き込み、支葉も巻き込む。外区に珠文があらく巡る。瓦当部のみの残存である。胎土は砂粒を多く含み、浅黄橙色、やや軟質。平安時代前期。西賀茂角社瓦窯産。

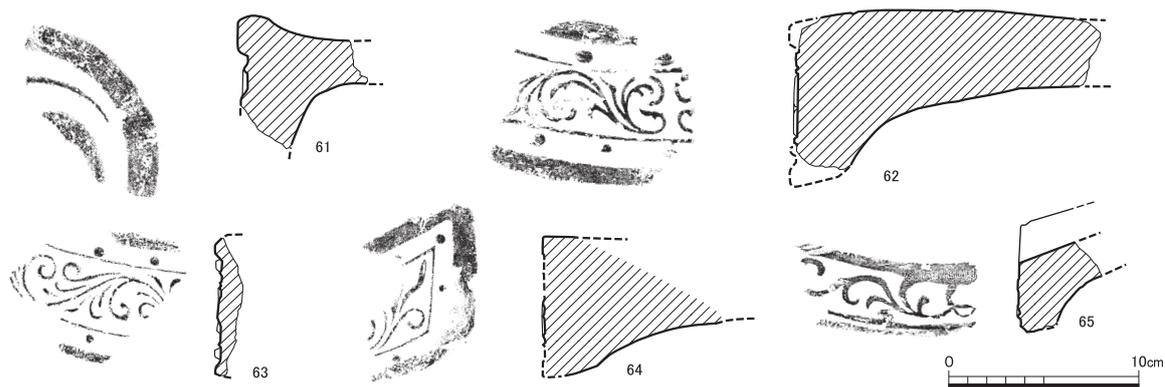


図20 軒瓦拓影・実測図（1：4）

64は均整唐草文軒平瓦である。瓦当面は大半が欠損している。端部に残存する唐草の支葉は、巻き込むものと上方に延びるものがある。外区に珠文が粗く巡る。曲線顎。平瓦部凹面・側面タテナデ。胎土は砂粒含み、灰白色で表面は暗灰色、やや軟質。平安時代前期。岸部瓦窯産。

65は均整唐草文軒平瓦である。舌状の中心飾りをもち、唐草が3転する。周囲に界線を作るが、瓦当面中心部上方はヘラケズリされている。瓦当部凹面・平瓦部凸面布目、平瓦部凹面オサエ後ヨコナデ。顎部凸面ヨコナデで一部布目が残る。側面は不成形。胎土は精良、緑灰色、硬質。平安時代後期。山城産。

（4）石製品（図21、図版4）

石製品には石鍋と温石がある。

滑石製石鍋（66）は、内湾する体部外面上方に水平方向にのびる幅広の鏝を削り出す。外面鏝以下には工具痕が残り、煤が付着する。口径は24.8cmを測る。

67・68は温石である。67は口径21.8cm、器高10.0cmの滑石製石鍋の口縁部から底部を再加工したものである。鏝部は鋭利な刃物で削り落している。底部の切断面は粗く凸凹している。外面には石鍋として使用されていたときに付着した煤が付着し、底部はやや厚く付着している。68は滑石製石鍋の破片を再加工したものである。石鍋の口縁部を側縁として利用し、二辺を斜め方向に切断しているが、他は欠損している。鋭利な刃物で鏝部分を削り落している。外面には煤が付着している。66・68は井戸25、67は土坑14から出土した。

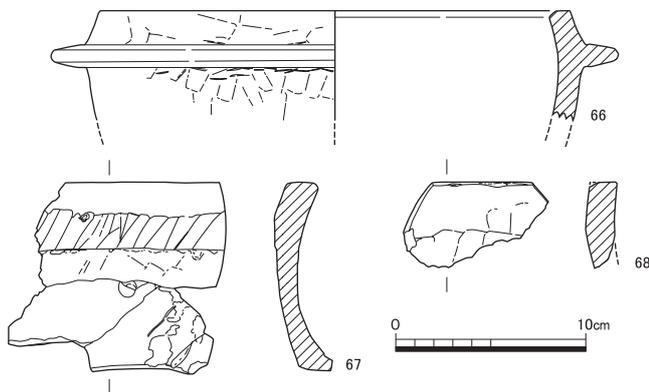


図21 石製品実測図（1：4）

5. まとめ

今回の調査では、調査面積が狭く遺構の全容はつかむことはできなかったが、この地における土地利用の変遷について、その一端を知りうる資料が得られた。

検出した遺構には、鎌倉時代の井戸・溝・土坑や、平安時代の掘立柱建物・柵・土坑などがある。建物としてのまとまりがつかめなかった遺構も多数ある。遺構の大半は調査区の東半に集中している。調査地は右京二条四坊一町の東一・二行北七門にあたり、町の東側を巡る木辻大路に近接した位置にあたる。条坊関連の遺構は検出していないが、検出した遺構からは大路に面して小規模な建物が軒を連ねていた状況が推測される。

今回の調査結果に周辺地の調査結果をふまえて「一町」の平安時代から鎌倉時代の遺構状況を見ると、遺構の上部はかなり削平されているものの、平安時代から鎌倉時代の遺構は良好に遺存しているとみられる。

なお、当地周辺は平安京の中において調査例が希薄な地域であり、今後の調査結果の蓄積を待つて考察を行う必要がある。

遺物では井戸25から平安時代前期の緑釉軒平瓦が出土した。混入品ではあるが、どのような経緯を経て当地から出土したのか興味もたれる。

Ⅲ 中臣遺跡86次調査

1. 調査経過

今回の調査は、中臣遺跡の86次調査となる。中臣遺跡は、旧石器時代から中世に至る遺構・遺物が確認されている大規模な複合遺跡である。今回の調査地は中臣遺跡北西の低位段丘上に位置する。調査地北側には平安時代前期の宮道朝臣列子墓の伝承をもつ宮道古墳があるが、これは周辺に分布する中臣十三塚と呼ばれる古墳時代後期の古墳群のうちの1基と考えられている。

調査地周辺では、これまでに中臣遺跡1～5次・14次・27次・44次・76次・78次調査が実施されている。調査地の北西で実施された1次調査では、石室をもつ径約6mの古墳時代後期の小型円墳が検出されている。その西側で実施された44次調査では弥生時代中期の土壌墓が1基みついている。調査地南東で実施された14次調査では古墳時代後期の竪穴住居1棟がみついている。調査地の東側で実施された27次・76次・78次調査では弥生時代中期の方形周溝墓が4基接続してみついている。また、調査地南側一帯で実施された2～5次調査では縄文時代後期の土坑、古墳時代前期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物などがみついている。以上のことから、今回の調査でも縄文時代から古墳時代後期に至る各時期の遺構の検出が想定された。

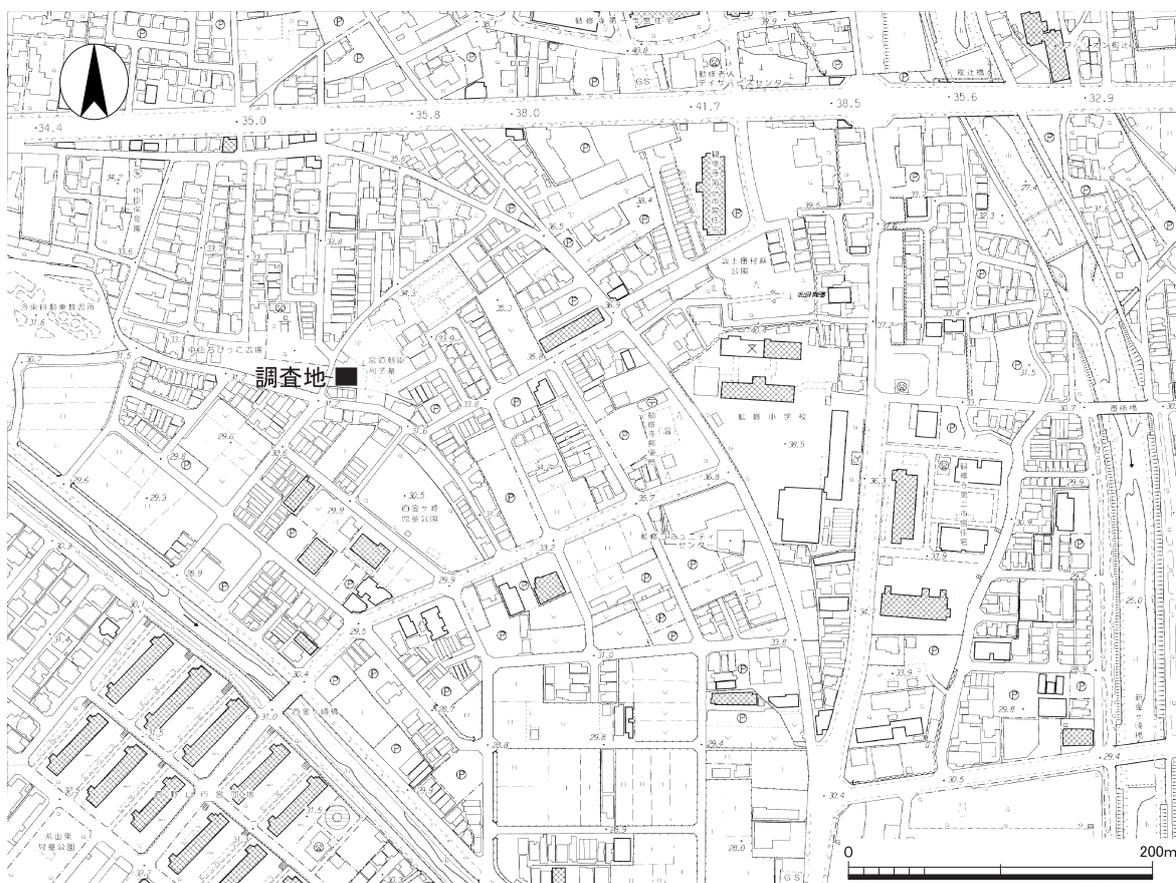


図22 調査位置図 (1 : 5,000)



図23 調査前全景（南東から）



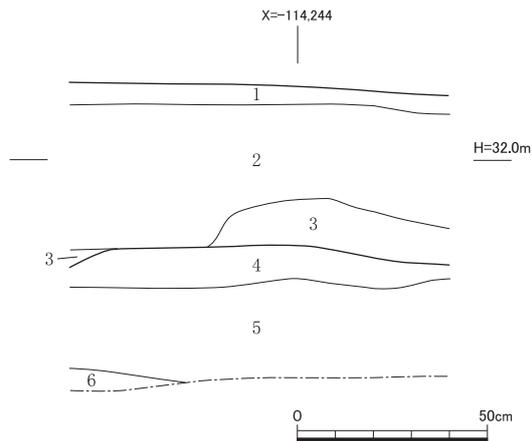
図24 作業風景（北北東から）

調査区は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導に従い、敷地の西側に設定した。調査面積は150㎡である。調査の結果、調査区全域でGL - 0.1～0.6mで砂礫もしくは均質なシルト～細砂の無遺物層を確認したが、遺構は検出されなかった。その後、宮道古墳の周溝を確認する目的で一部調査区を北側に拡張し、調査面積は153㎡となった。拡張部北端で溝状の落ち込みの南肩部を検出し掘り下げたが、底からモルタルが出土した。写真撮影、平面図作成などの記録作業後、断割調査を行い、断面図を作成して調査を終了した。

2. 遺 構

(1) 基本層序

調査地は調査前まで駐車場として利用されていた。現地表面の標高は敷地北東で32.5m、南西で32.2mであり、北東から南西に向かって下がる。



- 1 碎石
- 2 10YR3/2黒褐色シルト～細砂 小礫混に10YR5/6黄褐色シルトブロック混(現代盛土)
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂に2.5Y5/4黄褐色シルト～細砂ブロック多量混(近現代土壌化層)
- 4 2.5Y5/4黄褐色シルト～細砂 φ0.5～3cmの礫少量混(基盤層)
- 5 2.5Y6/6明黄褐色シルト～細砂 φ1～4cmの礫微量混やや粘質(基盤層)
- 6 2.5Y6/4にぶい黄色シルト～極細砂粘質一部グライ化(基盤層)

図25 基本層序 (1 : 20)

GL - 0.1～0.5mまでの駐車場盛土を除去すると駐車場造成以前の近・現代土壌化層が堆積する。にぶい黄褐色のシルト～細砂を主体として締まりは悪い。層厚は約0.05～0.2mある。その直下が中臣遺跡の基盤となる無遺物層となる。検出標高は調査区北で32.3m、南では31.6mであり、北から南に下がる。この基盤層は、検出面ではY = -17,777ラインより東は径1～10cmの礫にシルト～細砂が混じる砂礫層で、西側は均質なシルト～細砂層である。調査区西壁際の断割調査の結果、砂礫層の堆積が北東から南西に下がり、その上に均質なシルト～細砂層が堆積していることが確認できた。

(2) 遺構

調査区全域で砂礫もしくは均質なシルト～細砂の無遺物層を確認したが、遺構は検出されなかった。

調査区北東の拡張部では、北端で溝状の落ち込みの南肩部を検出した。深さは約0.5m、埋土は黒褐色細砂～粗砂を主体とし、締まりは悪い。埋土からは棧瓦片が出土し、底にはモルタル板が埋まることから、近・現代に埋められたと考えられ、北側にある宮道古墳との関連は不明である。

今回の調査では、遺物は出土しなかった。

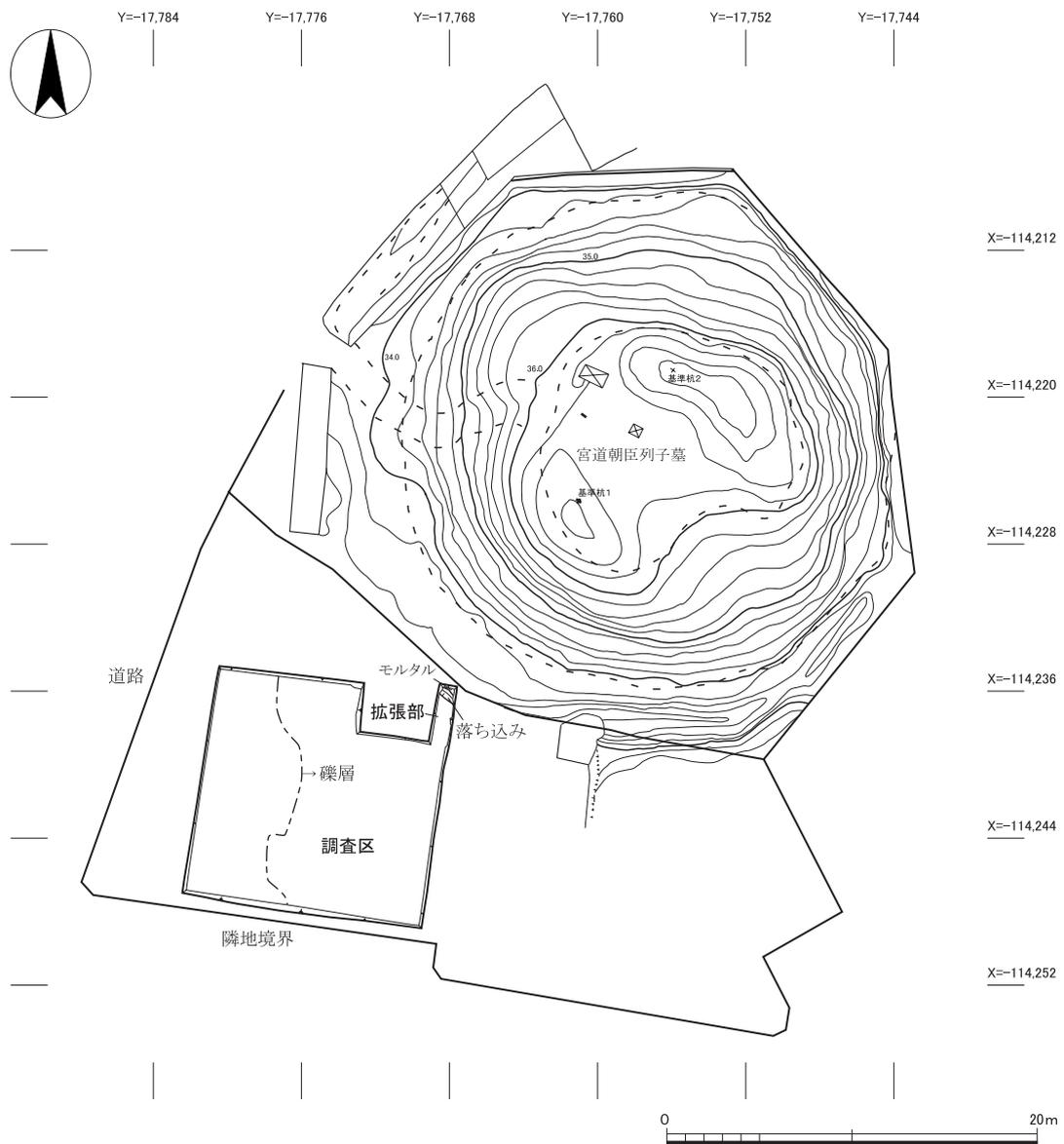


図26 調査区平面図 (1 : 400)

3. まとめ

今回の調査では、明確な遺構は検出できなかった。調査地東側で実施された78次調査の遺構検出標高は32.5m前後であり、今回の基盤層検出標高と大きな差はない。また北から南に下がる地形は周辺道路地形に沿うことから後世に大きな削平は受けていないと考えられる。さらに大きな攪乱がなく、遺物が全く出土しないことから見ても、当初から遺構が存在しなかった可能性が高い。このことから、27・76・78次調査で連続して見つかった弥生時代中期の方形周溝墓が西側には展開してこないことが判明した。また、周辺で多数見つかった古墳時代後期の遺構が存在しない要因としては、宮道古墳が築かれたことにより、以後その傍での居住や生産活動が制限された可能性が考えられる。遺構密集地における空閑地の存在は、集落の空間利用のあり方を考える上で興味深い成果と言えよう。

註

- 1) 京都橘大学文学部教授の一瀬和夫氏に測量データを提供していただいた。記して感謝申し上げます。



図27 調査区全景（南西から）

IV 植物園北遺跡

1. 調査経過

今回の調査は民家の新築工事にともなう、文化庁国庫補助事業による植物園北遺跡の発掘調査である。植物園北遺跡は1979～81年に実施した公共下水道敷設工事に伴う広域立会調査によって発見された遺跡である。弥生時代後期から古墳時代前期を主体とする集落跡で、京都盆地では最大級の規模を誇る。現在では縄文時代から室町時代までの遺構が存在する複合遺跡であることが明らかとなっている。

当調査地は植物園北遺跡の南東部に位置し、調査前は民家に囲まれた駐車場であった。道を挟んだ北側の敷地では2006年に遺構の確認調査（立会調査）が実施され、古墳時代前期の竪穴住居（住居）が6棟確認されている。さらにその北側の敷地でも古墳時代の竪穴住居3棟を検出している。このため、今回の調査対象地にもこの集落が及んでいるものと考えられ、調査の運びとなった。調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもと、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当して実施した。



図28 調査位置図 (1:2,500)



図29 調査前全景（北から）



図30 作業風景（北から）

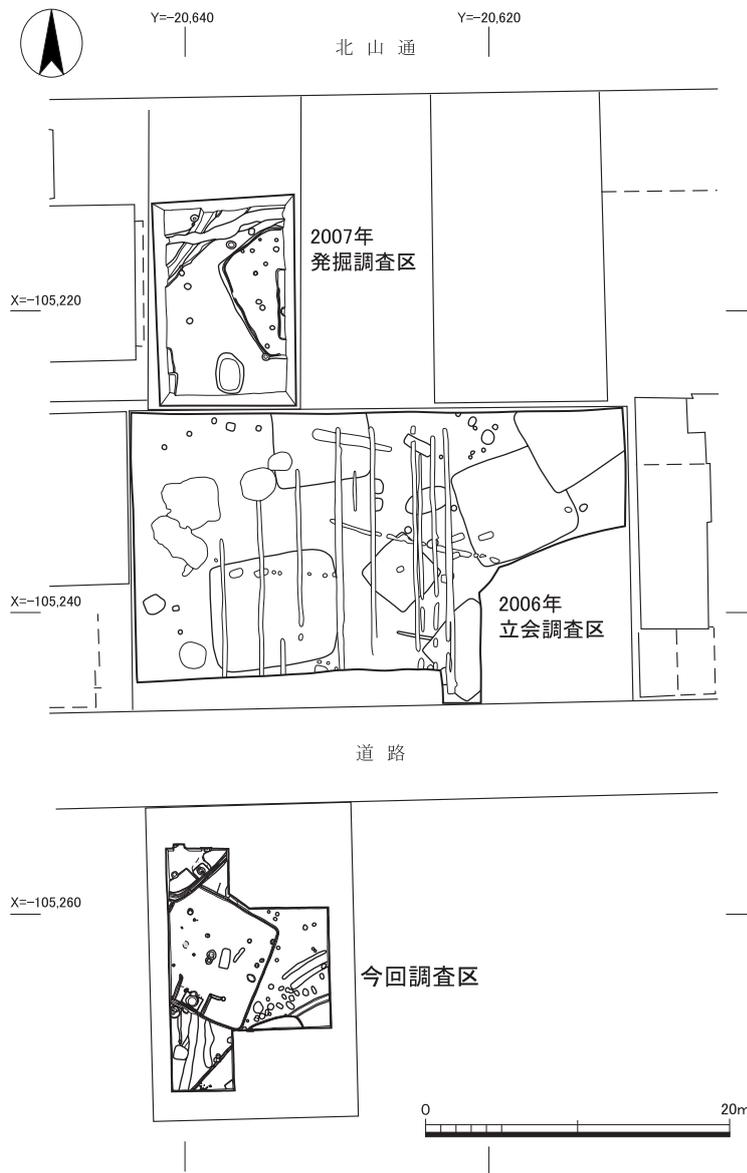


図31 調査区配置図（1：500）

調査区は敷地の中央部を中心とし、西側を南北に突出させた形である。発掘はアスファルト舗装の撤去、重機掘削から開始した。排土を場内で処理した関係上、途中で調査区の一部を先行して終了させ、排土置き場とした上で全体の調査を行った。結果、古墳時代前期の竪穴住居4棟と中世とみられる土坑群を検出した。

その後、碎石で調査区を埋め戻し、調査を終了した。

なお、調査期間中、調査区に西側に位置するノートルダム学院の発掘調査成果発表会に合わせて現場を公開するなど、成果の公表に努めた。

2. 遺 構

(1) 基本層序

調査区は前述したように駐車場として利用されており、北側が道路に面している関係上、平坦ではあるが北へ向かってわずかに下るよう整地・舗装されていた。一方、旧地形は基本的に北西から南東に下る緩斜面であり、中・近世には、これをひな壇状に成形し、耕作地としていた。調査区の中央部を北東から南西方向へ延びる溝を境に北西が高く、南東が一段低い畑地となっていたとみられる。

調査区の基本層序は、北西部と南東部で若干の違いがある。北西部は、上から駐車場のアスファルトとその基礎の碎石層、近世の耕土層、床土、その下に古墳時代の包含層が薄く堆積し、黄褐色粘土層の地山と続く。一方、南東部は、近世の耕土層・床土までは北西部と同様であるが、その下に中世の耕土層・床土が認められ、さらにその下が黄褐色粘土層の地山となる。遺構は、北西部では古墳時代の包含層上面、南東部では地山面直上で検出した。

(2) 遺構（図版5・6）

検出した主な遺構は、中世の土坑群と古墳時代前期の竪穴住居群である。その他に近世の溝や土坑が少数認められる。

中世の遺構

中世の遺構としては、土坑群を調査区の東部で検出した。土坑は楕円形で、長径0.3～0.6、短径0.2～0.4m、深さ0.1～0.3mで、調査区の東側から南西にかけて、帯状に分布している。性格は不明であるが、植栽に関係したものと考えられる。

古墳時代の遺構

古墳時代の遺構としては、調査区全域にわたって、竪穴住居（4棟：SH101～104）を検出した。いずれも出土遺物が乏しいため、時期の確定は難しいが、住居の形状、重複関係から前期のものと考えられる。その他柱穴、溝などがある。以下主な遺構について述べる。

SH101（図34、図版5-2） 調査の中央部で検出した、一辺約7.5mの方形の竪穴住居である。西部が調査区外となり、北部が竪穴住居SH104に削平される。主柱穴は4基の内3基を検出した。中央には地床炉があり、南辺中央に土坑（貯蔵穴）がある。また、壁際には壁溝がめぐる。

表5 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	竪穴住居(SH101～104)、柱穴、溝	
中 世	土坑群	

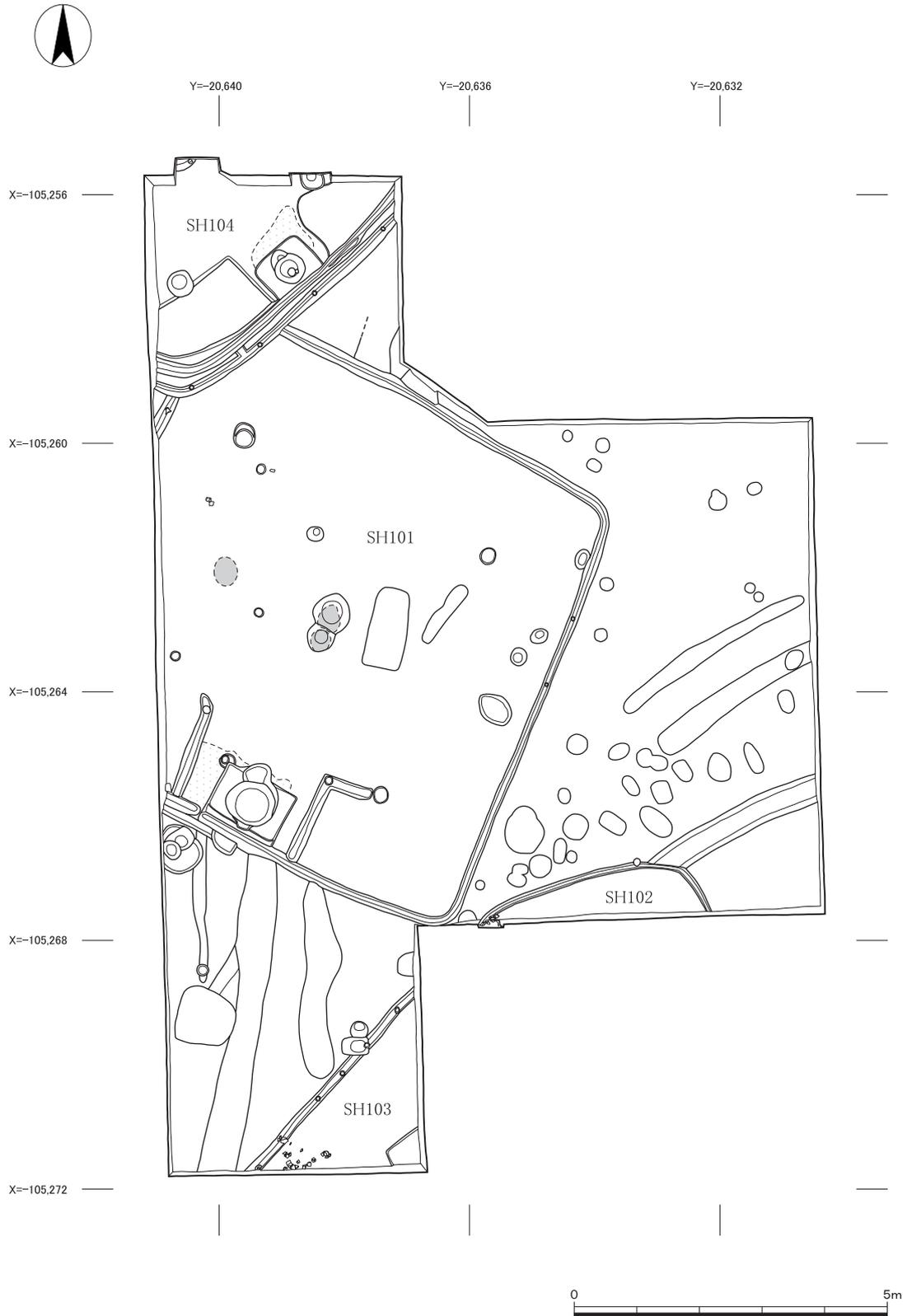


图32 遺構平面図 (1 : 100)

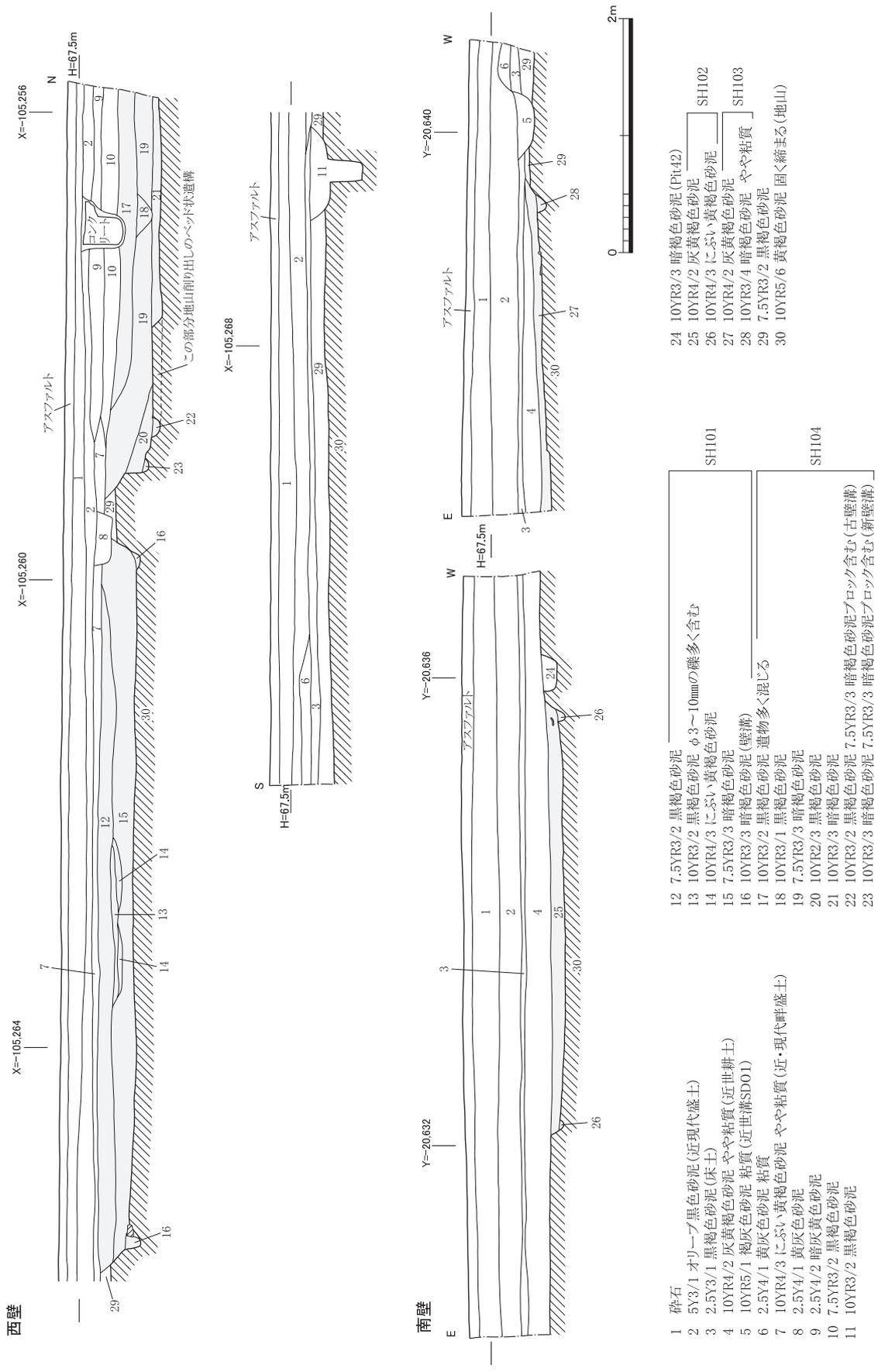


図33 西壁・南壁断面図 (1:50)

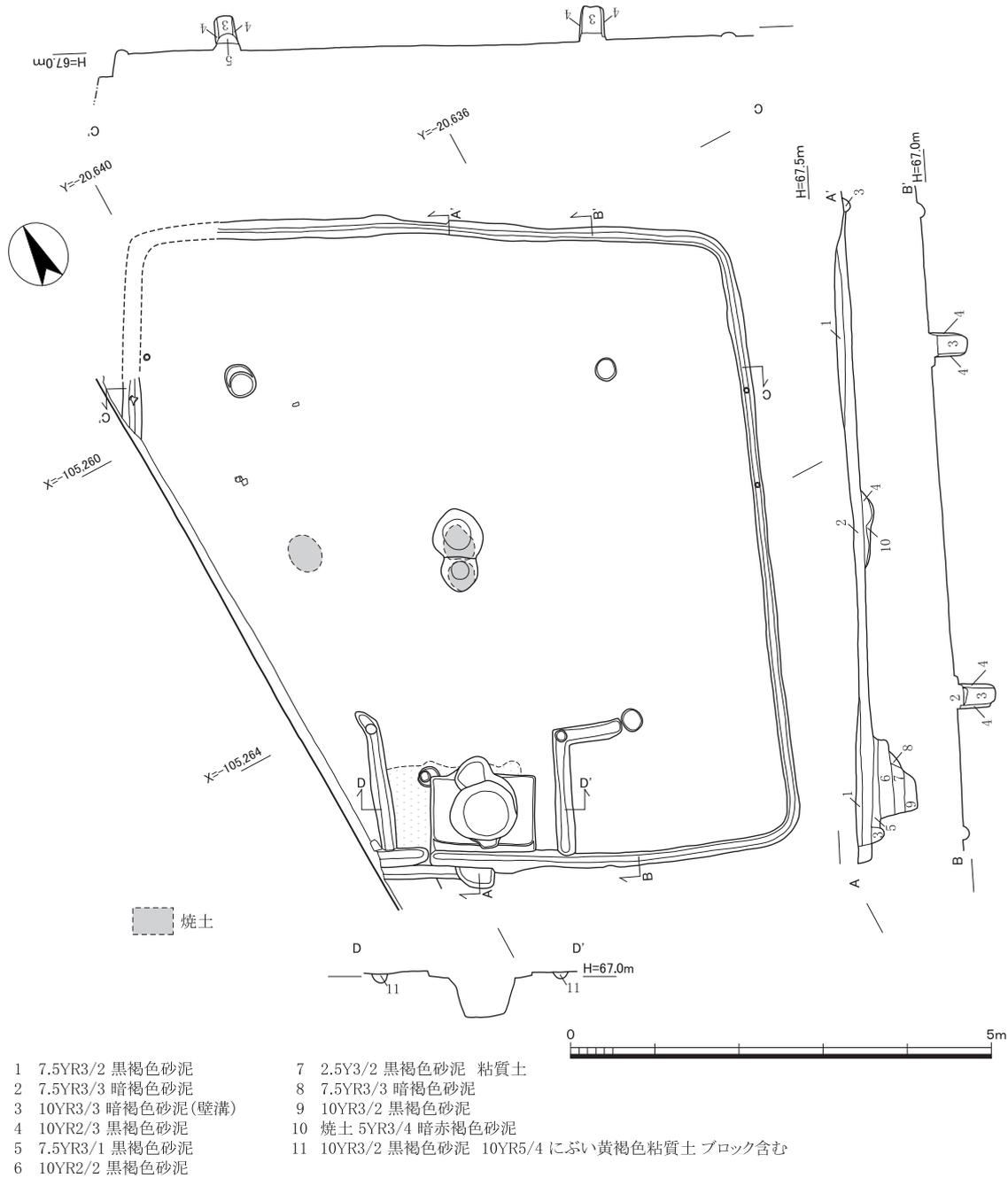
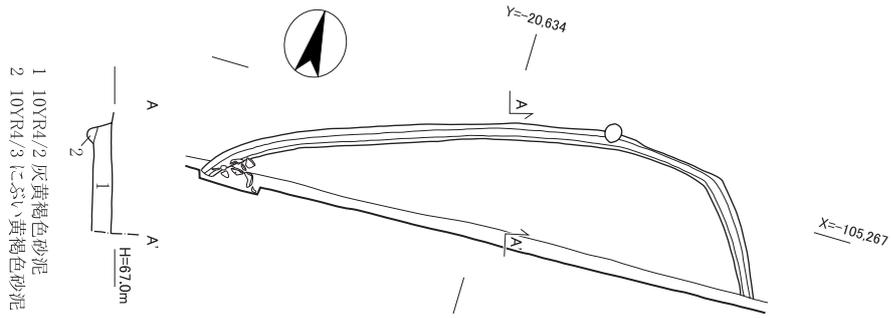


図34 SH101実測図 (1 : 80)

中央の地床炉は、平面形が瓢箪型になり、北側がやや大きく深い、全長約1.0m、最大幅0.8m、深さ0.15mである。底面の土は被熱によって赤変している。また、地床炉から西へ約2m離れた地点でも、床面が焼けて赤変している部分が認められる。

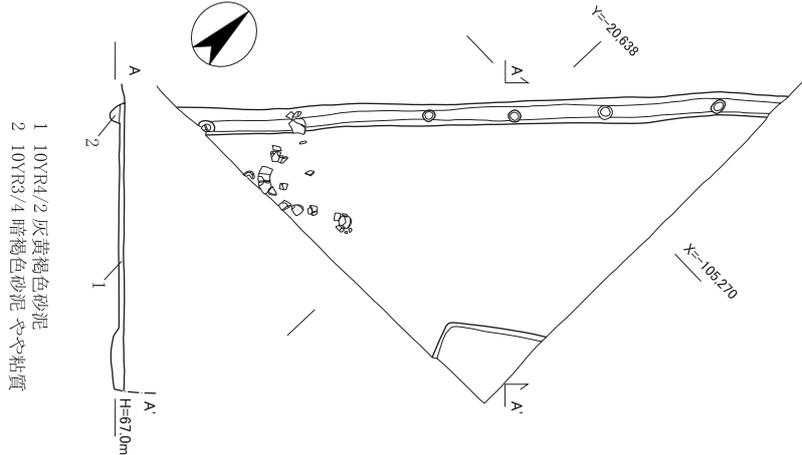
貯蔵穴は2段に堀り窪められ、上段は幅1.2m、奥行き0.9mの方形で、約5cmの深さがある。この中央に直径約0.75m、深さ0.5mの円形の穴が穿たれている。貯蔵穴の周囲には小石混じりの砂が薄く敷かれている。また、貯蔵穴の左右には並行して幅0.2m、深さ0.1mの溝が掘られている。東側の溝は、住居の南壁から1.5m延びて東へ90°折れ曲がり、支柱穴の一つに取り付く。一方、西側の溝は、壁から1.6m延びてやや西側に屈曲したところで終わる。いずれの溝も屈曲点に小穴

SH102



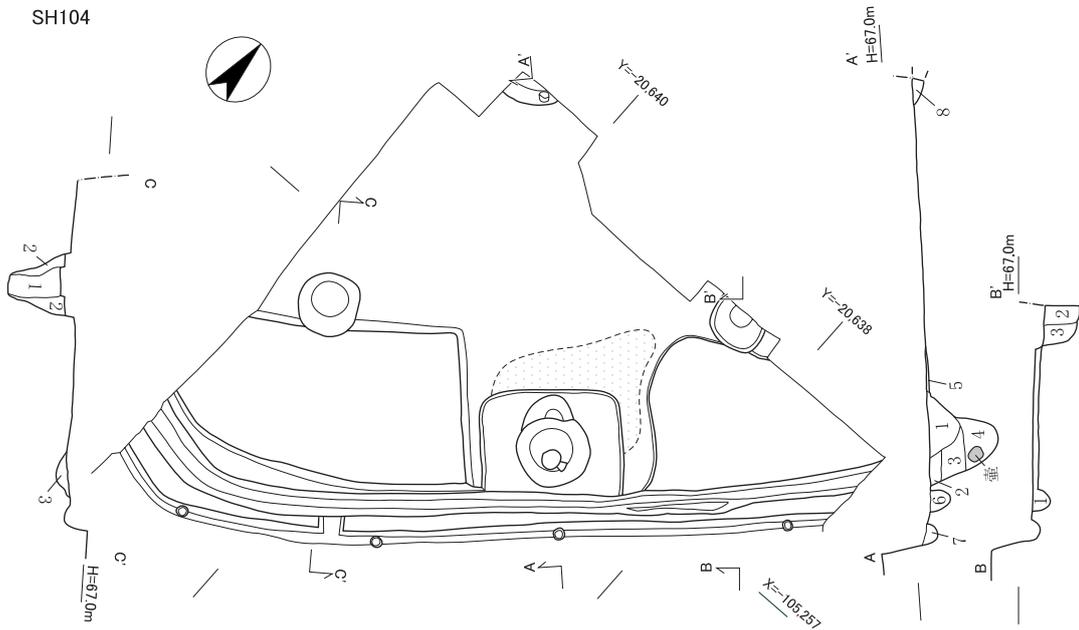
- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

SH103



- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 2 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質

SH104



A-A'

- 1 7.5YR4/3 褐色砂泥
- 2 7.5YR3/1 黒褐色砂泥
- 3 7.5YR3/3 暗褐色砂泥
- 4 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 5 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ1~3cmの礫を含む
- 6 10YR3/2 黒褐色砂泥 7.5YR3/3 暗褐色砂泥ブロック含む
- 7 10YR3/3 暗褐色砂泥 7.5YR3/3 暗褐色砂泥ブロック含む
- 8 7.5YR3/3 暗褐色砂泥

B-B'

- 1 10YR3/1 黒褐色砂泥 7.5YR4/3 褐色砂泥ブロック含む
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

C-C'

- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 3 10YR3/2 黒褐色砂泥 7.5YR3/3 暗褐色砂泥ブロック含む



図35 SH102~104実測図 (1:50)

が認められる。

主柱穴はいずれも円形で、掘形の直径0.2m、深さ0.3m程度で、中央に直径0.15m前後の柱痕跡が認められる。掘形と柱痕跡の間にほとんど余裕がなく、柱を埋めるための最小限の掘形とみられる。

壁溝は幅0.15m、深さ0.05m前後で、全周するものと考えられる。東壁側では底に直径約0.05mの小穴を少数確認している。

SH102(図35、図版6-2) 調査区の南東部で検出した竪穴住居である。北辺を検出し、一辺3.5m前後の胴の張る隅丸方形の住居と推測される。壁際に幅0.1m、深さ0.05m前後の壁溝がめぐる。西端部の床面に土師器片の散乱が認められる。

SH103(図35、図版6-3) 調査区南部で検出した竪穴住居である。北西辺のみの検出で、全体の規模は不明である。中央付近に窪みが認められるが、その性格も不明である。

壁際には幅約0.15m、深さ0.05mの壁溝が認められ、底の部分に0.5~0.8m間隔で小穴が並んでいる。南西部の床面に土師器片の散乱が認められる。

SH104(図35、図版6-1) 調査区の北部で検出した竪穴住居である。住居の南東辺を確認したのみで規模は不明であるが、貯蔵穴の位置から、一辺5.5m前後でやや胴の張る隅丸方形の住居と推測される。この住居は、壁際に壁溝が2条めぐっていることから、ある段階で外側に約0.3m拡張されたと考えられる。

南東辺のほぼ中央には土坑(貯蔵穴)がある。貯蔵穴は内側の壁溝に接しており、当初のものを拡張後もそのまま利用したとみられる。形状はSH101のものと同じで、方形の浅い掘り込み(幅0.9m、奥行き0.7m、深さ0.05m)の中央に直径0.4m、深さ0.3mの円形の深い穴が穿たれている。内部から、古式土師器の壺が1点完形で出土している。また、貯蔵穴の周辺には小石混じりの砂が薄く敷かれている。

主柱穴は4基の内2基を検出した。掘形は円形で、直径0.4m、深さ0.3m前後である。中央に直径0.15mの柱痕跡が認められる。共に柱の立て替えは認められない。

調査区の北壁沿いでは住居の中央に位置するとみられる地床炉の一部を検出した。底面がわずかに被熱で赤変している。

また、貯蔵穴から南西側の壁際は、奥行き約1.0mの幅で0.05mほど床が高くなっている。いわゆるベット状施設(屋内高床部)で、地山を削り残して成形したものである。一方、貯蔵穴を挟んだ対称位置にも同様の高まりが認められる。ただし、こちらは床面に土を盛り上げたもので、しかも、内側の壁溝を埋めて成形している。こうした状況から、南西側のベットは当初からのもので、北東側は住居を拡張した後、新たに付け加えたものと考えられる。

壁溝は当初述べたとおり2条あり、内側は当初のもの、外側は拡張後のものである。いずれも、幅0.15m、深さ0.05m前後である。外側の溝には1.2~1.5m間隔で底部に小穴が並んでいる。

この住居は、柱や貯蔵穴などに重複や造り替えが認められないことから、当初の内部施設を利用したまま、外周を拡張したものとみられる。ただし、北東側のベットは拡張後に付加している。

3. 遺 物

今回の調査では古墳時代から近世の遺物が出土している。主に土器類と瓦類があるが、いずれも小片のことが多い。

古墳時代の遺物は、古式土師器（壺・甕・高杯）が認められる。各住居跡の埋土や貯蔵穴から出土しているが、小片が多い。また、包含層からは古墳時代後期の須恵器（杯）がわずかに出土している。

平安時代の遺物は、中世の遺構に混入して須恵器（杯・甕）、土師器（皿）、黒色土器（椀）、緑釉陶器（椀）などの土器類と瓦（平）が出土しているが量は少ない。

中世の遺物は、土師器（皿）、瓦器（火鉢）、青磁（椀）などの土器類が、土坑や溝からわずかに出土している。

近世の遺物は、土師器（皿）、陶器（甕）、染付（椀）などの土器類が、溝などからわずかに出土している。

以下、図示できた遺物について記す。

1は竪穴住居SH104の貯蔵穴から完形で出土した小型の壺である。尖り気味の丸底で、球形の体部を持ち、やや外方開きながら直線的に立ち上がる小さな口縁部からなる。全体に表面が風化が進んでいるため、器壁の調整は不明であるが、体部の一部にはミガキの痕跡が認められる。庄内式土器併行期のものとみられる。

2は竪穴住居SH103の壁際の床面から出土した高杯である。杯部のみが残存しており、浅い皿形の杯部から、屈曲して外反しながら開く口縁部からなる。脚部は残存していないが、脚と杯の接合部では中空の脚部に粘土を補充して埋めている。風化が著しいため、器壁の調整は不明である。庄内式土器から布留式土器併行期のものとみられる。

3は竪穴住居SH101の壁溝から出土した高杯の脚部である。脚部中程3方に直径1cmの円孔が穿たれている。

表6 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
古墳時代	古式土師器、土師器、須恵器		古式土師器4点、石材1点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、 緑釉陶器、瓦				
中 世	土師器、瓦器、青磁				
近 世	土師器、陶器、染付				
合 計		5箱	5点（1箱）	0箱	4箱

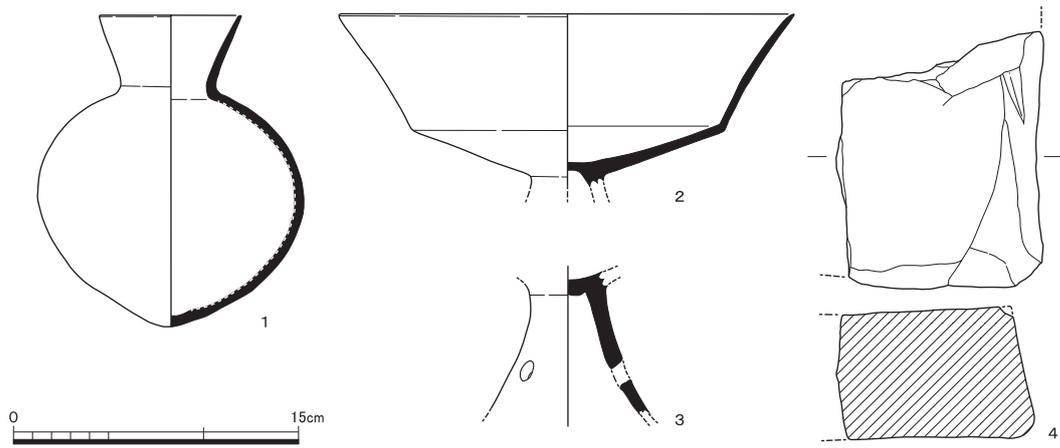


図36 出土遺物実測図（1：4）

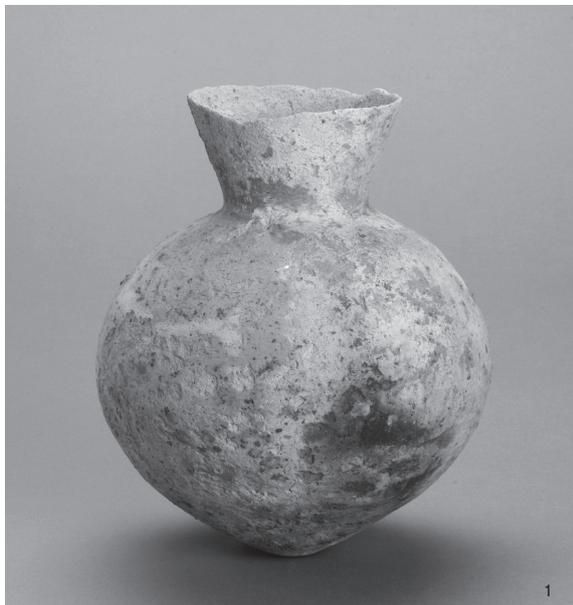


図37 古式土師器壺（1）

4は竪穴住居SH101の貯蔵穴近くで出土した石材である。縦約13cm、横約10cm、厚さ6.5cmの石材で、上面と下面が磨かれ、なめらかになっている。何ものかを研磨あるいはすり潰す作業台として使用されていたものと考えられる。



図38 石材（4）

4. まとめ

今回の調査では、古墳時代前期の竪穴住居群からなる集落の一部を検出することができた。ここでは特徴的な項目について、考察を加えまとめとする。

古墳時代集落と住居跡

上述したように、調査地周辺では数多くの竪穴住居跡が検出されている。調査区の北側では2006年の調査で古墳時代前期の竪穴住居6棟、さらにその北側の敷地では2007年の調査で古墳時代前期の竪穴住居3棟と飛鳥時代から奈良時代の竪穴住居1棟、また、西側に位置するノートルダム学院構内では1990年の調査で古墳時代前期の竪穴住居8棟、後期の竪穴住居の3棟、また、2011年から同学院内で継続的に実施している調査でも、現在までに古墳時代前期の竪穴住居を10棟検出している。このように、調査区の近辺は古墳時代、とくに前期の竪穴住居の分布密度が高い地区である。

また、住居の規模に注目すると、今回検出した住居の内SH101は方形で、一辺7mを越える。2007年の調査で検出した住居（竪穴住居30）は、全容は不明であるが、多角形であると考えられ、南西の一辺は7.2m、南北9.0mある。2006年調査で確認した住居の一つ（6号住居）は、方形で東西約8m、東西7.3mある。さらに2011年に調査したノートルダム学院校内の調査2区で検出した住居も方形で一辺7mを越える。このように、一辺7mを越える大型住居が多いのも特徴である。

こうした状況から、今回の調査地一帯は植物園北遺跡においては南東端にあたるものの、古墳時代前期の集落においては中核をなす部分にあたるものと考えられる。

住居の内部構造

今回の調査では、竪穴住居SH101とSH104の内部構造を明らかにすることができた。住居は基本的に4箇所の支柱穴があり、中央に地床炉、南辺中央に土坑（貯蔵穴）、壁際に壁溝がめぐっている。

ところでSH101については、貯蔵穴の左右に並行して浅い溝がある。一方の溝は、途中で直角に曲がり、支柱穴の一本に取り付く。住居の床面に掘り込まれたこうした小規模な溝については、「床面小溝」とよばれるものに類例があり、床板を載せる転ばし根太などの据え付け掘形と¹⁾考えられている。今回検出したSH101の小溝を「床面小溝」と同じ性格のものと仮定すると、溝の位置や屈曲の状況から、貯蔵穴の左右、支柱と壁の間に床板が張られていた可能性が考えられる。

一方、調査区の北部で検出したSH1104の貯蔵穴の左右には、床面の一部を高くした、いわゆるベット状施設（屋内高床部）が認め



図39 SH101貯蔵穴左右の小溝（東から）



図40 SH104貯蔵穴壺出土状況（北東から）

られる。このベットは床の土を削り出す、あるいは盛り上げて高床部を作り出したものである。

これら2つの施設は、構造的には異なるが、その位置や形状は似ており、共に床面に高低差を付けることによって、住居内の空間を区分する施設であると考えられる。これは竪穴住居内の空間的な機能分化が明確化したことを意味していると思われる。

貯蔵穴出土の土器

今回の調査では、いずれの住居も出土する遺物は極めて乏しい。こうした状況は、住居の廃絶にともなって、住居内が片付られていることを

示していると思われる。ところが、SH104の貯蔵穴からは、古式土師器の壺が完形で出土している。また、ノートルダム学院の2011年の調査でも第4区で検出した住居の貯蔵穴から同様の壺が完形で出土している。住居に伴う遺物が少ない点も共通している。まだ類例は少ないが、植物園北遺跡の古墳時代前期の集落では住居を廃棄する際、貯蔵穴に壺を埋納するまつりが行われた可能性が指摘できる。

以上、植物園北遺跡における今回の調査区と周辺の特徴、竪穴住居の内部構造、貯蔵穴における祭祀の可能性を指摘してまとめとする。

註

- 1) 千葉県佐倉市 大篠塚遺跡 古墳時代前期の竪穴住居跡『東関東自動車道（千葉—成田線）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』東関東自動車道遺跡発掘調査団ほか1971年 73頁挿図77

V 山科本願寺跡

1. 調査経過

今回の調査は、京都市山科区西野山階町地内で実施した。敷地の西側には山科本願寺の「御本寺」を囲う土塁が残り、この地が「御本寺」中心部に近い場所にあたることから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導により、遺構の遺存状況を確認するための調査を実施することとなった。同敷地での調査は3次に分けて実施し、今回の調査は平成22年度の16次調査、平成23年度の17次調査に続く山科本願寺跡18次調査となる。

調査は平成24年7月17日から10月5日まで実施した。調査は文化財保護課の指導に従い1区から3区の3箇所に分けて行った。1区は17次調査で見つかった石組溝群の延長部分を確認するため南端を17次調査1区と重複させ、敷地中央部に設定した。当初の調査面積は402㎡である。調査では全面で山科本願寺の整地面を確認した。整地面上では、北側で建物跡や石組井戸が見つかった。南側では、17次調査で見つかった石組溝の延長部分や建物、井戸、竈、石風呂などで構成される風呂関係遺構群が見つかった。石風呂部分を一部拡張し、1区の最終調査面積は412㎡となった。2区は土塁裾の位置を確認するため敷地北西部に設けた。調査面積は20㎡である。調査では土塁の基底部を検出した。3区は石風呂の規模を確認するため1区の南西に設けた。調査面積は21㎡である。調査では石風呂の北西隅と南西隅を確認し、石風呂の規模が確定した。また風呂関連遺構群の西端を限ると考えられる柱列も確認した。1区から3区までを合わせた最終的な調査面積は453㎡となった。調査中の9月8日には現地説明会を行い、約700名の参加を得た。

なお、確認調査のため各遺構は土層観察用の畦を残す、または部分的な掘り下げに留めるなどして図面作成、写真撮影などの記録を行った。その後、遺構を土嚢と真砂土で保護して埋め戻しを行い、調査を終了した。

なお、16・17次調査で見つかった遺構との混乱を避けるため、今回の調査で検出した個別遺構には3000番台の遺構番号を付し、柱列と建物番号は16次調査からの通し番号とした。



図41 調査前全景（北から）



図42 作業風景（北から）



図43 現地説明会（北から）



図44 埋め戻し状況（北から）



図45 井戸3020保護状況



図46 石風呂3130保護状況

2. 遺 跡

（1）遺跡の位置と歴史

山科本願寺跡は、山科盆地の中央やや西寄りに位置する。山科川、四ノ宮川、音羽川、安祥寺川などにより形成された扇状地の先端にあたる。周囲より標高が高く、比較的安定した地盤を形成している。遺跡北方には京と東国を結ぶ旧東海道が東西にはしり、近くには東海道から分岐する奈良街道や渋谷街道が通る交通と物資の要衝であった。また、遺跡東を限る山科川は醍醐、六地蔵を経て巨椋池に流れ込み、桂川・宇治川・木津川と合流し淀川となって大阪湾まで結ばれ、水運の面から見ても利便性の高い立地であったと考えられる。山科本願寺は、この地に文明10年（1478）に浄土真宗中興の祖・蓮如上人によって造営が開始された。文明12年（1480）には「御影堂」の棟上、翌13年には「阿弥陀堂」の棟上が行われている。文明15年（1483）までに「向所」「寝殿」などを含めた主要堂舎が揃ったと考えられる。寺域は主要堂舎のある「御本寺」、有力末寺の坊舎が置かれた「内寺内」、門徒の居住区などがある「外寺内」の3つの郭で構成され、それぞれの郭を土塁と濠で囲み、あるいは自然河川を利用して防御施設とした環濠城塞都市であった。その範囲は南北約1km、東西約0.8kmにおよぶ。また延徳元年（1498）には、山科本願寺から約1km東に蓮如

の隠居所が造営され、山科本願寺南殿と呼ばれた。蓮如は明応8年（1499）に南殿で没している。京が応仁の乱によって荒廃し混乱が残る一方、山科本願寺は寺内町の経済的な発展にも支えられ大いに繁栄するが、天文元年（1532）、管領細川晴元率いる近江守護職六角定頼と法華宗、延暦寺の連合軍による攻撃により焼亡した。その後、本願寺は大坂へ移転する。織田信長との石山合戦などを経て、豊臣秀吉の命により山科に寺領を回復するが、本願寺が山科に戻ることはなかった。

現在は遺跡中心部を国道1号線と東海道新幹線が東西に貫く。それに沿って市街地化が進み、山科本願寺の痕跡は国道1号線の北側で土塁や濠の一部がわずかに残るのみである。そのうち、山科中央公園内に残る「内寺内」と「外寺内」を限る土塁と南殿跡が2002年に「山科本願寺南殿跡附山科本願寺土塁跡」として国史跡に指定されている。

（2）周辺の調査（図47、表7）

山科本願寺跡では、今回の調査を含めて18次にわたる発掘調査が実施されている。それ以外にも多数の試掘調査、立会調査が行われ、山科本願寺に関わる整地土や遺構が見つまっている。主要な調査については図47と表7にまとめた。また、蓮如上人の隠居所となった山科本願寺南殿跡でも二度の発掘調査が実施され、南殿北東隅部分の調査では土塁、堀、掘立柱建物、柵、暗渠、溝、土坑などが見つまっている¹⁾。南殿の南側外郭部分の調査でも掘立柱建物、溝、土坑などの遺構が多数見つかっており²⁾、両調査ともに遺構は地中保存されている。

今回の調査地周辺では、山科本願寺跡2・11～14・16・17次の調査が実施されている。今調査地の南隣接地で実施された2次調査では、石室や石組溝、礎石などが見つまっている。2次調査地の東で実施した14次調査では池や石敷きからなる庭園遺構や礎石列などが見つかった。また14次調査では遺構埋土や遺構を覆う焼土層から多量の輸入陶磁器や堆黒・蒔絵などの高級漆芸品が出土した。今調査地の南西で実施した13次調査では、土塁の際で泉状遺構や石組溝からなる庭園遺構や小規模な炉、土取り穴などが見つまっている。11・12次調査では南北方向の土塁基底部と石組暗渠が見つかった。今調査と同じ敷地内で実施した16・17次調査では通路状遺構、柱列、集石遺構、石組溝群、土塁屈曲部、刀埋納遺構などが見つまっている。

以上のように、調査地周辺では山科本願寺に関連する遺構の検出密度が極めて高い。また、小規模な建物の密集や庭の多さなどから、史料に記された山科本願寺内に存在した建物や西本願寺の近世絵図と対比して、調査地一帯が宗主一族の居住空間および本願寺の実務空間にあたりと想定でき³⁾、その東側には阿弥陀堂や御影堂が位置すると推測される。

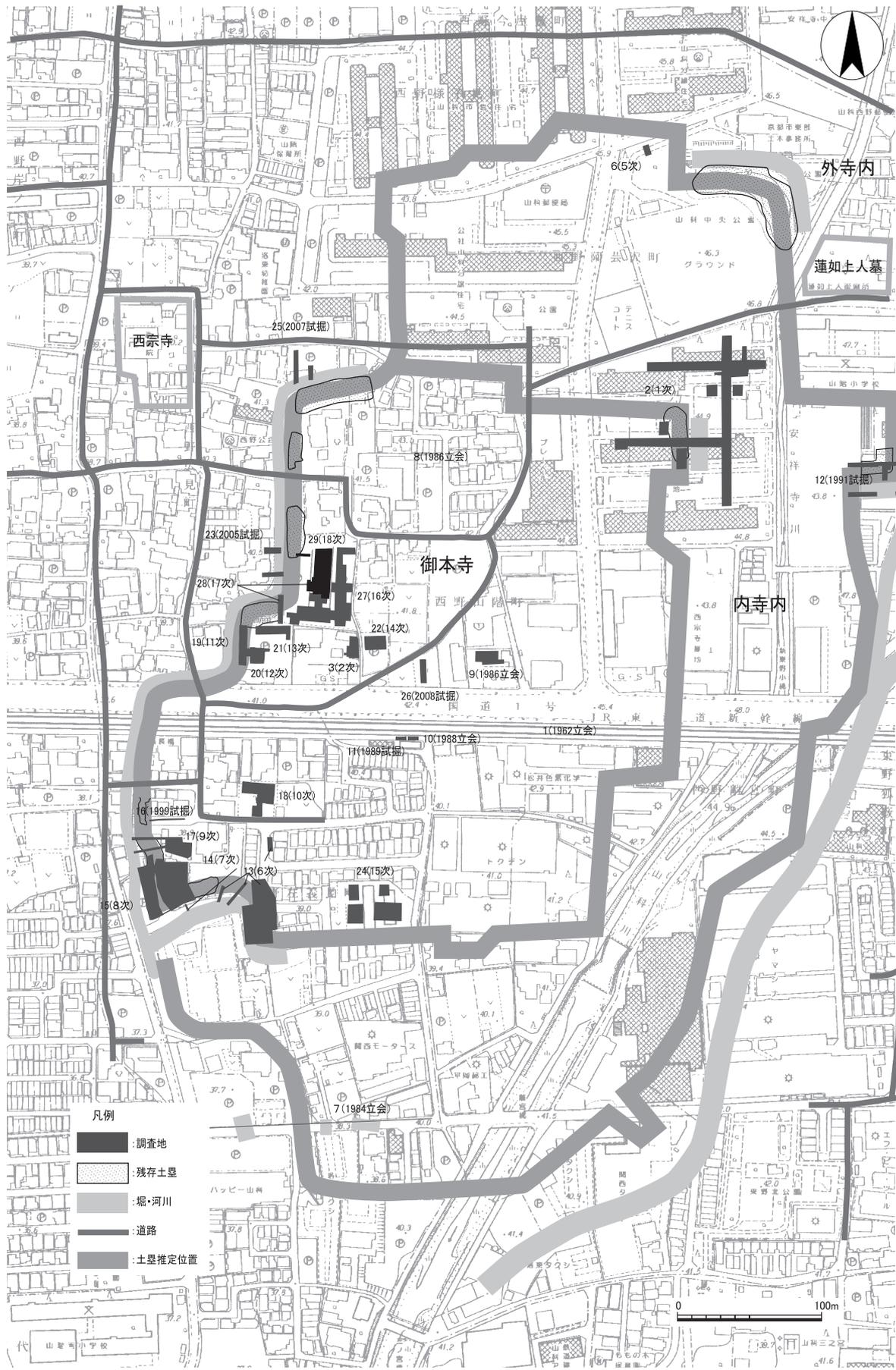


図47 主要調査位置図 (1 : 4,000)

表7 主要調査一覧表

No.	調査名・回数	所在地：山科区	調査期間	方法	概要	文献
1	新幹線立会	西野左義長町・山階町・離宮町	1962.8.9～ 11.11	立会	南北方向の石組溝、暗渠、南北方向の土塁	1
2	山科寺内町遺跡 1次	西野阿芸沢町・山階町・離宮町	1973.5.21～ 8.4	発掘	建物・鍛冶場、石垣、柵、南北方向の堀・土塁	2
3	山科寺内町遺跡 2次	西野山階町	1974.10.9.～ 11.3	発掘	石組溝、石室、庭園の一部	2
4	76RT-YG001 3次	西野今屋敷町9 (安祥寺中学校)	1976.11.17～ 11.30	発掘	旧耕地	3
5	76RT-YG002 4次	西野大手洗町20 (山階小学校)	1977.2.14～ 3.5	発掘	整地層	4
6	76RT-JN001 5次	西野阿芸沢町 (山科中央公園)	1978.10.30～ 11.13	発掘	攪乱	5
7	83RT-SW061	西野左義長町・東野舞台町ほか	1984.3.6～ 11.17	立会	東西および南北方向の堀、土坑群	6
8	85RT-SW054	西野大手洗町・今屋敷町ほか	1986.4.1.～ 1987.5.16	立会	南北方向の堀と土塁、土坑	7
9	86BB-RT010	西野山階町12	1987.1.27～ 1.30	立会	東西方向の石組溝	8
10	88BB-RT005	西野山階町29	1988.5.30～ 6.2	立会	東西方向の石組溝	9
11	89BB-RT021	西野山階町29	1989.10.2～ 10.14	試掘	東西方向の石組溝	10
12	91RT-AH001	西野大手洗町20 (山階小学校)	1991.8.2～ 10.18	試掘	土塁と堀の屈曲部	11
13	96RT-HG001 6次	西野左義長町16ほか	1997.4.20～ 7.10	発掘	東西および南北方向の堀、東西方向の土塁、暗渠、建物、井戸	12
14	97RT-HG002 7次	西野左義長町23	1997.7.16～ 9.18	発掘	鉤型に曲がる土塁と堀、建物、井戸、鍛冶場	13
15	98RT-HG003 8次	西野左義長町23-1、23-4	1998.8.17～ 11.9	発掘	南北方向の堀と土塁、暗渠	14
16	センターNo.60	西野左義長町19-1ほか	1999.10.28	試掘	南北方向の土塁を測量	15
17	00RT-HG004 9次	西野左義長町19-1ほか	2000.5.10～ 6.30	発掘	建物、溝、暗渠、土塁基底部	16
18	04RT-HG006 10次	西野左義長町13-2	2005.1.17～ 3.18	発掘	東西および南北方向の堀、塀、柵	17
19	04RT-HG007 11次	西野山階町30	2005.3.1～ 3.15	発掘	土塁基底部の構築状況を調査	17
20	05RT-HG008 12次	西野山階町30	2005.5.11～ 5.25	発掘	土塁内側斜面と暗渠を検出	18
21	05RT-HG009 13次	西野山階町30	2005.5.30～ 7.2	発掘	土塁屈曲部、泉状遺構、炉、土取穴、暗渠を検出	17
22	05RT-HG010 14次	西野山階町28-5、28-6	2005.11.11～ 12.16	発掘	焼成土坑、庭園遺構、柱列を検出 多量の輸入陶磁器、ガラス玉出土	17
23	05 S 208	西野広見町31-1ほか	2005.9.20	試掘	御本寺西側を限る堀の西肩口を検出	19
24	15次	西野左義長町25-4ほか	2006.7.31～ 9.15	発掘	御本寺南側を限る堀状の落ち込み、土坑、井戸、溝、柱穴を検出	20
25	07 S 274、275	西野広見町5-7、5-10	2007.9.25	試掘	御本寺北側を限る堀の北肩を検出	21
26	08 S 103	西野山階町11-5ほか	2008.9.1	試掘	GL-0.4mで整地層を確認	22
27	10RT-HG012 16次	西野山階町30-1ほか	2011.1.11～ 3.11	発掘	整地面、焼土の堆積、通路状遺構を検出	23
28	11RT-HG013 17次	西野山階町30-1ほか	2011.7.21～ 9.30	発掘	整地面、石組溝、土塁などを検出	23
29	12RT-HG014 18次	西野山階町30-1ほか	2012.7.17～ 10.4	発掘	石組井戸、風呂関連遺構群、塀状遺構、土塁などを検出	本報告

文献一覧（表14の文献番号と一致）

- 1 杉山信三・堤圭三郎「山科本願寺」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』日本国有鉄道 1965年
- 2 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年
- 3 堀内明博『山科本願寺跡 安祥中学校校舎新築に伴う発掘調査の概要 昭和51年度』51-4（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977年
- 4 堀内明博『山科本願寺跡 山階小学校校舎改築に伴う発掘調査の概要 昭和51年度』51-33（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977年
- 5 前田義明『山科本願寺跡 山科中央公園内防火用貯水タンク建設に伴う発掘調査の概要 昭和53年度』53-47（財）京都市埋蔵文化財研究所 1980年
- 6 平方幸雄「山科本願寺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 7 百瀬正恒・吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
- 8 百瀬正恒「山科本願寺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 9 久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
- 10 久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 11 本弥八郎「山科本願寺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 12 永田宗秀・近藤知子「山科本願寺跡1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 13 近藤知子「山科本願寺跡2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 14 吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 2000年
- 15 長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
- 16 吉崎 伸「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 17 小檜山一良・清藤玲子・柏田有香「山科本願寺跡（1）（2）（3）（4）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
- 18 柏田有香『山科本願寺跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 19 長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年
- 20 未報告（古代文化調査会による調査）京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課のご教示による。
- 21 家原圭太「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 22 堀 大輔「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
- 23 柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局 2012年

表8 山科本願寺関係略年表

応永22年	(1415)		七世存如の嫡子として蓮如が生まれる。
長祿元年	(1457)		蓮如、本願寺八世宗主となる。
文明3年	(1471)		蓮如、越前吉崎に坊舎を構える。
7年	(1475)		蓮如、越前吉崎御坊を去る。
9年	(1477)		応仁、文明の乱一応終わる。
10年	(1478)	1月	蓮如、野村柴の庵に居す。馬屋新造。(この年、大津近松にて越年。) (山科本願寺の造営始まる。)
11年	(1479)	1月	整地と作庭を始める。
		3月	向所を新造。
		4月	堺の古坊を移し、寝殿をつくりはじめる。
		8月	庭できる。
		12月	御影堂建設用材柱50余本など、山科につく。
12年	(1480)	1月	三帖敷の小御堂を作る。
		2月	御影堂造作事始め。
		3月	御影堂、棟上の祝。
		8月	ひわだ大工をよんで御影堂の檜皮葺はじめる。 仮仏壇を設けて、絵像の御影をうつす。 整地。
		11月	大津にあった根本御影を野村にうつし、山科ではじめて報恩講を催す。
		12月	吉野で阿弥陀堂用大柱20余本をあつらえる。
13年	(1481)	1月	寝殿の大門柱立。
		2月	阿弥陀堂の事始め。
		4月	阿弥陀堂棟上。
		6月	仮仏壇をつくって、本尊をすえる。
14年	(1482)	1月	御影堂大門の事始め。 阿弥陀堂の橋隠の柱を用意。 阿弥陀堂の四方の柱も立つ。 大門の地形をならす。 四壁の内に排水用の小堀を南北に掘る。 門前の両所に橋をかける。
		4月	冬のたき火所だった四門の小棟を改築。
		5月	寝殿の天井をはる。
		6月	阿弥陀堂の仏壇をつくりなおす。
		7月	仏壇に奈良塗師をやとってぬらせる。
		9月	仏壇ぬり終る。
15年	(1483)	5月	河内菅田の野中之馬という瓦師をよんで、大葺屋をつくり、 西山の土で瓦を焼く。
		8月	阿弥陀堂瓦葺きおわる。
長享2年	(1488)		加賀一向一揆おこる。
延徳元年	(1489)		山科南殿を造営する。
明応6年	(1497)		大坂石山坊舎造営。
8年	(1499)	2月20日	蓮如大坂から山科南殿に戻る。
		3月25日	蓮如没す、85歳。
大永5年	(1525)		九世宗主実如没す。証如、十世宗主となる。
天文元年	(1532)	8月24日	法華宗・延暦寺・六角氏の攻撃により焼亡。山科本願寺陥落。
2年	(1533)		証如、石山坊舎を本寺と定める。本願寺大坂へ移転。
5年	(1536)	7月	天文法華の乱。
元亀元年	(1570)		織田信長との石山合戦開始。
天正8年	(1580)		本願寺顕如、信長と和睦。石山本願寺退去。 その後、紀伊鷺森・泉貝塚・大坂天満と移転を繰り返す。
14年	(1586)		豊臣秀吉の朱印状をもって山科に寺領を回復する。
19年	(1591)		本願寺、京都七条堀川(現西本願寺)へ移転。
慶長7年	(1602)		東本願寺別立。このときから東西本願寺となる。
享保年間	(1716～1736)		東西本願寺がそれぞれ山科別院を建立。

(西川幸治「都市史の中の中世寺院」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年を一部改変)

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図49・50)

調査地は現在駐車場として利用されている。現地表面の標高は敷地北東で約42.4m、敷地南西では約41.8mあり、北東から南西に向かって低くなる。

1区では地表下0.2~0.4mまでの碎石と駐車場盛土を除去すると駐車場造成以前の果樹畑であった時期の近現代土壌化層が堆積する。灰黄褐色のシルト~細砂を主体として炭化物が混じり締まりは悪い。層厚は0.1~0.2mある。その下には近世の盛土層が堆積する。近世盛土層は大きくは上下2層に分かれる。上層は礫混じりの灰黄褐色シルト~細砂が主体で非常に締まりが悪い。層厚は0.1~0.3mある。下層は黒褐色シルト~細砂が主体で炭化物・焼土を中量含む。層厚は0.1~0.2mある。それらを除去し、地表下0.6~1mで山科本願寺の遺構面となる。遺構面の標高は調査区北端では41.75m、南端では41.1mであり、北から南に低くなる。遺構面を形成する整地層は、にぶい黄褐色や褐色シルト~細砂ににぶい黄褐色粘土~シルトのブロックを混ぜ、非常に固く締まる。確認調査のため断割調査を実施していないが、攪乱や井戸3080壁面(図50)で確認した整地層の層厚は0.6~1.2mある。その間では明確な遺構面は確認されず、一連の整地と考えられる。下層で

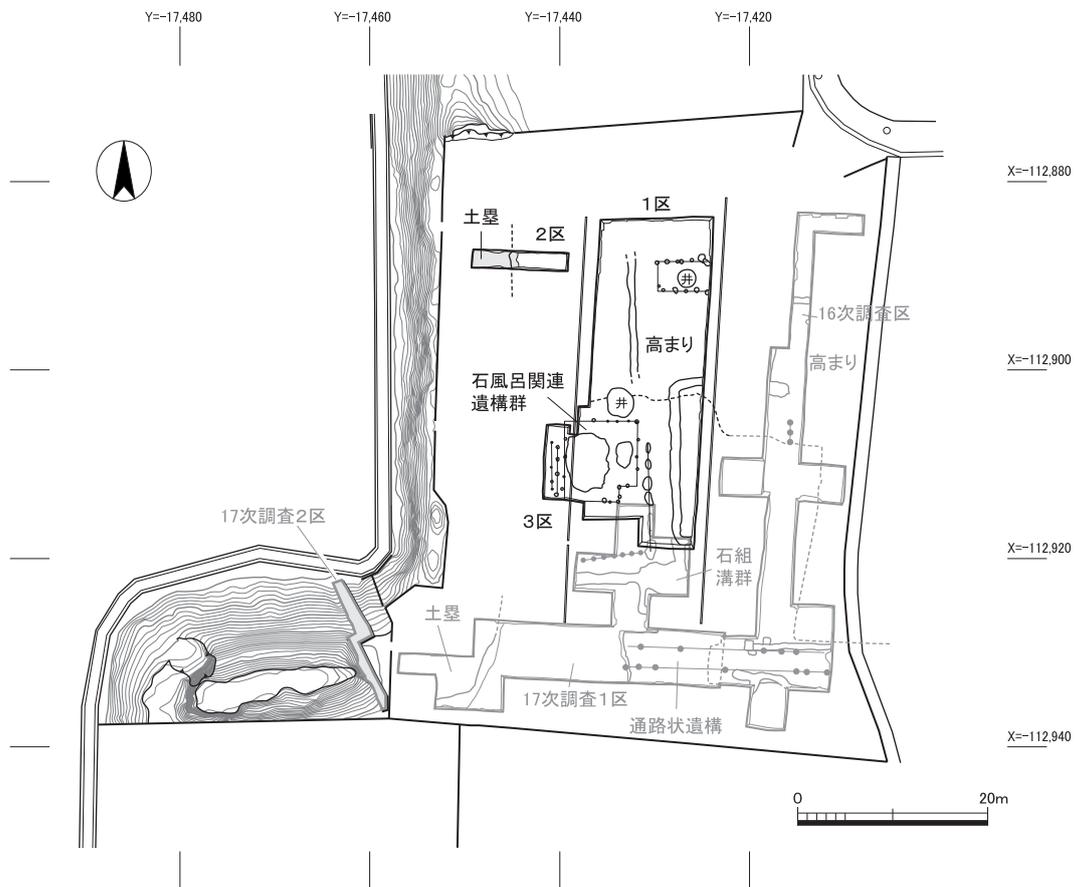


図48 調査区配置図 (1 : 800)

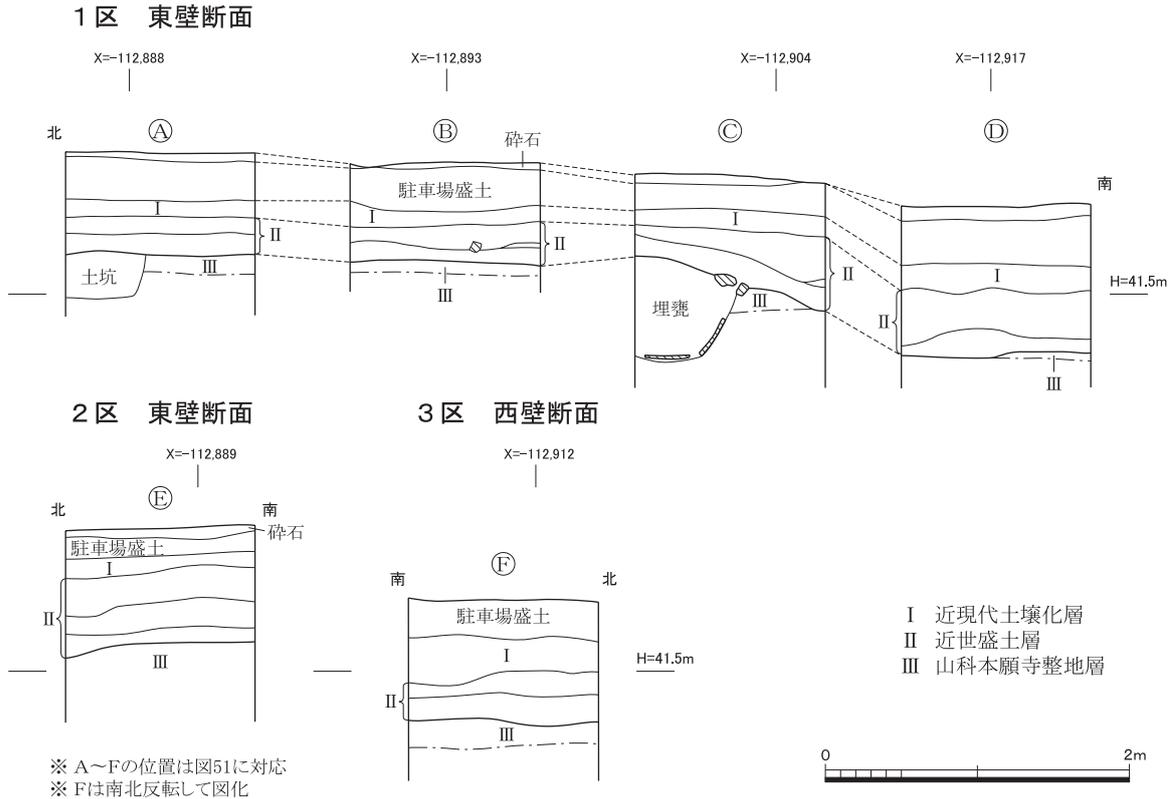


図49 調査区断面模式柱状図（1：50）

は、径1～10cmの礫を多く含み、やや締まりの悪い整地土も認められる。山科本願寺の整地層直下が自然堆積層の基盤層となる。攪乱や近世遺構、井戸3080壁面で確認した基盤層上面の標高は40.3～40.6mである。基盤層の堆積状況は砂礫層とシルト層が互層に堆積する（図50）。

また2区、3区ともに基本層序は1区と同様で、2区では土塁以外の平坦面部分では地表下約0.8m、標高41.7mで本願寺の整地面となる。3区では地表下約0.8m、標高41.2mで本願寺の整地面となる。

なお、遺構は全て山科本願寺の整地面上で検出した。大きくは室町時代の山科本願寺期と江戸時代から近代の近世・近代期の2時期に分けられる。以下では、時期別に主要な遺構の概要を述べる。

（2）室町時代の遺構（図51）

高まり 1区のX=-112,903ラインより北は整地土を南半より高く積むことで、高まりとなる。境界では約0.2mの段差がつく。また、X=-112,898からX=-112,903の間は、整地土の最上層に0.05～0.1mの厚さで、にぶい黄褐色粘土～シルトのブロックを混ぜた化粧土と考えられる土が貼

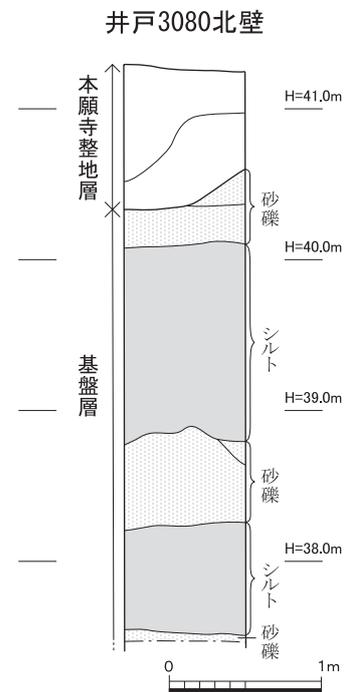


図50 基盤層堆積模式図（1：50）

表9 遺構概要表

時代	遺構	備考
室町時代	建物1、井戸3020、溝3043、土坑3230	北半高まり上で検出
	建物2、竈3100、石風呂3130、土間、井戸3080、溝3128・3129	風呂関連遺構群
	土坑3111・3112・3113・3114	塀状遺構
	柱列5・6・7、土坑3091・3144・3135・3244、埋甕3083、溝3087・3089	
	土塁3208、溝3205・3206	2区検出
江戸時代～近代	土坑3004・3010・3016・3025・3029・3030・3038・3039・3040・3077・3078・3096・3105・3110・3119・3122・3148・3165・3170・3194	

られ、固く締まる。全体が近世の整地土で覆われ、ほぼ後世の削平を受けることなく本願寺存続期の生活面が良好な状態で残存し、礎石と考えられる扁平な石が高まりの整地面上に据えられたままの状態出土している。

井戸3020(図52、巻頭図版3-1) 1区北東の高まり上で検出した円形の石組井戸である。検出面以下0.7mまでは石が抜き取られていたが、それより下は石組が残り、遺存状態は良好である。掘形の直径は約1.9mで、石組部分は外法径が約1.3m、内法径が約0.8mある。保存のため完掘しておらず、検出面から4m、標高37.6mまで掘り下げを中止したが湧水層には達していない。石組に使用された石材は、チャート、花崗岩、砂岩系石材が混在する。径0.2～0.35mの大きめの石材を平らな面を内側に向けて積み、間に径0.1～0.15mの石を差し込む。石組は非常に強固である。埋土は、検出面以下0.7mまでは10YR3/2黒褐色～10YR3/3暗褐色の炭化物と焼土を多量に含むシルト～細砂が層厚約0.2mの単位で水平に堆積する。石組部分から下は、炭化物と焼土、焼けた壁土を非常に多く含む5YR4/3にぶい赤褐色シルト～細砂の締まりの悪い土で一気に埋まる。掘形埋土は2.5Y4/2暗灰黄色の礫混じりシルト～細砂で固く締まる。

建物1 1区北東の高まり上で検出した井戸3020を囲う柱穴によって構成される建物である。井戸館の可能性はある。座標北に対してほぼ振れをもたない。桁行4間、梁行2間分を検出したが、桁行は東の調査区外に延びる可能性がある。完掘していないため柱形式の詳細は不明であるが掘立柱、あるいは地下式礎石をもつ建物と考えられる。柱間は不等間である。柱穴埋土には炭化物と焼土が混じる。

溝3043(図53、図版7-2) 1区北半の高まり上で検出した南北方向の溝である。南北約12m分を検出した。主軸は北に対して約1度西に振れる。幅0.5～0.8m、深さは0.1～0.15mで溝底に傾斜はなく、流水堆積も認められないことから、素掘りの区画溝と考えられる。埋土には多量の炭化物と焼土、少量の炭化米が混じる。炭化物の樹種は、ヒノキ、マツ属、キハダ、アカガシ亜属、タケ類などである。

土坑3230(図53) 溝3043の底で検出した土坑である。径約0.5m、深さは約0.2mあり、底から径0.2～0.3mのチャート石材が3石出土した。また埋土上層からは多量の炭化物と焼土、焼けた

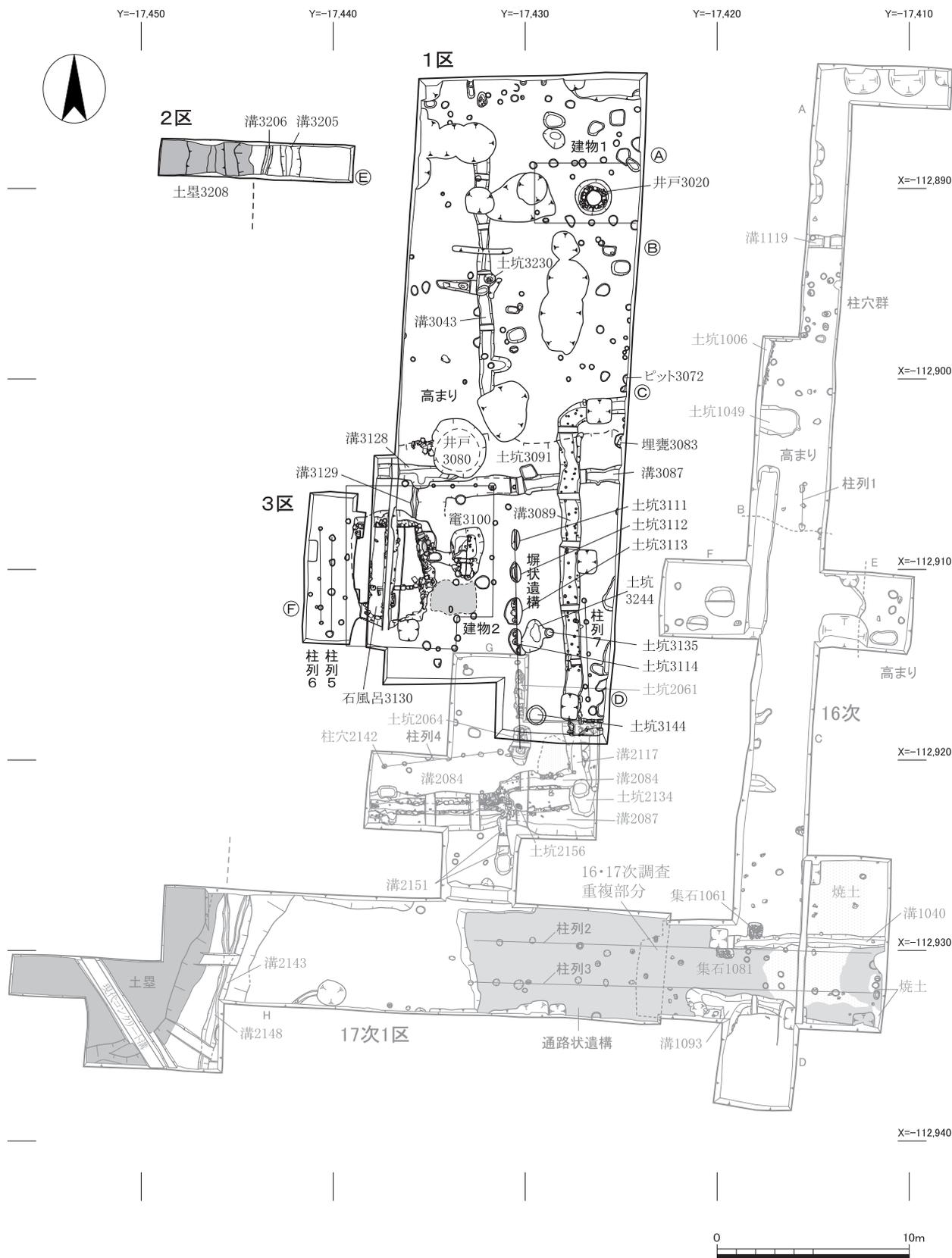


図51 中世遺構平面図 (1 : 300)

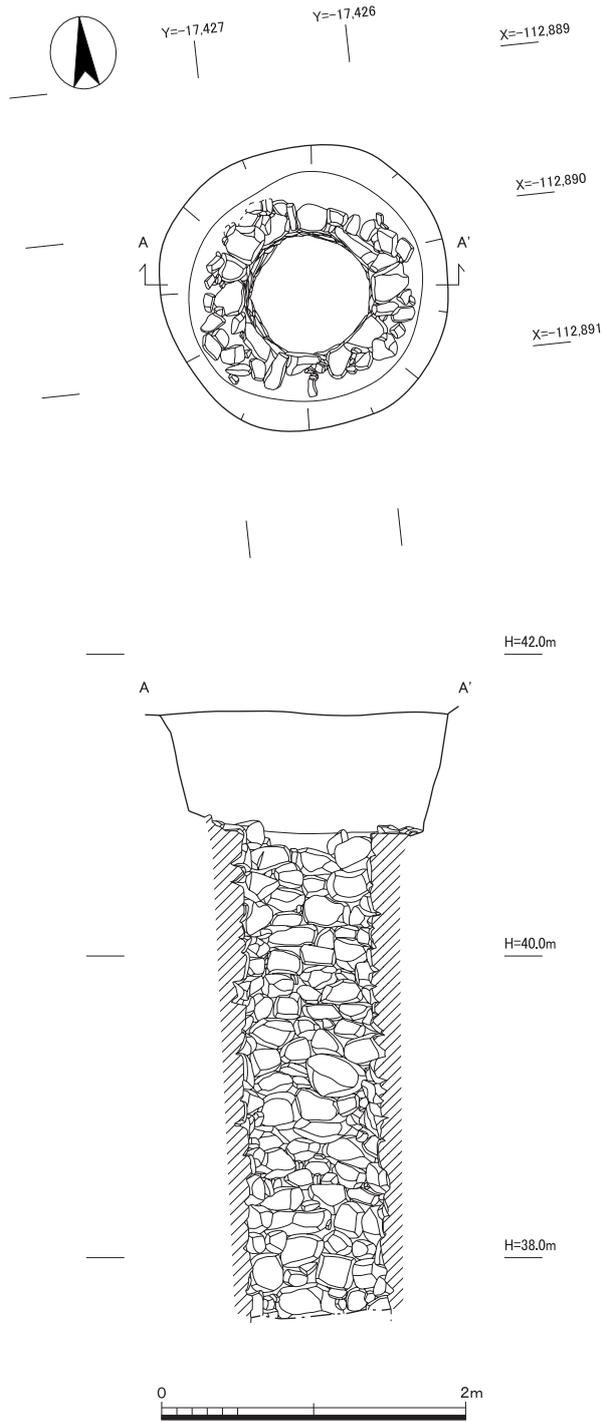


図52 井戸3020実測図(1:50)

壁土、炭化米が出土した。

風呂関連遺構群(図54、巻頭図版1) 1区南西と3区では建物、土間、竈、石風呂、井戸、溝などからなる一連の風呂関連遺構群が見つかった。また、柱列5・6や後述する塀状遺構もこの風呂関連遺構群を区画するためのものと考えられる。

建物2 石風呂3130、竈3100、土間を覆う建物である。北に対して約1度東に振れる。柱間は不等間で東西約7.6m、南北約8.5mあり、南東の隅を欠く。延べ床面積は約61.6㎡である。掘立柱あるいは地下式礎石をもつ柱で構成される建物と考えられる。柱穴埋土には炭化物と焼土が混じる。竈3100の作業場床面で東側から倒れ込んだ状態の焼けた土壁を検出しており、この建物の壁は一部土壁作りであったと考えられる。また、石風呂3130から出土した瓦のうち、雁振瓦の占める割合が高いことから、この建物は棟のみ瓦が葺かれていた可能性もある。

竈3100(図55、図版9) 建物2の内部東側に位置する竈である。石風呂3130と並列する。土間から一段掘り下げて焚口を設ける半地下式の竈である。北側が素掘りの作業場、南側が石組の燃焼室で焚口は北に向く。

焚口は鳥居形に組まれ、東側の柱石がチャート系、西側柱石と天井石は花崗岩である。天井石の花崗岩は一石の角柱状石材が後

に土圧で割れたものと考えられる。焚口の大きさは石の内法で幅0.45m、高さ0.35mある。

燃焼室は馬蹄形を呈し、チャートと砂岩系の石材で構築される。いずれの石も二次的に火を受け赤変する。石組の外法で東西約1m、南北約0.8mある。内法は東西約0.55m、南北約0.6mで深さは約0.8mある。石組は下段に長径0.4~0.6mの大きめの石材を縦使いして置き、その間に径0.1~0.2mの石を詰める。上段は長径0.2~0.4mの石材を横使いして積み、最上段は石の平らな面を上に向け並べる。燃焼室の床面は、炭化物と焼土を多量に混ぜた粘質シルトを貼って火床とし(図55-

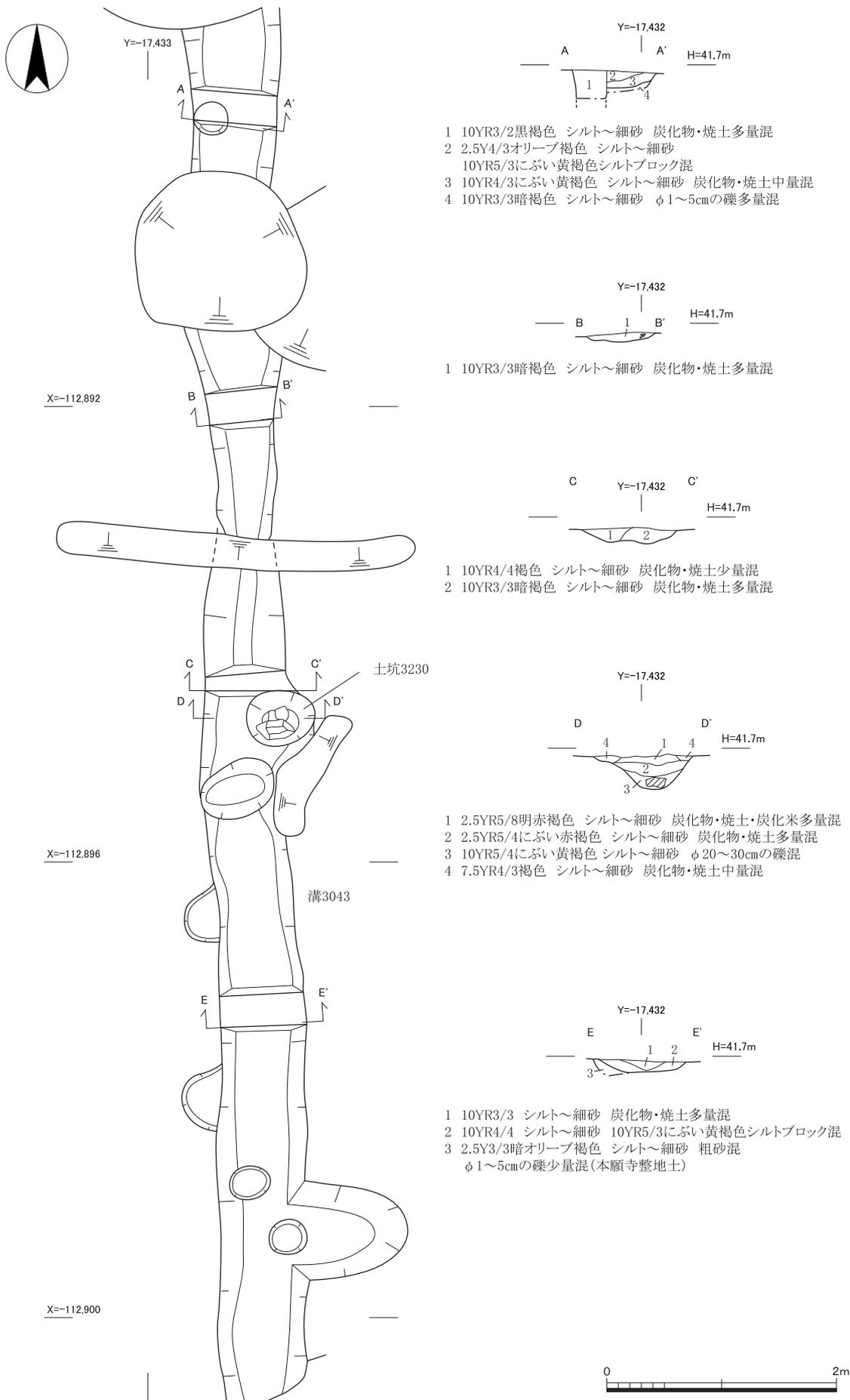


図53 溝3043、土坑3230実測図 (1 : 50)

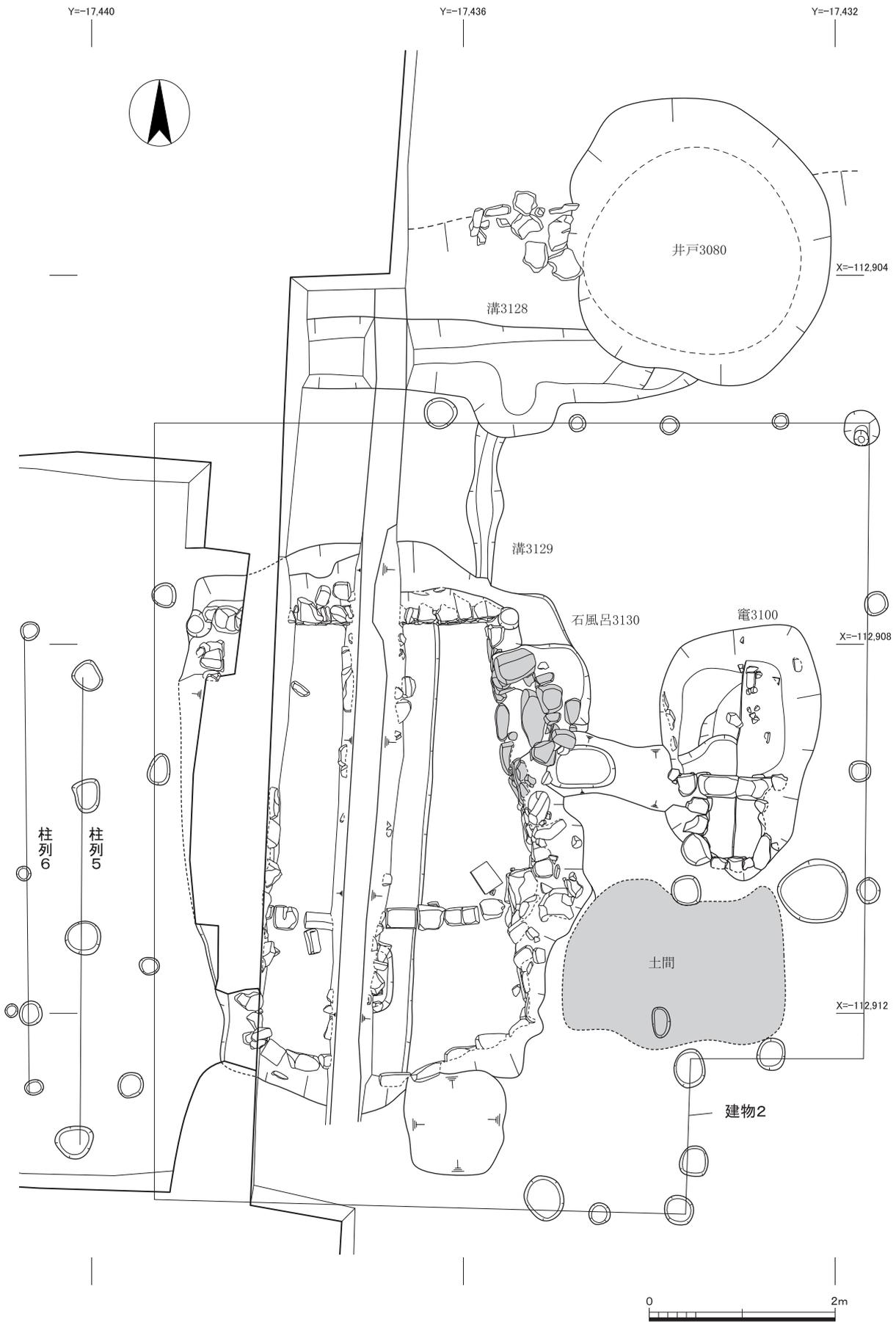


図54 風呂関連遺構群平面図 (1 : 60)

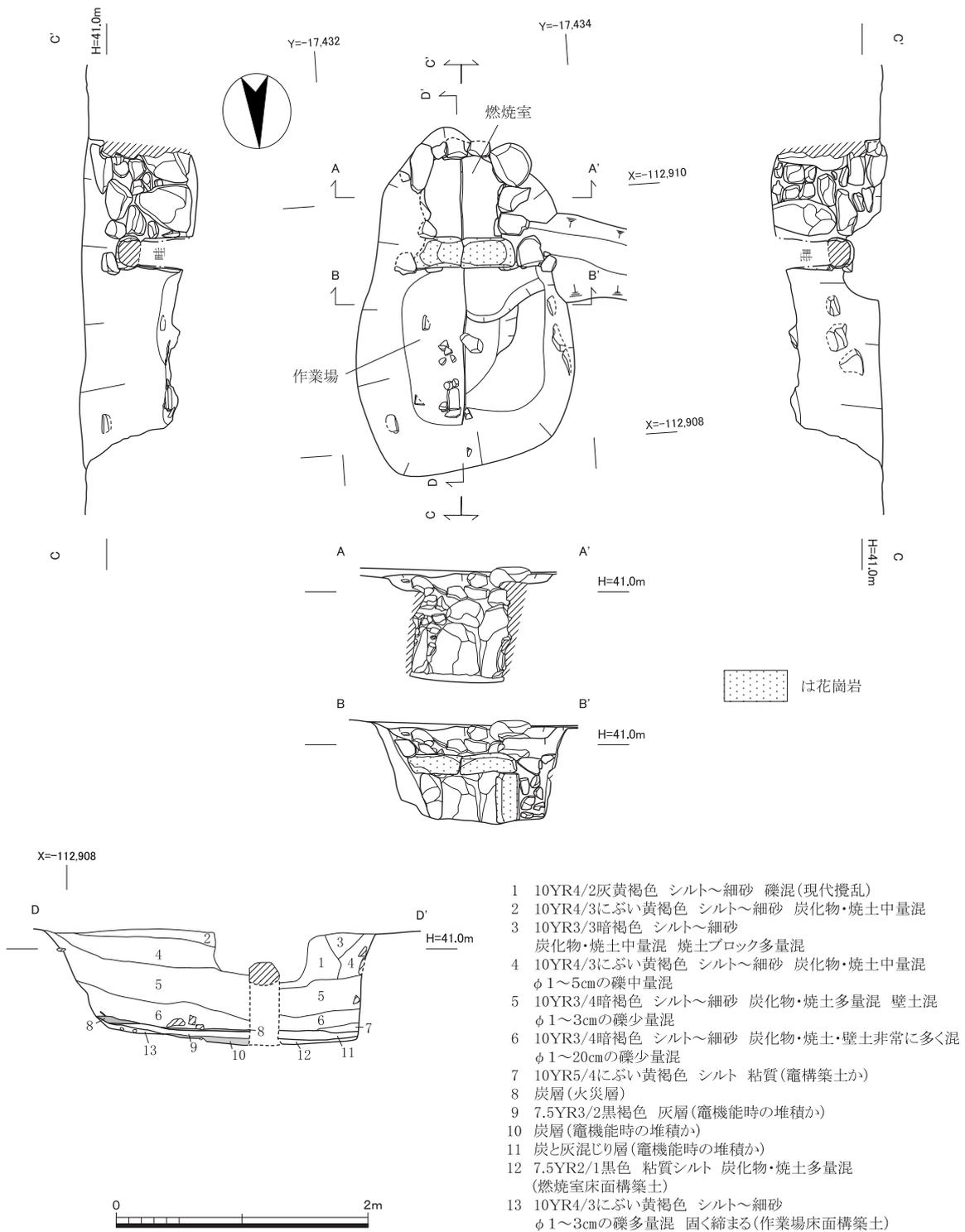


図55 竈3100実測図 (1:50)

12層)、その上に竈機能時の炭と灰層が堆積する(11層)。さらにその上に、釜口構築土が崩落したと考えられる粘質のシルトが馬蹄形にかたまりで堆積し(7層)、それより上は焼土で埋まる(3～6層)。11層出土の炭化材の樹種は針葉樹とアカガシ亜属、12層出土の炭化材はマダケ属、針葉樹、アカガシ亜属・タケ類などであった。

作業場は東西約1.7m、南北約1.6m、深さは約0.8mある。東側床面上には焼けた壁土が倒れこ

んでいたため保存し、西半のみ床面まで掘り下げを行った。西半で確認した底面の形状は中央がやや凹み、さらに焚口付近は灰溜め用に浅い土坑状になる。床面構築土は径1～3cmの礫が混ざり固く締まる(13層)。南半は床面直上に竈機能時に掻き出した炭と灰がそれぞれ2～5cmの厚さで堆積する(9・10層)。その上に、本願寺が焼き討ちにあった際の火災に伴う炭が薄く堆積し(8層)、それより上は焼土で埋まる(2・4～6層)。8層出土の炭化材は散孔材の広葉樹、タケ類、10層出土の炭化材はアカガシ亜属、ヒノキ、コナラ亜属クヌギ節などであった。

石風呂3130(図56・57、巻頭図版2、図版10・11) 建物2の内部、西側に位置する石風呂である。主軸は座標北に対してほぼ振れをもたない。半地下式構造で、西辺はブロック塀の下にあり検出できていないがおおよその全体規模は、東西約4.4m、南北約6.0mある。内部は石列で仕切られ、北側の作業場などを兼ねたと考えられる前室と南側の蒸し風呂部に分かれる。前室、蒸し風呂部ともに石組みである。

蒸し風呂部の平面形は南辺がややふくらむ蒲鉾形で、石組の外法で東西約3.3m、南北約2mある。内法では東西約2.7m、南北約1.5mで、面積は約4㎡となる。検出面から機能面までの深さは約0.8mある。石組みの石材は南辺が全て花崗岩、東辺もチャートの1石を除き主要石材は全て花崗岩である。南辺、東辺の石材は強く火を受けて赤変する。南辺は長径約0.5m、短径約0.3m、厚さ0.15m程度の扁平な花崗岩の石材を縦使いして並べる。東辺は長径約0.5m、短径0.25～0.5mの石材を縦使いして並べ、その上に長径約0.2mの花崗岩を横使いして積む。蒸し風呂部と前室を仕切る石列は、砂岩系の2石を除き花崗岩で構成される。長径約0.3mの石材を横使いして並べる。中央の1石は花崗岩製の長足五輪塔の地輪の一部を転用したもので、梵字が陰刻される。上端には水輪を打ち欠いた円形の破面が残る。現地保存したため、拓本を採取し図56に掲載した。石列の石材はいずれも二次的に火を受けておらず、断面観察で石の北面に蒸し風呂の天井構築土と考えられる粘質シルトが巻きつき(図57-35層)、南面は床面構築土に覆われていることを確認した(36層)。このことから、北辺石列は風呂機能時には露出していなかったと考えられる。また、東から2石目と3石目の石材は床面からやや浮いた状態で出土しており、蒸し風呂部の入り口にあたることから可動式であった可能性がある。蒸し風呂部中央には長径約0.3mの花崗岩の石材が立てて埋められる(38層)。その後、焼けた壁土を混ぜたシルトで床面を構築する(36・37層)。床面は南から北に向けて緩やかに下がる。床面上には機能時の炭と灰が薄く堆積し(34層)、その上に崩落した天井構築土と考えられる径20～40cmの石を含む土がかぶる(32・33層)。それより上は、焼き討ち後に埋め戻されたと考えられる。天井構築土に混じる石は花崗岩が多く、チャート系、砂岩系が少量混じる。花崗岩製の墓石を割ったものもある。34層出土の炭化材は、サクラ属、ヒノキ、ツバキ属などであった。

前室の平面形は南がやや広がる台形状で、石組みの外法で東西約3.7m、南北約3.4mある。内法では東西約3m、南北約3mで面積は約9㎡となる。検出面から機能面までの深さは約0.9mある。東辺には石組みの階段がつく。石組みの石材はチャートと砂岩系の河原石で構成される。北辺は径0.1～0.3mの石を横使いして積む。東辺階段部分は長径0.4～0.6mの石を踏み石として積み、両脇

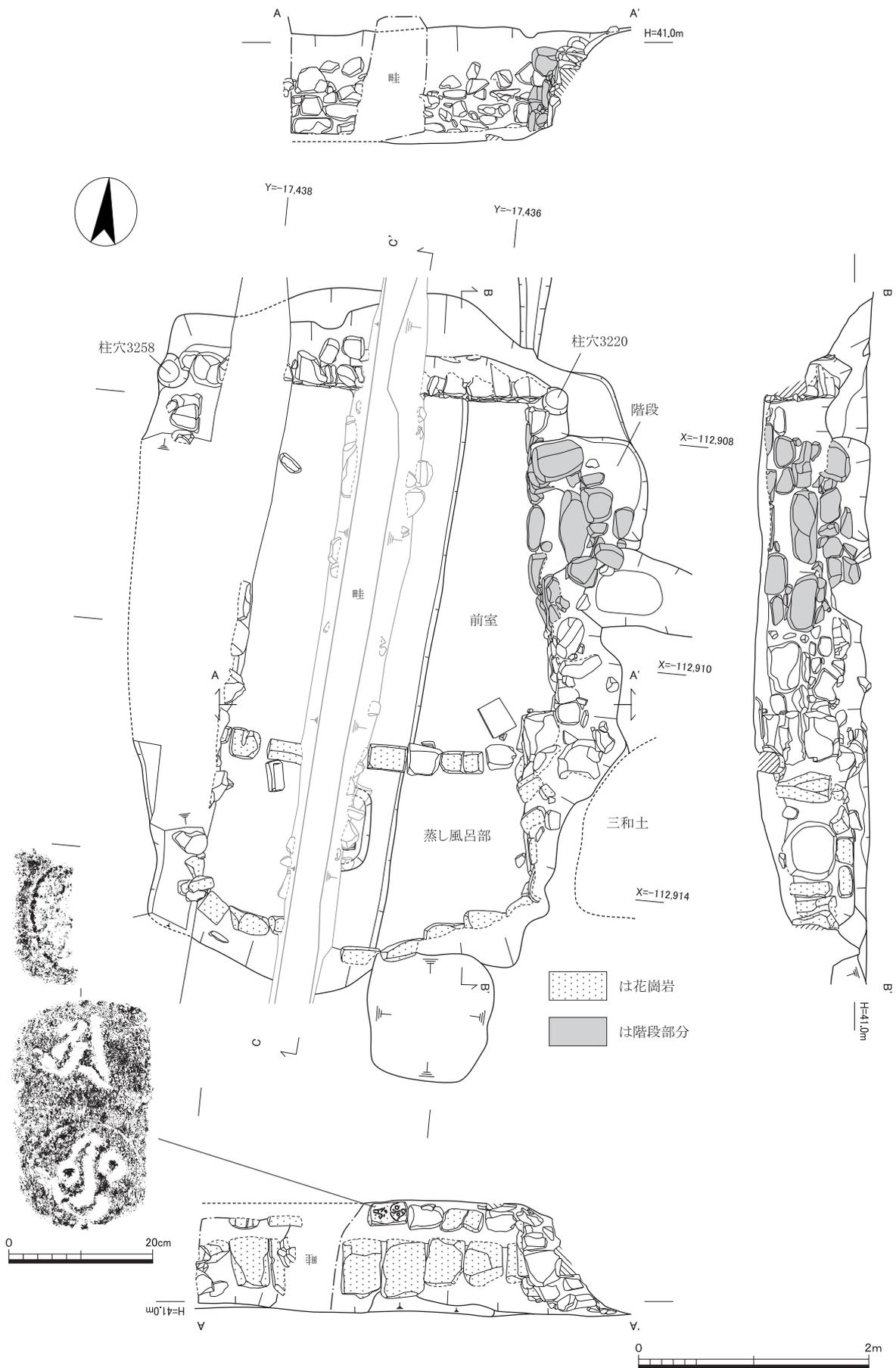
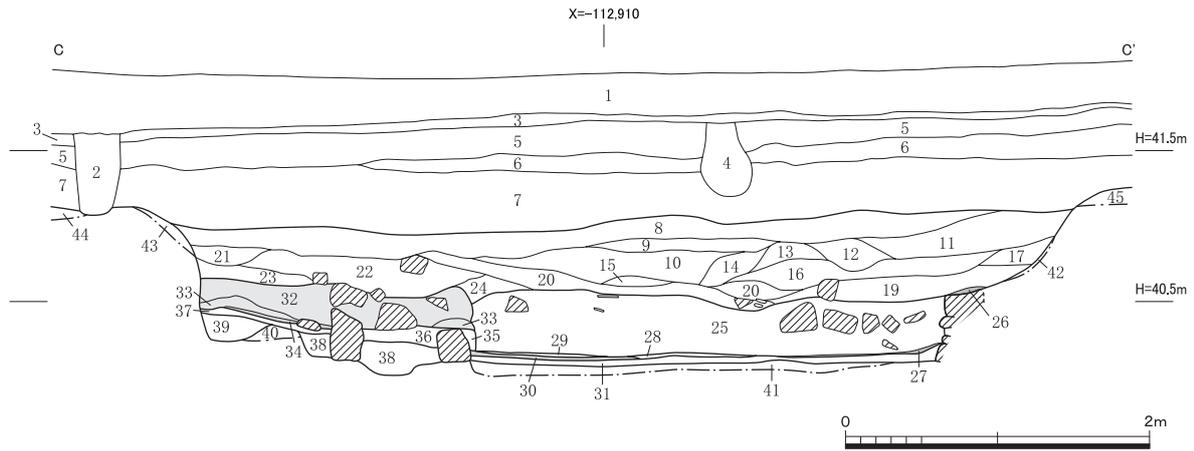


図56 石風呂3130実測図 (1 : 50)



- | | |
|--|--|
| 1 駐車場盛土 | 28 7.5YR3/3暗褐色 シルト～細砂 灰多量・炭少量混(火災層) |
| 2 2.5Y4/2暗灰黄色 シルト～細砂 極粗砂～小礫混(現代攪乱) | 29 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 粘質(床修復土) |
| 3 10YR4/1褐灰色 シルト～細砂
φ1～5cmの礫少量混 土壌化(近現代耕作土) | 30 炭・灰(風呂機能時の堆積) |
| 4 10YR4/1褐灰色 シルト～細砂 φ3～5cmの礫多量、炭化物中量混(根) | 31 2.5Y4/3オリーブ褐色 シルト～細砂に10YR4/2灰黄褐色粘質
シルトブロック多量混(床構築土) |
| 5 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂
φ1～3cmの礫中量混、炭化物少量混(近世盛土) | 32 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂に2.5Y5/3黄褐色粘土～シルト
の大ブロック非常に多く混φ20～40cmの礫、炭化物・焼土少量混
(崩落した天井構築土) |
| 6 10YR4/2灰黄褐色 シルト 炭化物少量混(近世盛土) | 33 7.5YR5/3褐色 シルト
焼けた壁土、炭化物多量混(崩落した天井構築土) |
| 7 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
φ1～5cmの礫中量、炭化物・焼土中量混(近世盛土) | 34 炭・灰層(風呂機能時の堆積) |
| 8 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫中量、炭化物・焼土少量混 | 35 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 粘質
焼土少量混(天井構築土) |
| 9 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土多量混 | 36 2.5Y5/3黄褐色 シルト 粘質
焼けた壁土多量混(床面構築土) |
| 10 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫、炭化物・焼土少量混 | 37 7.5YR3/4暗褐色 シルト 固く締まる(床面構築土) |
| 11 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 シルト～細砂 粗砂混 炭化物・焼土少量混 | 38 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
炭化物・焼土多量混(立石埋め土) |
| 12 10YR3/2黒褐色 シルト 炭化物・焼土少量、灰多量混 | 39 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂
φ1～5cmの礫多量混 固く締まる(花崗岩掘形) |
| 13 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土中量混 | 40 10YR4/2灰黄褐色 細砂 φ0.5～5cmの礫多量混
(本願寺整地土) |
| 14 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土少量、灰多量混 | 41 40層と同じ |
| 15 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土中量混 | 42 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 やや粘質(本願寺整地土) |
| 16 10YR4/4褐色 シルト φ0.5～3cmの礫少量、炭化物・焼土少量混 | 43 10YR4/4褐色 シルト 固く締まる(本願寺整地土) |
| 17 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土微量混 | 44 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫中量混
2.5Y4/4オリーブ褐色粘土ブロック混 固く締まる(本願寺整地土) |
| 18 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト 粗砂混 炭化物・焼土多量混 | 45 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 φ1～5cmの礫多量混
固く締まる(本願寺整地土) |
| 19 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 φ3～20cmの礫微量、炭化物・焼土少量混 | |
| 20 10YR4/2灰黄褐色 シルト φ3～5cmの礫混 | |
| 21 10YR4/2灰黄褐色 シルト φ1～3cmの礫少量混 | |
| 22 10YR3/3暗褐色 シルト φ1～25cmの礫少量、炭化物・焼土少量混 | |
| 23 2.5Y3/3暗オリーブ褐色 シルト～細砂 φ1～10cmの礫少量混 | |
| 24 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土・灰中量混 | |
| 25 7.5YR3/2黒褐色 シルト～細砂 粗砂～極粗砂混
φ15～40cmの礫少量、炭化物・焼土・壁土多量混
2.5Y6/3にぶい黄色シルトのブロック少量混(火災層) | |
| 26 炭(火災層) | |
| 27 炭(火災層) | |

図57 石風呂3130断面図 (1 : 50)

に径0.2～0.4mの石を積み上げる。東辺の階段より南部分は長径0.3～0.4mの石を横使いして積み、間に径0.1～0.2mの石を詰める。東辺南端の石組みは西に張り出し、袖をつくる。袖石は長径0.5m前後の大きめの石材を3石積み上げる。前室の北東隅と北西隅では、掘立柱の柱穴3220と3258を検出した。掘形の直径は0.2mと0.25mである。前室床面は整地土の上に床面構築土を貼る(31層)。床面はほぼ平坦で、蒸し風呂部に近い南半には風呂機能時に掻き出されたと考えられる炭と灰が薄く堆積する(30層)。その上にも固く締まった粘質シルトが堆積する(29層)ことから床を修復したと考えられる。床面と北辺石組み上、階段上には火災に伴う炭と灰が堆積し(26～28層)、その上を焼けた壁土などを多量に含む焼土層が覆う(25層)。それより上は焼き討ち後の埋め戻し土で埋まる。

土間 竈3100の南、石風呂3130の南東では土間の三和土を検出した。検出範囲は東西2.3m、南北1.8mである。灰と小礫が混じり非常に固く締まる。

井戸3080 建物2の北で検出した円形の井戸である。掘形の直径は約3mある。検出面から約4m、標高37.3mまで掘り下げたが湧水層には達していない。掘形の大きさからみて石組井戸であった可能性が高いが、掘り下げた4mまでで石組は検出していない。埋土は検出面から約1.2mまでは2.5Y4/3オリーブ褐色シルト～細砂に径1～15cmの礫が混じる層が主体となる。近世の遺物が混じり、山科本願寺廃絶後も凹みとなって残っていたものと思われる。それより下は10YR4/2～4/3灰黄褐色～にぶい黄褐色の細砂に径5～30cmの礫が多量に混じる締まりの悪い土で埋まる。井戸検出面の西側には長径0.3m程度の扁平なチャートと砂岩系の石が敷かれていた。

溝3128 井戸3080から西に延びる素掘り溝である。検出長約4m、幅約0.8m、深さは0.3～0.35mある。溝底の標高は西が低い。埋土は下層がやや粘質の10YR3/1黒褐色シルト～細砂に炭化物・焼土が多量に混じる。上層は10YR2/2黒褐色シルト～細砂に炭化物・焼土が多量に混じる。この溝3128と石風呂3130の間には南北方向の溝3129がはしる。両遺構に削平され、先行する遺構である可能性が高い。検出長約1.3m、幅0.15～0.4m、深さは約0.1mある。埋土は10YR3/2黒褐色シルト～細砂で、焼土は混じらない。

柱列5 石風呂3130の西で検出した南北方向の柱列である。座標北に対してほぼ振れをもたない。南北3間分を検出した。掘立柱あるいは地下式礎石をもつ柱列と考えられる。柱間は北から1.3m、1.5m、2.1mと不等間である。柱掘形の直径は0.35～0.45mある。

柱列6 柱列5の西で検出した南北方向の柱列である。北に対して約1西に振れる。南北3間分を検出した。柱径が小さく、杭状の柱列と考えられる。柱間は北から2.5m、1.5m、0.8mと不等間である。

溝3089 (図58、図版8-2・8-3) 1区南東で検出した溝である。17次調査1区で検出した石組みの溝2117の延長で南北方向に延び、X=-112,902ラインで東に屈曲する。東は調査区外に伸び、そのまま延長すると16次調査で検出した土坑1006あるいは土坑1049につながる可能性がある(図51)。南北主軸は北に対して約1度西に振れる。X=-112,915ラインより南は石組みの痕跡が残る。それより北は素掘りで、溝底で多数の杭跡を検出したことから板で護岸していたと考えられる。検出長は南北方向部分が約17m、東西方向部分が約2.5mある。幅は0.8～1m、深さは0.15～0.25mある。底面の標高は北端で41.4m、南端では41.0mで北から南に低くなる。溝底には厚さ0.05～0.1mの砂が堆積し、北から南へ流水があったことがわかる。また、砂層が2層に分けられる箇所があり(図58-Cライン)、補修が行われたと考えられる。石組み部分は長径0.3～0.4mの石材を横使いして据える。石材はチャート、砂岩系、花崗岩が混在する。また、X=-112,919ラインでは石組みが東へも延びる。

溝3087 (図51・58・59) 1区南半で検出した東西方向の素掘りの溝である。Y=-17,434付近で南に屈曲する。溝3089、溝3128、石風呂3130などと重複するため、部分的な掘り下げに留めた。検出長は東西約10m、南北約2mである。幅は0.7～1.4m、深さは確認できた部分では0.2～0.35mある。底面の標高は東端で41.2m、中央付近では40.8mで東から西に向けて低くなる。流水堆積

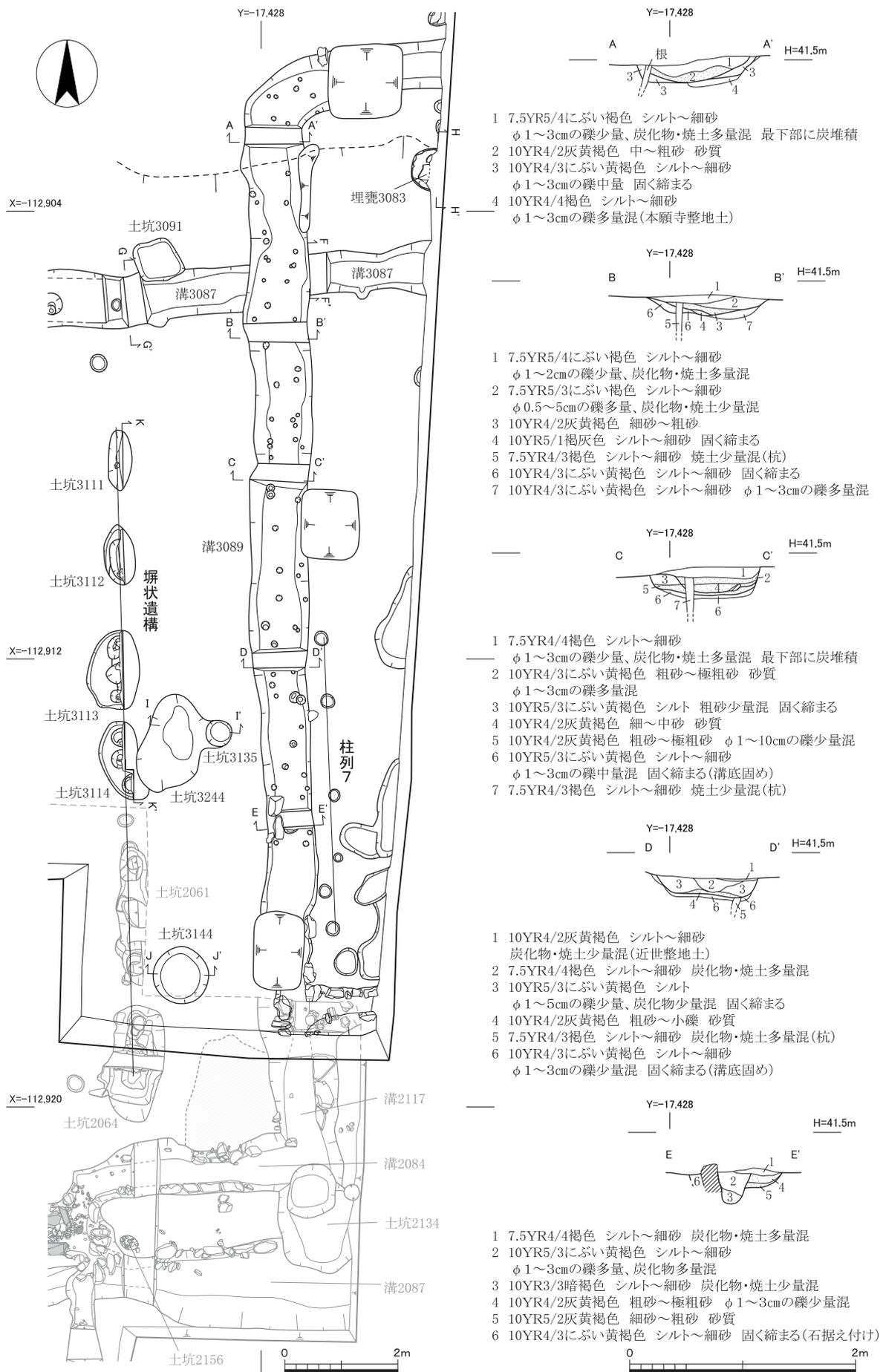
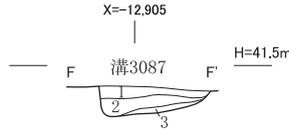
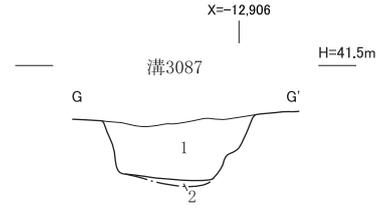


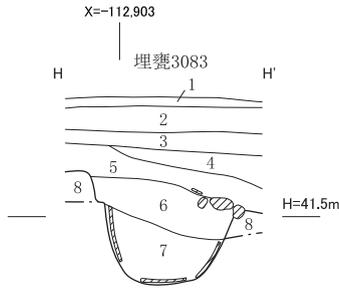
図58 1区南東部平面図(1:100)、溝3089断面図(1:50)



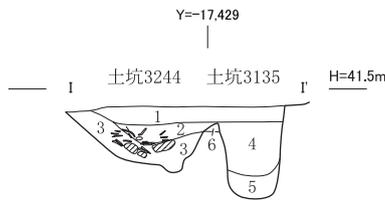
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土中量混
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂 φ1～2cmの礫中量混
- 3 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 φ1～5cmの礫多量混



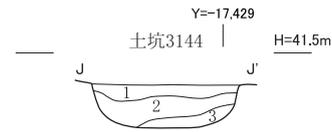
- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 細砂 10YR6/4にぶい黄褐色シルトブロック多量 φ1～3cmの礫多量混 固く締まる(埋め戻し土)
- 2 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫多量混(本願寺整地土)



- 1 碎石
- 2 駐車場盛土
- 3 10YR4/1褐灰色 シルト～細砂 φ1～5cmの礫少量混 土壌化(近代耕作土)
- 4 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 粗～極粗砂、φ1～3cmの礫中量混(近世盛土)
- 5 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫少量、炭化物・焼土多量混(近世盛土)
- 6 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土中量混 焼けた壁土混
- 7 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土多量混 締まり悪い
- 8 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 粗砂混 φ1～5cmの礫混 固く締まる(本願寺整地土)

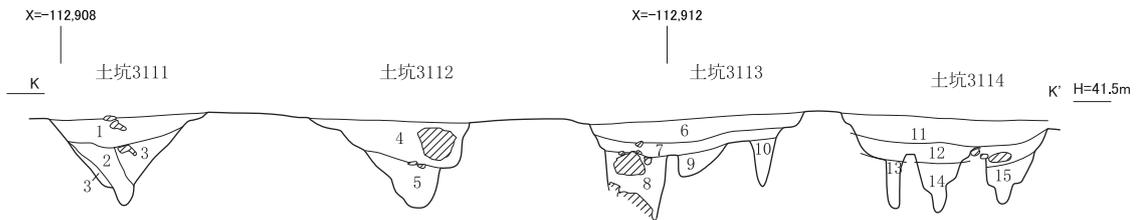


- 1 10YR4/4褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土中量混
- 2 7.5YR3/2黒褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土多量混
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 土器多量混
- 4 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土少量混
- 5 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
- 6 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫混 固く締まる(本願寺整地土)



- 1 10YR3/3暗褐色 細砂～中砂 炭化物・土器多量混
- 2 10YR3/2黒褐色 細砂～中砂 やや粘質 土器多量混
- 3 10YR4/2灰黄褐色 中砂～粗砂 砂質

塀状遺構



- 1 7.5YR4/3褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土多量混
- 2 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土多量混
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土少量混
- 4 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土中量、φ1～3cmの礫多量混
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 粗砂混 炭化物・焼土少量混
- 6 10YR4/4褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土中量混
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土少量混
- 8 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫多量混
- 9 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土少量混
- 10 2.5Y4/3オリブ褐色 シルト～細砂
- 11 10YR4/4褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土中量混
- 12 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土少量混
- 13 10YR4/4褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土少量混
- 14 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土少量、φ1～3cmの礫少量混
- 15 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土少量混



※ 断面図の位置は図58に対応

図59 溝3083、埋壙3083、土坑3244・3135・3144、塀状遺構断面図 (1:50)

は確認できていない。埋土は固く締まり、意図的に埋め戻された可能性がある。

埋甕3083（図58・59） 1区中央の東壁際で検出した埋甕である。備前焼の大甕が高まりの段差の境界部分に据えられる。断面観察（図58・59－Hライン）から底部から50cmまでが地中に埋まり、それより上部は露出していたと考えられる。底部付近のひび割れが漆と布により補修されていたことから、液体を入れるための甕であった可能性が高い。

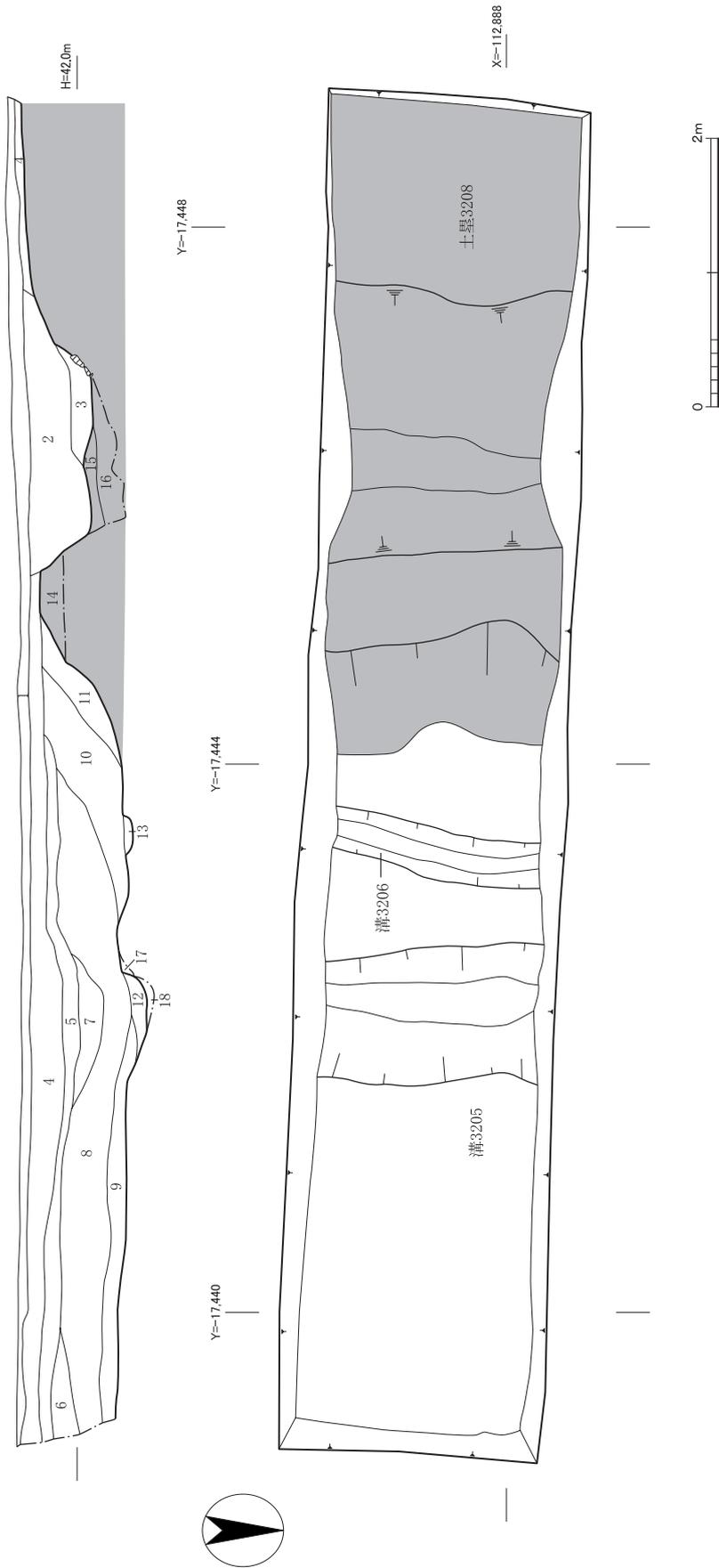
土坑3091（図版7－3） 1区中央南寄りで検出した土坑である。1辺約0.7mの隅丸方形で深さは約0.1mある。底は平坦で断面形は逆台形状を呈する。埋土は10YR3/3暗褐色シルト～細砂で炭化物と焼土が混じる。埋土中から多量の土師器皿などが出土した。

土坑3244・3135（図58・59） 1区南東で検出した土坑である。不整形な土坑3244と柱穴状の土坑3135が東西に並ぶ。検出面では明瞭な重複関係は確認できなかった。土坑3244は塀状遺構を構成する土坑3114を削平する。土坑3244は東西約1m、南北約1.7mで、深さは約0.35mある。埋土からは炭化物、焼土とともに多量の土師器皿などが出土した。土坑3135は径約0.45mの円形で、深さは約0.6mある。埋土からは土師器皿などが出土した。

土坑3144（図58・59） 1区南東端で検出した土坑である。径約1mの円形で、深さは約0.3mある。埋土から多量の土師器皿が出土した。

塀状遺構（図58・59） 1区南東で検出した南北方向の土坑列である。土坑3111～3114と17次調査で検出した土坑2061・2064の6基の土坑が南北に並ぶ。主軸は北に対して約1.5度西に振れ、溝3089とほぼ平行する。北端の土坑3111は、南北約1m、東西約0.4m、深さは約0.5mある。土坑中央に柱痕跡が認められ、抜き取りが行われているが柱径は約0.1mと推測される。土坑3112は、南北約1.1m、東西約0.55m、深さは約0.55mある。中央に径約0.4mの柱穴が配される。柱は抜き取りが行われ、柱痕跡は確認できなかった。南側の土坑3113・3114の2基は17次調査検出の土坑2061・2064と同様に南北に細長い土坑の中に3基の柱穴が配置される。土坑3113は南北約1.4m、東西約0.9m、深さは約0.1mある。中に配置された柱穴の掘形は、北柱が径約0.4m、深さ約0.5m、中央柱が径約0.35m、深さ約0.2m、南柱が径約0.2m、深さ約0.3mある。柱の抜き取りが行われており、柱径は不明である。北柱の底には根石が入れられていた。土坑3114は南北約1.4m、東西約0.7m、深さ約0.2mある。中に配置される柱穴の掘形は、北柱が径約0.35m、深さ約0.4m、中央柱が径約0.35m、深さ約0.4m、南柱が径約0.35m、深さ約0.3mある。柱の抜き取りが行われているが、柱痕跡から推測される柱径は約0.1mある。17次調査検出の土坑2061・2064がいずれも3本の柱を1単位とし中央柱の径が最も大きく深かったことから、昨年度の報告では中央に高い柱を立て、それを両側の柱で支える宝幢遺構と推測したが⁵⁾、今調査で並んで見つかった土坑3111～3114の柱穴の配置や形状は一様でない。また、出土状況を見ると風呂関連遺構群と溝3089の間に位置し、方位の振れもほぼ一致することなどから、風呂関連遺構群を他から遮蔽するための塀状施設の基礎部分である可能性が高いと考えられる。

柱列7（図58） 1区南東、溝3089の東に沿う南北方向の柱列である。北に対して約2度西に振れる。南北5間分を検出した。柱間は不等間で、柱掘形の径は0.15～0.25mある。



- 1 砕石
- 2 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 粗～極粗砂、φ1～10cmの礫中量混(現代擾乱)
- 3 10YR2/1黒色 粗～極粗砂 φ1～3cmの礫多量混(現代擾乱)
- 4 現代駐車場盛土
- 5 10YR4/1褐灰色 シルト～細砂 φ1～5cmの礫少量混(近現代土壌化層)
- 6 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 φ1～10cmの礫中量混(近世盛土)
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫中量混 やや粘質
- 8 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 φ1～5cmの礫少量、炭化物・焼土少量混 縮まり悪い(近世盛土)
- 9 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 10YR5/3にぶい黄褐色 シルトブロック混、φ1～5cmの礫少量、炭化物・焼土少量混(近世盛土)

- 10 10YR4/4褐色 シルト～細砂 φ1～10cmの礫中量、炭化物・焼土少量混
- 11 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 φ1～10cmの礫少量混
- 12 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 φ1～2cmの礫少量混(溝3205埋土)
- 13 10YR3/4暗褐色 シルト～細砂 炭化物・焼土少量混 やや粘質(溝3206埋土)
- 14 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 10YR5/2灰黄褐色シルトブロック多量混 非常に固く縮まる(土層構築土)
- 15 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 2.5Y5/3黄褐色シルトブロック混(土層構築土)
- 16 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 2.5Y5/3黄褐色シルトブロック混、極粗砂～小礫多量混(土層構築土)
- 17 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト φ1～2cmの礫微量混(山科本願寺整地土)
- 18 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 φ1～2cmの礫多量混 固く縮まる(山科本願寺整地土)

図60 2区実測図 (1:50)

2区（図版11-4）

土塁3208（図60） 2区の西半では南北方向に走る土塁を検出した。上部は削平されていたが、基底部分は良好に残存していた。Y=-17,444ライン付近が内側裾となり、検出標高は41.65mで約30度の傾斜角で立ち上がる。土塁構築土は、上面検出で確認できた部分では均質なシルト～細砂にさらに粘質のシルトブロックを混ぜ非常に固く締まる（図60-14～16層）。

溝3205（図60） 2区東半で検出した南北方向の溝である。土塁に平行する。検出長約1.5m、幅約1m、深さは約0.15mある。底面の標高は北から南に僅かに下がる。流水の痕跡は認められない。

溝3206（図60） 溝3205の西側で検出した南北方向の溝である。土塁に平行する。検出長約1.5m、幅約0.4m、深さは約0.05mある。底面はほぼ平坦である。流水の痕跡は認められない。

（3）江戸時代から近代の遺構（図61）

1区では、調査区全域で江戸時代から近代の遺構を検出した。貯蔵施設と考えられる円形土坑群、火葬墓と考えられる方形土坑群、その他の土坑群がある。円形土坑群と方形土坑群については16・17次調査でも多数検出している。

円形土坑群

平面円形で壁が垂直に立ち上がる土坑群である。木杵痕跡のあるものと素掘りのものがあるが、いずれも底が湧水層となる礫層まで達しないことから井戸ではなく、肥溜や貯水施設としての機能が考えられる。2基ないしは3基が近接して並ぶものが多い。

土坑3040 調査区北東部で検出した。径約1.4m、深さ約0.3m、底面の標高は41.4mである。底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。東肩がやや崩れる。埋土は10YR3/2黒褐色シルト～細砂で径0.1m未満の礫を中量混じる。埋土から土師器皿、瓦質土器鉢などが少量出土した。

土坑3038 土坑3040の南隣で検出した。径約2.1m、深さ約1.1m、底面の標高は40.5mである。底は平坦で壁は垂直に近い角度で立ち上がる。埋土は10YR2/3黒褐色シルト～細砂で径1～10cmの礫が中量混じる。埋土から土師器皿、焼締陶器搦鉢、施釉陶器皿・壺、染付椀、瓦類など19世紀代の遺物が出土した。

土坑3039 土坑3038の南隣で検出した。径約2.3m、深さ約1.1m、底面の標高は40.6mである。底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。埋土は10YR4/2灰黄褐色細砂で締まりが悪い。埋土から焼締陶器搦鉢、施釉陶器椀・蓋、磁器椀、染付椀、棧瓦など19世紀代の遺物が出土した。

土坑3025 調査区北部で検出した。径約1.5m、深さ約0.6m、底面の標高は41.1mである。埋土は10YR3/2黒褐色シルト～細砂に焼土・炭化物が少量混じる。埋土から土師器皿、焼締陶器搦鉢（信楽）・甕、施釉陶器皿（唐津）・天目茶椀（瀬戸美濃）、染付椀・皿、瓦類など18世紀後半～19世紀代の遺物が出土した。

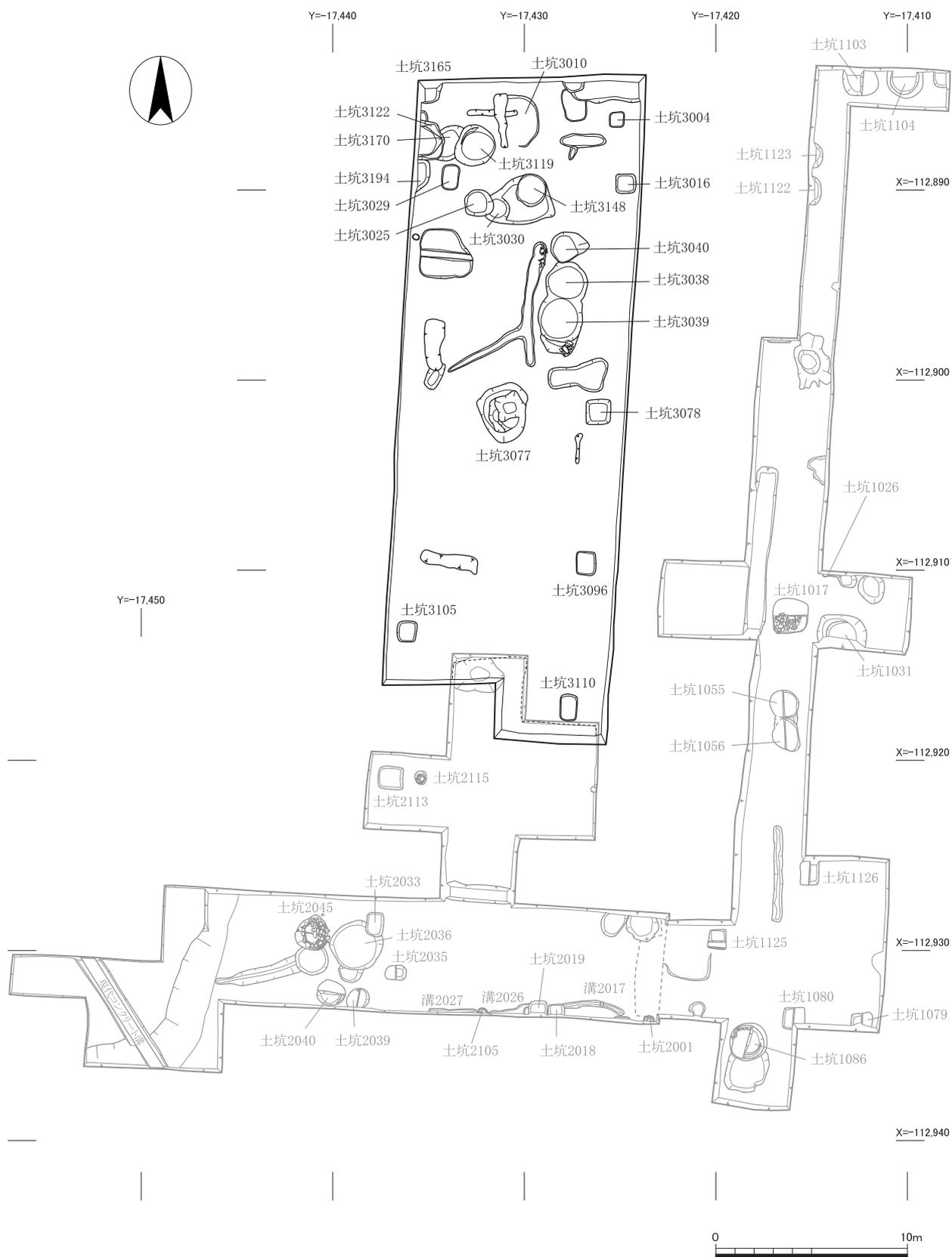


图61 近世遺構平面図 (1 : 300)

土坑3030 土坑3025の東隣で検出した。土坑3025に削平される。径約1.5m、深さ約0.7m、底面の標高は40.95mである。埋土は10YR3/2黒褐色シルト～細砂に径20cm以下の礫が混じる。埋土から土師器皿、瓦質土器鍋、焼締陶器播鉢・壺（備前）、施釉陶器皿（唐津・志野）、染付椀・皿・壺、瓦類、鉄釘など18世紀後半代～19世紀代の遺物が出土した。

土坑3148 土坑3030の東隣で検出した。径約1.5m、深さ約0.6m、底面の標高は40.9mである。埋土は10YR3/3暗褐色シルト～細砂に径20cm以下の礫が多量混じる。埋土から土師器皿、焼締陶器片、染付椀、砥石など18世紀代と考えられる遺物が出土した。

土坑3122 調査区北西部で検出した。径約2.0m、深さ約0.75m、底面の標高は40.95mである。壁には部分的に白色系の粘土が残り、木杵があった可能性がある。埋土は10YR3/2黒褐色細砂に径5cm以下の礫が混じる。埋土から土師器皿・焙烙、焼締陶器播鉢（信楽）、施釉陶器天目茶椀（瀬戸美濃）、瓦類など19世紀代の遺物が出土した。

土坑3170 土坑3122の東隣で検出した。土坑3122に削平される。径約1.7m、深さ約0.55m、底面の標高は41.2mである。埋土は10YR3/3暗褐色シルト～細砂に10YR4/3にぶい黄褐色シルトと焼土・炭化物が混じる。埋土から土師器皿、瓦質土器鉢、焼締陶器甕（信楽）、染付椀、瓦類など18～19世紀代の遺物が出土した。

土坑3119 土坑3170の東隣で検出した。土坑3170を削平する。径約2.1m、深さ約0.75m、底面の標高は40.95mである。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂に焼土・炭化物が混じる。埋土から土師器皿・焙烙、焼締陶器播鉢（備前・信楽）、施釉陶器皿（唐津・志野）・天目茶椀（瀬戸美濃）、染付椀、瓦類、鉄釘など18～19世紀代の遺物が出土した。

土坑3194 土坑3122の南隣で検出した。径約1.5m、深さ約0.75m、底面の標高は40.9mである。埋土は10YR2/3黒褐色シルト～細砂で、瓦質土器片などの遺物が微量出土した。

土坑3165 調査区北西隅で検出した。検出長は東西約1m、南北約1m、深さ約0.5m、底面の標高は41.2mである。埋土は10YR3/2黒褐色シルト～細砂で、土師器皿、瓦質土器風炉などが出土した。

方形土坑群

平面方形で壁が垂直に立ち上がる土坑群である。底に炭が堆積し、炭中に多量の骨片が混じることから、火葬した骨を埋めた火葬墓と考えられる。

土坑3004 調査区北東で検出した。一辺約0.75m、深さ約0.1m、底面の標高は41.5mである。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂に焼土と炭化物が多量に混じる。

土坑3016 調査区北東で検出した。一辺約1m、深さ約0.3m、底面の標高は41.3mである。埋土は10YR3/3暗褐色シルト～細砂に炭化物が混じる。底から壁にかけて厚さ0.03～0.05mの炭が堆積する。炭層や埋土から骨片のほか施釉陶器蓋、磁器皿、染付椀など20世紀前半代の遺物が出土した。

土坑3029 調査区北西で検出した。南北約1.2m、東西約0.9m、深さ約0.35m、底面の標高は

41.3mである。埋土は10YR3/2黒褐色シルト～細砂に径1～10cmの礫が多量混じる。底面には厚さ0.05mの炭が堆積する。炭層から骨片のほか土師器皿・焙烙、施釉陶器皿、磁器人形など20世紀代と考えられる遺物が出土した。

土坑3078 調査区中央東で検出した。1辺約1.3m、深さ約0.4m、底面の標高は41.1mである。埋土は10YR3/2暗褐色シルト～細砂に炭化物が多量に混じる。底から壁面にかけて厚さ0.05mの炭が堆積する。炭層や埋土から骨片、土師器皿、焼締陶器甕（備前）、施釉陶器天目茶碗（瀬戸美濃）、染付碗・皿、平瓦など19世紀代の遺物が出土した。

土坑3096 調査区南東で検出した。南北約1.2m、東西約1m、深さ約0.25m、底面の標高は41.4mである。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂に炭化物が多量に混じる。底面には厚さ0.03mの炭が堆積する。炭層からは骨片が出土した。

土坑3105 調査区南西で検出した。一辺約1m、深さ約0.3m、底面の標高は40.8mである。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂に焼土と炭化物が少量混じる。底から壁にかけて厚さ0.03mの炭が堆積する。埋土から骨片、土師器皿、施釉陶器壺・蓋、染付碗などの20世紀代の遺物が出土した。

土坑3110 調査区南東で検出した。南北約1.3m、東西約0.9m、深さ約0.25m、底面の標高は40.9mである。埋土は10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂に焼土と炭化物が混じる。底には厚さ0.03mの炭が堆積する。埋土から骨片、土師器皿、施釉陶器片、染付碗など20世紀代の遺物が出土した。

その他の遺構

土坑3010 調査区北端で検出した。南北約2.7m、東西約1.7mの不整形土坑である。断面形状は楕円状で、深さは約0.2mある。埋土は10YR3/4暗褐色シルト～細砂で焼土と炭化物が少量混じる。埋土からは土師器皿、瓦質土器鉢、焼締陶器楕円（信楽・丹波）・甕（備前）・壺（備前）、施釉陶器皿（唐津・志野）・天目茶碗（瀬戸美濃）、染付碗、輸入陶器德利（李朝）、花崗岩製石臼、花崗岩製五輪塔石材、砥石など17世紀中頃から後半代の遺物がまとまって出土した。

土坑3077 調査区中央部で検出した。南北約3.0m、東西約2.6mの不整形土坑で、底面の形状も凹凸がある。深さ約0.8m、底面の標高は40.8mである。埋土は10YR3/3暗褐色シルト～細砂に径1～30cmの礫が混じる。埋土からは土師器皿、瓦質土器鉢、焼締陶器楕円（備前・信楽）・甕（備前・信楽）・壺（備前）、施釉陶器皿（唐津）・天目茶碗（瀬戸美濃）、染付碗、棧瓦など18世紀代の遺物がまとまって出土した。

4. 遺 物

今回の調査では整理箱にして69箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、金属製品、銭貨、石製品、壁土、炭化米がある。全体の約8割を土器・陶磁器類が占める。遺物の帰属時期は山科本願寺期のものが約7割を占め、江戸時代から近代のものが約3割ある。

以下では、主要な遺構から出土した遺物について種別に概要を述べる。なお、土器類の個別の詳細については章末の表6にまとめた。

(1) 土器 (図版12・13)

石風呂3130 (図62) 土師器皿、焼締陶器甕 (備前産・信楽産)・播鉢 (備前産・信楽産)・壺 (備前産)、瓦質土器鉢・鍋・羽釜、施釉陶器壺 (瀬戸系)、輸入陶磁器青花 (椀・皿)・青磁 (椀・盤・壺)・白磁 (椀・皿)、丸瓦、平瓦、雁振瓦、塼、鉄釘、銭貨、石材、砥石、壁土、炭化米などが出土した。二次焼成を受けるものが多い。京都X期中段階に属する一群である。

1～3は土師器皿である。いずれも白色系の大型皿で口径は12.4～12.9cmの間に分布する。4～7は焼締陶器である。4は備前産の壺口縁部である。短く直立して立ち上がり、口縁端部をわずかに外側に摘まみ出す。5は信楽産の壺口縁部である。口縁は外反し、端部は面をもつ。6は信楽産の甕口縁部である。内面にナデによる凹線がめぐる。7は信楽産播鉢である。焼成は硬質で、4条1単位のクシ描き播目をもつ。8・9は輸入陶磁器で、8は中国明時代の青花皿、9は中国製の白磁の端反り口縁皿である。8は外面が牡丹唐草文、内面は雲文である。

竈3100 (図62) 土師器皿、焼締陶器甕 (備前産)、瓦質土器鉢・火鉢、施釉陶器天目茶椀 (瀬戸美濃系)、丸瓦、鉄釘、壁土が出土した。京都X期中段階に属する一群である。

10～12は土師器皿である。いずれも白色系で10は小型皿、11・12は大型皿である。13は施釉陶器の瀬戸美濃系天目茶椀である。

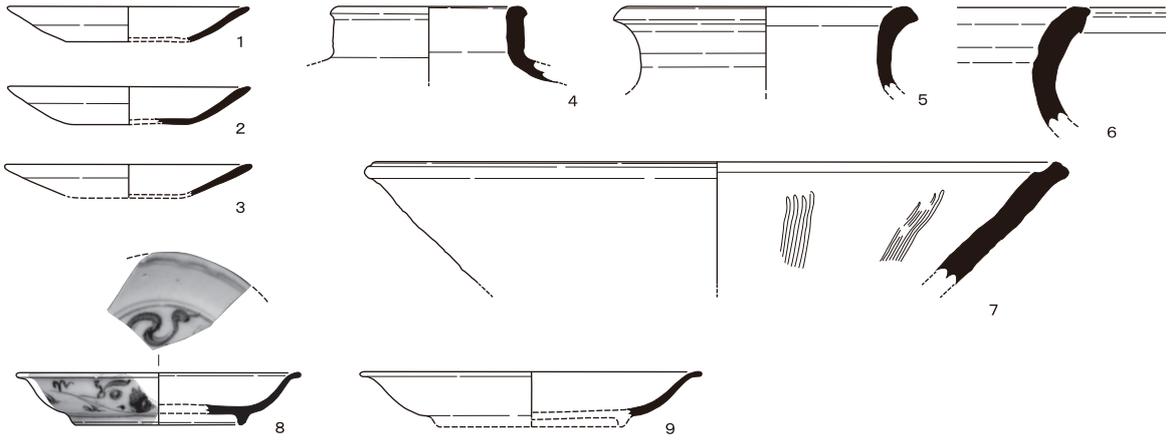
井戸3080 (図62) 土師器皿、焼締陶器甕 (備前産)・播鉢 (備前産・信楽産)、瓦質土器火鉢・

表10 遺物概要表

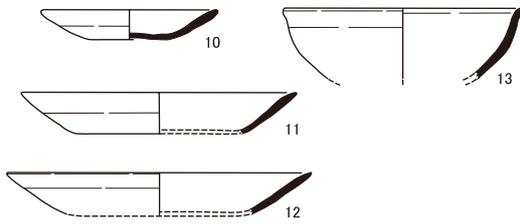
時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、軒瓦、金属製品、銭貨、石製品、炭化材、炭化米、壁土、骨		土師器108点、瓦質土器2点、焼締陶器10点、施釉陶器3点、輸入陶磁器9点、軒瓦5点、丸瓦1点、平瓦1点、雁振瓦4点、塼3点、鉄釘19点、石製品5点、炭化材1、壁土1、炭化米1	2箱	49箱
江戸時代	土師器、瓦質土器、焼締陶器、染付、磁器、施釉陶器、金属製品、銭貨			0箱	20箱
合 計		83箱	173点 (12箱)	2箱	69箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より14箱多くなっている。

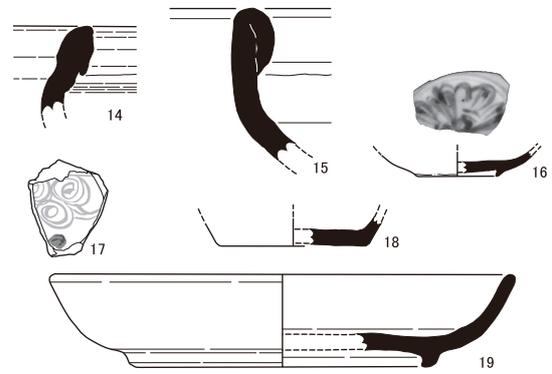
石風呂3130



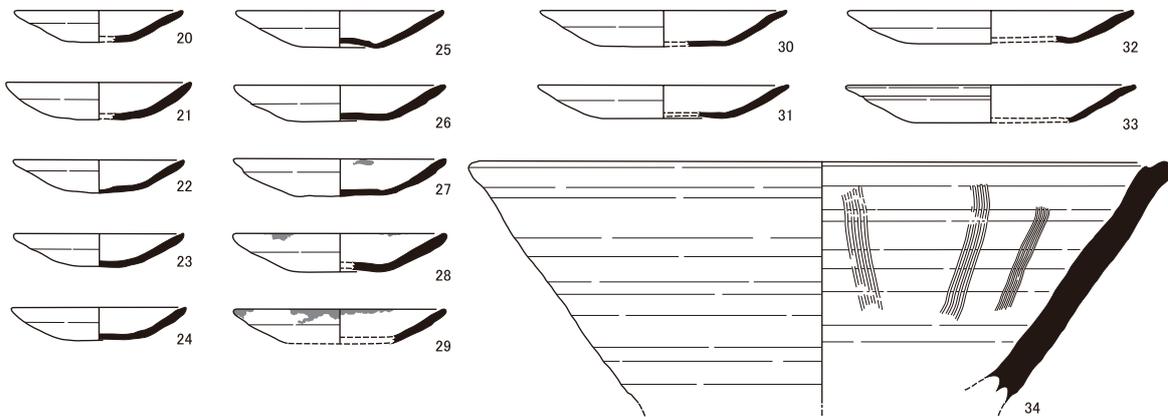
竈3100



井戸3080



溝3089



溝3087



溝3043

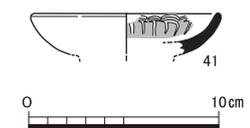


図62 出土土器類実測図1 (1:4)

鍋、施釉陶器黄瀬戸皿・天目茶椀（瀬戸美濃系）、輸入陶磁器青花（椀・皿）・青磁（椀・盤）・五彩・華南三彩、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼、鉄釘、砥石、石臼、炭化米、骨片などが出土した。京都X期古～中段階に属する一群である。

14・15は焼締陶器の甕で、14は信楽産、15は備前産である。14は口縁部内面にナデによる凹線がめぐる。16～19は輸入陶磁器である。16は中国明時代の青花皿で、外面は唐草文、内面には花文が描かれる。17は五彩磁器の破片である。赤絵の唐草文と緑色の上絵具が残る。裏面は無釉である。18は華南三彩の破片である。鉢もしくは香炉と考えられる。底面は無釉で墨書が認められる。19は中国龍泉窯系の青磁盤である。

溝3089 (図62) 土師器皿、焼締陶器甕(備前産)・播鉢(備前産・信楽産)・壺(備前産)、瓦質土器火鉢・鉢・鍋、輸入陶磁器青磁椀・白磁片、平瓦、塼、鉄釘、砥石が出土した。京都X期中段階に属する一群である。

20～33は白色系の土師器皿である。20～24は小型皿で、口径は8.6～9cmの間に分布する。25～29は中型皿で、口径は10.9～11cmの間に分布する。27～29は灯明皿として使用されている。30～33は大型皿で、口径は12.8～15cmの間に分布する。34は焼締陶器の信楽産播鉢である。焼成は硬質で、4条1単位のクシ描き播目をもつ。

溝3087 (図62) 土師器皿、焼締陶器甕(備前産)、瓦質土器、輸入陶磁器白磁椀、塼、鉄釘などが出土した。京都X期古段階に属する一群と考えられる。

35～40は白色系の土師器皿である。35はいわゆるへそ皿で、口径は6.8cmを測る。36は小型皿で口径は8.5cm。37・38は中型皿で、口径はそれぞれ10.8と11.3cmある。39・40は大型皿で、口径はいずれも15.4cmである。36・37は灯明皿として使用されている。

溝3043 (図62) 土師器皿、焼締陶器甕(備前産・信楽産)、瓦質土器鉢、輸入陶磁器青花皿・青磁(壺・盤・皿・椀)、丸瓦、塼、鉄釘、炭化米、壁土などが出土した。二次的に火を受けたものが多い。

41は中国龍泉窯系の青磁小皿である。内面には片彫蓮弁文が認められる。

井戸3020 (図63、巻頭図版3-2) 土師器皿、焼締陶器甕(信楽産)・播鉢(信楽産)、瓦質土器風炉・鉢、施釉陶器椀・壺(黄瀬戸)、輸入陶磁器青花(椀・皿)・青磁(盤・椀)・白磁皿、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、雁振瓦、塼、鉄釘、砥石、炭化米、壁土などが出土した。京都X期中段階に属する一群である。二次的に火を受けたものが多い。

42～53は白色系の土師器皿である。42～44は小型皿で、口径は9.2～9.7cmの間に分布する。45～51は中型皿で、口径は10.2～11.8cmの間に分布する。52・53は大型皿で、口径は13.4と14.5cmである。54は焼締陶器の信楽産播鉢である。焼成は硬質で4条1単位のクシ描き播目をもつ。55・56は焼締陶器の信楽産甕である。焼成は55がやや軟質、56は硬質である。57は瓦質土器の捏鉢である。底部は未調整で、体部外面はユビナデ、内面は横方向のヘラミガキを施す。58は瓦質土器の風炉である。瓦質土器の風炉としては出土例の少ないものであるが、山科本願寺跡では16次調査でも同型のものが出土している⁷⁾。中空の乳足と呼ばれる三足の脚が付く。口縁部は垂直に立ち上がる。肩部には雲形の火窓を三方向に開ける。口縁部にも火窓と60度ずらし、三方向に雲形透かしを穿つ。口縁部外面は横方向の密なヘラミガキで仕上げる。体部から脚部外面は密なヘラミガキと丁寧な研磨により光沢をもつ。脚底部外面は未調整である。内面は体部上半と口縁部は回転ナデで仕

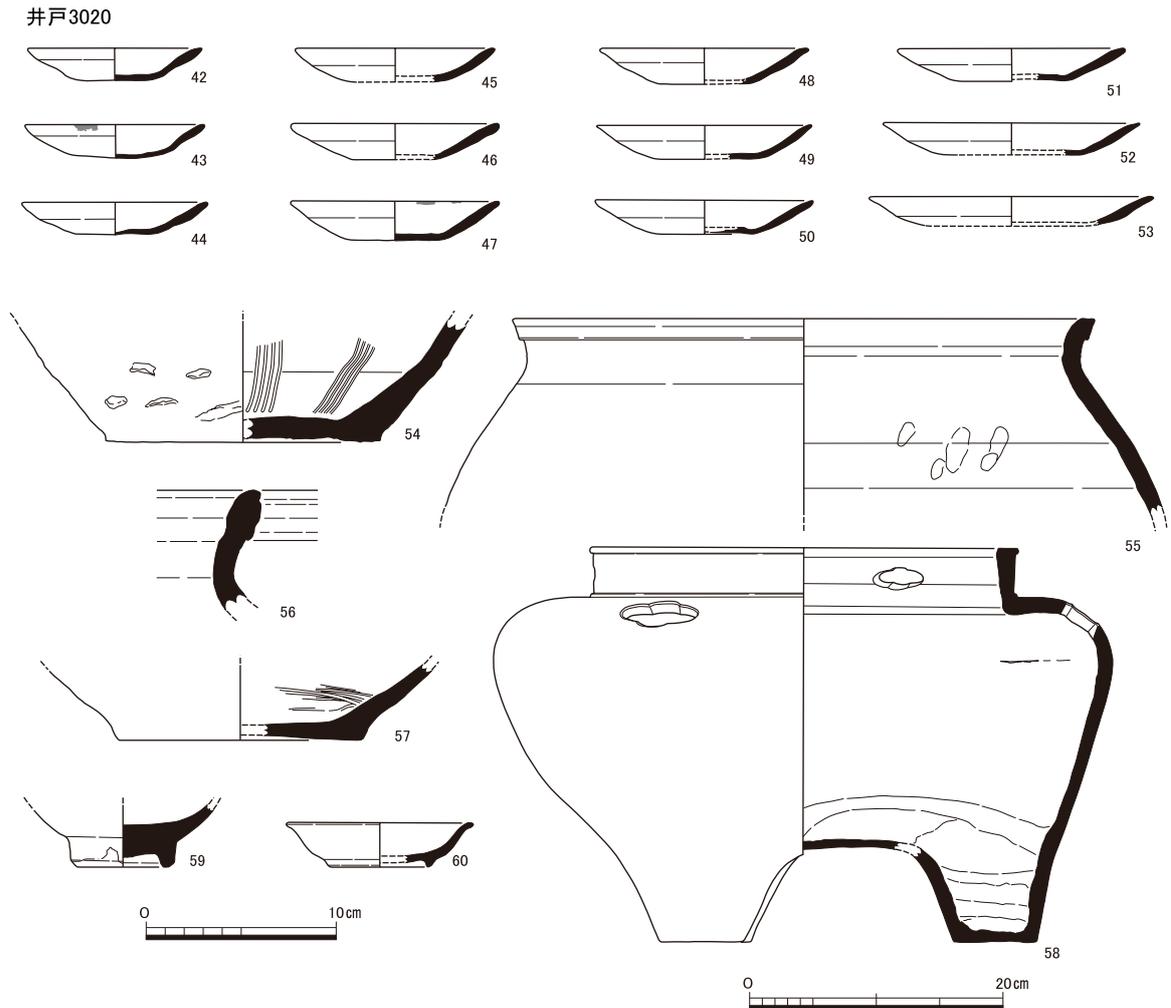


図63 出土土器類実測図2（1：4、55・58のみ1：6）

上げる。体部下半から脚部は弱いヨコナデで、粘土紐接合痕が明瞭に残る。全体的に二次焼成を受け、器表面の炭素が抜けて赤色化する（巻頭図版3-2）。59・60は輸入陶磁器で、59は中国龍泉窯系の青磁椀、60は白磁の皿である。

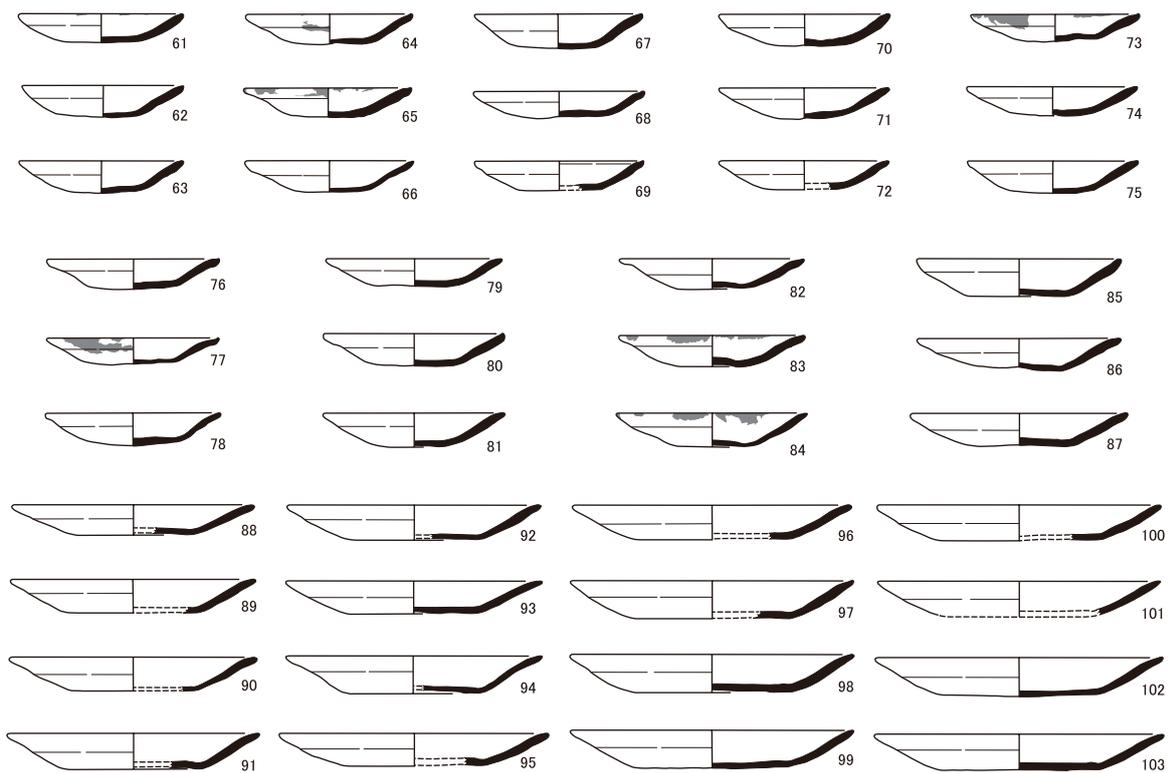
土坑3244（図64） 土師器皿、焼締陶器片、瓦質土器火鉢、輸入陶磁器白磁片・青磁片、平瓦、鉄釘、壁土、炭化材などが出土した。京都X期中段階に属する一群である。

61～103は土師器皿である。図化したものはすべて白色系であるが、赤色系皿も微量出土している。61～84は小型皿で、口径は8.4～10cmの間に分布する。灯明皿として使用されているものが多い。85～87は中型皿である。口径は10.4～11.4cmの間に分布する。88～103は大型皿で、口径は12.6～15cmの間に分布する。

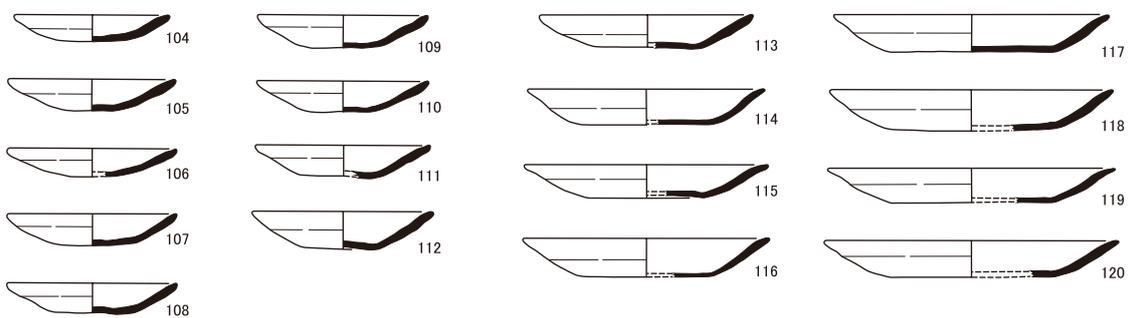
土坑3091（図64） 土師器皿、焼締陶器甕・播鉢、瓦質土器鍋、施釉陶器皿（黄瀬戸）、輸入陶磁器青花椀、鉄釘などが出土した。京都X期中段階に属する一群である。

104～120は白色系の土師器皿である。104～112は小型皿で、口径は8～9.4cmの間に分布する。113は中型皿である。口径は11.1cmある。114～120は大型皿で、口径は12.4～15.4cmの間に分布する。

土坑3244



土坑3091



土坑3144

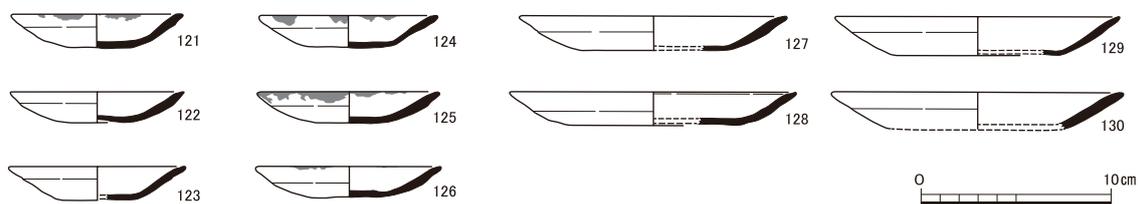


図64 出土土器類実測図3 (1:4)

土坑3144 (図64) 土師器皿、瓦質土器片、施釉陶器天目茶碗 (瀬戸美濃系)、輸入陶磁器青磁碗・白磁片、鉄釘、炭化材などが出土した。京都X期中段階に属する一群である。

121~130は白色系の土師器皿である。121~126は小型皿で、口径は8.9~9.6cmの間に分布する。灯明皿として使用されているものが多い。127~130は大型皿で、口径は13.9~15cmの間に分布する。

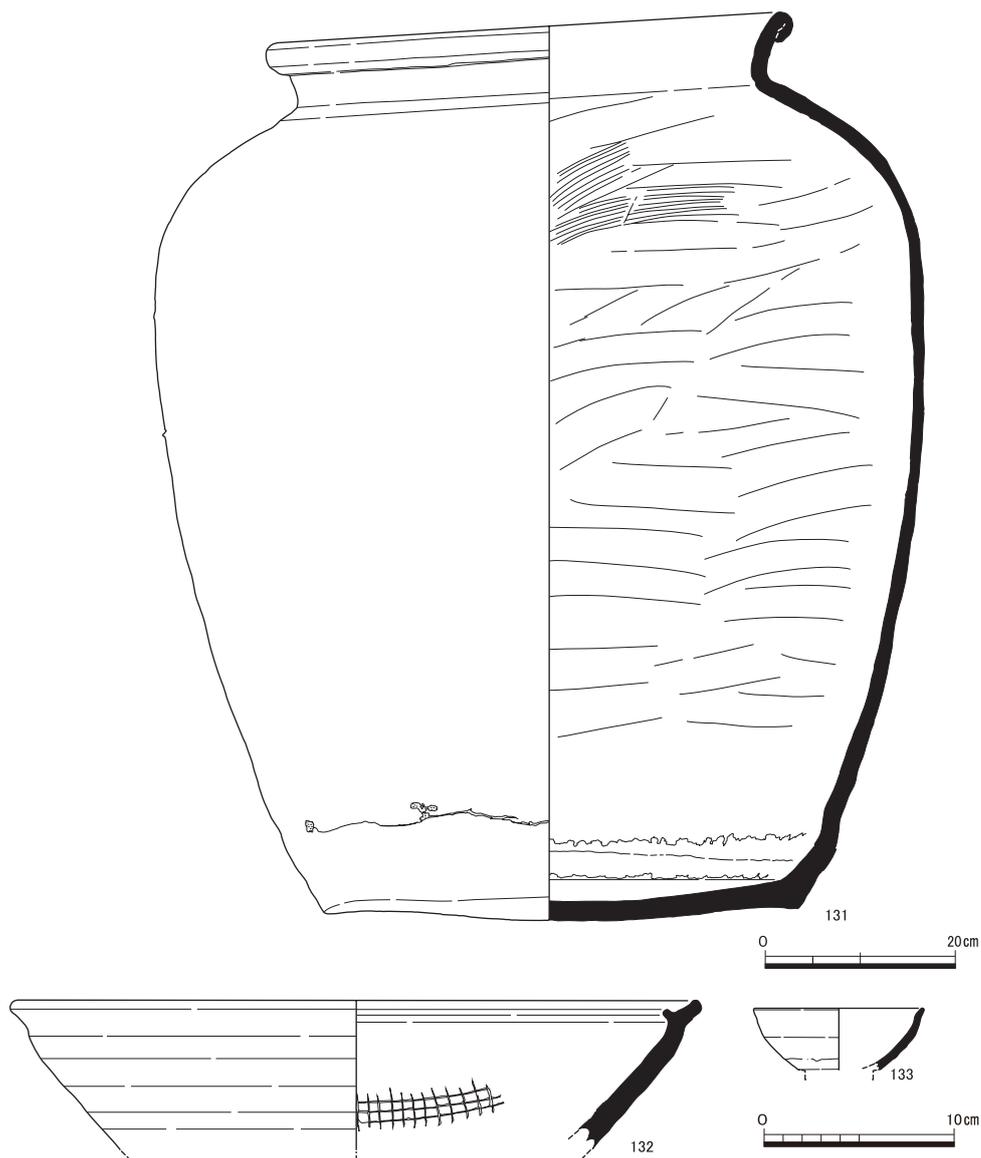


図65 出土土器類実測図4（1：4、131のみ1：8）

埋甕3083（図65、図版13） 131は焼締陶器の備前産大甕である。その埋土からは、土師器皿、焼締陶器甕、瓦質土器羽釜、施釉陶器卸目皿・天目茶椀、丸瓦、埴、鉄釘、壁土などが出土した。

131は備前焼の大甕である。口縁部から肩部にかけて緑色の自然釉が厚くかかる。底部から約10cm上の粘土紐接合部に一部ひびが入り、その部分に布を漆で貼って補強している（図版13-2・13-3）。132は施釉陶器の卸目鉢である。ロクロ成形で、内面下半は卸目を刻み、体部外面はヘラケズリする。卸目部分は無釉、体部内外面上半と口縁部は透明釉がかかる。口縁部内面にはカエリの凸帯が巡る。産地は不明。133は施釉陶器の天目茶椀である。二次焼成を受ける。

（2）瓦類（図66・67）

遺構や整地層中から整理箱にして5箱の瓦類が出土した。軒瓦・丸瓦・平瓦・埴・道具瓦がある。二次焼成を受けるものが多い。軒瓦は少なく、掲載した5点の出土にとどまる。また、石風呂

3130からは、ややまとまって瓦類が出土した。破片総数241点で、内訳は丸瓦49点、平瓦79点、塼45点、雁振瓦34点、不明34点である。塼が全体の約19%、雁振瓦が約14%を占め、道具瓦の出土割合が高いのが特徴である。

瓦1～瓦5は軒瓦である。瓦1は井戸3020下層から出土した。左方向に巻き込む巴文軒丸瓦である。外区には珠文がめぐる。丸瓦部凸面は縦方向ミガキを施す。瓦当には雲母が付着する。焼成は硬質で胎土は精良、色調は黄灰色を呈する。瓦2は井戸3080下層から出土した。左方向に巻き込む巴文軒丸瓦である。外区には珠文がめぐる。二次焼成を受ける。丸瓦部凸面は縦方向ナデ、凹面は粗いナデで布目が残る。焼成は硬質、胎土はやや粗く径1～5mmの石英・長石を多量含む。色調は外面橙色、断面は灰白色を呈する。瓦3は井戸3020下層から出土した。左方向に巻き込む巴文軒丸瓦である。外区には小さい珠文が密にめぐる。丸瓦部凸面、凹面ともにナデで仕上げる。焼成は硬質、胎土は精良で径1～5mmの石英・長石を少量含む。色調は外面灰色、断面は灰黄色を呈する。瓦4は井戸3080から出土した唐草文軒平瓦である。瓦当上面を面取りする。平瓦部凹面は縦方向ミガキ、顎部と瓦当裏面は横方向ナデ、平瓦部凸面は縦方向ナデで仕上げる。焼成は硬質、胎土は精良で径1～7mmの石英・長石を少量と黒色粒を多量含む。色調は外面灰色、断面は灰白色を呈する。瓦5は土坑3010から出土した唐草文軒平瓦である。二次焼成を受ける。平瓦部凹面は横方向ナデ、平瓦部凸面と瓦当裏面から顎部は不定方向のナデで仕上げる。焼成はやや軟質、胎土は精良である。色調は外面灰色、断面は灰白色を呈する。

瓦6は石風呂3130の前室掘り下げ中に出土した丸瓦である。大振りの丸瓦で両端を欠損するが破面が平行し、意図的に打ち欠いた可能性がある。凸面は縦方向のヘラミガキで仕上げ、凹面は布目に釣りの紐痕がつく。焼成は硬質、胎土は精良で径1～3mmの石英・長石を少量含む。色調は外面灰色、断面は灰黄色を呈する。瓦7は石風呂3130前室床面から出土した完形の平瓦である。二次焼成を受ける。長さ29.4cm、最大幅は23.1cmある。凹面両端は縦方向ナデ、中心部は不定方向ナデ、凸面は縦方向ナデで仕上げる。側面と端面はヘラ切りのちナデで、凹面側を面取りする。焼成は硬質、胎土は精良で径1～3mmのチャートを少量含む。色調は外面灰黄色、断面は灰白色を呈する。

瓦8～11は雁振瓦である。全て二次焼成を受ける。瓦8は井戸3020下層から出土した。凸面縦ヘラミガキ、凹面は粗いナデで布目とコビキ痕が残る。側面はヘラ切りのちナデで凹面側を面取りする。焼成は硬質、胎土はやや粗く径1～5mmの石英・長石を多量含む。色調は外面にぶい橙色、断面は灰白色を呈する。瓦9は井戸3020下層から出土した。凸面は縦方向ナデ、凹面は未調整で布目とコビキ痕が残る。側面はヘラ切りのちナデ。焼成は硬質、胎土は粗く径1～12mmの石英・長石を多量含む。色調は外面にぶい黄橙色、断面は灰白色を呈する。瓦10は井戸3020下層から出土した。凸面は縦方向ナデ、凹面は布目とコビキ痕が残る。側面はヘラ切りのちナデで凹面側を面取りする。焼成は硬質、胎土はやや粗く径1～3mmの石英・長石を多量含む。色調は外面褐灰色、断面は灰白色を呈する。瓦11は石風呂3130の蒸し風呂部から出土した。凸面は縄タタキのちナデ、凹面は粗いナデでコビキ痕が明瞭に残る。釣りの紐痕も認められる。焼成は硬質、胎土はやや粗く径1～3mmの石英・長石を中量含む。色調は黄灰色を呈する。

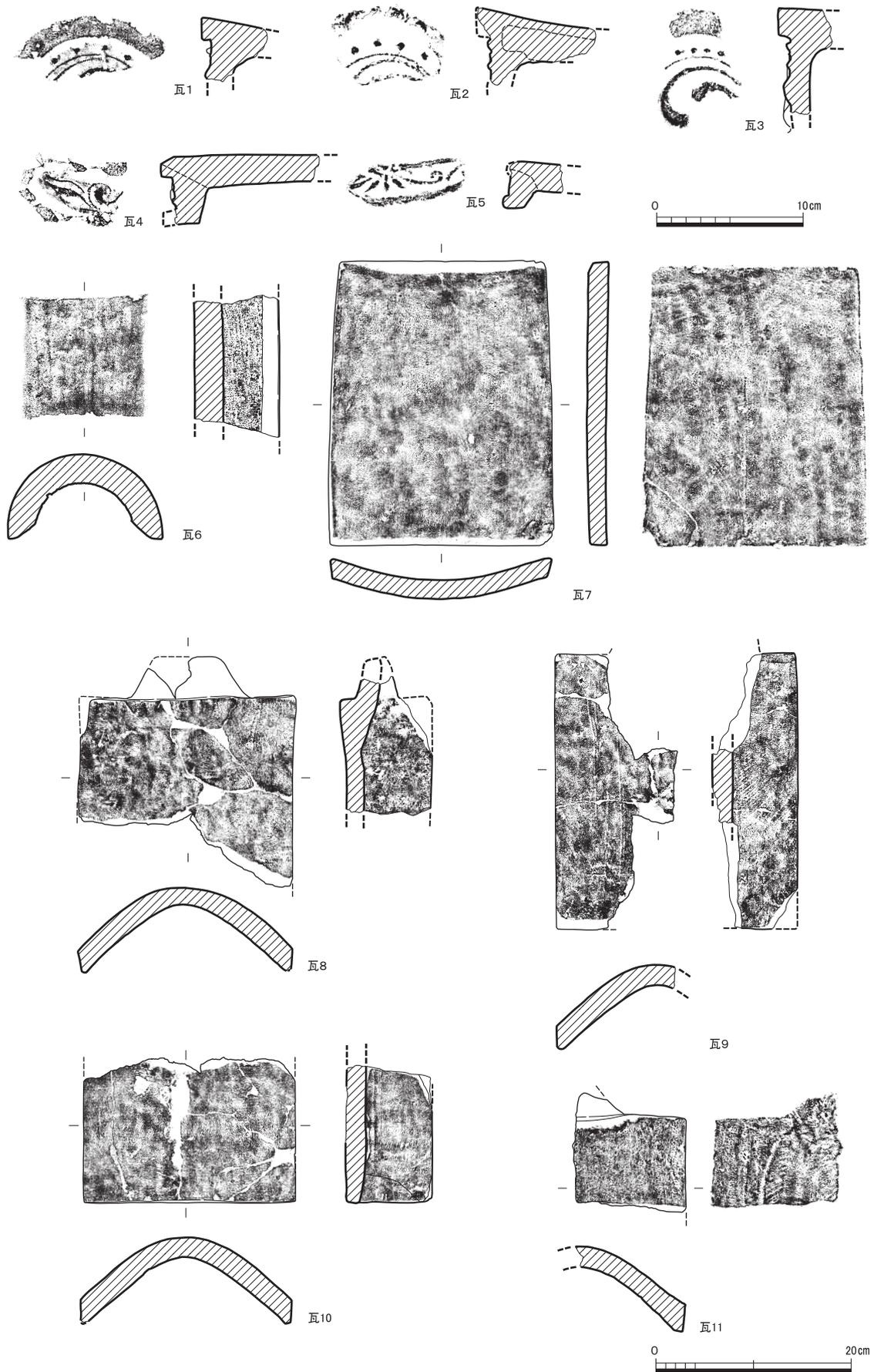


图66 瓦類拓影・実測図1 (瓦1~5は1:4、瓦6~11は1:6)

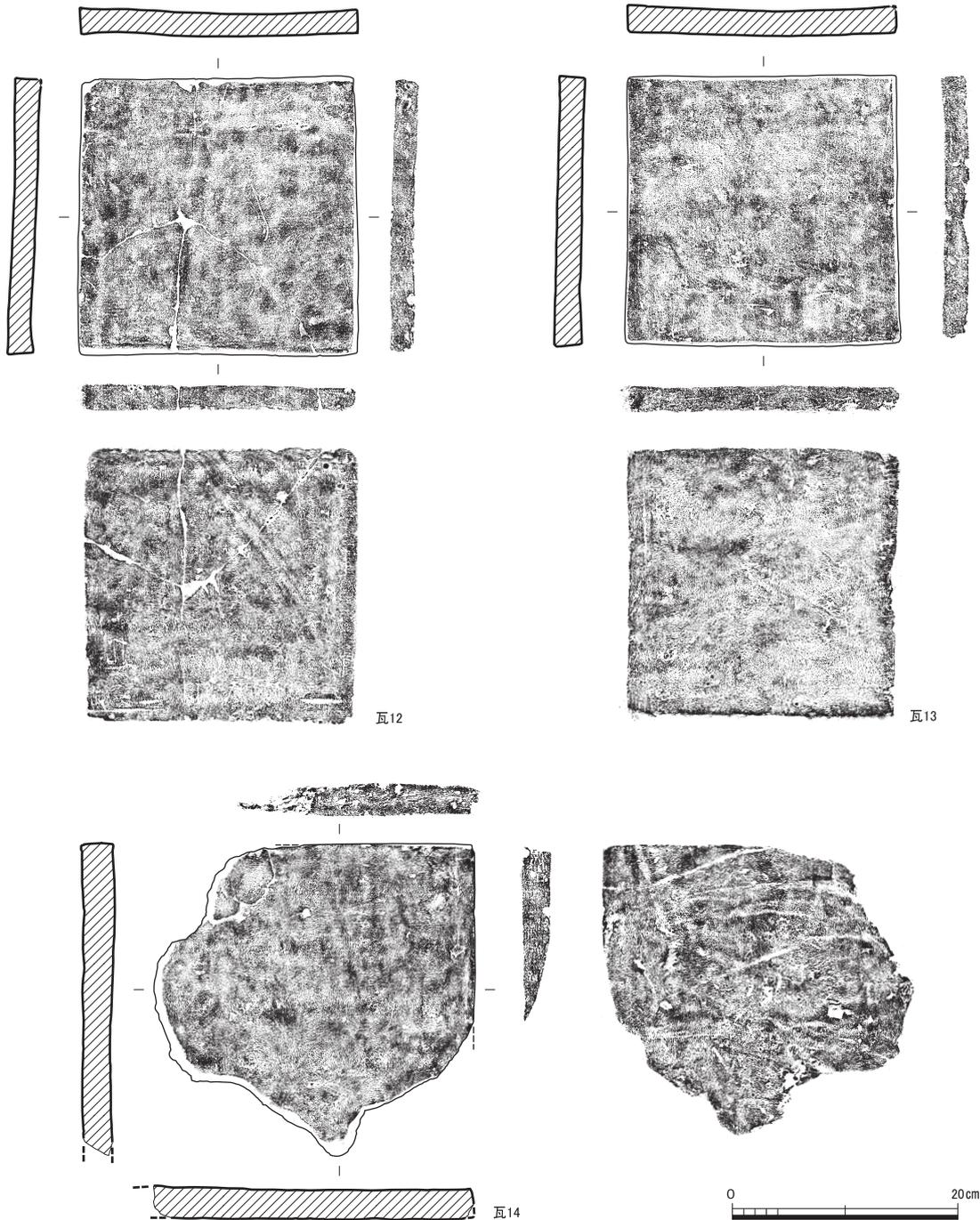


図67 瓦類拓影・実測図2 (1:6)

瓦12～14は磚である。いずれも埋甕3083の埋土から出土した。瓦12は完形品である。一辺の長さは24.9～25cmでほぼ正方形、厚さは最大で2.3cmある。表面は丁寧なナデ、裏面は粗い板ナデ、側面は横方向ナデで仕上げる。焼成は硬質、胎土は精良で径1～3mmのチャートを少量含む。色調は黄灰色を呈する。瓦13も完形品である。一辺の長さは24.2～24.5cmでほぼ正方形、厚さは最大で2.5cmある。表面側にわずかに凸状に隆起する。表面は不定方向のナデ、裏面は粗いナデで仕上げる。側面もナデを加える。焼成は硬質、胎土は精良で径1～5mmのチャートを少量含む。色調は灰色を呈する。瓦14は欠損するが、残存長が28.4cmあり、瓦12・13と比較して一回り大きい磚であ

る。厚さも最大で約2.8cmあり、瓦12・13より厚い。二次焼成を受け、表面の摩滅が著しいが、表面は不定方向ナデに一部板ナデと思われる痕跡が認められる。裏面は粗いナデで布目が残る。裏面に布目が残る、断面で粘土ブロックの単位が観察できたことから型作りと考えられる。側面も粗いナデを施す。焼成は硬質、胎土は精良である。色調は浅黄橙色を呈する。

(3) 金属製品 (図68、表11)

調査では総数にして約60本の鉄釘が出土した。特に石風呂3130からは27本とまとまって出土した。うち9本が蒸し風呂部、10本が前室、8本が全体掘り下げ中に出土している。残存状況の良好なものについて図を掲載した。すべて断面形は方形で、上端を折り曲げて釘の頭とするものである。出土遺構、長さ、重量は表11にまとめた。

表11 鉄釘計測表

番号	遺構名	長さ(cm)	重量(g)
金1	井戸3020	6.2	11.32
金2	井戸3020	5.9	5.1
金3	井戸3020	5.7	6.64
金4	井戸3020	4.7	4.12
金5	井戸3020	(4.3)	3.35
金6	井戸3020	(1.8)	0.9
金7	石風呂3130	(6.6)	0.31
金8	石風呂3130	(5.9)	0.24
金9	石風呂3130	(5.3)	10.52
金10	石風呂3130	5.7	1.55
金11	石風呂3130	4.4	6.54
金12	石風呂3130	4.8	6.19
金13	石風呂3130	(3.4)	1.16
金14	石風呂3130	3.3	6.03
金15	石風呂3130	(3.2)	7.98
金16	石風呂3130	3.0	1.93
金17	石風呂3130	2.6	2.66
金18	石風呂3130	(1.6)	3.42
金19	竈3100	(4.3)	1.65

※ 長さの () は残存長

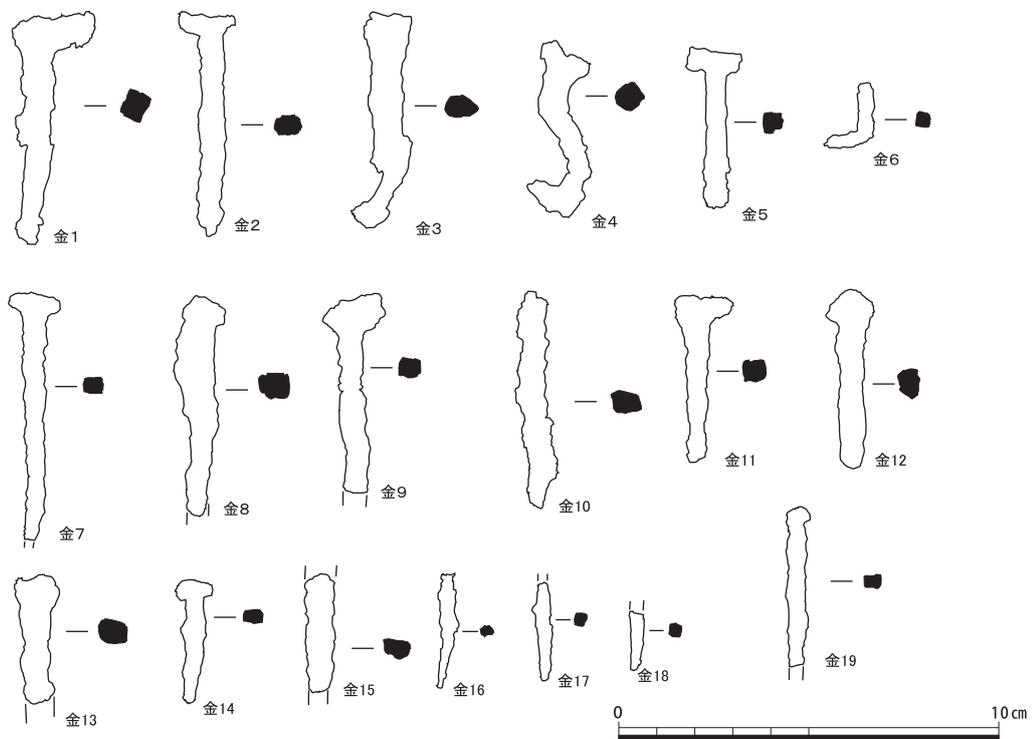


図68 鉄釘実測図 (1:2)

(4) 石製品・石材 (図69)

石1は石風呂3130の蒸し風呂部掘り下げ中に出土した。両面が剥離するが、平面船形で断面三角形の溝が彫られており、硯と考えられる。石材は暗灰色のきめの細かい粘板岩系である。石2は井戸3080から出土した。花崗岩の一边を平らにし、その上面を窪ませ、断面形は凹形となる。用途は不明。火を受けて赤変する。石3は井戸3080の掘削底から出土した砂岩製の茶白の受皿部である。外面には加工時の鑿の痕跡が明瞭に残る。火を受けて一部赤変する。石4は石風呂3130の蒸し風呂部掘り下げ中に出土した。花崗岩製の墓石で上方を欠損するが、残存長38.5cm、幅27.2cm、厚さ13.5cmある。右下部に生前供養を示す「逆修」、中央に「妙法蓮華教」、左下部に名「妙〇」が陰刻され、中央下部に蓮華座が陽刻される。石5は石風呂3130蒸し風呂部掘り下げ中に出土した。花崗岩の石材で残存長29.9cm、残存幅17.3cmある。上方に断面方形のほぞが付き、他の部材と組み合わせる石塔などの一部分と考えられる。

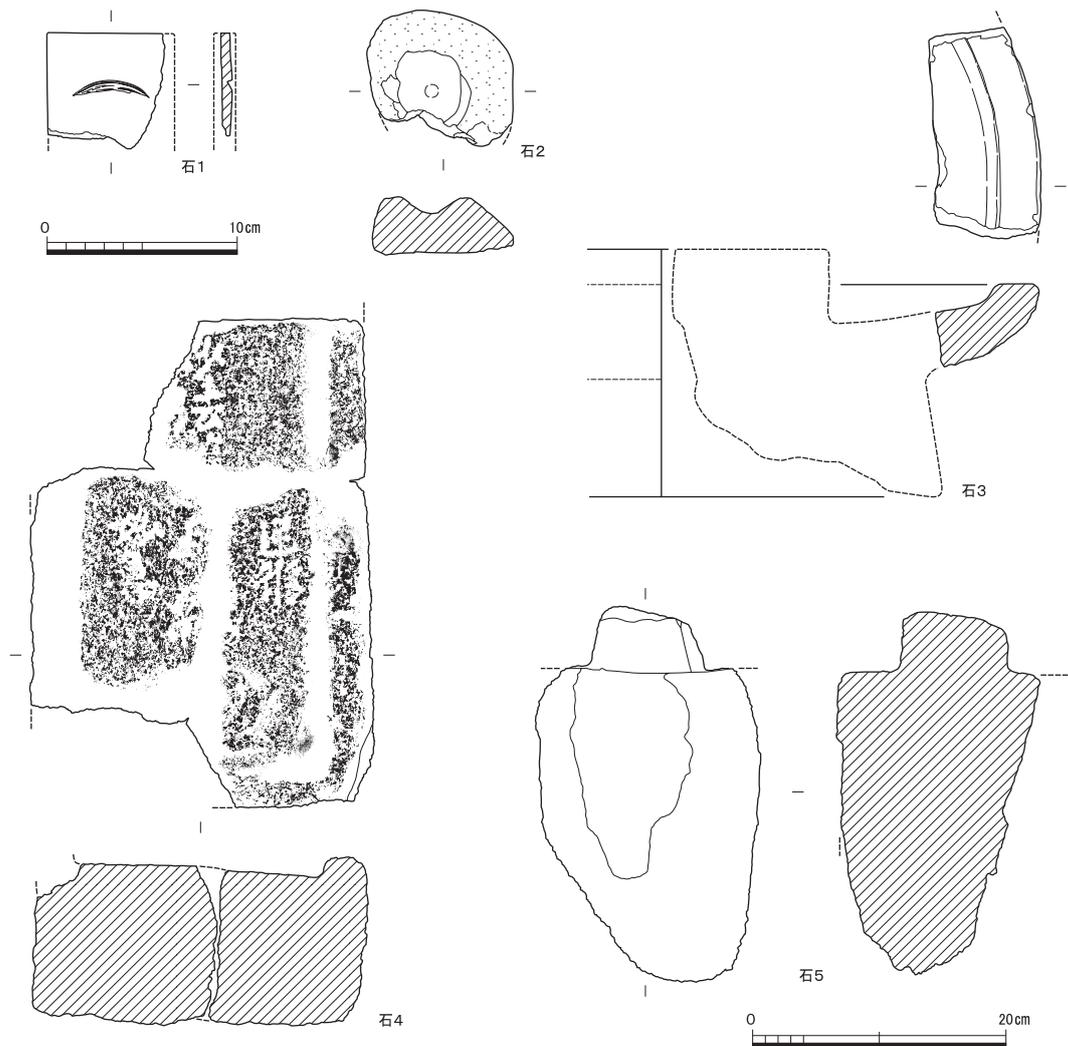


図69 石製品・石材実測図 (石1～3は1:4、石4・5は1:6)

(5) その他の遺物

調査中に各遺構から壁土、炭化米が出土した。

壁土は井戸3020・3080、溝3043・3089、埋甕3083、竈3100、石風呂3130などから出土した。特に井戸3020からは整理コンテナにして2箱分がまとまって出土した(巻頭図版3-2)。すべて二次焼成を受けた破片であるが、一辺が20cmを超える破片もある。出土した壁土はすべてスサと径1~15mmの石を多量に含む荒土で、表面は斑直しで平滑に仕上げられる。平滑面が2面残る破片も認められる。平滑面が表裏2面のものと、直角あるいは鋭角に連続する2面のものがある。表裏2面のものは厚さが3cm、3.8cm、4.5cm、9cmである。連続する2面のものは、壁の隅部分、もしくは2面のうち1面が部材の当たりと考えられる。いずれにも化粧土や中塗りは認められない。木舞の痕跡も明瞭に確認できたものはない。

炭化米は井戸3020・3080、溝3043・3089、石風呂3130、土坑3230などから出土した。特に井戸3020からはまとまって出土している(巻頭図版3-2)。径1~6cm程度のかたまりで出土した。籾殻がついた状態の籾米である(図70-1)。籾粒の向きは一定方向ではない(図70-2・3)。また、藁状の繊維が付着しているものがある(図70-4)ことなどから、脱穀後、米俵に詰められていたものである可能性が高い。

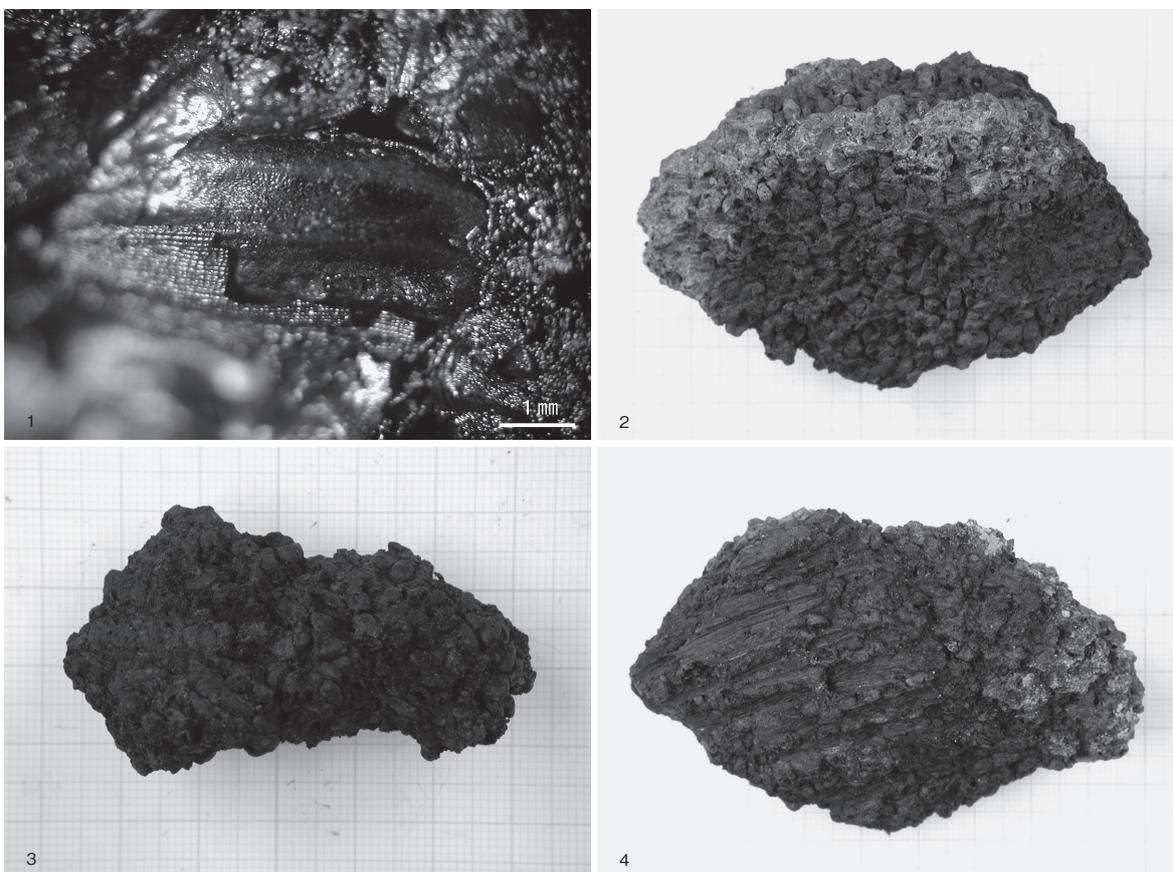


図70 炭化米

表12 遺物一覧表

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
1	土師器	皿・大	石風呂3130	(12.4)	1.9		25	10YR5/1褐灰色	
2	土師器	皿・大	石風呂3130	(12.6)	2.0		10	7.5YR7/3にぶい橙色	
3	土師器	皿・大	石風呂3130	(12.9)			25	10YR8/3浅黄橙色	
4	焼締陶器	壺	石風呂3130	(9.6)	(4.0)		口縁20	外面5YR3/2~3/3赤褐色 内面2.5Y4/2灰赤色 断面10YR5/1褐灰色+2.5YR5/2灰赤色	備前
5	焼締陶器	壺	石風呂3130	14.5	(4.2)		10	外面5YR5/4にぶい赤褐色 内面5YR5/2灰褐色 口縁部2.5YR3/5暗赤褐色 断面10YR8/1灰白色 φ1~4mmの石英・長砂・黒色砂粒中量含む	信楽
6	焼締陶器	甕	石風呂3130				口縁破片	2.5Y8/4淡黄色 断面2.5Y8/2灰白色	信楽
7	焼締陶器	播鉢	石風呂3130	(35.7)			20		信楽 播目4条1単位
8	輸入青花	皿	石風呂3130	(14.5)	2.8		15		
9	輸入白磁	皿	石風呂3130	(17.6)	(2.4)		10		
10	土師器	皿・小	竈3100	(9.0)	1.6		45	10YR8/3浅黄橙色	
11	土師器	皿・大	竈3100	(14.4)	2.2		20	10YR7/2にぶい黄橙色	
12	土師器	皿・大	竈3100	(15.9)	2.3		15	外面10YR8/3浅黄橙色 内面10YR8/2灰白色+10YR5/1褐灰色	
13	施釉陶器	天目椀	竈3100	(12.4)	(3.7)		15	釉7.5YR3/1黒褐色 7.5YR4/3褐色 断面10YR8/2灰白色	美濃
14	焼締陶器	甕	井戸3080		(4.6)		口縁小片	外面7.5YR6/6橙色 内面7.5YR7/6褐色 断面10YR8/4浅黄橙色	信楽
15	焼締陶器	甕	井戸3080		(8.1)		口縁小片	外面2.5Y5/1黄灰色 内面5YR4/2灰褐色 断面2.5YR4/2灰赤色	備前
16	輸入青花	皿	井戸3080		(1.1)	(4.1)	底部40		
17	輸入五彩	皿か	井戸3080				5		
18	輸入三彩	鉢か	井戸3080		(1.5)	(7.6)	底部小片		底面に墨描あり
19	輸入青磁	盤	井戸3080	(24.0)	4.9	(15.4)	20		
20	土師器	皿・小	溝3089	(8.6)	1.7		30	10YR8/4浅黄橙色	
21	土師器	皿・小	溝3089	(9.6)	2.0		30	10YR8/3浅黄橙色	
22	土師器	皿・小	溝3089	8.9	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	
23	土師器	皿・小	溝3089	8.9	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	
24	土師器	皿・小	溝3089	9.0	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	
25	土師器	皿・中	溝3089	(10.8)	2.0		55	10YR8/3浅黄橙色	
26	土師器	皿・中	溝3089	10.9	1.9		100	10YR灰白色	
27	土師器	皿・中	溝3089	10.9	2.0		100	10YR8/2灰白色	灯明皿
28	土師器	皿・中	溝3089	(10.9)	2.1		30	10YR8/2灰白色	灯明皿
29	土師器	皿・中	溝3089	(11.0)	1.8		20	10YR8/2灰白色	灯明皿
30	土師器	皿・大	溝3089	(12.8)	1.9		20	10YR5/1褐灰色	
31	土師器	皿・大	溝3089	(13.0)	1.8		25	10YR8/3浅黄橙色	
32	土師器	皿・大	溝3089	(14.8)	1.8		20	10YR7/4にぶい黄橙色	
33	土師器	皿・大	溝3089	(15.0)	2.0		25	10YR8/3浅黄橙色	
34	焼締陶器	播鉢	溝3089	(36.2)			30	10YR8/6黄橙色 φ1~3mmの石英・長石多量含む	信楽
35	土師器	皿・へそ	溝3087	(6.8)	1.4		25	10YR8/2灰白色	
36	土師器	皿・小	溝3087	(8.5)	1.6		40	10YR8/4浅黄橙色	灯明皿
37	土師器	皿・中	溝3087	10.8	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色 底部内・外面10YR5/1褐灰色	灯明皿
38	土師器	皿・中	溝3087	(11.3)	1.8		25	10YR8/3浅黄橙色	
39	土師器	皿・大	溝3087	(15.4)	1.8		20	10YR8/3浅黄橙色	
40	土師器	皿・大	溝3087	(15.4)	1.9		20	10YR8/3浅黄橙色	
41	輸入青磁	皿	溝3043	(9.6)	2.2		20		内面蓮弁文
42	土師器	皿・小	井戸3020	(9.2)	1.7		45	10YR5/2灰黄褐色	
43	土師器	皿・小	井戸3020	9.3	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
44	土師器	皿・小	井戸3020	(9.7)	1.7		40	10YR5/1褐灰色	
45	土師器	皿・中	井戸3020	(10.2)	1.8		20	10YR8/2灰白色	
46	土師器	皿・中	井戸3020	(10.7)	1.9		20	10YR4/1+10YR5/1褐灰色	2次焼成
47	土師器	皿・中	井戸3020	(10.7)	2.1		25	10YR8/4浅黄橙色	灯明皿
48	土師器	皿・中	井戸3020	(10.8)	1.9		25	7.5YR4/1褐灰色	灯明皿
49	土師器	皿・中	井戸3020	(11.2)	1.8		80	10YR8/2灰白色+10YR3/1黒褐色	2次焼成
50	土師器	皿・中	井戸3020	(11.4)	1.8		45	2.5YR6/6橙色	2次焼成
51	土師器	皿・中	井戸3020	11.0	1.7		20	10YR8/3浅黄橙色	
52	土師器	皿・大	井戸3020	(13.4)	1.7		20	10YR7/3にぶい黄橙色	
53	土師器	皿・大	井戸3020	(14.5)	1.6		20	10YR8/3浅黄橙色	
54	焼締陶器	播鉢	井戸3020		(6.1)	14.4	底部30	10YR7/3にぶい黄橙色 底面7.5YR6/4にぶい橙色 断面2.5YR8/1~8/2灰白色 φ1~5mmの石英・長石多量含む	信楽 播目4条1単位
55	焼締陶器	甕	井戸3020	44.0	(15.0)		口縁20	2.5YR8/3淡黄色	信楽
56	焼締陶器	甕	井戸3020		(6.3)		口縁10	外面7.5YR7/6橙色 内面10YR7/6明黄橙色 φ1~5mmの石英・長石多量含む	信楽
57	瓦質土器	捏鉢	井戸3020		(3.7)	(12.6)	底部20	外面10YR5/1褐灰色 内面N4/灰色 断面10YR8/2灰白色	2次焼成
58	瓦質土器	風炉	井戸3020	33.7	31.5		50	10YR8/6黄橙色 5YR6/6橙色 10YR5/2灰黄褐色	2次焼成
59	輸入青磁	椀	井戸3020	(9.6)	(4.0)	(4.8)	20		
60	輸入白磁	皿・小	井戸3020	(9.6)	2.4	(5.2)	35		全面施釉
61	土師器	皿・小	土坑3244	(8.4)	1.6		25	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
62	土師器	皿・小	土坑3244	(8.5)	1.8		60	10YR8/2灰白色	
63	土師器	皿・小	土坑3244	8.5	1.7		100	10YR8/3浅黄橙色	
64	土師器	皿・小	土坑3244	(8.6)	1.6		95	10YR8/3浅黄橙色	
65	土師器	皿・小	土坑3244	8.7	1.6		100	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
66	土師器	皿・小	土坑3244	(8.8)	1.7		70	10YR8/3浅黄橙色	
67	土師器	皿・小	土坑3244		1.9		100	10YR8/3浅黄橙色	
68	土師器	皿・小	土坑3244	8.8	1.5		100	7.5YR8/3浅黄橙色	
69	土師器	皿・小	土坑3244	(8.8)	1.6		40	10YR5/1褐灰色	
70	土師器	皿・小	土坑3244	(8.8)	1.7		60	10YR8/3浅黄橙色	
71	土師器	皿・小	土坑3244	(8.8)	1.7		80	10YR8/3浅黄橙色	
72	土師器	皿・小	土坑3244	(8.8)	1.5		50	10YR8/3浅黄橙色 N5/灰色	
73	土師器	皿・小	土坑3244	8.8	1.5		100	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
74	土師器	皿・小	土坑3244	8.9	1.6		100	10YR8/3浅黄橙色	
75	土師器	皿・小	土坑3244	(8.9)	1.7		60	10YR8/3浅黄橙色	
76	土師器	皿・小	土坑3244	9.0	1.6		100	10YR8/2灰白色	
77	土師器	皿・小	土坑3244	(9.0)	1.4		95	10YR5/1褐灰色	灯明皿
78	土師器	皿・小	土坑3244	(9.1)	1.7		95	7.5YR8/3浅黄橙色	
79	土師器	皿・小	土坑3244	(9.2)	1.5		70	10YR8/3浅黄橙色	
80	土師器	皿・小	土坑3244	(9.4)	1.8		70	10YR8/3浅黄橙色	
81	土師器	皿・小	土坑3244	(9.4)	1.8		45	10YR8/4浅黄橙色	
82	土師器	皿・小	土坑3244	(9.7)	1.6		90	10YR8/2灰白色	
83	土師器	皿・小	土坑3244	9.7	1.7		100	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
84	土師器	皿・小	土坑3244	(10.0)	1.8		50	10YR5/1褐灰色	灯明皿
85	土師器	皿・中	土坑3244	(10.4)	2.0		40	10YR8/3浅黄橙色	
86	土師器	皿・中	土坑3244	10.6	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	
87	土師器	皿・中	土坑3244	(11.4)	1.8		60	10YR8/3浅黄橙色	
88	土師器	皿・大	土坑3244	(12.6)	1.6		25	10YR6/1褐灰色	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存 (%)	色調胎土	備考
89	土師器	皿・大	土坑3244	(12.7)	1.8		25	10YR8/3浅黄橙色	
90	土師器	皿・大	土坑3244	(12.8)	1.8		30	10YR8/3浅黄橙色	
91	土師器	皿・大	土坑3244	(12.9)	1.9		40	10YR8/3浅黄橙色	
92	土師器	皿・大	土坑3244	(13.2)	1.8		40	10YR8/3浅黄橙色	
93	土師器	皿・大	土坑3244	13.3	1.8		100	7.5YR8/3浅黄橙色	
94	土師器	皿・大	土坑3244	(13.5)	2.0		50	10YR8/3浅黄橙色	
95	土師器	皿・大	土坑3244	(14.0)	1.7		20	10YR8/3浅黄橙色	
96	土師器	皿・大	土坑3244	(14.5)	1.8		20	10YR8/3浅黄橙色	
97	土師器	皿・大	土坑3244	(14.7)	2.0		25	10YR8/3浅黄橙色	
98	土師器	皿・大	土坑3244	(14.8)	2.0		50	10YR8/3浅黄橙色	
99	土師器	皿・大	土坑3244	(14.8)	2.0		75	10YR8/3浅黄橙色	
100	土師器	皿・大	土坑3244	(14.8)	1.9		25	10YR8/3浅黄橙色	
101	土師器	皿・大	土坑3244	(14.8)	1.9		35	10YR8/3浅黄橙色	
102	土師器	皿・大	土坑3244	(14.9)	2.1		45	10YR8/3浅黄橙色	
103	土師器	皿・大	土坑3244	(15.0)	1.9		30	10YR8/3浅黄橙色 N4/灰色	
104	土師器	皿・小	土坑3091	(8.0)	1.5		40	10YR8/4浅黄橙色	
105	土師器	皿・小	土坑3091	(8.6)	1.7		40	10YR8/3浅黄橙色	
106	土師器	皿・小	土坑3091	(8.7)	1.5		40	10YR8/4浅黄橙色	
107	土師器	皿・小	土坑3091	8.8	1.7		100	10YR8/3浅黄橙色 内面N4/灰色+7.5YR7/6橙色	
108	土師器	皿・小	土坑3091	(8.8)	1.6		75	10YR8/4浅黄橙色 10YR4/1褐色	灯明皿
109	土師器	皿・小	土坑3091	(8.9)	1.8		80	10YR8/3浅黄橙色	
110	土師器	皿・小	土坑3091	(9.0)	1.7		90	10YR8/3浅黄橙色	
111	土師器	皿・小	土坑3091	(9.1)	1.8		75	10YR8/3浅黄橙色	
112	土師器	皿・小	土坑3091	(9.4)	2.1		60	10YR8/4浅黄橙色	
113	土師器	皿・中	土坑3091	(11.1)	1.8		90	10YR8/3浅黄橙色 N5/灰色	
114	土師器	皿・大	土坑3091	(12.4)	1.9		30	10YR8/3浅黄橙色	
115	土師器	皿・大	土坑3091	(12.7)	1.8		25	10YR8/3浅黄橙色	
116	土師器	皿・大	土坑3091	(12.9)	1.9		45	10YR8/3浅黄橙色	
117	土師器	皿・大	土坑3091	(14.3)	2.0		25	10YR8/3浅黄橙色	
118	土師器	皿・大	土坑3091	(14.6)	2.2		25	10YR8/3浅黄橙色	
119	土師器	皿・大	土坑3091	(15.0)	1.8		25	10YR8/3浅黄橙色	
120	土師器	皿・大	土坑3091	(15.4)	1.9		40	10YR8/2灰白色	
121	土師器	皿・小	土坑3144	8.9	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	
122	土師器	皿・小	土坑3144	(9.0)	1.6		30	10YR8/3浅黄橙色	
123	土師器	皿・小	土坑3144	(9.1)	1.8		30	10YR8/3浅黄橙色	
124	土師器	皿・小	土坑3144	9.3	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色	
125	土師器	皿・小	土坑3144	(9.4)	1.7		55	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
126	土師器	皿・小	土坑3144	(9.6)	1.7		70	10YR8/3浅黄橙色	灯明皿
127	土師器	皿・大	土坑3144	(13.9)	1.8		25	10YR8/4浅黄橙色	
128	土師器	皿・大	土坑3144	(14.9)	1.5		30	2.5Y5/1黄灰色 10YR8/3浅黄橙色	
129	土師器	皿・大	土坑3144	(14.9)	2.1		30	10YR8/3浅黄橙色	
130	土師器	皿・大	土坑3144	(15.0)	2.0		25	10YR8/3浅黄橙色	
131	焼締陶器	甕	埋甕3083	(52.7)	96.4	49.4	70	5YR4/2灰褐色 内面10YR6/3にぶい黄橙色 φ1~15mmのチャート少量含む	備前
132	施釉陶器	卸目皿	埋甕3083	35.7	(7.9)		10	7.5YR4/2灰褐色 断面10YR7/4にぶい黄橙色	
133	施釉陶器	椀	埋甕3083	(8.9)	(3.8)		25	断面2.5Y6/1黄灰色	天目 美濃

5. まとめ

(1) 遺構の変遷とその性格

今調査では、山科本願寺に関わる多数の遺構を検出した。北半では、整地土を周囲より一段高く盛り上げた高まりを検出した。高まり上では石組みの井戸3020が見つかった。「御本寺」中心部で井戸が検出されたのは初めてであり、その立地に注目すると、高まり上面の標高は41.6～41.8mで、周辺調査で検出された整地面の中では最も標高が高い場所に位置する井戸となる。元来が高燥な扇状地上にさらに整地土を厚く積んでいる場所であり、地下水位は低いと考えられ、今回の調査でも井戸底を検出できていない。そうした場所にあえて井戸を開削していることから付近に水を必要とする施設が存在したと考えられる。井戸の周囲には柱穴や礎石状の石が散見され、建物が建っていた痕跡が認められた。建物の性格については、この井戸3020から多量の炭化米が出土していることを合わせると、炊事に関わる施設であった可能性が高い。また、井戸3020からは厚みのある焼けた壁土や米俵に入っていたと考えられる炭化した米のかたまりが多量に出土している。同じ高まり上で検出した南北方向の溝3043からも炭化米が比較的まとまって出土しており、炊事施設とともに米などを貯蔵した土蔵の存在も想定される。溝3043は、これより西では遺構が希薄となり、2区で検出した土塁裾までの距離が約10mであることから見て、井戸周辺に展開する建物群の西を限る区画溝と考えられる。

南半では、建物2、石風呂3130、竈3100、井戸3080などからなる風呂関連遺構群が見つかった。この遺構群については次節で詳述する。その東では南北方向の塀状遺構が見つかった。これは風呂関連遺構群を遮蔽する施設と考えられる。そのさらに東では溝3089を検出した。これは17次調査で検出した石組溝群のうちの溝2087の延長部分であるが、今回の調査部分は大抵が石組みではなく板で護岸したものである。水流堆積があり、排水を兼ねた区画溝と考えられる。南半北側では東西方向の溝3087を検出した。風呂関連遺構群や溝3089に削平される。今調査で検出した主要遺構は、ほとんどが埋土に焼土が混じり、焼き討ち時まで存続していたものと考えられるが、この溝3087だけが重複関係や埋土の状況からみて、一段階古い時期のものと考えられる。これらのことから、16～18次で検出した主要遺構の変遷を以下にまとめる。なお、遺構は完掘していないため構築時期ではなく廃絶時期による変遷である。

古：土坑2157（土取り穴）

中：石組溝群中層・下層、溝2148、溝3087

新：溝1119、通路状遺構、石組溝群上層、溝2143、井戸3020、溝3043、風呂関連遺構群、
塀状遺構、溝3089、土塁

新段階の遺構は、埋土に焼土が混じり、焼き討ち後に埋まったものと考えられる。古段階の土坑

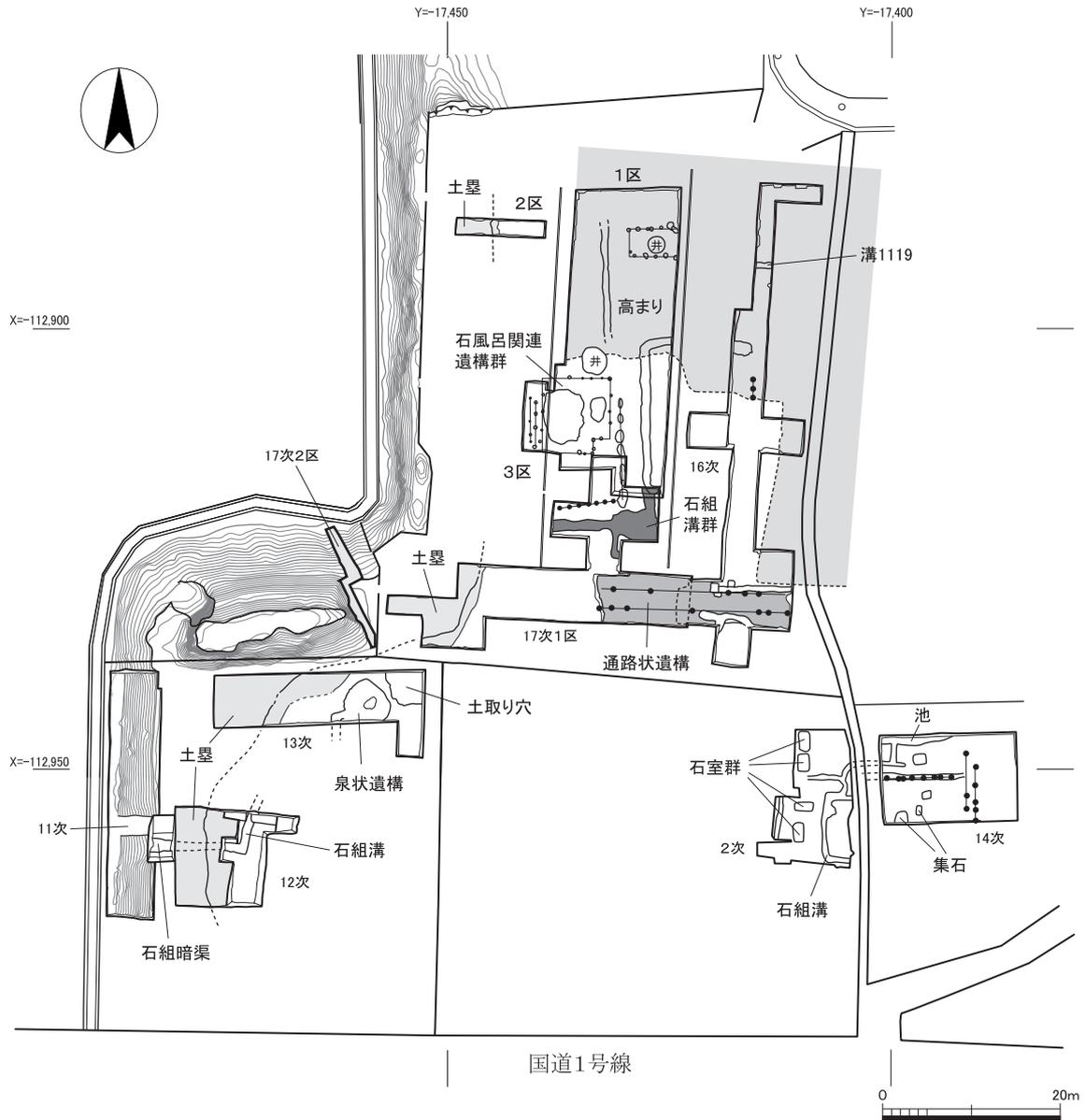


図71 周辺遺構分布図（1：800）

2157は土塁構築土の下で検出した遺構であるが、出土遺物は15世紀末～16世紀初頭に位置づけられるものであり、山科本願寺の創建まで遡る確実な遺構は検出できていない。これらの遺構群の性格については、昨年度の報告で周辺調査の成果を加えて検討を行った⁸⁾。その概要を以下に述べる。

12・13次調査では泉状遺構や石組溝からなる庭が見つかった。2・14次調査では石室群、石組溝・石敷き・池からなる庭園遺構、多量の輸入陶磁器や漆芸品が出土した饗応施設と考えられる建物跡、16・17次調査では通路状遺構や石組溝群で構成される坪庭状遺構などが見つかり、約200m四方の範囲に小規模な建物や複数の庭が近接して作られていたことが判明した（図71）。この状況を安永九年（1780）製作の『都名所図会』に描かれた西本願寺の建物との比較、また山科本願寺に関わる史料に記された「御本寺」内にあった「阿弥陀堂」「御影堂」以外の「寝殿」「御亭」「常屋」「向所」「馬屋」などの施設との対比から、見つかった遺構群は宗主一族の居住施設および

寺の実務施設で、一般門徒には開放されない私的な空間に建てられた建物とそれに付随する庭であると考えた。その観点で見ると今回の18次調査で見つかった炊事施設や風呂もやはり奥向きの施設であり、この考えを裏付ける成果であると言えよう。今回の一連の調査では山科本願寺の中枢部の施設を多数発見できたことに加え、これらの施設群の東に位置したと考えられる「阿弥陀堂」と「御影堂」の位置がほぼ推定可能になったことが非常に大きな成果となった。

(2) 風呂関連遺構群について

今調査では先述したように、1区南半と3区で建物、竈、石風呂、土間、井戸などからなる風呂関連遺構群を検出した。

石風呂3130は北半と南半で石材の使い分けが行われ、南半の花崗岩と床面のみが二次的に強く火を受けていた。また、南半のみ粘土と径20～40cmの石を混ぜたブロック土が床面上に堆積することから、南半には粘土と石で固めたドーム状の天井が架かり、その中で火を燃やしたと考えられた。同様の構造のものとしては炭窯などがあるが、今回の場合、近接して井戸と竈が見つかり、水と湯を必要とする施設と考えられることから、ドーム状の部分で熱気浴を行う石風呂と判断した⁹⁾。石風呂の発掘調査での検出例は無いが、現存する類似の遺構としては、京都市の「八瀬かまぶろ」がある。成立は白鳳時代にまで遡るとの伝説もあるが、瀬戸内海沿岸を中心に分布する中世の石風呂の系譜を引くものとされ¹⁰⁾、現在は復元されたものが京都市登録有形民俗文化財となっている。規模は外法で高さ約2m、幅約3.5mあり平面形は円形に近い隅丸方形で、内部の面積は約3.2㎡ある。床は石を敷きつめ、壁は粘土と石で固められ、天井はドーム状となる。枯木ではなく生の青木を室の中に入れて燃やした後、燃えかすを掻き出し、そこに箆を敷いて塩水をかけて蒸気を発生させて入り汗を流すことで療養・保養を目的としたとされる¹¹⁾。また、先述したように瀬戸内海沿岸とその島嶼部には多くの石風呂が現存し、文化財指定を受けたものだけでも20件を超える¹²⁾。これらは、鎌倉時代に東大寺の大勧進となった僧重源が、東大寺領となった周防国や備前国に建築用材の調達に赴いた際に広めたとの伝説が残るもので、その代表的な例として国指定重要有形民俗文化財となっている山口県周防大島町にある「久賀の石風呂」がある¹³⁾。花崗岩を積み上げてその目地に粘土を塗り込めて室をつくり、内部は土間のたたきとなっている。外法で最大幅5.4m、奥行約4.6m、高さ約2.5mあり、土間は直径約3mの円形である。やはり、室の中で松の枝葉などを燃やした後、海水をかけた海藻を敷いて湯気をたてる方式のものである。これらを今回検出した石風呂3130と比較すると、粘土と石で固める壁の構造は両者と類似し、内部の規模は「八瀬かまぶろ」とほぼ同規模、内部を土間とする点は「久賀の石風呂」と共通し、半地下式であることを除けば石風呂型式のものとしては一般的な構造と規模をもつものと考えられる。半地下式とした場合の利点としては、高さが確保できるので天井の構築が低くて済むという点が挙げられるが、換気や熱効率の点では平地式より劣ると考えられることから、その要因については今後の検討が必要である。

次に、山科本願寺に関連する史料の中で「風呂」に関する記述があるものを見てみたい。

史料1 『実如上人闍維中陰録¹⁴⁾』

「一、廿日風呂アリ。土呂殿ヨリ御焼候。又寺内七郷ノ風呂ヲモ悉御焼候也。」

史料2 『本願寺作法之次第¹⁵⁾』

「一、野村殿にてハ毎月風呂立申候に、風呂の入口は二ツ御入候。御住持の出入の口ハ脇二御入候。総出入の口ハ如常。是も昔は只一にて御入候を、五山などの長老の出入の口ハわきに別に候段きこしめし、円如御申候て如此候。一家衆其禪衣の人々御内衆同前二入申候。一家衆ハ召仕候者一人宛つれて入申候、垢かく者候はてハとて如此候。古より此分候。廿五日と廿八とに立申候へ共、あひた近く候段にて、前月に廿五日たち候へは、後月ハ廿八日、毎月一度の心、御客人候へハ臨時に幾度も立られ候き。」

史料1は大永五年（1525）に記された実如上人の葬送中陰記録である。これによれば、「土呂殿」と呼ばれる本願寺の風呂と「寺内七郷ノ風呂」があり、それらを同じ日に「焼」していることがわかる。今回見つかった風呂は「御本寺」内に位置することから、この「土呂殿」である可能性が高く、また風呂を「焚」ではなく「焼」と表現しており、石風呂の室の中で木を燃やすことを表現しているのではないかと推測される。またこの史料により、少なくとも大永五年以前にはこの風呂が成立していたことがわかる。

史料2は蓮如の子の実悟によって天正八年（1580）に記された本願寺の故実書である。山科本願寺廃絶以後の史料ではあるが、これには風呂の様子が具体的に記される。「野村殿」は後にできた南殿と区別して呼ばれた「御本寺」内の殿舎のことである。そこでは毎月1回、25日と28日の月替わりで風呂が立てられ、また客人があった時はそれ以外でも臨時に風呂が立てられた。風呂の入口は二つあり、宗主を指す「御住持」や五山などの長老といった身分の高い人が使う入口とそれ以外の者が使う入口があった。また、宗主や客人以外には、本願寺の一門である「一家衆」や重臣の「御内衆」が入り、「一家衆」は垢を搔かせるために家来を一人連れて入ったということなどがわかる。この「野村殿」の風呂とはおそらく今回見つかった石風呂3130のことであり、この風呂は宗主一族や重臣、高貴な客人など限られた者しか利用できない重要な風呂であったと考えられる。2箇所入口については今調査では判明しなかったが、この風呂に到る導線を考えると、結論から述べれば、正面は南側にあったと推測される。西側は推定土塁裾までの距離が約6mしかなく、土塁と風呂の間に居住施設の存在は想定し難い。北側には炊事施設などが展開し、整地の状況からも南側の風呂とは別空間であったと思われる。東側については塀状遺構で遮蔽され、あまり人目に触れない空間であったと考えられ、そのため溝3089は石組溝2117の延長であるにも関わらずここでは素掘りのままでおかれたのではないかと推測される。一方、風呂の南側には複数の庭や建物が展開し、客人の饗応施設や宗主一族あるいは側近らの居住空間が広がっていた可能性が高い。坪庭を構成する石組溝2084では、風呂の覆屋と考えられる建物2の東柱筋を南に延長した部分で橋脚状の石組みと炭化した板材が見つかっており橋が架けられ通路となっていたと考えられる。各建物か

ら通路状遺構を通り、坪庭を眺めながら風呂へと到る経路が想定できるのである。

(3) 土塁の構築と規模

今回の調査では、2区で南北方向に走る土塁の基底部を検出した。17次調査でも土塁の調査を実施しており、ここでは両調査の成果をまとめる。

今回の調査では、Y=-17,444ラインで土塁の内側裾を検出した。17次1区ではY=-17,446ライン付近で裾を検出しており、東西に約2mのずれがある。17次1区と18次2区の間は約40mあるため、誤差の範疇とも捉えられるが、西側に残存する土塁斜面の等高線を見ると同様に北に対してわずかに東に振れをもつことから、主軸が東にやや振れて構築されていると考えたい。また、裾の検出標高は今調査では41.65m、17次調査では40.5mで1m以上の高低差があるが、これは土塁構築前の整地面の高低差に起因すると考えられる。また、幅や流水の有無に差異があるものの、裾の内側に溝がめぐるとは共通する。また、今回は断割調査を実施していないが、17次調査では、土塁構築土の下から山科本願寺期の遺物を多量に包含する土取り穴が見つかり、土塁の構築が山科本願寺の造営開始期より遅れることが判明した。また、具体的な土塁の構築時期については、文献史側からの研究と考古学的に見た土取り穴出土土器の年代の両面から本願寺存続期でも後半、永正年間（1504～1521）頃と推測した¹⁶⁾。主要遺構の主軸がわずかに北に対して西に傾くものが多いのに対して土塁の軸が東に傾くことも、構築時期の差に起因する可能性がある¹⁷⁾。

敷地の南西には土塁の一部が現存しており、17次2区の調査ではこの現存土塁のおおよその規模が判明した。外側の水路底から土塁頂部までの高さは約6.2m、内側裾からの高さは約3.7mとなる。外側平坦面での試掘調査の結果をもとに標高40.2m以下が外濠と推測され、濠部分を除いた土塁基底部の幅は約8.5m、斜面の傾斜角は土塁内法面で30～35度、外法面で約40度ある。外濠の幅は10～11mで濠法面の傾斜角は約30度、肩部のみ約50度と急傾斜となる。土塁断面露出部分や断割調査での土層観察では、土の使い分けや部分によって積み方を変えるなどの土塁構築方法に関する情報が得られた。なお、土塁は現地保存されている。

(4) 本願寺廃絶以後の様相

今調査では、調査地全域で近世から近代の遺構や整地層を検出した。16・17次調査でも同様の成果を得ており、ここで山科本願寺の廃絶後、近世以降に当地がどのように利用されたかについて検討を加えたい。

整地層から出土する遺物は16世紀後半から17世紀前半に比定でき、大規模な整地の時期は17世紀中頃と推測される。近世整地層直下には山科本願寺の整地面がほぼ削平されることなく残る。16世紀後半から17世紀前半の遺物は遺構からもほとんど出土せず、天文元年（1532）の山科本願寺焼き討ち後、17世紀中頃に整地が行われるまでの約100年間、当地はほとんど人の手が加えられないままになっていたと考えられる。18世紀になると貯蔵施設と考えられる円形土坑が敷地北寄り
と南寄りに散見されるようになるが、土層断面の観察では近世の耕作土層は認められず、耕作地と

しても活発に利用されなかったと考えられる。17世紀末頃に、当地は墓地として利用されるようになる。17次調査では土器を棺として用いた土器棺墓が3基みつがっているが、18世紀後半以後すべて方形の木棺直葬の火葬墓となる。最も新しいものは20世紀半ばの遺物が混じり、墓地としての利用は現代まで続いたようである。墓は南北方向に一定のライン上に並ぶことから、何らかの規制のもとに構築されたと考えられる。戦後は果樹畑となり、その後駐車場となって現在に至る。

山科本願寺廃絶後に当地が耕作地や居住地とならず活発に利用されなかった要因については、豊臣秀吉の命により寺領を回復した安土桃山時代から江戸時代を通して当地が本願寺の所領であり続けたこと¹⁸⁾や、扇状地の水はけが良すぎて耕作に不向きであったことなどが考えられる。また、土塁と濠が残されたことで、それに囲まれた「御本寺」跡地は本願寺焼亡後もその存在感を示し、周辺の山科七郷とは隔絶して、その中心部の利用が忌避された可能性も考えられる。

註

- 1) 出口 勲「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年
- 2) 平田 泰「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 3) 柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局 2012年
- 4) 元興寺文化財研究所の狭川真一氏から御教示を得た。
- 5) 前掲註3文献と同じ
- 6) 土器の型式については小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年に準拠する。
- 7) 前掲註3文献の図85-44
- 8) 前掲註3文献第5章第1節
- 9) 京都府立大学大学院教授大場 修氏、京都産業大学教授鈴木久男氏から御教授を得た。
- 10) 村上忠喜「八瀬かまぶろとサウナ文化」第156回京都市文化財講座資料 2003年
- 11) 前掲註10資料と同じ、大場 修『物語ものの建築史 風呂のはなし』鹿島出版 1986年
- 12) 前掲註10資料と同じ
- 13) 文化庁HP『文化遺産オンライン』「久賀の石風呂」
<http://bunka.nii.ac.jp/SearchDetail.do?heritageID=203293>
- 14) 『真宗史料集成』第二巻 同朋舎1983年所収。
- 15) 前掲註14文献と同じ
- 16) 草野顕之「創建時山科本願寺の堂舎と土塁について」『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館 2002年
- 17) 前掲註3文献第5章第2節
- 18) 中村武生「山科本願寺・寺内町跡の近世・近代」『戦国の寺・城・まち - 山科本願寺と寺内町』法蔵館 1998年

6. 竈3100、石風呂3130出土炭化材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の発掘調査では、寺の跡地の西端の一角から、石風呂、竈、土間、井戸などからなる一連の風呂関連遺構が確認されている。石風呂3130は、南北約6m、東西約4.4mで、粘土や石で固めたドーム状の天井があったと見られる蒸し風呂部と、準備作業などのための前室に分かれている。

本報告では、竈3100と石風呂3130から出土した炭化材について樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、竈3100の作業場および燃焼室と、石風呂3130の前室および蒸し風呂部から出土した炭化材11試料である。このうち、石風呂3130前室 階段付近から出土した炭化材は、2袋あるため、仮にA・Bとして2試料について分析を実施する。いずれも多数の炭化材片が認められる。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3. 結果

炭化材の樹種同定結果を表13に示す。竈3100作業場 炭2（図55-10層）、石風呂3130階段付近 炭（B）、石風呂3130蒸し風呂部奥 炭・灰（図57-34層）には2種類、竈3100作業場 北壁貼り付き炭には3種類が認められた。これらの炭化材は、針葉樹2分類群（マツ属複維管束亜属・ヒノキ）、広葉樹4分類群（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・ツバキ属・サクラ属・モチノキ属）とイネ科に同定された。なお、竈3100作業場 炭1（図55-8層）は、道管が認められ、その配列から広葉樹と判断できるが、小片で保存が悪いため、種類は不明である。また、竈3100作業場 灰（図55-9層）、竈3100燃焼室 床（図55-8層）、竈3100燃焼室 炭・灰（図55-11層）、石風呂3130前室 炭・灰層（図57-30層）には、微細な炭片の可能性のある炭質物が確認されるが、これらは遺存状態が悪く木材組織等の組織構造が認められず、種類・由来は不明である。以下に同定された各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

表13 樹種同定結果

試料名	種類	備考
竈3100作業場 炭1 (図55-8層)	広葉樹	同定不可
竈3100作業場 炭2 (図55-10層)	ヒノキ	
	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
竈3100作業場 床 (図55-8層)	マツ属複雑管束亜属	
竈3100作業場 灰 (図55-9層)	不明	
竈3100作業場 北壁貼り付き炭	ヒノキ	径4mmの芯持丸木
	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	径3mmの芯持丸木
	モチノキ属	径5mmの芯持丸木
竈3100燃焼室 床構築土 (図55-12層)	不明	
竈3100燃焼室 炭・灰 (図55-11層)	不明	
石風呂3130階段付近 炭	A ヒノキ	
	B ヒノキ イネ科	
石風呂3130前室 炭・灰層 (図57-30層)	不明	
石風呂3130蒸し風呂部 炭・灰 (図57-34層)	サクラ属	
石風呂3130蒸し風呂部奥 炭・灰 (図57-34層)	ヒノキ	
	ツバキ属	

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められるが、目立たない。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列。道管は、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ツバキ属 (*Camellia*) ツバキ科

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、道管壁の厚さは中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～6個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～5細胞幅、1～30細胞高。

・モチノキ属 (*Ilex*) モチノキ科

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～6個が複合して散在する。道管は階

段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～5細胞幅、1～40細胞高。

・イネ科 (Gramineae)

試料は、微細片で薄く脆い。横断面では、2対4個の道管の外側に篩部細胞があり、これらを厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成する。維管束は、維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

4. 考察

今回調査した炭化材は、マツ属複維管束亜属・ヒノキの針葉樹2種類、コナラ属コナラ亜属クヌギ節・ツバキ属・サクラ属・モチノキ属の広葉樹4種類とイネ科の合計7種類に同定された。

各種類の木材の材質についてみると、マツ属複維管束亜属の木材は、軽軟であるが、強度と保存性は比較的高く、燃料材としては松脂を多く含み、燃焼性が高い。ヒノキの木材は、木理が通直で割裂性・耐水性が高く、燃料材としては、軽軟で比較的燃焼性が高い。広葉樹のクヌギ節、ツバキ属、サクラ属、モチノキ属は、比較的重硬で強度が高く、いずれも燃料材としては、火付きが悪いが、一度着火すれば、比較的火持ちが良い。

出土位置別にみると、竈3100作業場の炭は、マツ属複維管束亜属、ヒノキ、クヌギ節、モチノキ属、イネ科が認められ、全体的に雑多な種類構成を示す。このうち、竈3100作業場北壁 貼り付きの炭には3種類が認められたが、いずれも直径3～5mの芯持丸木であり、小径の枝が利用されている様子がうかがえる。

一方、石風呂3130蒸し風呂部の炭は、ヒノキ、ツバキ属、サクラ属が認められ、少なくとも3種類の木材が燃料材として利用されていたことがうかがえる。上記した各樹種の材質および燃焼性を踏まえると、燃焼性が高く火持ちの悪いヒノキと、火持ちの比較的良いサクラ属とツバキ属が混在して利用されていたことになる。

引用文献

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

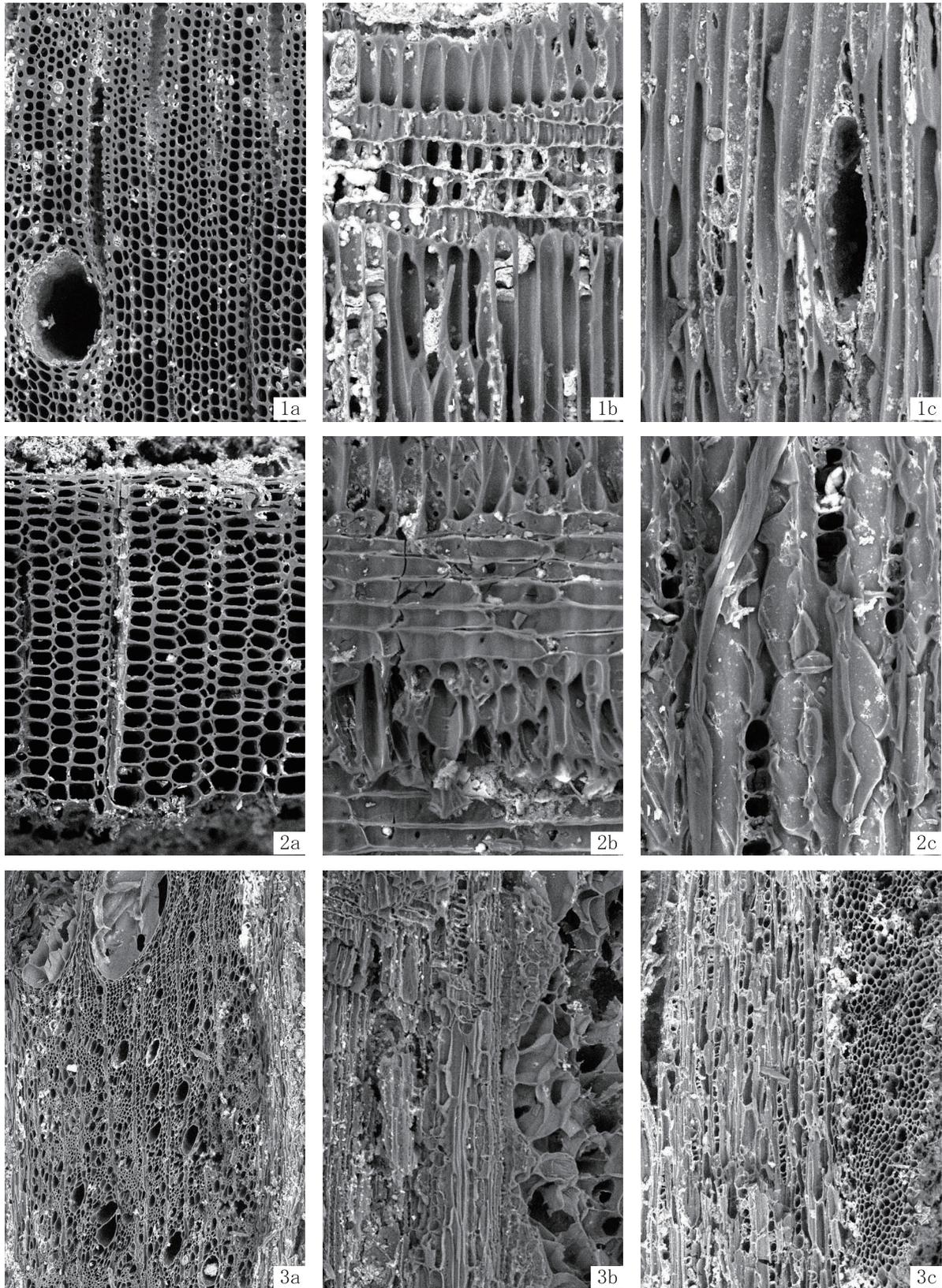
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].

島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

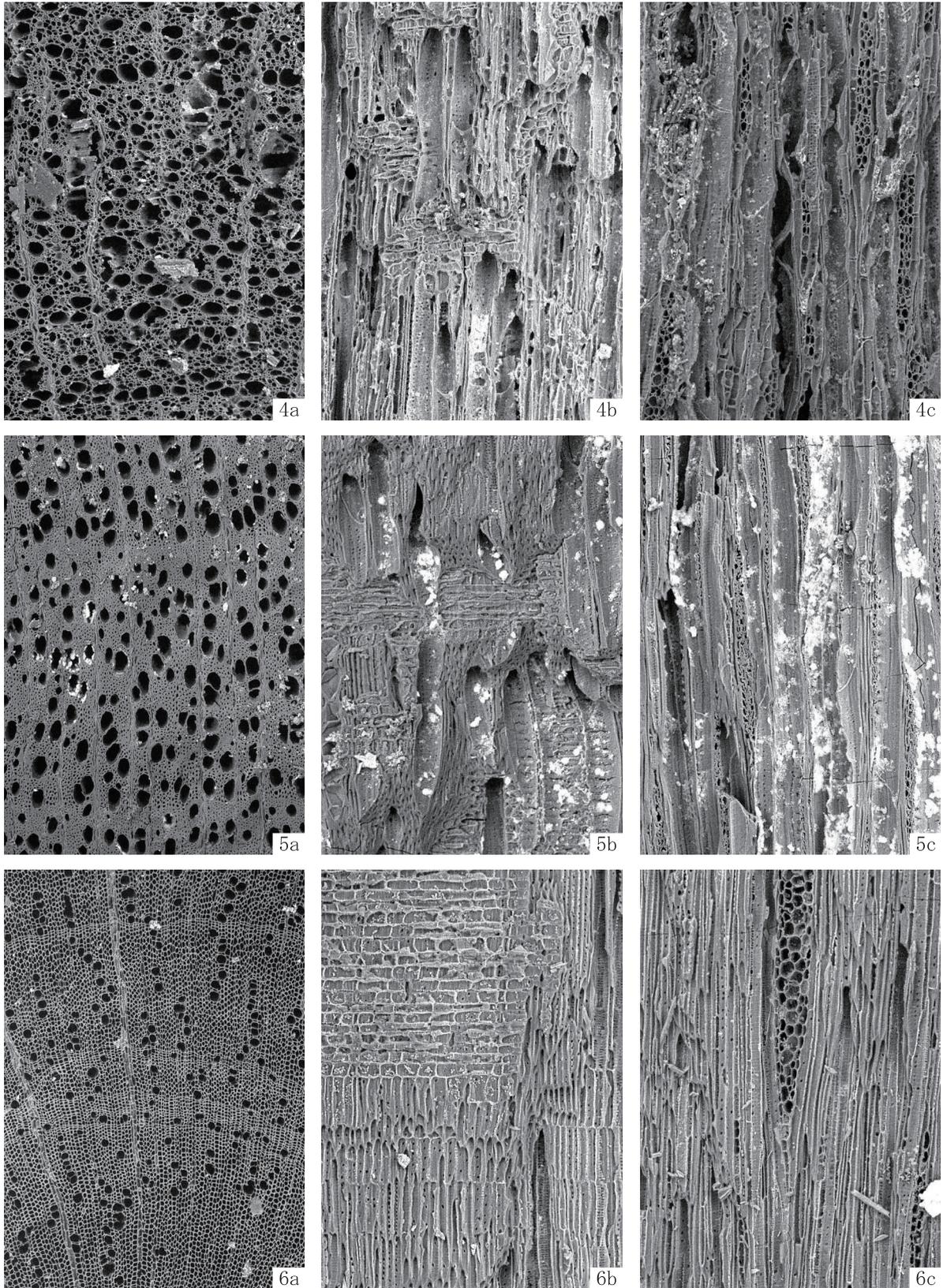
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



1. マツ属複維管束亜属(カマド作業場;床)
 2. ヒノキ(作業場階段付近;炭)
 3. コナラ属コナラ亜属クスギ節(カマド作業場;炭2)
- a: 木口, b: 柁目, c: 板目

 200 μm: 2-3a
 200 μm: 1a, 2-3b, c
 100 μm: 1b, c

図72 炭化材 1



4. ツバキ属(燃焼室-同名 奥;炭)
 5. サクラ属(燃焼室;炭・灰)
 6. モチノキ属(カマド 作業場 北壁;はり付き 炭)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μm: a
 200 μm: b, c

図73 炭化材2

7. 総括

(1) 調査に至る経過

文明10年（1478）に蓮如上人により造営を開始された山科本願寺は、宗祖親鸞の木造を奉る御影堂、本尊の阿弥陀如来を奉る阿弥陀堂の他、寝殿などを配した「御本寺」、蓮如の一族や坊官の居住した「内寺内」、蓮如の墓所である「蓮如上人御塚」がある他、絵師や、餅、酒、塩、魚などを商う町衆の居住域である「外寺内」の大きく三つの区画に分かれ、その周囲を土塁と濠が巡っていたことが想定されている¹⁾。しかし当初から三つの区画が揃っていたのかは大きな課題である²⁾とともに、文献に現れる「御本寺」内の重要施設の配置なども判然としなかった。

今回、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「山科本願寺跡」に含まれており、『周知の埋蔵文化財包蔵地内における取扱い要綱（京都市域内）』で重要遺跡として京都市が定めた地域であることから、土地所有者と協議の上、「御本寺」内の遺構配置や残存状況等を確認する目的で国庫補助による範囲確認調査を平成22年度から3箇年にわたって実施した。

(2) 調査成果

調査の結果、古・中・新の3段階にわたる遺構の変遷を確認することができた。新段階の遺構は埋土に焼土を含んでおり、天文元年（1532）の焼討ち時まで存続していたと考えられる。

現存する土塁は創建期に遡るものではなく、文献史の研究成果と土塁下に認められる土取り穴出土土器の年代等から永正年間（1504～1521）頃と考えられること、現地表面まで土塁が削平されている部分についても、基底部分と内溝が良好に残存していることが判明した。

最終年度に発見された石風呂・竈・井戸・建物のセットは特筆すべき成果である。検出された石風呂は、5章2節に引用されている『実如上人闍維中陰録』に記される「土呂殿」と考えられ、文献と発掘調査成果が比較検討できる資料となった。

また、周辺の調査状況を考え合わせると（図71）、おおよそ200m四方の範囲に小規模な建物や複数の庭が近接して造られており、『都名所図会』（安永9年製作）に描かれた西本願寺の建物配置や、蓮如上人の『御文』などに表れる施設との対比から、宗主一族の居住施設および寺の実務施設で、一般門徒には開放されない私的な空間に建てられた建物とそれに附随する庭と想定される。その結果、御影堂と阿弥陀堂はこれらの私的空間の東側に位置することが推定できる（図74）。

以上の調査成果を総合すると、山科本願寺は創建から焼討ちまでの54年間で何度かの改修を経て寺観を整えたこと、土塁と堀は最終段階で整えられたことが判明した。

(3) 今後の課題

御本寺の中核施設「御影堂」と「阿弥陀堂」は、今回の調査成果から当該地の東方に位置することが想定されるが、その正確な位置と規模の把握が今後の第一の課題である。

第二に調査区北半から東端にかけてL字状に広がる高まりは、南北溝3043で区画された石組井戸3020とそれを囲う建物1の発見により、炊事機能を有する施設の他、米などを貯蔵した土蔵の存在も推定される。しかし、高まりの面積に比して判明した施設が少ないことから、建物1の北や東にどのような施設群が存在したのかを今後確認しなければならない。

第三に『御文』125の「惣而四壁之内東西南北之地形モ不同ナル間、」の四壁、『御文』114の「普請作事ツキ地等ニ至マテ皆々心口ヲツクセシ」のツキ地（築地）は、創建期山科本願寺の御本寺を囲繞していた施設と考えられるが、それらの施設の確認も課題である。

第四に、御本寺内の遺構の保存と活用に向けた時期ごとの遺構分布図の作成と遺構レベルの把握、未だ畑地や駐車場として残る部分での確認調査が必要である。

註

- 1) 山科本願寺・寺内町研究会編『戦国の寺・城・まち－山科本願寺と寺内町－』1998年の各章。
- 2) 草野顕之「山科本願寺・寺内町の様相－蓮如の時代とその後－」『戦国の寺・城・まち－山科本願寺と寺内町－』（山科本願寺・寺内町研究会 法藏館）1998年。
- 3) 草野顕之「創建時山科本願寺の堂舎と土塁について」『中世の寺院体制と社会』（中尾 堯編 吉川弘文館）2002年。

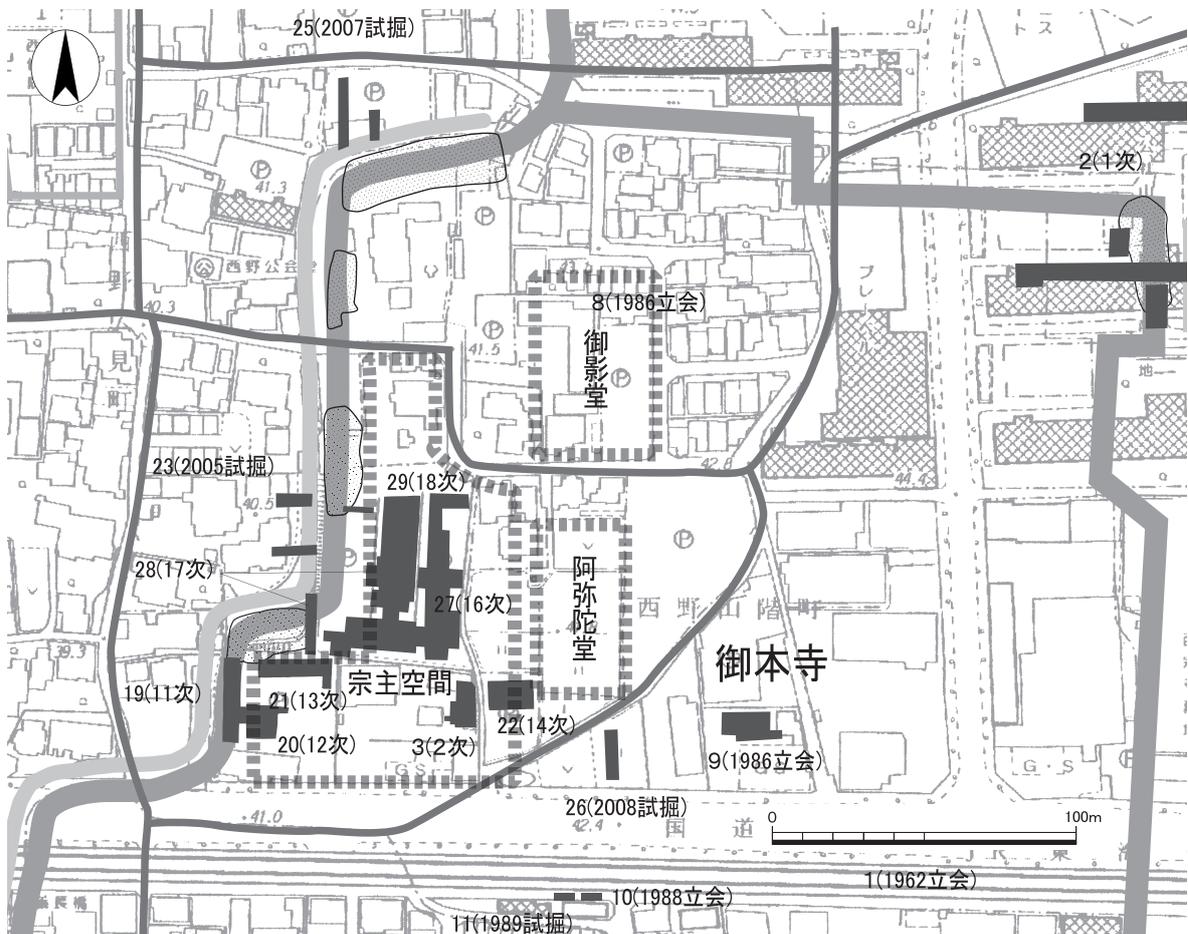


図74 御本寺中枢施設推定図（1：2500）

VI 大藪遺跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

調査対象地は、京都市南区久世殿城町544番地に所在し、この土地に集合住宅が新築される事になった。この場所は、大藪遺跡の範囲に含まれることから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）が、2011年10月11日に調査対象地の中央にT字形のトレンチを設定して試掘調査を実施した。

調査の結果、地表下約0.5mで中世の柱穴と弥生時代の柱穴・包含層を検出し、当該期の土師器・弥生土器などの遺物が出土したことから、調査対象地内に中世と弥生時代の遺構が良好に残存したと判断した。このため、文化財保護課は財団法人京都市埋蔵文化財研究所に発掘調査を委託し、文化財保護課の指導の下で発掘調査を実施する事となった。

今回の調査にあたっては、これまでの周辺の発掘調査・立会調査の成果に基づき、弥生時代の遺構を検出するとともに、周辺の調査と合わせてその変遷を明らかにすることを目的とした。

(2) 調査の経緯

発掘調査は、2011年12月1日から開始し、試掘調査の結果から、調査地内の東部に、東西14m、南北13.5mの長方形の調査区を設定した。現地地表下約0.5mの遺構面まで重機掘削し、その後手掘りで2時期に分けて調査を実施した。まず、中世以降の遺構を調査し、検出遺構を実測図と写真撮影により記録した。その後、弥生時代の遺構を調査し、実測図と写真で記録した。また、文化財保護課の指導と地権者の了解を得て、検出した掘立柱建物の規模を確認するため、調査区の東側に1.3m×0.6mの拡張区を3箇所、新たに1m×0.7mの調査区を2箇所設定した。

最後に、建物柱穴の断割、調査区断面の写真撮影・実測図作成などを行い、2011年12月28日に調査を終了した。調査中、文化財保護課の現地指導を、12月1日・13日・21日の3回受けた。



図75 調査前全景（西から）



図76 作業風景（北から）

2. 遺 跡

(1) 位置と環境

調査地一帯は、向日丘陵と桂川の間の中積平野に位置し、桂川によって形成された後背湿地に立地する。一帯は、標高14.8m前後の平坦地で、北西から南東方向にわずかに傾斜する。また調査地は、桂川から約800m西側に位置する。

周辺地域では、縄文時代から近世に至る遺構・遺物が検出され、大藪遺跡として周知されている。本調査地は、遺跡推定範囲の西側に位置する。遺跡中央部では、これまでの調査で中久世遺跡から継続する北西から南東方向に流れる自然河川が確認されている。弥生時代から古墳時代の集落は、この旧河川の両側に展開したと見られ、調査地は旧河川の西側に位置する。

また、調査地周辺は東寺領庄園「久世上下庄」の庄域に含まれる。これまでの調査で建物や堀などの遺構が検出され、庄園領主の居館などの遺構が想定される。

(2) 周辺の調査

調査地周辺では、多数の発掘調査・試掘立会調査が実施されている。主要なものを表14・図78にまとめた。ここでは、本調査地周辺の調査についてのみ述べる。

調査地北側の発掘調査（図78-17）では、調査区東端部で弥生時代後期から平安時代にかけての南北方向の河川が検出された。弥生時代の遺構は、東部で湾曲する溝2条（SD1・2）、隅丸方形・円形竪穴住居、西部で方形周溝墓などが検出され、SD2は集落を囲む環濠と推定された。長岡京期の遺構は、中央部で掘立柱建物1棟・南北柵・井戸1基などが検出された。平安時代後期の

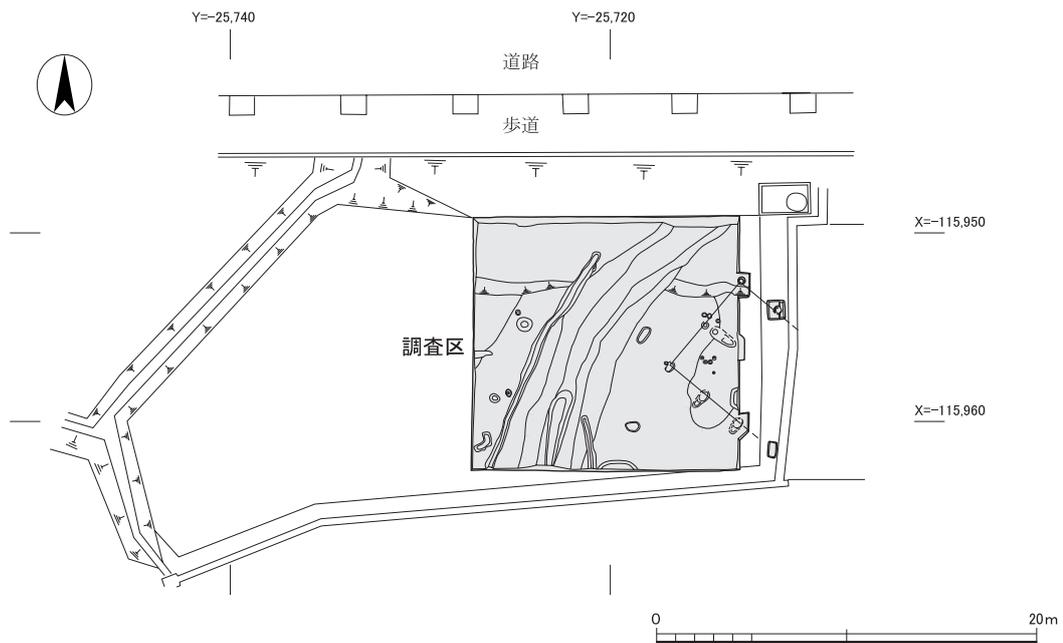


図77 調査区配置図（1：400）

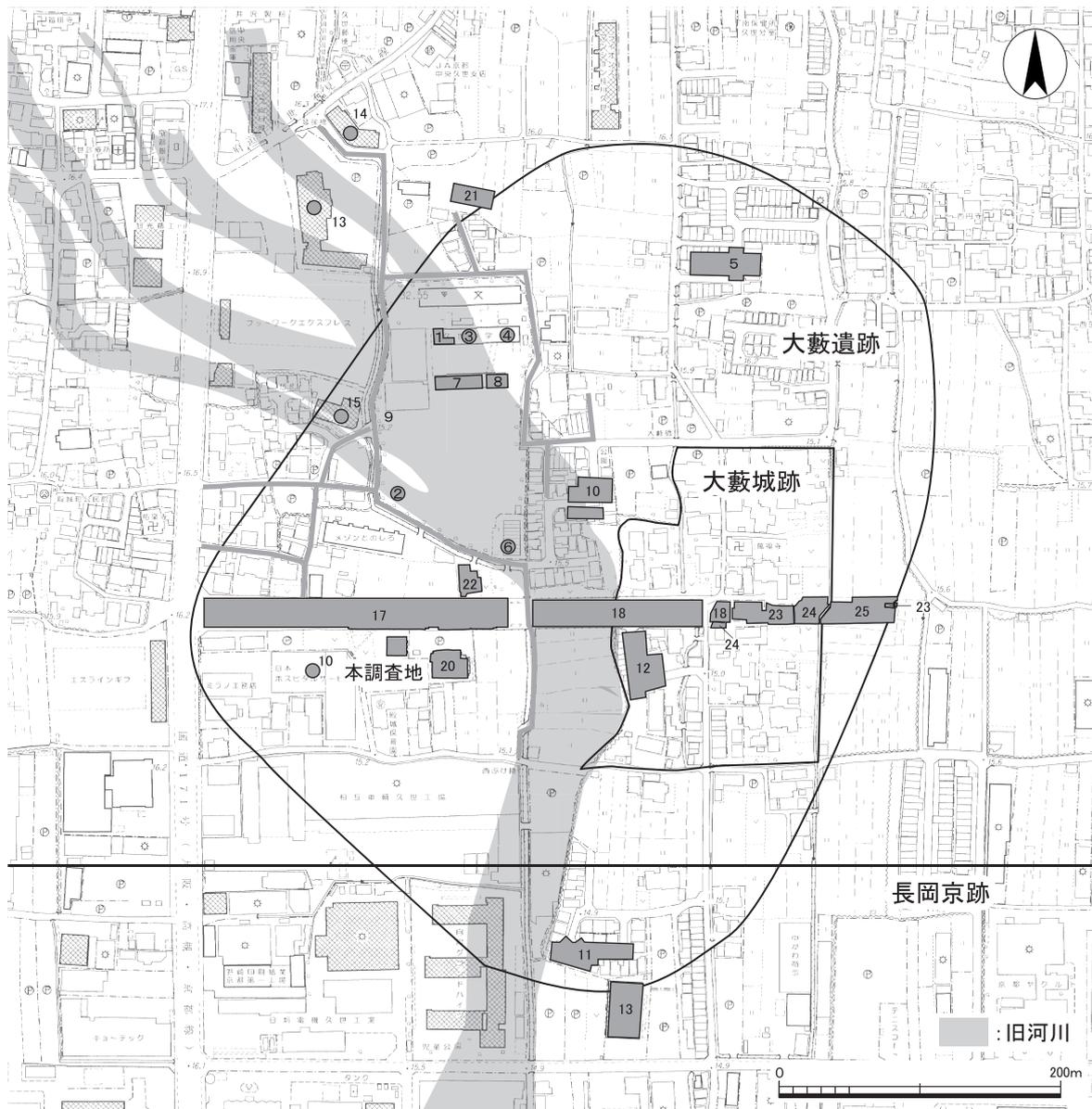


図78 調査区および周辺調査位置図（1：5,000 調査次数は表14に準ずる）

遺構は、中央部で南北溝・井戸1基などが検出された。室町時代の掘立柱建物・柱穴・井戸・堀などは調査区全域で検出されている。堀SD16（幅約7m）は東西方向に延長する堀で、調査区東側で南側に張り出し、その間にコの字形の堀SD17（幅約4m）があり、建物・門が配置される。SD16は外堀、SD17は内堀と推定され、大藪城に関する居館の遺構と考えられる。出土遺物には、弥生時代の土器・木製品・ガラス小玉、長岡京期の土器類・木製品、室町の土器類・木器類、近世の土器類・木器類などがある。¹⁾

調査地東側の発掘調査（図78-20）では、調査区西部で弥生時代後期の大型掘立柱建物1棟、東部で弥生時代の土坑1基が検出された。大型掘立柱建物は梁間2間（3.2m等間）・桁行3間（2.8m×3）で、妻柱の外側1.1mと0.6mの位置に棟持ち柱が付く。建物の主軸方向は北で西へ38度振れる。柱穴掘形はいずれも楕円形で、建物外側から内側に向かって掘られる。建物柱材は、年輪年代法によって紀元後51年+aとされた。その他、調査区全域で長岡京期の掘立柱建物3棟・南北溝・

表14 周辺調査一覧表

次数	調査地	調査機関・調査期間	主な検出遺構	主な出土遺物	文 献
1	南区久世大藪町・殿城町481(大藪中学校)	六勝寺研究会(梅川光隆) 1972. 7. 31～8. 24	弥生～鎌倉の流路、長岡京期の杭列など。	弥生中期～後期の弥生土器、古墳の土器類、長岡京期の土器類・祭祀具、平安・鎌倉の土器類・瓦類など。	梅川光隆『大藪遺跡発掘調査報告』1972
2	南区久世殿城町481(大藪中学校)	平安京調査会(梅川光隆) 1973	長岡京期の流路など。	長岡京期の土器類・瓦類・祭祀具など。	梅川光隆『長岡京時代の一括土器群と祭祀遺物』『論集平安京研究 2』1975
3	南区久世殿城町481(大藪中学校)	長岡宮跡発掘調査調査団(中山修一・三上貞二・百瀬正恒) 1973. 7. 26～9. 10	長岡京期の流路など。	長岡京期の土器類・瓦類・祭祀具・馬骨など。	中山修一『大藪遺跡の発掘』『乙訓文化 33号』1976
4	南区久世殿城町481(大藪中学校)	京都市埋蔵文化財研究所(磯部勝) 1979. 7. 31～8. 20	弥生のピット・溝、中世の溝。	弥生土器など。	磯部勝『大藪遺跡』『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』
5	南区久世大藪町213(住宅建設)	京都市埋蔵文化財研究所(平田泰) 1980. 12. 4～1981. 1. 20	弥生中期の流路、長岡京期の溝、平安～室町の建物・溝・井戸など。	縄文土器、弥生の土器・木器・石器類、古墳の土器類・木器類、長岡京期・平安の土器類、平安～室町の土器類・木器など。	平田泰『大藪遺跡発掘調査概要』昭和55年度
6	南区久世殿城町481(大藪中学校)	京都市埋蔵文化財研究所(磯部勝) 1981. 8. 11～8. 19	弥生～古墳の流路、長岡京期の包含層。	弥生土器、古墳の土器類、長岡京期の土器類・瓦など。	磯部勝『大藪遺跡』『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』
7	南区久世殿城町481(大藪中学校)	京都市埋蔵文化財研究所(堀内明博・鈴木廣司) 1983. 7. 11～10. 5	奈良～平安の流路など。	縄文土器、弥生後期の土器、古墳の土器類、奈良・平安の土器類・瓦・祭祀具、木器類、鎌倉～室町の土器類など。	堀内明博・鈴木廣司『大藪遺跡』『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』
8	南区久世殿城町481(大藪中学校)	京都市埋蔵文化財研究所(上村和直・久世康博) 1985. 5. 7～6. 14	奈良～平安の流路・土坑など。	弥生土器、古墳の土器類、奈良～平安の土器類・祭祀具、中世の土器類など。	上村和直・久世康博『大藪遺跡』『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』
9	南区久世大藪町234(公共下水道)	京都市埋蔵文化財研究所(吉崎伸) 1986. 12. 10～1987. 7. 21	弥生～平安の流路、弥生の溝・土坑、長岡京期の溝、平安の土坑・溝、鎌倉～室町の堀・土坑など。	縄文土器、弥生後期の土器、古墳の土器類、奈良・平安の土器類、鎌倉～室町の土器類など。	吉崎伸『大藪遺跡・中久世遺跡』『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』
10	南区久世殿城町(住宅建設)	京都市埋蔵文化財研究所(鈴木廣司) 1987. 5. 25～6. 27	弥生後期の堅穴住居、奈良の流路、鎌倉の堀・土坑など。	弥生後期の土器・石器、古墳の土器類、奈良の土器類、木器類、鎌倉～室町の土器類・木器など。	鈴木廣司『大藪遺跡』『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』
11	南区久世大藪町396(宅地造成)(L187調査)	京都市埋蔵文化財研究所(上村和直) 1988. 1. 22～3. 5	弥生後期～古墳時代の堅穴住居・溝、飛鳥時代の掘立柱建物、長岡京期の柱穴など。	弥生後期の土器・石器・土製品・鉄製品、古墳の土器類、飛鳥時代の土器類、長岡京期の土器類など。	上村和直『長岡京左京一条三坊跡』『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報 昭和63年度』
12	南区久世大藪町291(宅地造成)	京都市埋蔵文化財研究所(吉崎伸) 1988. 10. 29～12. 1	鎌倉～江戸の建物・井戸・溝など。	鎌倉～室町の土器類・金属器・木器、江戸の土器類など。	吉崎伸『大藪遺跡』『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』
13	南区久世大藪町404-2(宅地造成)(L237調査)	京都市埋蔵文化財研究所(鈴木廣司) 1990. 1. 5～3. 23	弥生後期の堅穴住居・方形周溝墓・堀、古墳の堅穴住居・建物・土墳墓、長岡京期の建物・溝、鎌倉～室町の溝・土坑、江戸の土壇墓など。	弥生土器、古墳の土器類、鎌倉～室町の土器類、江戸の土器類など。	鈴木廣司『長岡京左京一条三坊・大藪遺跡』『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』
14	南区久世殿城町442-1(宅地造成、試掘調査)	京都市埋蔵文化財調査センター 1992. 10. 19	弥生の溝などを検出。	詳細不明。	『大藪遺跡』『京都市内試掘調査概報』平成4年度
15	南区久世殿城町465(試掘調査)	京都市埋蔵文化財調査センター 1993. 11. 1	弥生～古墳時代の包含層を検出。	詳細不明。	『大藪遺跡』『京都市内試掘調査概報』平成5年度
16	南区久世殿城町535・539-1(試掘調査)	京都市埋蔵文化財調査センター 1998. 4. 7	弥生の湿地状堆積を検出。	詳細不明。	『大藪遺跡』『京都市内試掘調査概報』平成10年度
17	南区久世殿城町(街路建設)	京都市埋蔵文化財研究所(西大條哲・出口勲・吉崎伸) 1997. 12. 8～1999. 4. 15	弥生後期の堅穴住居・方形周溝墓・流路、長岡京期の建物・井戸・溝、平安後期の井戸・溝、室町の建物・井戸・堀・土坑など。	弥生土器・木製品・ガラス小玉、長岡京期の土器類・木製品、室町の土器類・木器類、近世の土器類・木器類など。	西大條哲ほか『大藪遺跡』『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』
18	南区久世殿城町(街路建設)	京都市埋蔵文化財研究所(吉崎伸・出口勲・西大條哲・宮下則子) 1999. 7. 6～2000. 3. 21	弥生後期の堅穴住居・流路、平安の井戸など。	縄文土器、弥生後期の土器、古墳の土器類、奈良の土器類、平安の土器類、鎌倉～室町の土器類・木器、桃山～江戸の土器類・土製品・木器など。	吉崎伸ほか『大藪遺跡』『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』
19	南区久世殿城町441(試掘調査)	京都市文化財保護課 2001. 1. 29	平安以降の溝・柱穴など。	詳細不明。	『大藪遺跡』『京都市内試掘調査概報』平成13年度
20	南区久世殿城町546-1(集合住宅)	大藪遺跡調査団(小泉信吾) 2001. 11. 1～12. 30	弥生後期の建物・土坑、長岡京期の建物・柱穴・溝など。	弥生後期の土器・石器、長岡京期の土器類など。	小泉信吾・吾喜良淳『大藪遺跡発掘調査報告書』
21	南区久世大藪町3-2(宅地造成)	京都市埋蔵文化財研究所(平田泰・能芝勉) 2006. 11. 16～12. 8	弥生の方形周溝墓、平安の土坑・溝、室町以降の建物・溝など。	弥生の土器・石器、平安の土器類、室町の土器類など。	平田泰・能芝勉『中久世遺跡・大藪遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-19
22	南区久世殿城町527-1, 528-1, 814-3(大田7466-3)	京都市埋蔵文化財研究所(西森正晃) 2007. 2. 1～3. 8	弥生後期の堅穴住居・溝・土坑、平安後期・鎌倉の柱穴、室町の建物・溝・土坑、江戸の溝など。	弥生の土器・石器、平安の土器類、鎌倉～室町の土器類・瓦、江戸の土器類など。	西森正晃『大藪遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-32
23	南区久世大藪町・築山町(街路建設)	京都市埋蔵文化財研究所(木下保明・近藤章子) 2010. 4. 15～7. 23	長岡京期の土坑、室町の建物・井戸・堀・溝、江戸の溝・柱穴など。	弥生の石器、長岡京期の土器類、室町～江戸の土器類・瓦など。	木下保明ほか『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-9
24	南区久世大藪町(街路建設)	京都市埋蔵文化財研究所(南出俊彦・田中利津子) 2010. 7. 26～11. 2	室町の建物・井戸・堀・溝、江戸の溝・柱穴など。	弥生の石器、長岡京期の土器類、室町～江戸の土器類・瓦など。	南出俊彦・田中利津子『大藪遺跡・大藪城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-13
25	南区久世築山町(街路建設)	京都市埋蔵文化財研究所(山本雅和・田中利津子) 2011. 1. 6～3. 31	縄文の土坑、長岡京期の溝・井戸、室町の建物・井戸・堀、江戸の溝など。	縄文土器、長岡京期の土器類、室町～江戸の土器類・瓦など。	山本雅和・田中利津子『大藪遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-18
26	南区久世殿城町544番地(集合住宅)	京都市埋蔵文化財研究所(上村和直) 2011. 12. 1～2012. 1. 4	本調査	本調査	

柱穴などが検出されている。建物はいずれも東西棟で、柱筋を揃えて東西に並ぶ。中央建物は桁行3間(2.6m×3)・梁間2間(2.3m×2)の東西棟である。出土遺物には、弥生時代後期の土器・石器、長岡京期の土器類がある²⁾。

調査地北東側の発掘調査(図78-22)では、調査区南部で弥生後期の円形竪穴住居、北部で溝などが検出された。また、調査区全域で平安時代後期から鎌倉時代の柱穴を検出した。柱穴は散在し、建物としてまとまらない。室町時代の遺構は、調査区中央部で掘立柱建物、周囲で溝などを検出した。出土遺物には、弥生時代の土器・石器、平安時代後期～鎌倉時代の土器類、室町時代の土器類・瓦、江戸の土器類などがある³⁾。

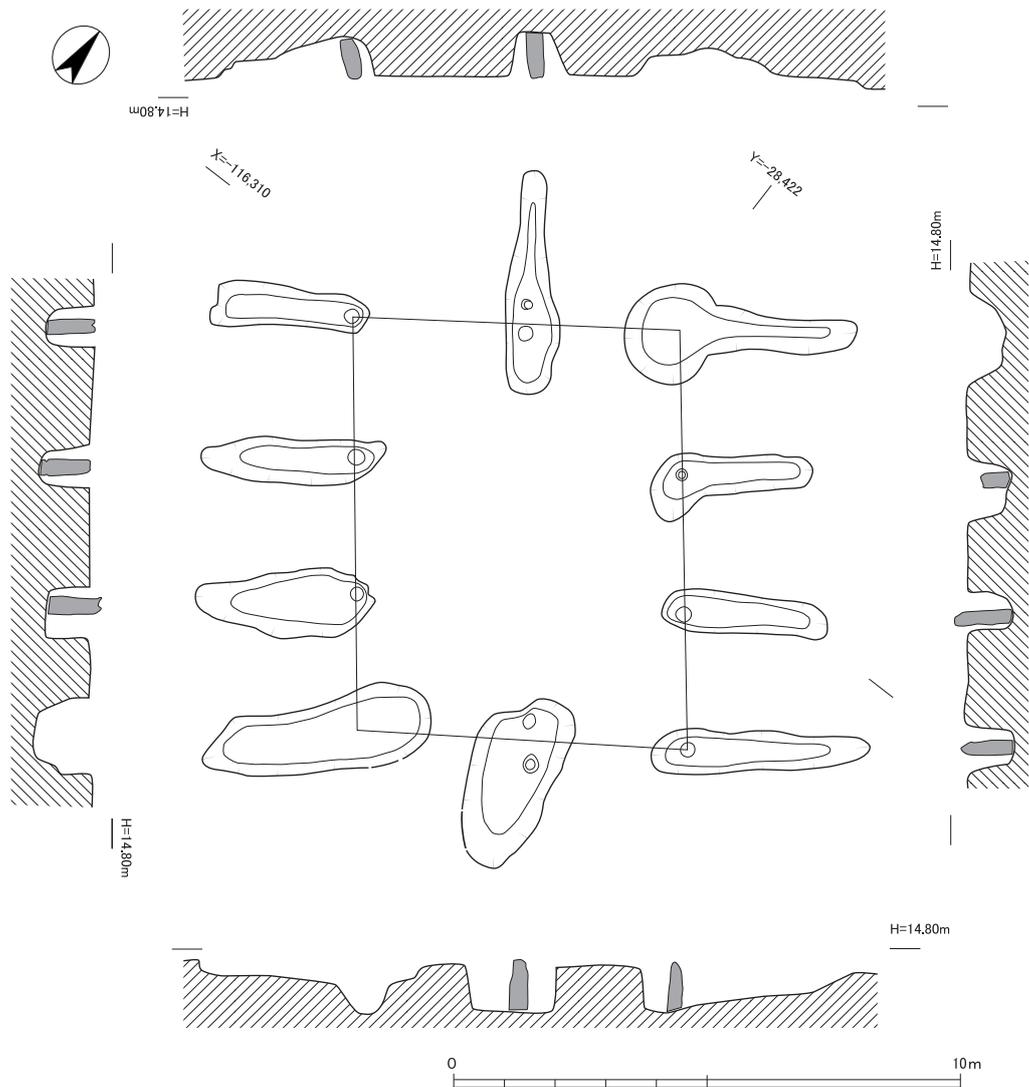


図79 20次調査検出遺構実測図(1:150 弥生時代)

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図80)

層序 調査地は、場所によって堆積状況が異なるが、基本層序は地表面から約0.3mまでが耕土層(第1層)・床土層(第2層)である。その下は、無遺物の地山層(第3層)である。地山層は、調査区北西部と他の地域で異なり、調査区北西部では褐灰色砂礫層、調査区北東部から南西部では黄褐色粘質土層である。黄褐色粘質土層は、約1m以下において緑灰色粘土層となる。

調査は、第3層上面を遺構面とし、中世以降の遺構と弥生時代の遺構の2時期に分けて調査を行った。遺構面の検出高は、北端が南端より0.13m高く、北側から南に若干傾斜する地形である。遺構面の標高は、調査区中央で14.5mである。

(2) 検出遺構の概要

調査で検出した遺構は、中世以降の遺構24基、弥生時代の遺構20基、総計44基である。

中世以降の遺構には、溝・柵・柱穴などがある。溝は調査区北部で大規模な東西溝1、その南側で溝2を検出した。両溝間で東西柵19を検出した。溝1の南側では、柱穴が散在するが、まとまっておらず建物の復原は出来ない。また、柱穴の埋土内には遺物がほとんど含まれていない。

弥生時代の遺構には、溝・落込み・土坑・柱穴などがある。溝は調査区中央で3条検出し、大規模な溝40は湾曲する。落込み30は、溝40と重複して調査区全域で検出した。土坑は調査区全域で検出したが、埋土内に遺物が含まれず、平面形が不定形なものが多い。柱穴は調査区東部で検出し、建物50としてまとまる。

なお、長岡京期の遺構・遺物は全く検出していない。

以下、各時期に分けて主要な遺構を報告する。遺物の時期は、森岡秀人による弥生土器編年⁴⁾、および平安京・京都I期～XIV期編年案⁵⁾に準拠する。

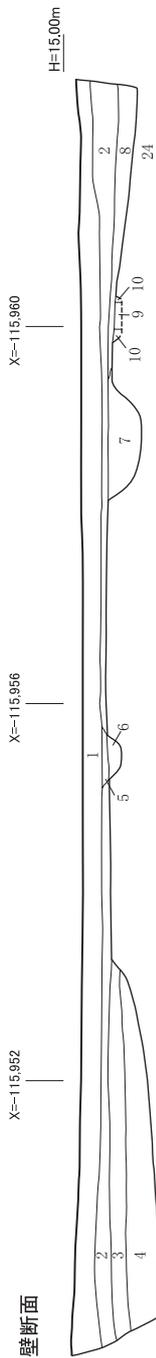
(3) 中世以降の遺構 (図81、図版14-1)

溝1 北部で検出した東西方向の素掘り溝である。東西両側は調査区外に延長し、北肩は調査区外である。検出面での規模は、南北幅4.1m以上、深さは0.5mである。南肩はなだらかに傾斜し、底部はほぼ平坦である。底部の標高は西端が14.2m、東端が13.9mで、東側に下がる。埋土は大き

表15 遺構概要表

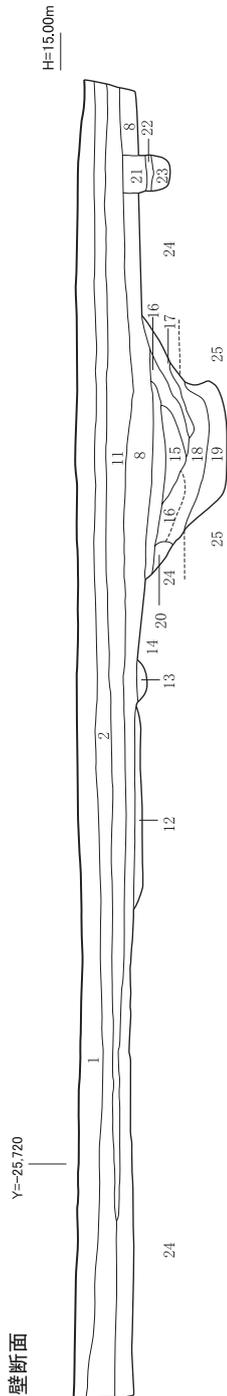
時 代	遺 構	備 考
弥生時代	溝34・35・40、落込み30、建物50、土坑14・32	
中 世	溝1・2、柵19、柱穴	

調査区東壁断面



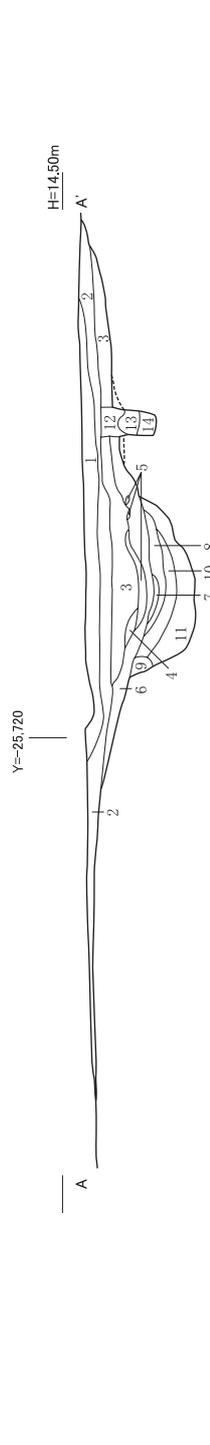
- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥(耕土)
- 2 10YR5/6 黄褐色砂泥(床土)
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色泥土(溝1)
- 4 2.5Y4/2 暗灰黄色泥土(溝1)
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥(溝2)
- 6 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥(溝2)
- 7 10YR2/3 黒褐色砂泥
- 8 2.5Y3/2 黒褐色砂泥(落ち込み・30)
- 9 10YR4/1 褐灰色砂泥
- 10 10YR3/3 暗褐色砂泥
- 11 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥

調査区南壁断面



- 12 10YR4/1 黄灰色砂泥
- 13 10YR4/1 黄灰色砂泥
- 14 10YR4/1 褐灰色砂泥(微砂混 炭少含)
- 15 2.5Y5/1 黄灰色粘土(炭多含)
- 16 5Y4/1 灰色砂泥(微砂混)
- 17 2.5Y5/1 黄灰色砂泥(微砂混)
- 18 N4/1 灰色砂泥(微砂多混 炭少含)
- 19 N3/1 暗灰色粘土(木質炭、18層アロック含)
- 20 5G5/1 緑灰色粘土(17層が入り込んできたもの)
- 21 10YR4/1 褐灰色砂泥(17層の土少混)
- 22 10YR4/1 褐灰色砂泥(17層の土中混)
- 23 10YR4/1 褐灰色砂泥(17層の土多混)
- 24 10YR5/6 黄褐色粘質土(地山)
- 25 5G5/1 緑灰色粘土(地山)

溝40断面



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト(φ0.2~2cm礫、細砂混、弥生土器含)
- 2 10YR4/4 褐色シルト(φ0.2~2cm礫、細砂混)
- 3 10YR3/1 黒褐色シルト(φ0.2~1cm礫、微砂、細砂少混、腐植土、弥生土器含)
- 4 10YR3/1 黒褐色シルト(微砂混)
- 5 10YR4/2 灰黄褐色シルト(腐植土微、地山アロック混、弥生土器含)
- 6 2.5Y3/1 黒褐色シルト(φ0.2~0.5cm礫微、微砂、細砂少混)
- 7 2.5Y4/1 黄灰色シルト(φ0.2cm礫微量、地山アロック混)
- 8 N3/1 暗灰色シルト(φ0.2~1cm礫微量、微砂微量、炭化物微量含)
- 9 10YR5/6 黄褐色粘質土(地山アロックの落ち込み)
- 10 2.5Y3/1 黒褐色シルト(φ0.2~0.5cm礫、細砂多混、炭化物含)
- 11 2.5Y2/1 黒色シルト(細砂、微砂多混、炭やや多、自然木・加工木含)(底部に加工木、φ1~2cm地山アロック状多含 水の流れた形跡)
- 12 10YR4/1~3/1(黒褐色砂泥)
- 13 10YR3/1 黒褐色砂泥(10YR4/4 褐色砂泥)
- 14 2.5Y3/1 黒褐色砂泥

図80 調査区断面図 (1 : 80)

く2層に分かれ、上層は暗灰黄色泥土、下層は灰黄褐色泥土である。底部に微砂層などは堆積せず、明瞭な水流の痕跡はない。堆積の状況からは、土石流などを経ずに次第に埋まったと考えられる。埋土内から、土師器皿、須恵器甕、瓦器鉢、白磁椀、平瓦、木片、弥生土器などが少量出土した。土師器皿の時期は平安京X期中段階に属する。

溝2 中央部で検出した東西方向の素掘り溝である。溝1南肩の1.8～3.1m南側に位置し、東西両側は調査区外に延長する。方向は西で南に振れ、幅は一定でない。検出面での規模は、南北幅0.4～0.5m、深さ約0.2mである。断面形はU字形で、底部はほぼ平坦である。底部の標高は西端14.5m、東端14.4mで、やや東側に下がる。埋土は暗灰黄色砂泥である。埋土内から土師器皿がごく少量出土した。土器は小片のため時期は不明である。

柵19 中央部で検出した東西方向の掘立柱柵で、溝1と溝2のほぼ中央に位置する。検出した

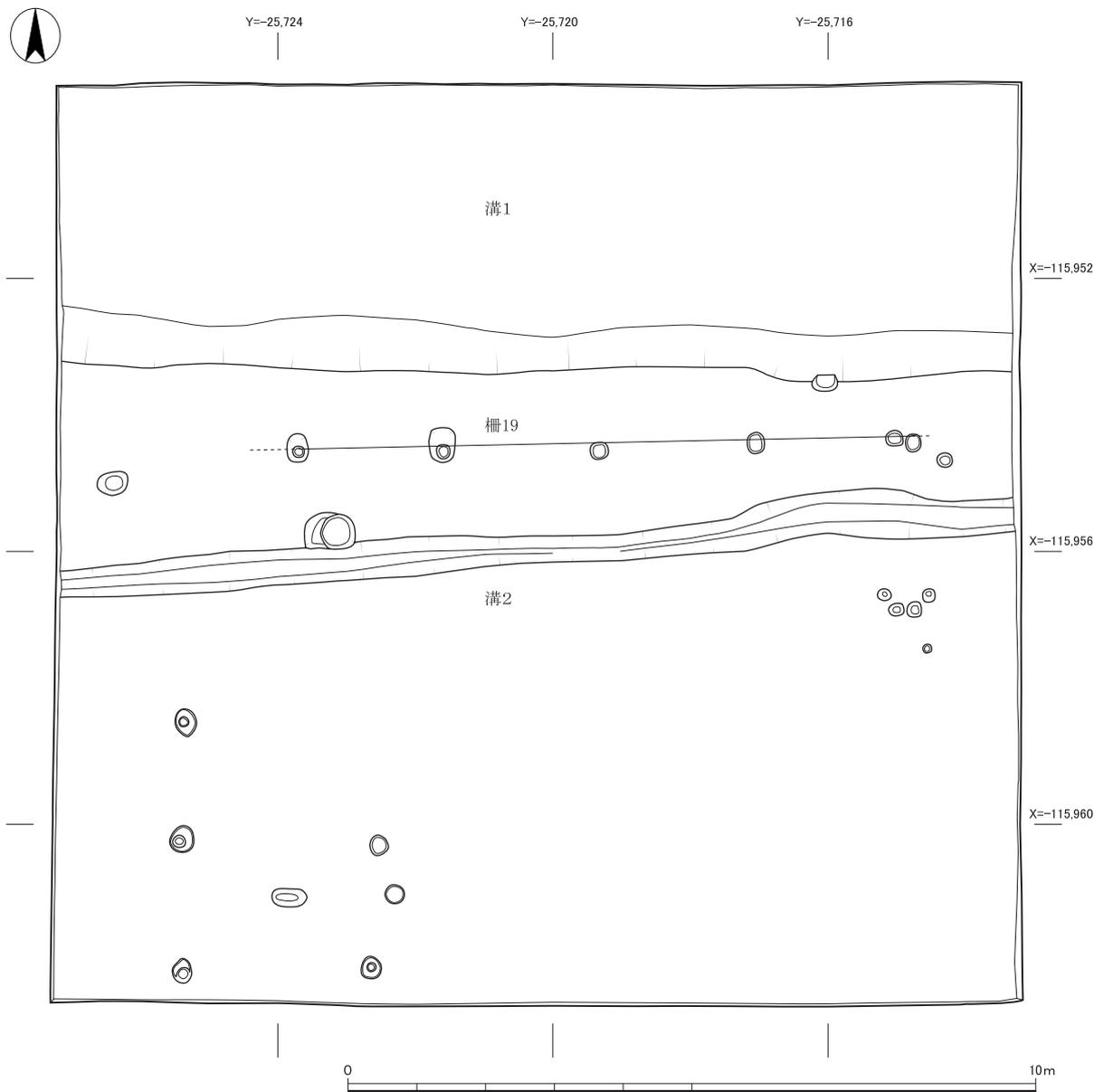


図81 中世以降遺構平面図 (1 : 100)

柱穴は5基で、検出長は8.6mである。方向は西で南にやや振れる。柱間の距離は、西から2.1m・2.2m・2.3m・2.0mで、2.2m前後で揃う。柱穴掘形は、円形または楕円形で、径0.3～0.4m、深さ約0.15mで、柱の径は約0.15mである。西端柱穴の底部標高は14.46m、東端柱穴標高は14.44mで、やや東側が低い。埋土は、暗灰黄色砂泥である。埋土内から土師器皿、須恵器甕、瓦器椀、弥生土器などがごく少量出土した。土器は小片のため時期は不明である。

(4) 弥生時代の遺構 (図82、図版14-2)

溝34 西部で検出した斜方向の素掘り溝である。方向は北東から南西で、南側は調査区外に延長し、北側は溝1によって上部が攪乱される。また上部は落込み30によって削平される。検出面での規模は、幅0.3～0.4m、深さ約0.5mである。断面形は箱形で、底部はほぼ平坦である。底部の標高は北端13.8m、南端13.85mで、北側にわずかに下がる。埋土は大きく3層に分かれ、上層は黒褐色砂泥で、中層は黒褐色砂泥で褐色砂泥ブロックが混在し、下層は黒褐色砂泥である。埋土の中・上層は固く締まる。堆積の状況から、上部は埋め戻されて整地された状況が窺える。埋土中から弥生土器壺・甕・高杯などがごく少量出土した。

溝35 南部で検出した南北方向の素掘り溝で、南側は調査区外に延長する。上部は落込み30に削平される。検出面での規模は、幅0.45m、深さ約0.1mである。断面形は箱形で、底部はほぼ平坦である。底部の標高は北端14.2m、南端14.1mで、南側にわずかに下がる。埋土は褐灰色砂泥である。埋土中から遺物は出土していない。

溝40 (図版15-2・16-1) 中央部で検出した斜め方向の素掘り溝である。方向は北東から南南西で、南側は緩やかに東側に屈曲する。南北両側は調査区外に延長し、北側は溝1によって上部が削平される。検出面での規模は、幅が中央部で4.4m・南部で2.8m、深さは約1mである。断面形は下部がU字形で上部は大きく開き、底部はほぼ平坦である。底部の標高は北端・南端共に13.25mである。埋土は大きく2層に分かれ、上層は黒褐色砂泥で下部に土器類・炭を多く含む薄い間層が認められる。下層は暗灰色泥土で遺物は少ない。底部に砂層などは堆積せず、明瞭な水流の痕跡はない。堆積の状況から、下部は次第に埋まったと考えられ、上部の凹みとして残った部分は人為的に埋め戻されて整地された状況が窺える。各層に含まれる遺物は時期差がほとんど認められない。埋土上層から弥生土器壺・甕・高杯・器台、木片などが少量出土した。

落込み30 全域で検出した南北方向の落込みである。東西両肩を検出したが、さらに南・東側は調査区外に続く。北側は溝1に上部が攪乱される。東西両肩はなだらかに落込み、底部は平坦である。深さは0.2～0.25mである。埋土は大きく2層に分かれ、上層はにぶい黄灰色砂泥、下層は黒褐色砂泥である。遺物は上層に多く、下層は少ない。埋土は溝40上層と類似し、溝40と連続して形成された窪みと考えられる。埋土中から弥生土器壺・甕・鉢・高杯・器台などが出土した。

土坑14 東端で検出した土坑である。西側を検出し、東側は調査区外に続く。上部は落込み30に削平される。検出面での規模は、南北幅1.25m、深さ約0.4mである。埋土は、にぶい黄褐色砂泥である。埋土中から弥生土器壺・甕などが少量出土した。

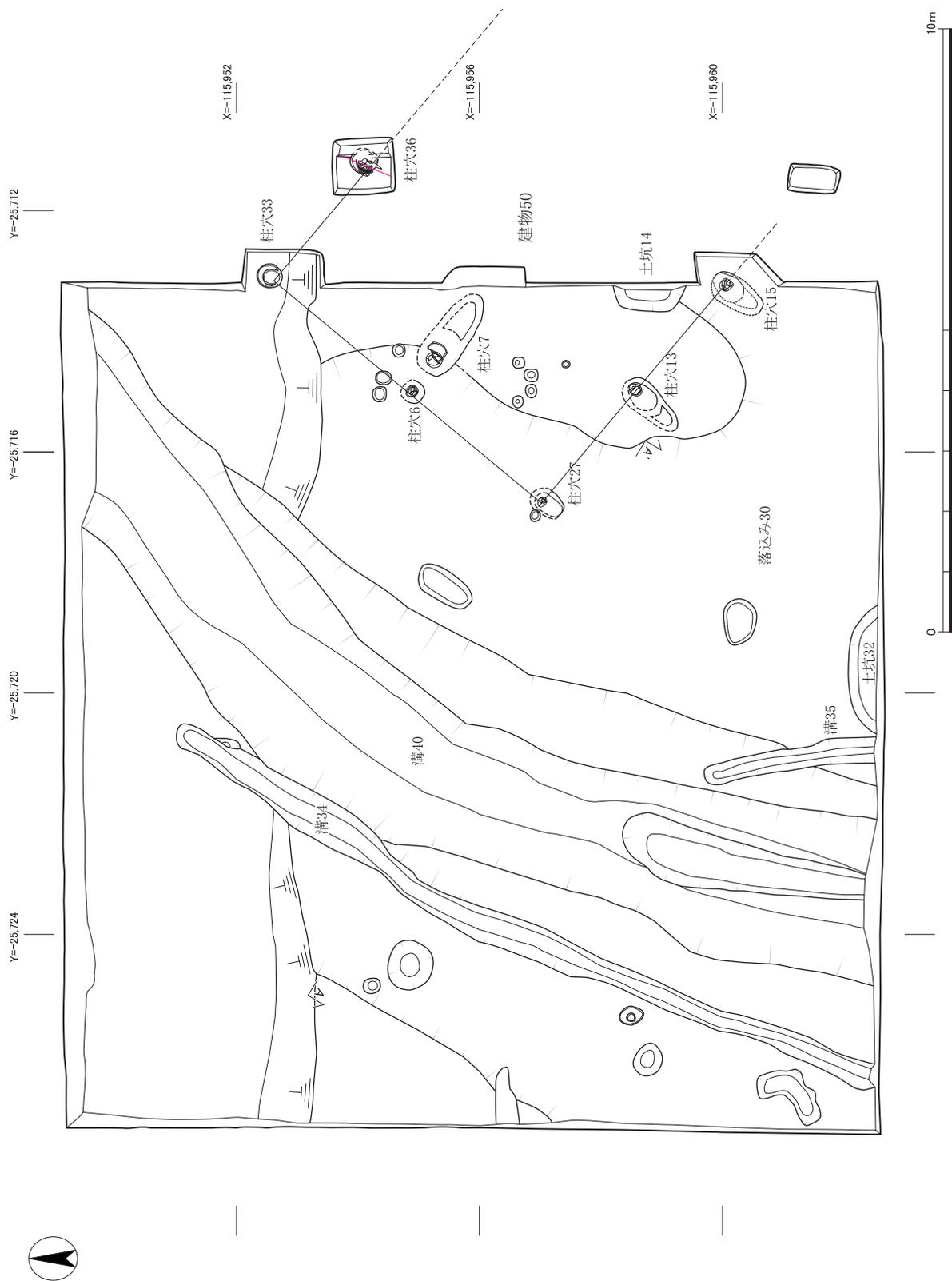


图82 弥生時代遺構平面図 (1 : 100)

土坑32 南端で検出した土坑である。北側を検出し、南側は調査区外に続く。上部は落込み30に削平される。検出面での規模は、南北幅1.6m、深さ約0.1mである。埋土は黄褐色砂泥である。埋土中から弥生土器壺・甕・鉢・器台などが少量出土した。

建物50 (図83～11、図版15～17) 東部で検出した掘立柱建物である。東側は調査区外に継続し、北側は溝1、南・西側上部は落込み30によって削平される。柱穴は7箇所検出し、北西から南東方向に主軸を持つ建物と推定できる。建物規模は、北東から南西方向が2間(6m)・北西から南東方向が2間(4.8m)以上である。柱間寸法は、梁間が3m等間、桁行が西から2.4m・2.35mで、梁間の妻柱の内側0.6mに柱穴が位置する。建物主軸は北で西へ49度振れる。

以下各柱穴について、左回り順に述べる。

柱穴36は、上部が攪乱によって削平される。掘形は円形で、径0.45m・深さ0.5m残存し、掘形壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底部は平坦である。柱材は円形で、径0.2m、長さ0.43m残存する。柱底部に礎板などはない。掘形埋土は黄灰色砂泥で、柱周りは黒褐色粘質土である。柱は北東側に傾き、掘形南西壁はえぐられ、柱を抜き取る際に北側に力が加わった状態を呈する。掘形埋土中から弥生土器甕片がごく少量出土した。

柱穴33は、上部が溝1によって削平され、柱材は残存していない。掘形は円形で、径0.45m・深

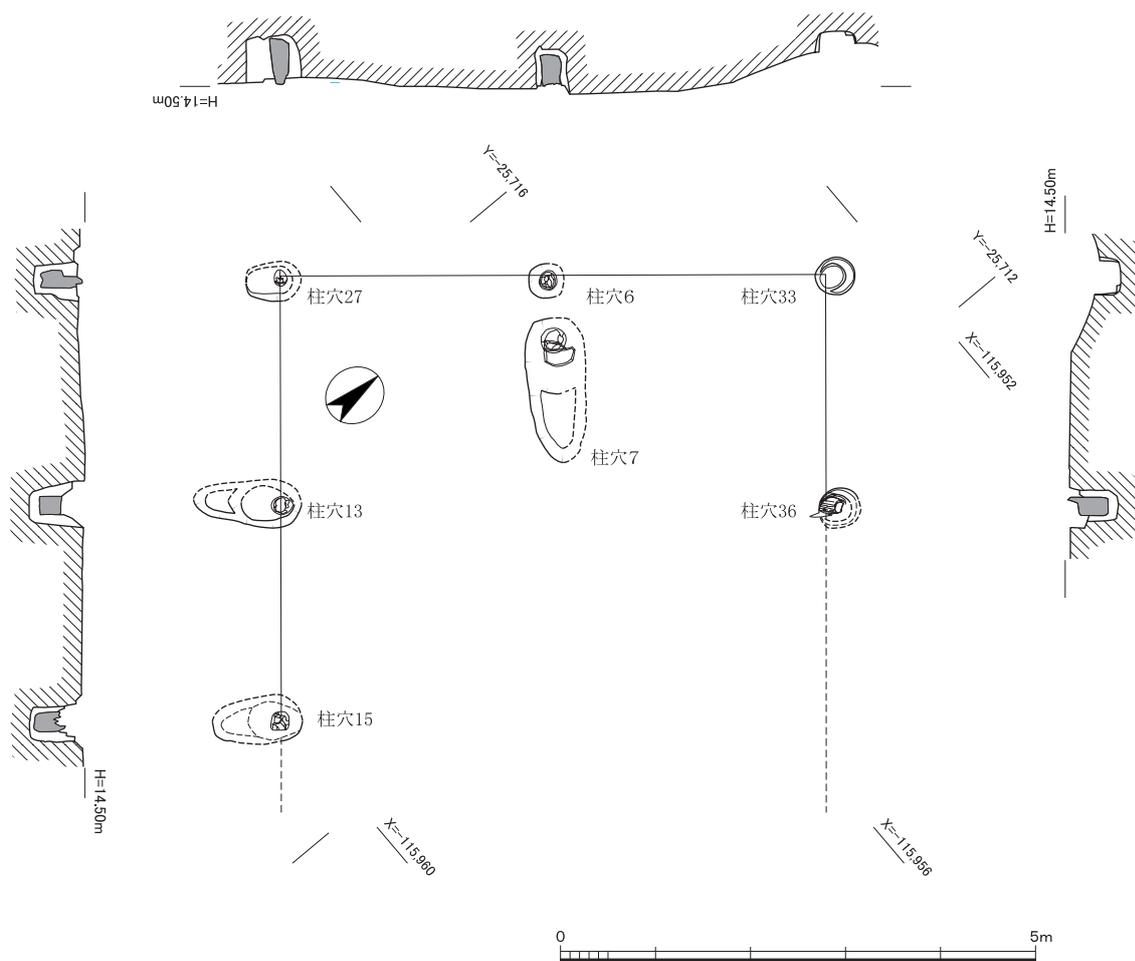


図83 建物50実測図 (1 : 80)

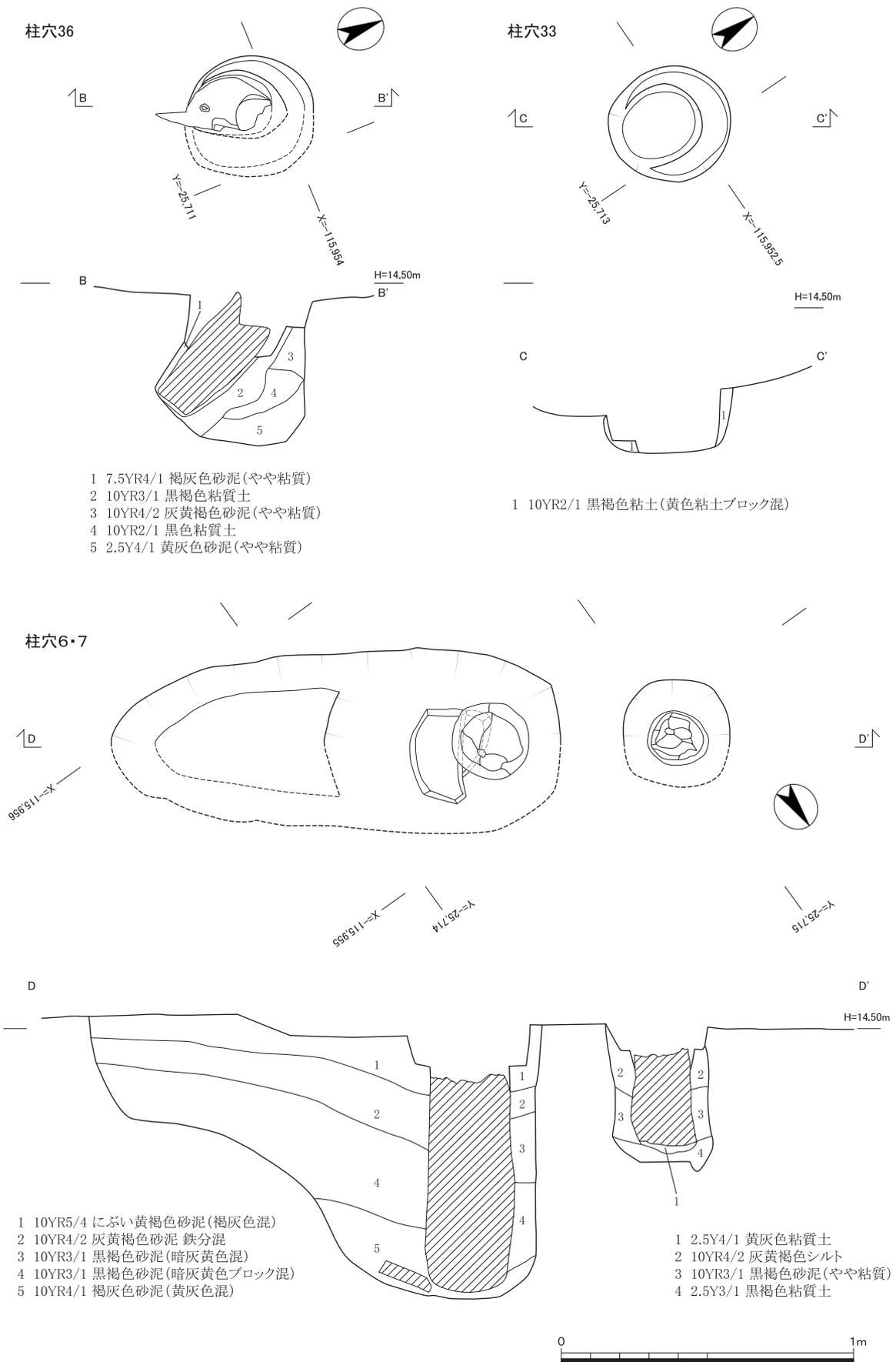
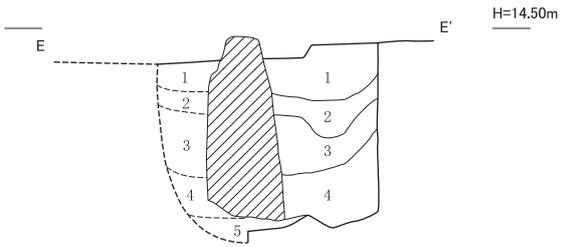
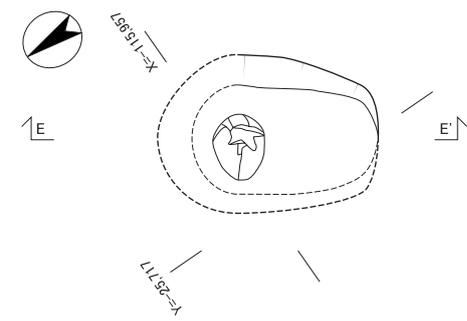


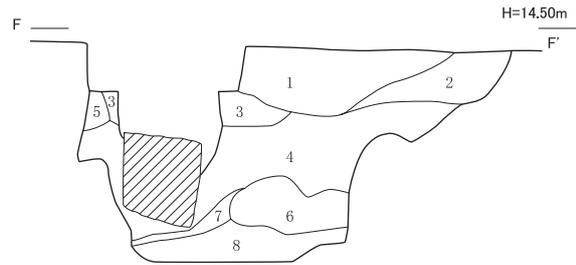
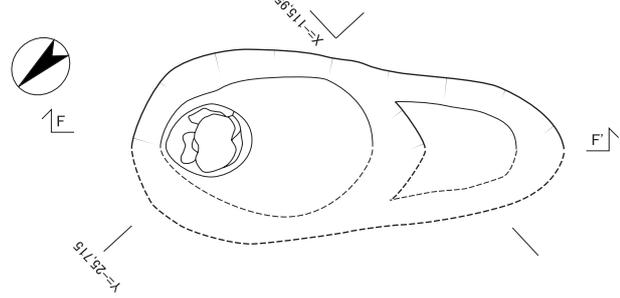
図84 建物50柱穴実測図1 (1:20)

柱穴27



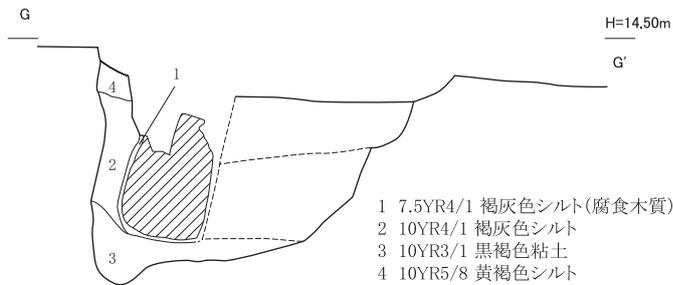
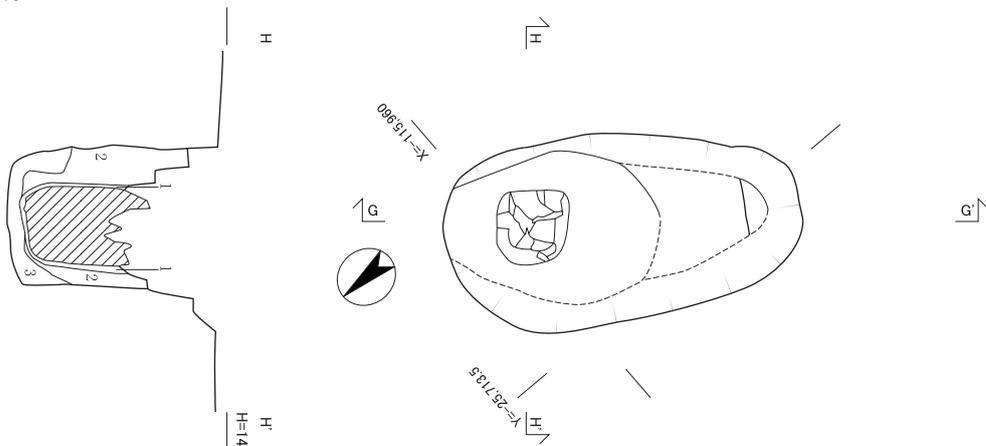
- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 3 10YR3/1 黒褐色砂泥
- 4 10YR3/1 黒褐色砂泥
- 5 2.5Y3/1 黒褐色粘質土

柱穴13



- 1 10YR4/4 褐色砂泥
- 2 10YR5/2 灰黄褐色砂泥
- 3 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
- 4 10YR3/1 黒褐色砂泥(黄褐色泥土混)
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
- 6 2.5Y5/3 黄褐色砂泥(粘質)
- 7 2.5Y4/1 黄灰色砂泥(暗灰黄色砂泥混)
- 8 2.5Y3/1 黒褐色砂泥

柱穴15



- 1 7.5YR4/1 褐灰色シルト(腐食木質)
- 2 10YR4/1 褐灰色シルト
- 3 10YR3/1 黒褐色粘土
- 4 10YR5/8 黄褐色シルト



図85 建物50柱穴実測図2 (1:20)

さ0.22m残存し、柱痕跡は径0.28mである。掘形埋土は黒色粘質土で黄色粘土ブロックが混在する。掘形埋土中から遺物は出土していない。

柱穴6は、掘形が円形で、径0.37m・深さ0.47mである。掘形壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底部は平坦である。柱材は円形で径0.2m、長さ0.34m残存する。柱底部に礎板などはない。掘形埋土は上部が黄灰色粘質土で、下部が黒褐色砂泥である。掘形柱あたり埋土中から弥生土器壺小片がごく少量出土した。

柱穴7は、掘形が楕円形で、長軸1.55m・短軸0.6mと推定でき、深さ0.96mである。掘形北西壁はほぼ垂直に立ち上がり、南東壁面は南東側から北西側にかけて次第に深くなり、中ほどに段があり、底部は平坦である。柱材は円形で径0.3m、長さ0.75m残存する。柱底部には0.32m×0.19m・厚さ0.04mの礎板を東側から斜めに挿入する。掘形埋土は上部がにぶい黄褐色砂泥、下部が黒褐色砂泥で暗灰黄色粘土ブロックが混在した。埋土上部は固く締まる。掘形柱あたり埋土中から弥生土器小片がごく少量出土した。

柱穴27は、上部が落込み3によって削平される。掘形は隅丸長方形で、長軸0.55mと推定でき、短軸0.38mで、深さ0.5m残存する。掘形壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底部は平坦で、底部北端に柱を据える。柱材は円形で径0.2m、長さ0.44m残存する。柱底部に礎板などはない。掘形埋土は上部が灰黄褐色砂泥、下部が黒褐色砂泥である。埋土上部は固く締まる。掘形埋土中から弥生土器甕小片がごく少量出土した。

柱穴13は、上部が落込み3によって削平される。掘形は楕円形で、長軸1.12m、短軸0.5mと推定でき、深さ0.58m残存する。掘形北東壁面はほぼ垂直に立ち上がり、南西壁面は南西側から北東側にかけて斜めとなり、中ほどに段があり、底部は平坦である。柱材は円形で、径0.2m、長さ0.23m残存する。柱底部に礎板などはない。掘形埋土は上部が褐色砂泥、下部が黒褐色砂泥で黄褐色泥土ブロックが混在する。埋土上部は固く締まる。掘形埋土中から弥生土器壺・甕小片、柱あたりから甕小片がごく少量出土した。

柱穴15は、上部が落込み3によって削平される。掘形は楕円形で、長軸0.95m、短軸0.5mと推定でき、深さ0.62m残存する。掘形北東壁面はほぼ垂直に立ち上がり、南西壁面は南西側から北東側にかけて斜めとなり、底部はほぼ平坦である。柱材は円形で径0.22m、長さ0.33m残存する。柱底部に礎板などはない。掘形埋土は上部が黄褐色砂泥、下部が黒褐色粘土である。埋土上部は固く締まる。埋土中から遺物は出土していない。柱は南西側に傾き、柱を抜き取る際に南側に力が加わった状態を呈する。掘形埋土中から弥生土器壺・甕小片がごく少量出土した。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は、整理箱にして12箱出土した。土器が6箱、木製品が6箱である。遺物の時期は、弥生時代と中世以降のものがあり、弥生時代が大半を占める。弥生時代の遺物には、壺・甕・鉢・高杯・器台と木製品があり、溝40・落込み30から集中して出土した。木製品は建物50柱穴から出土した。土器類はほとんどが小片で、図示できたものは少ない。中世以降の遺物には、土師器、須恵器、瓦器、磁器があり、溝1などから出土した。土器類は、ほとんどが小片で図示できたものは少ない。

(2) 弥生時代の遺物（図86・87、図版18・19）

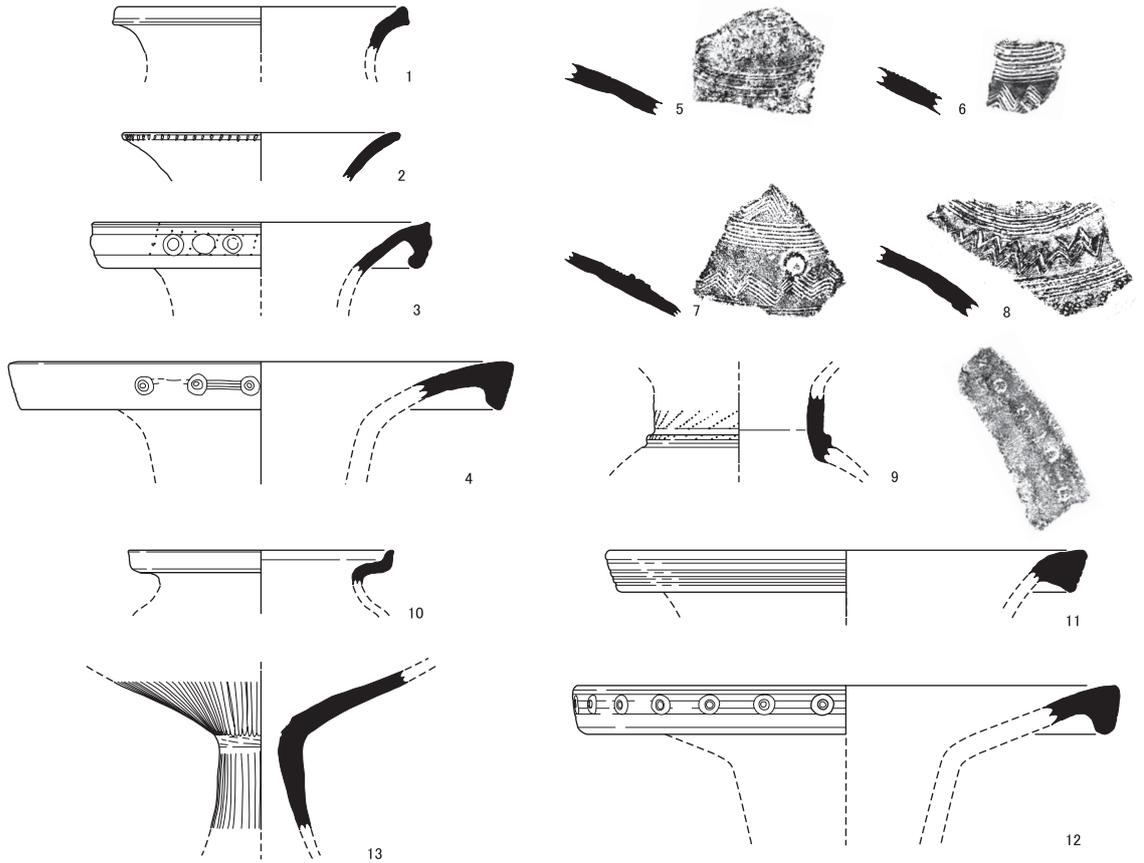
落込み30上層出土土器（1～12） 1は壺の口縁部である。口縁部は外反し、端部は上下にやや拡張する。2は壺の口縁部である。口縁部は外反し、端部は丸く収め、端面にキザミを施す。口縁部内外面はヨコナデを施す。3は壺または器台の口縁部である。口縁部は緩やかに外反し、端部は粘土紐を付加して下方に垂下させる。端面には列点文を施した後に竹管円形浮文を3個1単位で貼り付ける。口縁部内外面はヨコナデを施す。4は壺または器台の口縁部である。口縁部は緩やかに外反し、端部は下方に垂下する。端部外面に凹線文を施し、その上に竹管文を施す。磨滅が著しく、調整不明。5～8は壺の肩部である。5は櫛描直線文の上に列点文を施す。内面は指で押さえた後、斜方向ハケを施す。6は櫛描波状文の上に櫛描直線文を施す。内面は指オサエの後、斜方向ハケを施す。7は櫛描波状文と櫛描直線文を交互に施し、竹管円形浮文を貼り付ける。内面はオサエ後、斜方向ハケを施す。8は外面に櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描直線文の下に列点文を施す。内面は指オサエ後、斜方向ハケを施す。9は壺の頸部である。口縁部は筒状をなし、頸部と胴部の間に凸帯を巡らせる。頸部外面・凸帯上には列点文を施す。頸部内外面・胴部内面ヨコナデを施す。10は甕で、口縁部は屈曲し、端部は立ち上がる。口縁部内外面ヨコナデを施す。11は壺または器台の口縁部である。口縁部は外反し、端部は拡張し、端面に4条の凹線文を施す。口縁部上面には竹管文を押捺した後に赤色顔料を施す。胎土は褐色を呈する。12は壺または器台の口縁部で

表16 遺物概要表

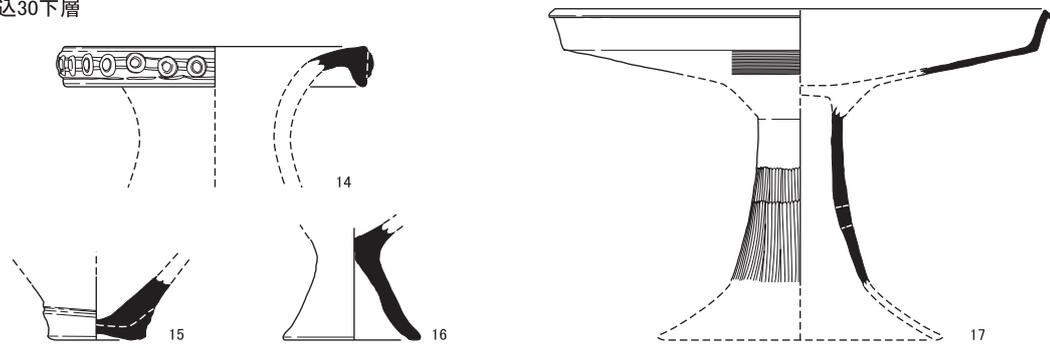
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器、木製柱	13箱	弥生土器21点、柱根6点、礎板1点	0箱	6箱
中世以降	土師器、須恵器、瓦器	2箱	土師器3点	0箱	1箱
合計		15箱	31点（8箱）	0箱	7箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

落込30上層



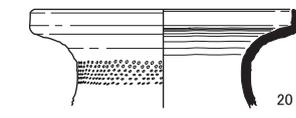
落込30下層



溝34



溝40



溝1

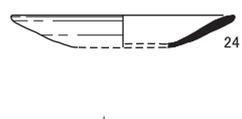
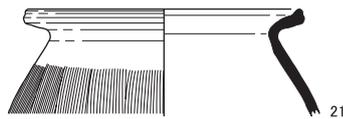
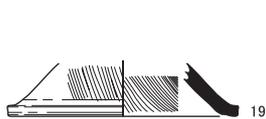
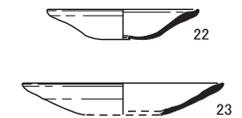


図86 出土土器拓影・実測図（1：4）

ある。口縁部は外反し、端部は下方に垂下する。端部外面に凹線文を施し、その上に竹管円形浮文を貼る。磨滅が著しく、調整不明。13は皿形高杯で、杯部は緩やかに外上方に伸び、脚柱部は下方でやや開く。杯部内面はミガキ、外面はタテミガキ。柱部内面はオサエ、外面はタテミガキを施す。

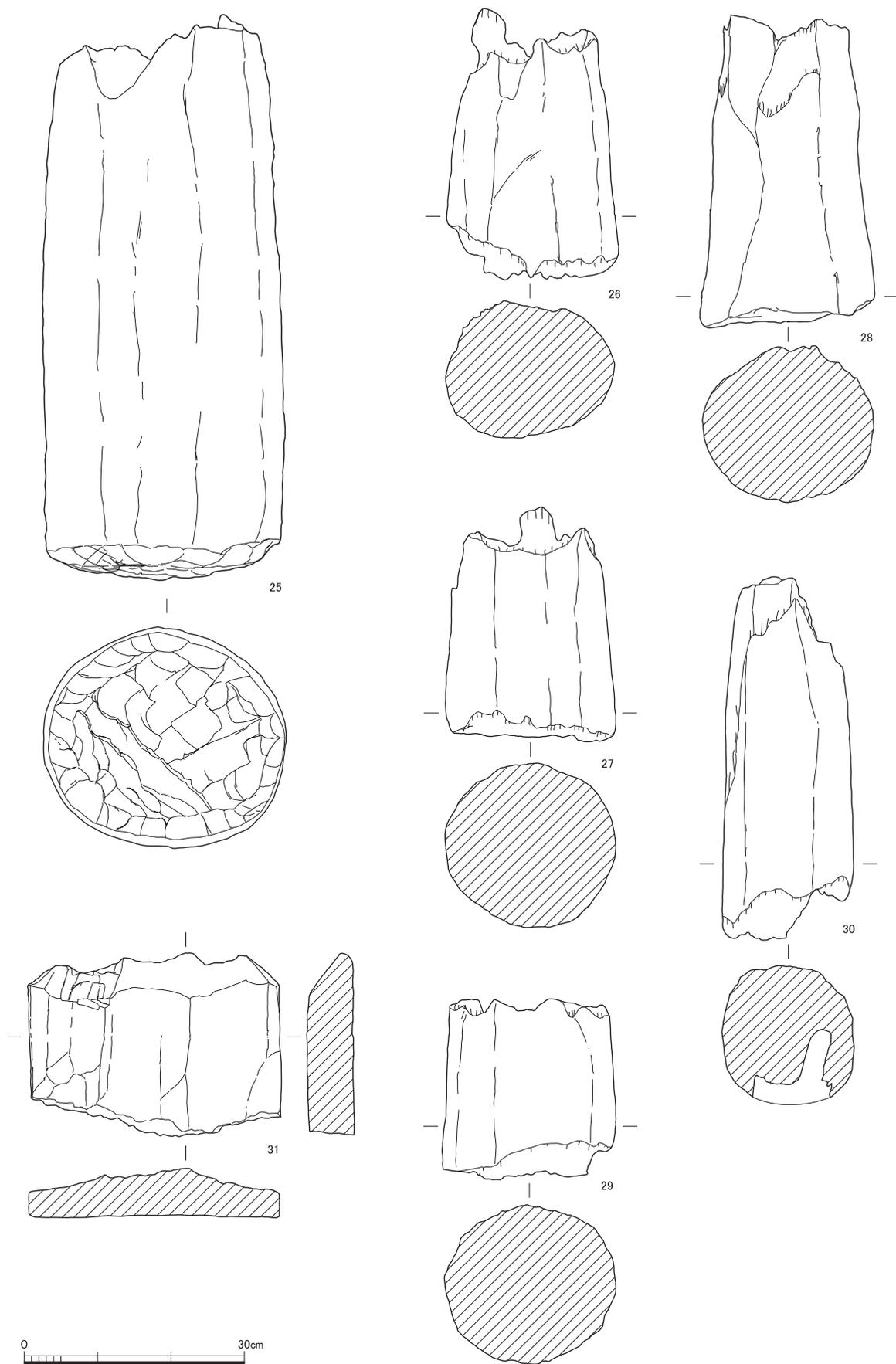


图87 出土木製品実測図（1：8）

落込み30下層出土土器(14~17) 14は壺または器台の口縁部である。口縁部は外反し、端部は下方に垂下する。端部外面に凹線文を施した後に竹管円形浮文を貼り付ける。磨滅が著しく、調整不明。15は甕底部である。中央は若干凹む。体部下部に粘土を巻き付けて底部とする。底部外面は繊維圧痕が残り、体部内外面ナデを施す。16は小型高杯脚部である。脚裾部は大きく開き、端部は内側に拡張する。内面は上半絞り目・下半ナデ、外面はナデを施す。17は皿形高杯である。杯部は緩やかに外上方に伸び、口縁部は短く立ち上がり、端部は外方へ拡張する。脚柱部は開き気味で、円形透かしがある。杯底部外面オサエ後ナデ、底部内面・口縁部内外面はヨコナデ。柱部内面は絞り、外面はタテミガキを施す。

溝34出土土器(18・19) 18は高杯の杯部と脚部の接合部である。脚部外面に凹線文を施す。内面は絞り、外面はタテミガキを施す。19は高杯脚部である。裾端部やや拡張する。内面はハケ、外面タテミガキを施す。

溝40出土土器(20・21) 20は甕口縁部である。口縁部は大きく外反して開き、端部は立ち上がり、受け口状を呈する。頸部外面に列点文、口縁部内面にヨコハケを施す。21は甕口縁部である。口縁部は屈曲し、端部は上方に拡張し、端面に凹線文を施す。体部内面ケズリ、外面ハケを施す。

建物50出土木製品(25~31) 25は柱穴7出土柱材で、残存長77cm・最大径33cmである。上部は腐食して先細り、底部は平坦である。調整は側面が幅8cm前後のタテケズリ、底部が外側から内側向けに幅5cm程度のチョウナ状の工具によるケズリが施される。材質はコウヤマキである。26は柱穴6出土柱材で、残存長37cm・最大径23cmである。上部・底部は腐食する。調整は不明。材質はコウヤマキである。27は柱穴15出土柱材で、残存長32.5cm・最大径23cmである。上部は腐食して先細り、底部も腐食する。調整は不明。材質はコウヤマキである。28は柱穴36出土柱材で、残存長約36cm・最大径23.5cmである。上部は腐食して先細り、底部も腐食する。調整は不明。材質はコウヤマキである。29は柱穴13出土柱材で、残存長25cm・最大径23.5cmである。上部・底部は腐食する。調整は不明。材質はコウヤマキである。30は柱穴27出土柱材で、残存長50cm・最大径18cmである。上部は腐食して先細り、底部も腐食する。調整は不明。材質はコウヤマキである。31は柱穴7出土木製礎板で、長さ25cm・幅37.5cm・最大厚さ6.5cmである。上面が台形の板材で、片側に傾斜を付ける。傾斜面を柱の底部に差し込む。調整は上面・斜面が幅4cm前後のケズリ、側面・裏面は割り面で不調整である。木取りは柁目材で木表を上面とする。材質はヒノキである。

(3) 中世の遺物(図86、図版18)

溝1出土土器(22~24) 22~24は土師器である。22は小型皿で、口径8.0cm・器高1.6cm、23・24は中型皿で、24は口径11.8cm・器高1.7cm、23は口径10.6cm・器高1.7cmである。いずれも底部は平底で、口縁部は緩やかに屈曲して外反気味に開く。口縁端部は22が立ち上がり、23・24は丸くおさめる。底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ、底部内面はナデ。口縁部内面・外面上位はヨコナデ。白色系土師器である。

5. まとめ

(1) 遺構の変遷 (図88)

今回の調査では、弥生時代から中世の遺構を検出した。ここでは、周辺の調査成果も含め、各時代ごとに変遷をまとめる。

弥生時代

調査で検出した弥生時代の遺構には、建物50・溝40・落込み30などがある。これらの遺構の後関係は、重複関係から建物50・土坑14がもっとも古い遺構である。いずれも落込み30によって上面が削平される。溝40と落込み30の埋土は類似したため、落込み30は溝40の氾濫部分と考えられる。中央部の溝34・35は落込み30・溝40上に掘られ、落込み30・溝40が埋没した後に造られた遺構と考えられる。

溝40・落込み30の時期は、埋土中の土器などから弥生時代中期後葉に比定できる。建物50の時期は、柱穴出土遺物が少量・小破片のため詳細な時期は特定できないが、溝40・落込み30と同時期かあるいは若干古いと推定できる。

本調査地の東側での調査(20次調査)では、建物50から約20m東側で棟持柱付掘立柱建物(SB001)を検出した。SB001の建物方向は建物50と同様であるが、角度は若干北に振れ、柱筋も揃わない。今回調査の建物50とSB001の周辺では当該期の遺構がほとんど検出されておらず、当該期の遺物の出土量もあまり多くない。また、住居地域と別区画に位置し、非日常的な空間と考えられる。

溝40は、断面が逆台形を呈すること、底部が平坦なこと、水流の痕跡が認められないこと、方向が当地域の自然流路の方向である北西から南東とは異なることなどから、自然流路とは考えがたく、人工的に掘削した溝と推定できる。溝40は、北側調査地(17次調査)で検出したSD2の延長にあたる。17次調査の報告では、SD2の北西側に竪穴住居が集中し、溝は集落の周囲を取り囲む環壕と推定されたが、溝の東側の22次調査でも竪穴住居が検出されたことから、集落内を区画する溝と考えた方が妥当といえる。

今回の調査地近辺では、棟持柱付建物が2棟並ぶことや、北側の17次調査で大壁建ち大型隅丸方形竪穴住居SH4(一辺11m)、22次調査では工房の可能性のある大型円形竪穴住居104が存在することなどから、集落の中心の可能性は高い。ただ、遺跡内での住居・墓の分布は散発的で、集落内における住居域・墓域・生産域などの構造については、不明な点が多い。

桂川右岸北部地域の弥生時代から古墳時代の遺跡は、水系と地形によって旧寺戸川北東部地域(旧西土川流域と呼称する。)、旧寺戸川流域(久々相遺跡・野田遺跡・渋川遺跡・東土川西遺跡)・旧石田川流域(森本遺跡・石田遺跡)に分かれる⁶⁾。大藪遺跡は旧西土川流域に含まれ、下津林遺跡・上久世遺跡・中久世遺跡・大藪遺跡・東土川遺跡などの遺跡が北西から南東に位置する。これらの遺跡は、北西から南東方向に流れる旧西土川に沿った微高地に営まれた集落と捉えられる。

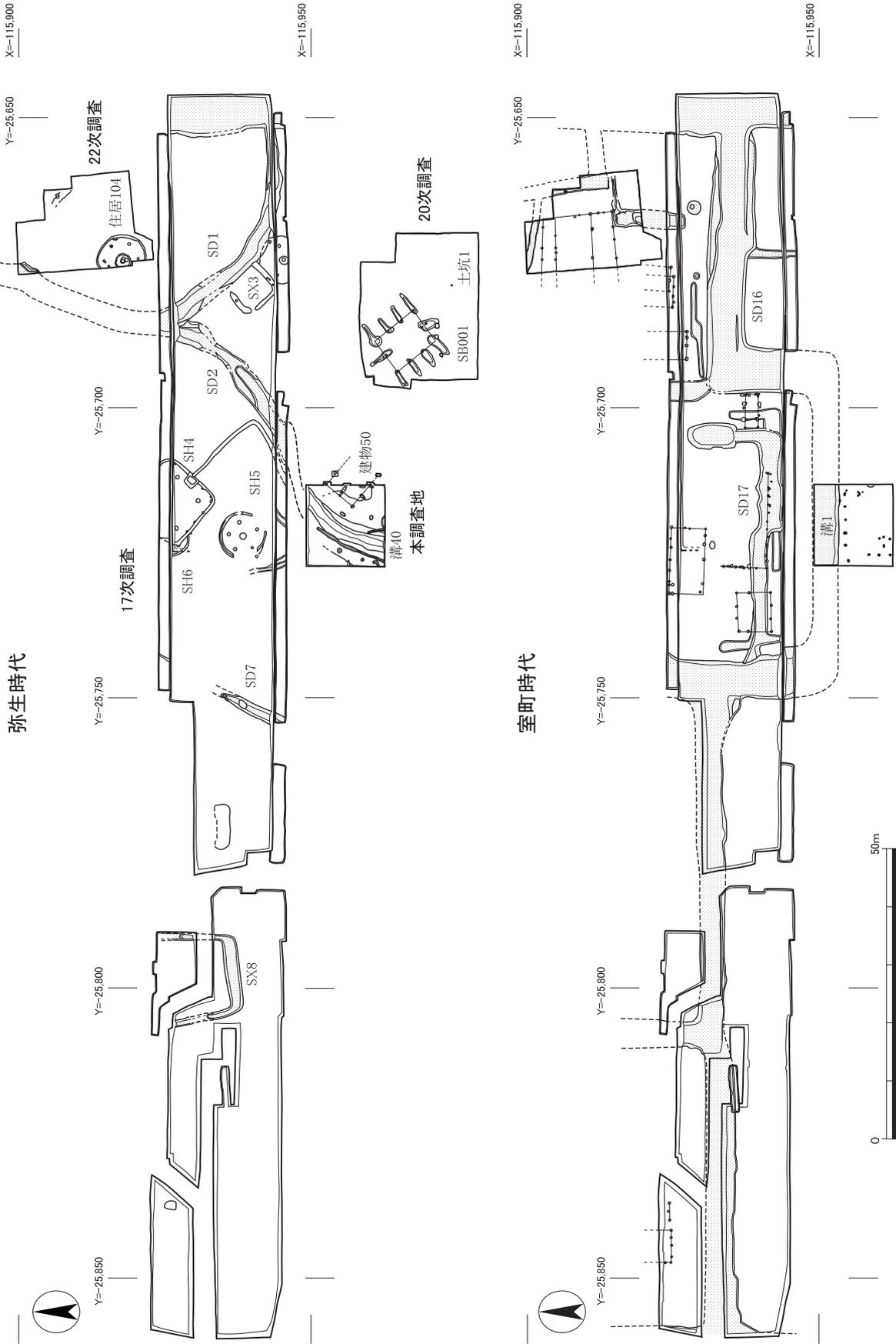


図88 調査地周辺遺構配置図 (1 : 1,000 調査次数は表14・図78に準ずる)

これらの遺跡群の内、中久世遺跡は縄文時代晩期・弥生時代前期から後期・古墳時代まで継続しており、旧石田川流域の森本遺跡と並んで当地域の拠点集落と考えられる。今回の調査は、桂川右岸遺跡群の動向と構造を明らかにする上で、大きな成果が得られた。

長岡京期

今回の調査では長岡京期の遺構・遺物は検出されていない。調査区北西側では（17次調査）掘立柱建物・柵・井戸・溝など、調査区東側では掘立柱建物3棟（2間×3間東西棟）・溝などが検出された。今回の調査地と周辺の遺構面はさほど変わらず、削平されたとは考えがたく、遺構がない理由は不明である。

室町時代

調査で検出した室町時代の遺構には、溝1・溝2・柵19などがある。溝1は東西方向の溝で、南側の柵19は同方向であることから、溝1に伴う可能性が高い。溝1・柵19の南側では当該期の顕著な遺構は確認できなかった。時期は、いずれも埋土から出土した土器から室町時代である。

溝1は、本調査地北側の調査（17次調査）で検出した東西溝SD16と規模が同様であることから、この溝の延長部分と推定できる。この関係を図面上で復元すると東西溝SD16は、幅約60mにわたって、南側へ約15m張り出す。張り出し部の区画は、東西幅45m・南北25m以上と推定できる。

これらの溝と同様の溝が、調査地東側の18次調査・23次調査・24次調査・25次調査でも検出され、溝内部で検出した建物・井戸などの遺構の存在から、同時期の屋敷が連続して連なる状況が想定される。

（2）弥生時代掘立柱建物について（図89）

今回の調査で検出した建物50について、その特徴を整理する。

規模と構造

建物50は、梁間2間・桁行2間以上の建物で、西北側妻柱の内側0.6mに屋内棟持柱が位置し、外側には独立棟持柱は付かない。柱穴掘形は楕円形もしくは隅丸長方形を呈し、長軸の片方の壁がほぼ垂直に立ち上がり、もう片方が斜めもしくは数段のテラスを持つ「斜坑柱掘形」または「斜L字形掘形」と呼ばれる形状を呈する。掘形の斜路は、棟持柱を除き建物外側から内側に向かって掘られる。棟持柱の掘形は、建物内側から外側に向けて斜路が付く。柱穴の深さは0.5～0.8mと深く、掘形は長い柱を落とし込みによって立てるのに適した形状を持つ。側柱の径は約0.2mで、棟持柱の径は約0.3mと一回り太く、棟木の荷重を受けるためと考えられる。

また、建物の建て替え痕跡は確認できず、短期間で廃絶したと考えられる。建物の周辺には溝・土坑・柱穴などの同時期の遺構が存在せず、溝・柵などの遮蔽施設も見あたらない。

20次調査検出建物との比較

建物50とSB001と比較する。SB001建物規模は、梁間2間・桁行3間で、梁間数は建物50と同様である。ただ、柱間寸法は梁間で0.2m、桁行で0.4mほど広く、SB001の方が規模が一回り大きい。側柱の径も、SB001の方が約0.1mほど太い。ただし、棟持柱はSB001の方が細い。棟持柱の

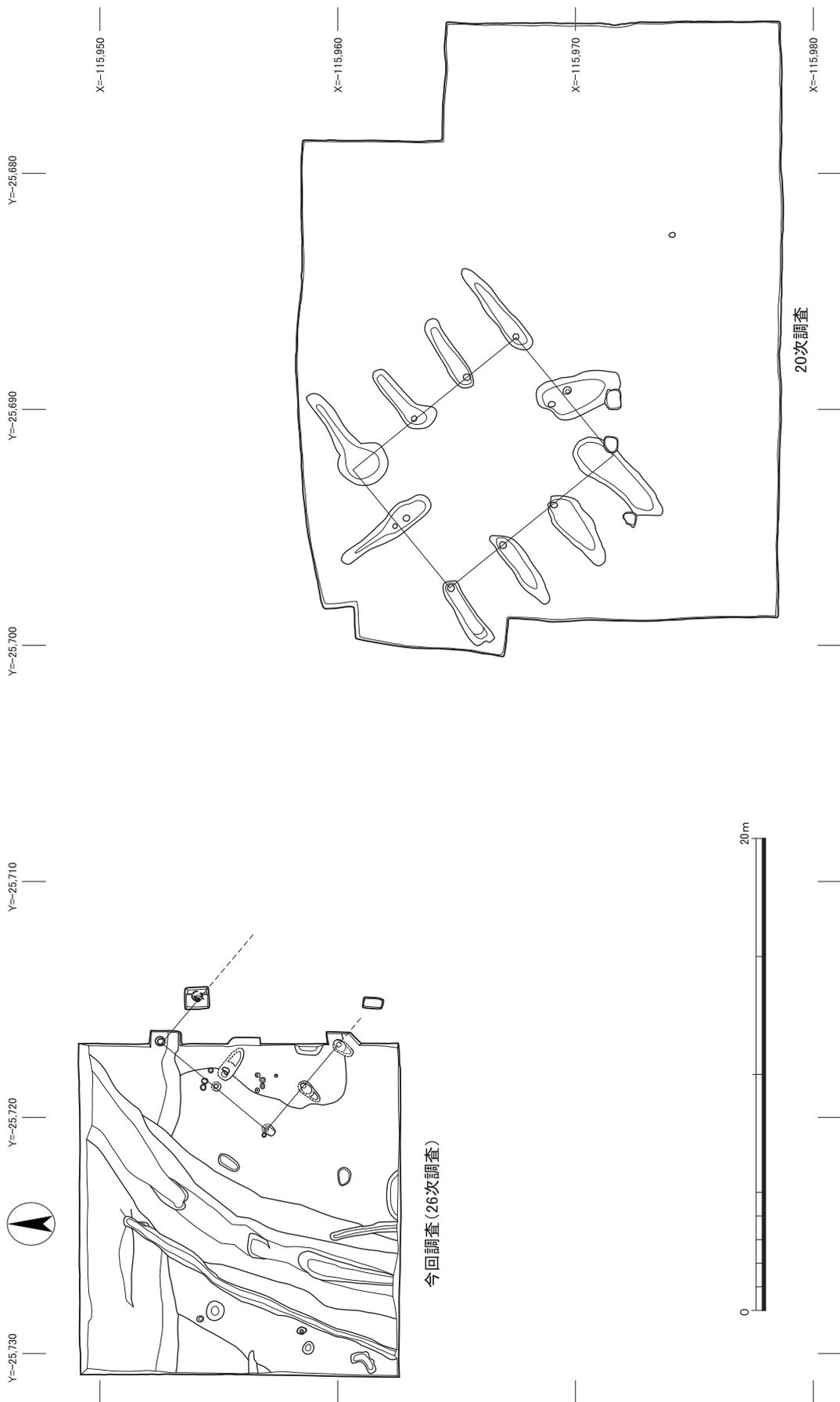


図89 20・26次調査区配置図 (1 : 250)

位置は、SB001が建物外に近接して立つのに対し、建物50は屋内であり、構造が大きく異なる。掘形は同様の形状を呈し、斜路の方向も同様である。柱材の樹種は、建物50が全てコウヤマキであるのに対し、SB001はコウヤマキ5本・ヒノキ3本とやや異なる。

建物の時期はいずれも弥生時代中期後葉と考えられ、方向からもこれらの建物が並存していた可能性が高い。ちなみにSB001柱材は、年輪年代法によって紀元後51年+aとされた。

また、建物50柱根25の年輪年代法による年代測定を試みたが、コウヤマキのため、年輪データの蓄積が少なく年代は得られなかった。⁷⁾

検出建物の特徴

弥生時代の棟持柱付建物は、日本全国で約80例検出されている。⁸⁾これらと大藪遺跡検出建物を比較すると、規模としては、梁間が6m、6.4m、SB001床面積が53.76㎡で、比較的大型に属する。梁間は1間のものが多いが、2間のものは少ない。また棟持柱の位置は、妻外側に付くものが大半を占める。屋内に棟持柱がある場合は、妻外側にも対応する独立棟持柱が付くものが多く、屋内だけに棟持柱が付くものは確認されていない。さらに、大藪遺跡検出建物では、棟持柱の位置が妻柱から比較的接するのも特徴といえよう。

森岡秀人氏によって、弥生時代の棟持柱付建物が分類された。⁹⁾この分類によると、滋賀県伊勢遺跡検出例を指標とした「伊勢型」は、梁間1間・桁行5間前後の規格的長方形プランを持つ大型建物で、屋内外に棟持柱が付き、側柱の掘形が隅丸長方形で斜路を持つと定義づけられる。大藪遺跡検出の2棟の棟持柱付建物は、規模や棟持柱の位置に相違点が見られるものの、おおむねこの類型に属する。「伊勢型」建物は、弥生時代後期には主流となり、後期後半に定型化を遂げるとされ、大藪遺跡検出建物とほぼ合致する。

引用・参考文献

- 1) 西大條 哲ほか「大藪遺跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』2000年、京都市埋蔵文化財研究所
- 2) 小泉信吾・千喜良淳『大藪遺跡発掘調査報告書』2002年、大藪遺跡発掘調査団
小泉信吾「大藪遺跡の大型掘立柱建物」『乙訓文化』58号、2002年、乙訓の文化遺産を守る会
- 3) 西森正晃『大藪遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-32、2006年、同研究所
- 4) 森岡秀人「山城地域」『弥生土器の様式と編年』1990年、木耳社
- 5) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年研究」『研究紀要 第3号』1996年、
- 6) 國下多美樹「野田遺跡の評価をめぐって-桂川右岸北部における遺跡の展開-」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第62集(第1分冊)』2004年、向日市埋蔵文化財センター
- 7) 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター年代学研究室に依頼して、暦年標準パターン群とのクロスデーティングを行ったが、照合ができなかった。
- 8) 梅本康広「中海道遺跡第32次(3NNANK-32地区)~中海道遺跡北東部~発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第44集』向日市埋蔵文化財センター、1997年
大阪府文化財センター『大阪府文化財センター調査報告書第155集 上の山遺跡II』同センター、2007年
- 9) 森岡秀人「近畿の様相」『日本考古学協会 2003年度滋賀大会資料集』同実行委員会、2003年

Ⅶ 寺戸大塚古墳

1. 調査経過

寺戸大塚古墳は、桂川右岸の向日丘陵上に位置する古墳時代前期の前方後円墳である。墳丘主軸が京都市と向日市の市境とほぼ重なっており、主軸より西側が京都市、東側が向日市となる。寺戸大塚古墳の調査は、墳丘測量調査を含めるとこれまで10回実施されており、今回の調査は11次調査となる。京都市実施の調査は、平成18・20・21年度、そして今年度と墳丘の範囲や遺存状況を確認するために継続的に行われてきたもので、この4回目をもって最終調査となる。

今年度は、後円部に1箇所（1トレンチ）、前方部の西側斜面に3箇所（2～4トレンチ）の合計4箇所に調査区を設定した。調査は竹の伐採および現況地形測量を行った後、重機による表土掘削を開始し、この後人力による遺構検出を行った。検出した遺構には葺石や埴輪列などがあり、これらの写真・図面による記録後、各調査区の埋め戻し作業を行い、現地作業を終了した。

2. 遺 構

1トレンチの調査では、後円部第1段斜面の葺石および基底石、墳丘裾の埴輪列を検出した。第1段斜面は地山削り出し成形であり、葺石は基底石から約0.4mの高さまで検出したが、それより上部は失われていた。埴輪は基底石のすぐ外側で計5基を約3m間隔で検出した。5基の埴輪のうち4基は底部を打ち欠いて樹立されていた。また、後円部裾から北側約13mの地点で、丘陵から墳丘を切断した堀切を、北から南へ下がる比高差0.4mの段差として検出した。

2～4トレンチの調査では、各調査区で前方部西斜面の墳丘裾、第1段斜面および第1段平坦面を検出した。第1段斜面は地山削り出し成形であるが、4トレンチ墳丘裾に限って盛土が確認された。各トレンチ第1段斜面では葺石とその基底石、墳丘裾で樹立埴輪を検出した。葺石は基底石から約0.7mの高さまで検出したが、上部は失われていた。2トレンチ第1平坦面では、平坦面に施された礫敷きを検出した。3・4トレンチでは礫敷きは遺存していなかったが、平坦面の一部を検出し、3トレンチでは樹立埴輪を検出した。墳丘裾および第1段平坦面の検出レベルは、2トレンチに対して4トレンチは約1m低く、自然地形の傾斜に従って墳丘が構築されたことがわかる。

3. ま と め

今回の調査では、後円部では墳丘裾の良好な遺存状況と堀切の存在を、前方部では各調査区において墳丘裾を確認し、墳丘プランを復元するデータを得ることができた。堀切は地形測量図から過去にもその存在が指摘されていたが、今回初めて遺構として確認することができた。

計4回にわたる調査によって、前方部の平面形が従来の想定よりも外側に大きく開くことが判明し、墳丘復元について新たな知見が得られたことは特筆すべき成果である。なお、本年度調査の詳細な報告およびこれまでに実施した調査の総括については、来年度に報告する予定である。

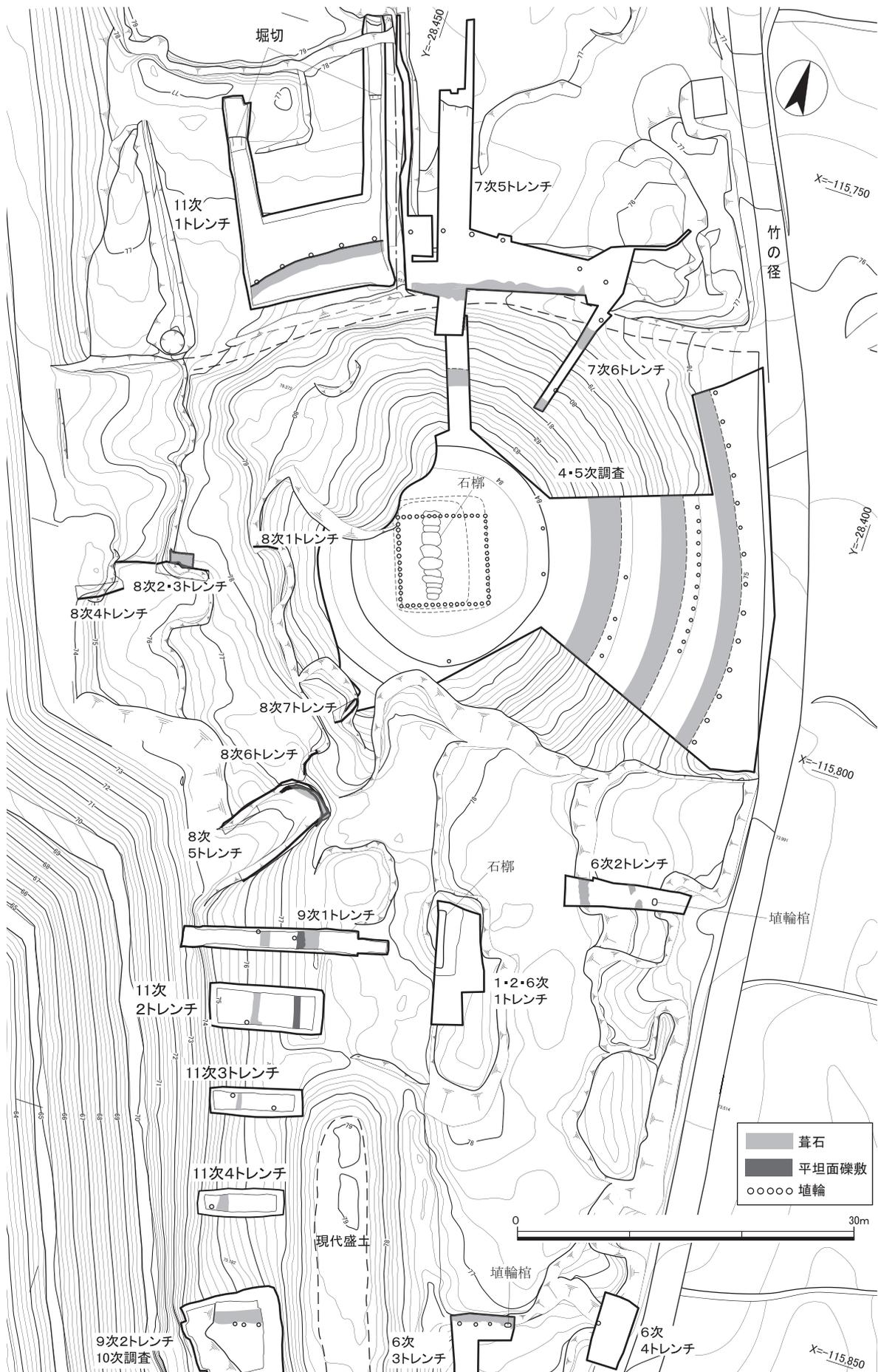


図90 調査区配置図 (1 : 500)

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなしいせきはつくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡発掘調査報告 平成24年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	網 伸也・伊藤 潔・柏田有香・吉崎 伸・馬瀬智光・上村和直・南 孝雄・宇野隆志							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1 TEL 075-415-0521							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-0925 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488 TEL 075-222-3108							
発行年月日	西暦2013年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきやうていんあま 平安宮朝堂院跡 聚楽遺跡	きょうとしなかにぎやうくじゆらくまわりびがし 京都市中京区聚楽廻東 町21番20、21	26100	2 237	35度 00分 58秒	135度 44分 31秒	2012/6/1～ 6/6	12.5㎡	個人住宅 建築
へいあんきやうていんあま 平安京右京二条 四坊一町跡	きょうとしなかにぎやうくじゆらくまわりびがし 京都市右京区花園中御 門町2、2-13、2-14	26100	1	35度 01分 03秒	135度 43分 25秒	2012/4/10～ 5/2	243㎡	共同住宅 建築
なかとみいせき 中臣遺跡 (86次調査)	きょうとしなかにぎやうくじゆらくまわりびがし 京都市山科区勸修寺西 栗栖野町44-3、44-4 (一部)、44-5、44-11	26100	632	34度 58分 12秒	135度 48分 19秒	2012/5/7～ 5/15	153㎡	共同住宅 建築
しよくぶつえんきやうていんあま 植物園北遺跡	きょうとしなかにぎやうくじゆらくまわりびがし 京都市左京区松ヶ崎芝 本町13番、13番1	26100	146	35度 03分 03秒	135度 46分 26秒	2011/11/14～ 12/22	116㎡	個人住宅 建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安宮朝堂院跡 聚楽遺跡	宮殿跡 集落跡	平安時代	修式堂基壇版築 基壇延石抜き取り痕跡 整地層	円面硯、瓦、凝灰岩		修式堂の基壇南西隅を 確定した。		
平安京右京二条 四坊一町跡	都城跡	平安時代 ～鎌倉時代	掘立柱建物、柵、溝、 井戸、土坑、柱穴	土器、瓦、陶磁器、石製品		平安時代中期の掘立柱 建物、柵を検出した。		
中臣遺跡 (84次調査)	集落跡					遺構、遺物は検出され なかった。		
植物園北遺跡	集落跡	古墳時代 中世～近世	竪穴建物、溝、ピット、 土坑	土器		古墳時代前期の竪穴建 物を検出した。		

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしなしいせきはつくつちょうさほうこく							
書名	京都市内遺跡発掘調査報告 平成24年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	網 伸也・伊藤 潔・柏田有香・吉崎 伸・馬瀬智光・上村和直・南 孝雄・宇野隆志							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1 TEL. 075-415-0521							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-0925 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488 TEL. 075-222-3108							
発行年月日	西暦2013年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やましなほんがんと 山科本願寺跡	きょうとしやましなくにしのかんか 京都市山科区西野山階 町30-1他	26100	626	34度 58分 56秒	135度 48分 33秒	2012/7/17～ 10/5	453㎡	範囲確認
おおやぶいせき 大藪遺跡	きょうとしみなみくくぜとのしろちよう 京都市南区久世殿城町 544番地	26100	773	34度 57分 16秒	135度 43分 06秒	2011/12/1～ 12/28	193㎡	集合住宅 建築
てらどおつかこふん 寺戸大塚古墳	きょうとしにしきようくおほえみなみかく 京都市西京区大枝南福 にしちよう 西町2丁目	26100	1005	34度 57分 19秒	135度 41分 19秒	2012/7/30～ 10/5	240㎡	墳丘範囲 確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山科本願寺跡	寺院跡	室町時代 ～江戸時代	風呂関連遺構群、井戸、 溝、土坑、建物、土塁、	土器、陶磁器、瓦、金属製 品、石製品、銭貨、炭化米、 炭化材、壁土、骨		風呂関連遺構群を検出 した。		
大藪遺跡	集落跡	弥生時代後期	建物、溝、土坑、落ち 込み	弥生土器、柱根		弥生時代の掘立柱建物を 検出した。		
寺戸大塚古墳	古墳	古墳時代	墳丘、葺石、基底石、 埴輪列、堀切	埴輪		墳丘裾の遺存状況と堀 切の存在を確認した。		